

あと ぼたけ にし け か ち い せき
后畑西・ケカチ遺跡

—市道下塩後22号線建設に伴う発掘調査報告書—

2017年12月

甲 州 市
甲州市教育委員会
昭和測量株式会社

あと ぼたけ にし け か ち い せき
后畑西・ケカチ遺跡

—市道下塩後22号線建設に伴う発掘調査報告書—

2017年12月

甲 州 市
甲州市教育委員会
昭和測量株式会社



ケカチ遺跡出土遺物 和歌刻書土器

巻頭図版 2



ケカチ遺跡 竪穴建物S122 北東から



ケカチ遺跡 竪穴建物S122 出土遺物（二面視・鉄製錘）

序

本書は甲州市塩山下於曾・熊野に所在する后畑西遺跡およびケカチ遺跡の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査は市道下塩後22号線建設に伴うもので、道路建設部分の記録保存を目的として実施されました。

調査の結果、東側の后畑西遺跡は谷状地形に挟まれた中に立地しており、奈良・平安時代の竪穴建物56軒や中世の土壌墓などが検出されました。ケカチ遺跡とは隣接した位置関係にあり、関係の深い集落跡であったものと想定されます。

西側のケカチ遺跡では、弥生時代末～古墳時代初頭の方形周溝墓、奈良・平安時代の集落跡などが検出され、古くから人々の営みのある場所であったことが窺えます。奈良・平安時代の竪穴建物は約40軒検出されていますが、その中でも大型の建物から二面硯や鉄製の錘が出土しており、古代の役人の存在を想定させるような遺物が見つかっています。また、同じ建物の埋土上層からは和歌を仮名文字で刻した土器が発見され、大きな話題ともなりました。古代の日本において、仮名文字が普及していく過程の一端を物語る大変貴重な資料でもあり、今後考古学のみならず、古代史、古典文学、書道史など、様々な方面から研究対象として取り扱われるものと思われまます。

このように見ていきますと、両遺跡を含むこの一帯には非常に大規模な集落が営まれていたことが分かります。また、文献史料によれば、平安時代には「於曾郷」と呼ばれていた地域でもあり、今回の調査によって私たちの暮らす甲州市の往時の姿、いわばルーツと呼べるものが少しずつ明らかになってきたとも言えるでしょう。

このような調査成果は、当市の文化財保護に深い理解とご協力をいただきました関係諸機関および関係者の皆様方のご協力を賜って成し得たことであり、深く感謝申し上げます。

本書が甲州市内における埋蔵文化財発掘調査の記録として、歴史研究の一助となれば幸いです。

平成29年12月22日

甲州市教育委員会
教育長 保坂 一仁

例 言

1. 本書は、山梨県甲州市塩山下於曾・熊野地内に所在する后畑西遺跡・ケカチ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は市道下塩後 22 号線に伴うもので、試掘調査は甲州市教育委員会が実施し本調査は甲州市教育委員会より委託を受けた昭和測量株式会社が行った。
3. 后畑西遺跡の埋蔵文化財包蔵地としての名称は坂之上・后畑遺跡であるが后畑遺跡と略した。また、ほぼ同時期に公益財団法人山梨文化財研究所が后畑遺跡の東半部の調査を行ったため、昭和測量が調査を行い報告する範囲については后畑西遺跡と呼称することとした。
4. 本書の編集は泉 英樹（昭和測量株式会社）が行った。第 1 章第 1 節は入江俊行（甲州市教育委員会）が執筆し、第 1 章第 2 節から第 5 章までは泉が執筆した。
5. 第 6 章の自然科学分析は以下の機関・個人が行った。
第 1 節：西願麻以（山梨県立博物館）、第 2 節：植月学（弘前大学）、第 3 節：楠崎修一郎（大妻女子大学博物館）、第 4 節：株式会社パレオ・ラボ
6. 発掘調査の基準点測量および空中写真撮影は昭和測量株式会社が行った。金属製品の保存処理は「保存処理のいしかわ」が行った。
7. 遺跡における X・Y 座標は世界測地系座標を使用している。
8. 発掘調査および報告書の作成にあたり次の方々とは諸機関からご教示とご協力を賜った。記して謝意を表する（順不同、敬称略）。
三森今朝美・小林茂夫・上矢敏彦・野田一寿・金井雅樹・三宅勝也・山本健司（甲州市役所建設課）、曾根浩・小野正文・飯島泉・岩間大介・柳通めぐみ・八巻一也・入江俊行・北井靖人・雨宮晃一・廣瀬昭久（甲州市教育委員会）、櫛原功一・平野修・藤澤明（公益財団法人山梨文化財研究所・帝京大学文化財研究所）、森屋雅幸（都留市教育委員会）、原正人（駿台甲府高等学校）、山下孝司（甲府市教育委員会）、坂本美夫、室伏徹、古代甲斐国研究会、植月学（弘前大学）、平川南・森原明廣・海老沼真治・西願麻以（山梨県立博物館）、小林健二・石神孝子（山梨県埋蔵文化財センター）
【ケカチ遺跡刻書土器検討委員会】
平川南（山梨県立博物館館長）、石田千尋（聖心女子大学・中央大学兼任講師）、大隅清陽（山梨大学教授）、鈴木景二（富山大学教授）、長谷川千秋（山梨大学教授）、福井淳哉（帝京大学書道研究所所長）
9. 本調査における図面・写真・遺物はすべて甲州市教育委員会で保管している。

凡 例

本書における遺構・遺物の表示は以下の通りである。

1. 遺構・遺物の挿図の縮尺は、各図にスケールバーで表示した。
2. 遺構平面図の方位は原則的に各図で表示した。特に表示しない場合は図面上を座標北とした。
3. 遺物番号は出土地点ごとに連番で付した。遺物分布図・観察表および本文中の番号はそれぞれ対応している。
4. 遺構及び遺物の色調は、『新版標準土色帖 2010年版』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)に基づいた。
5. 断面図中の数値は、海拔高度(T.P.)を示す。
6. 発掘調査で検出した遺構については以下の遺構記号を使用し、遺跡ごと、遺構ごとに連番で番号を付した。
S I : 竪穴建物跡 S K : 土坑 S P : 小穴・柱跡 S D : 溝状遺構
S Z : 方形周溝墓 S L : カマド
7. 遺構平面図における一点鎖線は攪乱、破線はサブトレンチ・試掘坑である。竪穴建物の床面の破線は硬化面、グレーの塗り潰しは焼土範囲を示し分かりづらい場合は注記した。
8. 遺物実測図の断面の黒塗りは須恵器、薄いグレーは灰軸陶器・緑軸陶器およびその他の陶器を表す。内面の濃いグレーの塗りつぶしは黒色処理、ドットの網掛けは油煙・煤の付着を示す。

本文目次

第1章 調査の経過		
第1節 調査に至る経緯	-----	1
第2節 調査の経過	-----	2
第2章 遺跡の位置と環境		
第1節 地理的環境	-----	4
第2節 歴史的環境	-----	4
第3章 調査の方法と基本層序		
第1節 調査の方法	-----	8
第2節 基本層序	-----	8
第4章 遺構と遺物		
第1節 后畑西遺跡	-----	13
第2節 ケカチ遺跡	-----	26
第5章 総括	-----	243
第6章 自然科学分析		
第1節 ケカチ遺跡出土二面硯の科学分析	-----	248
第2節 后畑西遺跡・ケカチ遺跡から出土したウマ遺体	-----	251
第3節 出土人骨・獣骨の分析		
第1項 后畑西遺跡出土人骨	-----	255
第2項 ケカチ遺跡出土獣骨	-----	256
第4節 土壌採取試料の分析		
第1項 后畑西遺跡・ケカチ遺跡出土の動物遺体	-----	258
第2項 后畑西遺跡・ケカチ遺跡出土炭化材の樹種固定	-----	259
第3項 后畑西遺跡・ケカチ遺跡から出土した炭化種実	-----	264
第4項 后畑西遺跡・ケカチ遺跡から出土した炭化種実の放射性炭素年代測定	-----	270
第5項 后畑西遺跡・ケカチ遺跡のカマド灰試料の植物珪酸体	-----	273

挿図目次

第1図 遺跡位置図	-----	5	第20図 S I 20	-----	56
第2図 周辺の遺跡	-----	6	第21図 S I 21・45	-----	57
第3図 調査地点周辺図	-----	9	第22図 S I 22・23・24	-----	58
第4図 調査区区分図	-----	10	第23図 S I 25	-----	59
第5図 后畑西遺跡全体図	-----	11	第24図 S I 26・27・28・29	-----	60
第6図 ケカチ遺跡全体図	-----	12	第25図 S I 26・27・28・29	-----	61
第7図 后畑西遺跡A・B地区			第26図 S I 30・31・33・34・		
遺構全体図	-----	43	35・36・43	-----	62
第8図 后畑西遺跡B・C地区			第27図 S I 30・31・33・34・		
遺構全体図	-----	44	35・36・43	-----	63
第9図 S I 1・2	-----	45	第28図 S I 32	-----	64
第10図 S I 3・4	-----	46	第29図 S I 37・38・39	-----	65
第11図 S I 5・6・7・10	-----	47	第30図 S I 37・38	-----	66
第12図 S I 6・7・10	-----	48	第31図 S I 40・44	-----	67
第13図 S I 8・13・17・19	-----	49	第32図 S I 41・42	-----	68
第14図 S I 8・13・19	-----	50	第33図 S I 41・42	-----	69
第15図 S I 9	-----	51	第34図 S I 46・47・48	-----	70
第16図 S I 11・17・18	-----	52	第35図 S I 46・47・48	-----	71
第17図 S I 12・35	-----	53	第36図 S I 49・54	-----	72
第18図 S I 14	-----	54	第37図 S I 49・54	-----	73
第19図 S I 15・16	-----	55	第38図 S I 50・51	-----	74

第39図	S I 50・51	-----	75	第85図	土坑(4)	-----	121
第40図	S I 52・53	-----	76	第86図	土坑(5)	-----	122
第41図	S I 55・56	-----	77	第87図	土坑(6)	-----	123
第42図	土坑(1)	-----	78	第88図	土坑(7)	-----	124
第43図	土坑(2)	-----	79				
第44図	ケカチ遺跡D・E地区				后畑西遺跡遺物実測図		
	遺構全体図	-----	80	第89図	S I 1・2・3	-----	125
第45図	ケカチ遺跡F・G地区			第90図	S I 3	-----	126
	遺構全体図	-----	81	第91図	S I 3	-----	127
第46図	ケカチ遺跡G地区			第92図	S I 3・4	-----	128
	遺構全体図	-----	82	第93図	S I 4	-----	129
第47図	S I 1	-----	83	第94図	S I 5	-----	130
第48図	S I 2	-----	84	第95図	S I 6	-----	131
第49図	S I 3・5	-----	85	第96図	S I 6	-----	132
第50図	S I 4	-----	86	第97図	S I 7	-----	133
第51図	S I 6~12	-----	87	第98図	S I 7	-----	134
第52図	S I 6~12	-----	88	第99図	S I 8	-----	135
第53図	S I 6~12	-----	89	第100図	S I 8	-----	136
第54図	S I 13・14・15	-----	90	第101図	S I 9・10	-----	137
第55図	S I 16~21	-----	91	第102図	S I 10	-----	138
第56図	S I 16~21	-----	92	第103図	S I 11	-----	139
第57図	S I 16~21	-----	93	第104図	S I 11・12	-----	140
第58図	S I 22・23	-----	94	第105図	S I 13・14	-----	141
第59図	S I 22・23	-----	95	第106図	S I 14・15	-----	142
第60図	S I 22・23	-----	96	第107図	S I 15~17・19	-----	143
第61図	S I 24・32	-----	97	第108図	S I 20	-----	144
第62図	S I 24・32	-----	98	第109図	S I 20・21・22	-----	145
第63図	S I 25・26	-----	99	第110図	S I 23・24・25	-----	146
第64図	S I 27・28・33	-----	100	第111図	S I 26・27	-----	147
第65図	S I 27・28・33	-----	101	第112図	S I 27~31	-----	148
第66図	S I 29・48・31	-----	102	第113図	S I 31・32・33	-----	149
第67図	S I 30・44	-----	103	第114図	S I 34・35・37	-----	150
第68図	S I 34	-----	104	第115図	S I 38・39	-----	151
第69図	S I 35・39	-----	105	第116図	S I 39	-----	152
第70図	S I 36・37・38	-----	106	第117図	S I 40・41	-----	153
第71図	S I 36・37・38	-----	107	第118図	S I 41	-----	154
第72図	S I 40	-----	108	第119図	S I 41~46	-----	155
第73図	S I 41・42・43・49	-----	109	第120図	S I 46・47	-----	156
第74図	S I 41・42・43・49	-----	110	第121図	S I 48・49	-----	157
第75図	S I 41・42・43・49	-----	111	第122図	S I 49	-----	158
第76図	S I 44~47	-----	112	第123図	S I 49・50・51	-----	159
第77図	S I 44~47	-----	113	第124図	S I 51・52	-----	160
第78図	S Z 1	-----	114	第125図	S I 52・53	-----	161
第79図	S D 1・2・3	-----	115	第126図	S I 53	-----	162
第80図	S D 7	-----	116	第127図	S I 54・55・56	-----	163
第81図	S D 4・5・6	-----	117	第128図	14溝・S K	-----	164
第82図	土坑(1)	-----	118	第129図	S K・S P	-----	165
第83図	土坑(2)	-----	119	第130図	遺構外	-----	166
第84図	土坑(3)	-----	120				

ケカチ遺跡遺物実測図		第156図	S I 26・27	-----	192
第131図	S I 1・2	第157図	S I 27	-----	193
第132図	S I 3・4	第158図	S I 28	-----	194
第133図	S I 4	第159図	S I 29・30	-----	195
第134図	S I 4	第160図	S I 31・32・33	-----	196
第135図	S I 5・6・7	第161図	S I 33・34・35	-----	197
第136図	S I 8・9・10	第162図	S I 36・37	-----	198
第137図	S I 10・11・12	第163図	S I 38・39・40	-----	199
第138図	S I 12~16	第164図	S I 40・41	-----	200
第139図	S I 16・17	第165図	S I 42	-----	201
第140図	S I 18・19	第166図	S I 42・43	-----	202
第141図	S I 19・20・21	第167図	S I 44・45・46	-----	203
第142図	S I 22	第168図	S I 47	-----	204
第143図	S I 22	第169図	S I 47・49	-----	205
第144図	S I 22	第170図	S L 1・S Z 1	-----	206
第145図	S I 22	第171図	S Z 1	-----	207
第146図	S I 22	第172図	S D 1・2	-----	208
第147図	S I 23	第173図	S D 3・4	-----	209
第148図	S I 24	第174図	S D 4・5	-----	210
第149図	S I 24	第175図	S D 6	-----	211
第150図	S I 24	第176図	S D 6	-----	212
第151図	S I 24	第177図	S D 7・8・9	-----	213
第152図	S I 24	第178図	S K	-----	214
第153図	S I 24・25	第179図	S K	-----	215
第154図	S I 25	第180図	S P・遺構外	-----	216
第155図	S I 25・26	第181図	遺構外	-----	217

表 目 次

表1	周辺の遺跡	-----	7	表5	ケカチ遺跡ビット一覧表	-----	42
表2	后畑西遺跡土坑一覧表	-----	42	表6	后畑西遺跡遺物観察表	-----	218
表3	后畑西遺跡ビット一覧表	-----	42	表7	ケカチ遺跡遺物観察表	-----	229
表4	ケカチ遺跡土坑一覧表	-----	42				

図 版 目 次

巻頭図版1 ケカチ遺跡出土遺物 和歌刻書土器

巻頭図版2 ケカチ遺跡竪穴建物 S I 22 出土遺物 (二面硯・鉄製鐙)

図版1	后畑西遺跡A地区	図版9	A地区 S I 13 S I 14
	后畑西遺跡B地区	図版10	A地区 S I 15 S I 16
図版2	后畑西遺跡 A・B地区モザイク写真	図版11	A地区 S K 4~S K 7 S K 12
	A地区全景		S K 17 S K 18 S K 21
	B地区全景 C地区	図版12	B地区 遺構検出状況
図版3	A地区 遺構検出状況		完掘状況
	完掘状況	図版13	B地区 S I 20~S I 22
図版4	A地区 S I 1~S I 3	図版14	B地区 S I 22~S I 24
図版5	A地区 S I 4~S I 6	図版15	B地区 S I 25 S I 26 S I 28
図版6	A地区 S I 7		S I 30~S I 36
図版7	A地区 S I 8~S I 11 S I 17	図版16	B地区 S I 31 S I 32 S I 34
	S I 18		S I 37~S I 39 S I 43
図版8	A地区 S I 11 S I 12	図版17	B地区 S I 38~S I 42

- 図版18 B地区 S I 33 S I 34
S I 41~S I 43 S I 45
S D 1 S D 2 溝14
- 図版19 B地区 S K 25 S K 30 S K 34
S K 36
- 図版20 B地区 S K 38 S K 41 S P 25
S P 33 S P 34
S P 36~S P 38
- 図版21 C地区 遺構検出状況
発掘状況
- 図版22 C地区 S I 46~S I 48
- 図版23 C地区 S I 46~S I 49 S I 54
- 図版24 C地区 S I 50~S I 52
- 図版25 C地区 S I 53 S I 55 S I 56
- 図版26 C地区 S K 59 S K 64~S K 66
S K 68
- 図版27 C地区 S K 70 S P 41~S P 43
S P 65~S P 67 S P 70
- 図版28 C地区 S P 71 S P 72 西側
埋没谷深掘り確認 作業風景
現地見学会
現地見学会資料展示風景
- 図版29 ケカチ遺跡D地区全景
ケカチ遺跡E地区全景
ケカチ遺跡D・E地区モザイク写真
ケカチ遺跡F地区全景
ケカチ遺跡G地区全景
- 図版30 ケカチ遺跡G地区全景
- 図版31 D地区 遺構検出状況
発掘状況
- 図版32 D地区 S I 11~S I 13 S K 9
- 図版33 E地区 遺構検出状況
発掘状況
- 図版34 E地区 S I 4 S I 4 b S I 5
- 図版35 E地区 S I 5 S D 1~S D 3
- 図版36 E地区 S D 3 S K 10~S K 12
S P 27~S P 34
- 図版37 E地区 S P 33~S P 35
S P 37~S P 39 S P 41
- 図版38 E地区 S P 43 S P 44 S P 47
S Z 1
- 図版39 F地区 遺構検出状況
発掘状況
- 図版40 F地区 S I 6~S I 11
- 図版41 F地区 S I 11~S I 15
- 図版42 F地区 S I 5~S I 8
- 図版43 F地区 S I 19 S I 21~S I 23
- 図版44 F地区 S I 22
- 図版45 F地区 S I 22 S I 24~S I 26
- 図版46 F地区 S I 26~S I 28
- 図版47 F地区 S I 29~S I 33
- 図版48 F地区 S I 33 S K 15
S K 18~S K 22 S K 24
- 図版49 F地区 S K 24~S K 27 S K 31
S K 35 S K 36
- 図版50 F地区 S K 40 S K 43
S K 50~S K 52 S K 79
S K 125
- 図版51 F地区 S P 56 S P 58 S P 59
S P 61 S P 64 S P 66
S P 68 S P 69
- 図版52 F地区 S P 71 S P 72 S P 75
S P 77 S P 79 S P 84
S P 86 S P 88 S P 89
- 図版53 F地区 S P 90 S P 92~S P 95
S P 97~S P 99
- 図版54 F地区 S P 100~S P 102 S P 104
S P 105 S P 118 S P 119
S P 121
- 図版55 F地区 S P 122 S P 124 S P 126
S P 128 S P 131 S P 137
S K 53 S K 56
- 図版56 G地区 中央部遺構検出状況
発掘状況
- 図版57 G地区 S I 29 S I 30 S I 34
S I 35
- 図版58 G地区 S I 36~S I 38
- 図版59 G地区 S I 39~S I 42
- 図版60 G地区 S I 41 b S I 42~S I 47
- 図版61 G地区 S I 29 S I 47 S I 48
S L 1 S D 4~S D 6
- 図版62 G地区 S D 4 S D 6
- 図版63 G地区 S D 7 S D 9 S K 58
- 図版64 G地区 S K 59~S K 63 S K 66
S K 67 S K 72 S K 73
- 図版65 G地区 S K 74~S K 76 S K 82
S K 94 S P 158 S P 159
S P 160
- 図版66 空中写真撮影状況
現地見学会
土壌試料整理状況
整理作業状況
和歌刻書土器検討会
古代史シンポジウム
- 后畑西遺跡出土遺物
- 図版67 S I 1 S I 2 S I 3
- 図版68 S I 3
- 図版69 S I 3 S I 4
- 図版70 S I 5 S I 6
- 図版71 S I 6 S I 7

図版72	S I 7	S I 8		
図版73	S I 8			
図版74	S I 9	S I 10	S I 11	
図版75	S I 11			
図版76	S I 12	S I 13	S I 14	
図版77	S I 15	S I 16	S I 17	S I 19
	S I 20			
図版78	S I 20	S I 21	S I 22	
図版79	S I 23	S I 24	S I 25	
図版80	S I 26	S I 27	S I 28	
図版81	S I 29	S I 30	S I 31	S I 32
	S I 33			
図版82	S I 34	S I 35	S I 37	S I 38
図版83	S I 39			
図版84	S I 39	S I 40	S I 41	
図版85	S I 41			
図版86	S I 42	S I 43	S I 44	S I 45
	S I 46	S I 47		
図版87	S I 47	S I 48	S I 49	
図版88	S I 49	S I 50	S I 51	
図版89	S I 52	S I 53		
図版90	S I 53	S I 54	S I 55	S I 56
図版91	14溝	S K 8	S K 9	S K 12
	S K 13	S K 14	S K 25	S K 29
	S K 30	S K 36	S K 44	S K 54
	S K 59	S K 65	S K 70	S P 11
	S P 16	S P 64	S P 71	
図版92	遺構外			

ケカチ遺跡出土遺物

図版93	S I 1	S I 2		
図版94	S I 3	S I 4		
図版95	S I 4			
図版96	S I 5	S I 6	S I 7	
図版97	S I 8	S I 9	S I 10	
図版98	S I 10	S I 11	S I 12	S I 13
図版99	S I 14	S I 15	S I 16	
図版100	S I 17	S I 18		
図版101	S I 19	S I 20	S I 21	
図版102	S I 22			
図版103	S I 22			
図版104	S I 22			
図版105	S I 22			
図版106	S I 23			
図版107	S I 24			
図版108	S I 24			
図版109	S I 24			
図版110	S I 24			
図版111	S I 24			
図版112	S I 25			

図版113	S I 25	S I 26		
図版114	S I 26	S I 27		
図版115	S I 27			
図版116	S I 28			
図版117	S I 29	S I 30		
図版118	S I 31	S I 32	S I 33	
図版119	S I 33	S I 34	S I 35	
図版120	S I 36	S I 37		
図版121	S I 38	S I 39	S I 40	
図版122	S I 40			
図版123	S I 41			
図版124	S I 42			
図版125	S I 42	S I 43		
図版126	S I 44	S I 45	S I 46	
図版127	S I 47			
図版128	S I 47	S I 49	S I 1	
図版129	S Z 1			
図版130	S D 1	S D 2		
図版131	S D 3	S D 4		
図版132	S D 4	S D 5		
図版133	S D 6			
図版134	S D 6			
図版135	S D 7	S D 8	S D 9	
図版136	S K 15	S K 20	S K 21	S K 22
	S K 23	S K 24	S K 25	S K 29
	S K 31	S K 32	S K 33	S K 34
	S K 44	S K 45	S K 47	S K 49
図版137	S K 50	S K 55	S K 58	S K 65
	S K 66	S K 67	S K 68	S K 72
	S K 84			
図版138	S P 18	S P 60	S P 63	S P 78
	S P 77	S P 102	S P 106	S P 131
	S P 148	遺構外		
図版139	遺構外			

自然科学分析

図版140	后畑西遺跡・ケカチ遺跡のカマド灰試料の植物珪酸体の植物珪酸体
図版141	后畑西遺跡・ケカチ遺跡から出土した炭化種実
図版142	后畑西遺跡・ケカチ遺跡から出土した炭化種実
図版143	后畑西遺跡・ケカチ遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真
図版144	后畑西遺跡・ケカチ遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真
図版145	后畑西遺跡・ケカチ遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真
図版146	ケカチ遺跡出土動物遺体

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

本書で報告する遺跡は甲州市塩山下於曾・熊野地内に存在した遺跡でケカチ遺跡と坂之上・后畑遺跡（后畑西遺跡と略称）である。

甲州市では甲州市民病院方面から東側の新塩山バイパスへ抜ける市道下塩後 22 号線改良工事を計画した。開発予定地内には周知の遺跡（埋蔵文化財包蔵地）として、上記遺跡が存在するため、甲州市教育委員会が試掘調査を実施し、遺跡の存在および本調査の必要性を確認した。甲州市教育委員会による試掘調査は予定地内のうち新塩山バイパスに連結する東側と、西側の 2 地点について行われ、その結果、工事総面積 9,965㎡のうち、約 7,300㎡を対象として本調査が行われることとなった。

遺構確認面までは現地表から 40-60cm であり、対象地域内に存在する遺跡はケカチ遺跡（古墳～中世）、坂之上・后畑遺跡（平安）、横井・大木戸遺跡（縄文・平安）、五反田遺跡（古墳・平安）がある。試掘の結果、予想された遺跡の時期は縄文・古墳～平安で、平安時代を主とし、縄文・古墳は少ないと推定され、遺構数としては竪穴建物 150 軒、溝約 60 本、小穴約 700 基が想定された。

本調査予定地内のうち西側約半分（4,045㎡）の 2 遺跡を、業務委託契約によって昭和測量株式会社が実施することとなった。発掘調査に係る業務委託契約は 3 件で、①「市道下塩後 22 号線ケカチ遺跡他発掘調査業務委託」（2,110㎡分、平成 27 年 8 月 4 日着手、平成 28 年 2 月 29 日業務完了）、②「市道下塩後 22 号線坂之上・后畑遺跡他発掘調査業務委託」（535㎡分、平成 28 年 2 月 25 日着手、3 月 15 日業務完了）、③「市道下塩後 22 号線ケカチ他遺跡発掘調査業務委託」（1,400㎡分、平成 28 年 4 月 19 日着手、7 月 22 日業務完了）となり、二年度に渡って発掘調査が実施された。また報告書作成業務は「市道下塩後 22 号線ケカチ他遺跡整理報告業務委託」として平成 29 年 2 月 20 日着手、12 月 22 日業務完了という期間で実施された。

発掘調査にあたり平成 27 年 8 月 3 日付で文化財保護法 9 2 条にもとづき発掘届を提出、8 月 4 日付で山梨県教育委員会より「埋蔵文化財発掘調査について（通知）」を受理した。また、調査は事業主体者である甲州市と甲州市教育委員会、昭和測量株式会社で 3 者協定を締結し、甲州市教育委員会の指導監督のもと実施された。なお、甲州市教育委員会によるケカチ遺跡の試掘調査報告については以下の通りである。

【ケカチ遺跡試掘調査報告】

所在地 甲州市塩山下於曾 825,835,836,837

調査面積 約 180㎡

調査期間 平成 26 年 12 月 10～12 月 15 日

調査原因 市道整備

調査概要

（1）調査の目的と方法

当地は、塩川左岸の微高地上に位置し、埋蔵文化財包蔵地であるケカチ遺跡（古墳・平安時代）の範囲内となっている。当地内に市道が新設されることとなり、新設道路部分について試掘調査を実施することとなった。市道を整備する予定敷地内に 5 本の試掘坑（トレンチ）を設定し調査を行った。調査は、重機によって表土掘削をした後、土層観察と遺構確認作業を実施し、測量・写真撮影等により土層堆積、検出遺構・遺物の状態を記録した。

(2) 調査の成果

Aトレンチは約14.6m×2.1mで設定し、地表から約40cmで粘性の強い黄褐色土層（ローム層）を検出したため、この面で遺構確認を行った。その結果、溝状遺構3、土坑3を検出した。遺物は土師器の破片（平安）が出土している。

Bトレンチは約19.1m×2.0mで設定し、地表から約70cmで黄褐色土層（ローム層）を検出したため、この面で遺構確認を行った。ローム層はトレンチの中央から西側部分にかけては検出されておらず、谷状に落ち込む地形となっていることが推定された。トレンチ中央部分に大規模な攪乱があるほか、遺構は検出されなかった。遺物は土師器小片（平安？）が微量出土している。

Cトレンチは約23.3m×1.8mで設定し、地表から約50-60cmで黄褐色土層（ローム層）を検出したため、この面で遺構確認を行った。その結果、重複が多く正確な遺構数は不詳であるが、竪穴住居1、溝状遺構2、土坑9を検出した。遺物は土師器（平安）が出土しており、竪穴住居とみられる遺構からはミガキ調整のある壺破片（古墳か）が出土している。

Dトレンチは約26.8m×2.0mで設定し、地表から約50-60cmで黄褐色土層（ローム層）を検出したため、この面で遺構確認を行った。その結果、重複が多く正確な遺構数は不詳であるが、溝状遺構10、土坑9を検出した。遺物は土師器の破片（平安）が出土している。

Eトレンチは約11.9m×2.0mで設定し、地表から約30cmで黄褐色土層（ローム層）を検出したため、この面で遺構確認を行った。その結果、竪穴住居1、溝状遺構1を検出した。遺物は土師器の破片（平安）が出土しており、環、甕、台付鉢などがみられる。

(3) まとめ

調査の結果、A・C・D・Eトレンチから遺構・遺物が検出されており、当地内に遺跡が存在することがわかった。Bトレンチからは遺構が検出されておらず、地形的に他のトレンチと比較して谷状の低地に位置していることから、Bトレンチ相当部分は流路などの古川であったことが考えられる。遺物も平安時代の土師器を主体に検出されており、Bトレンチを除く微高地上に遺跡が展開しているものと推定され、開発に際して事前に本格調査を実施する必要がある。

第2節 発掘調査と整理作業の経過

発掘調査は平成27年9月3日から平成28年3月15日までと平成28年4月19日から7月22日までの二年度にわたって実施した。着手前の現況はモモ・ブドウなどの果樹園および宅地などである。調査はモモ・ブドウなどの耕作や宅地の転居状況など近隣への影響を最小限に止めつつ進める必要があったため、数度にわたる反転掘削によるものとなった。初年度は、后畑西遺跡のA地区およびC地区の西半部、ケカチ遺跡のD・E・F地区の調査を行った。平成27年9月3日、后畑西遺跡C地区の西半部とケカチ遺跡D地区から調査を開始した。平成27年10月9日には第1回目の空中写真撮影を行った。その後、反転してケカチ遺跡E地区の調査を進め、平成27年10月30日には第2回目の空中写真撮影を行った。ケカチ遺跡E地区では方形周溝墓に平安の竪穴建物が重複して検出されており、空撮終了後の11月14日には第1回目の現地見学会を開催した。あいにくの雨天の中、70名以上の参加があった。続いて后畑西遺跡A地区の調査を開始し、平成28年1月13日には第3回目の空中写真撮影を行った。この後、ケカチ遺跡F地区の調査を開始したが、真冬の冷え込みによる遺構面の凍結に苦慮した。一旦凍結すると遺構検出も掘削もままならないためブルーシートを複数枚重ね、新聞紙やコンクリート養生用のマットを敷くなどして凍結による作業の遅滞防止に努めた。2月26日には第4回目の空中写真撮影を行った。また、后畑西遺跡B地区の調査も開始し、3月5日に

はケカチ遺跡F地区と后畑西遺跡B地区を会場として第2回目の現地見学会を実施した。両遺跡の竪穴建物群の調査状況や出土遺物、写真パネルの展示を行った。その後、3月15日までに初年度の発掘調査を終了した。

次年度は平成28年4月19日より前年度に環境が整わず調査を実施できなかった範囲から開始し、5月9日にはケカチ遺跡G地区、次いで5月30日には后畑西遺跡C地区の調査を開始した。5月31日にはケカチ遺跡G地区の南北両端部を対象に第5回目の空中写真撮影を行った。その後、数多くの竪穴建物や貴重な出土遺物に驚きつつ両遺跡の調査を進め、7月8日に第6回目の空中写真撮影を行った。7月16日にはふたたび両遺跡を会場に第3回目の現地見学会を実施した。その後、7月22日までに器材を撤収し、現場を明け渡した。

整理作業は、平成29年2月20日から12月22日まで行った。整理作業は遺物の注記・接合から開始した。遺物水洗作業については現場調査と並行して進めていたが、残った遺物の水洗作業を進めていた3月10日に後に大きな話題となった「和歌刻書土器」を発見している。4月3日からは竪穴建物のカマドから採取した土壌試料の水洗フルイと分別作業を開始した。作業は5月31日までに終了し、分別後の試料の分析を株式会社パレオ・ラボに委託した。5月8日には遺物実測を開始し、7月10日から並行して遺物実測図のトレース作業を開始した。遺物実測は10月25日に終了した。遺物写真の撮影は9月21日から開始し11月2日に終了した。その後、遺構図の編集や報告書の図版・挿図の作成、本文執筆などを進め、平成29年12月22日まで作業を行った。

なお、和歌刻書土器については発見後の平成29年3月27日に甲州市教育委員会と初回の打ち合わせを行い、解説へ向けて研究者への遺物実見の手配や基礎資料の準備を開始した。5月20日には山梨県立博物館にて和歌刻書土器検討会が開かれた。その後、検討会委員による検討や数度にわたる打合せを経て、8月25日に解説案が記者発表され、9月3日には甲州市が主催した『古代史しんぼじうむ「和歌刻書土器の発見」ケカチ遺跡と於曾郷』において広く一般公開されている。

【調査体制】

発掘調査担当	泉 英樹・萩野谷主税（昭和測量株式会社文化財調査課）
助言・指導	新津 健（昭和測量株式会社文化財調査課研究顧問）
発掘補助員	浅川晃一・雨宮久美子・飯野金雄・石原美穂・岩崎誠至・長田秋文・小沢正臣・小澤美幸・河西元彦・河西町男・北野礼子・北村透江・栗原礼子・小林としみ・齊藤里美・里吉奈美子・鮫田勝男・菅沼芳治・近山辰男・千野富子・土屋常子・土屋晴子・筒井聡・出井光・内藤敏夫・直井光江・中澤保・原田隆邦・広瀬ありさ・松本榮一・三木一恵・水上善正・宮原雄二・望月一正・望月孝次・望月敏子・横内光夫・渡辺智之
整理作業担当	泉 英樹・萩野谷主税
整理補助員	浅川晃一・今福ともみ・上島光子・小澤美幸・垣内律子・栗田かず子・齊藤里美・佐野香織・広瀬ありさ・藤原由香・牧野麻里・三木一恵・渡辺麗子

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境（第1図）

后畑西遺跡・ケカチ遺跡は東側に重川、西側にその支流である塩川が流れ、両河川に挟まれた南北に細長い段丘面に立地している。重川は市の北東部に位置する大菩薩や甲武新岳などをはじめとする山々に水源を発し、扇状地を形成しながら南流して笛吹川と合流する。多くの遺跡がこの両河川に挟まれた扇状地上に所在する。調査地付近は日当たりの良い緩やかな南斜面で、標高は376～377mを測る。土壌の水はけも良くブドウやモモなどの果樹栽培が盛んな土地である。

第2節 歴史的環境（第2図・表1）

遺跡は甲州市塩山下於曾・熊野地内に所在する。

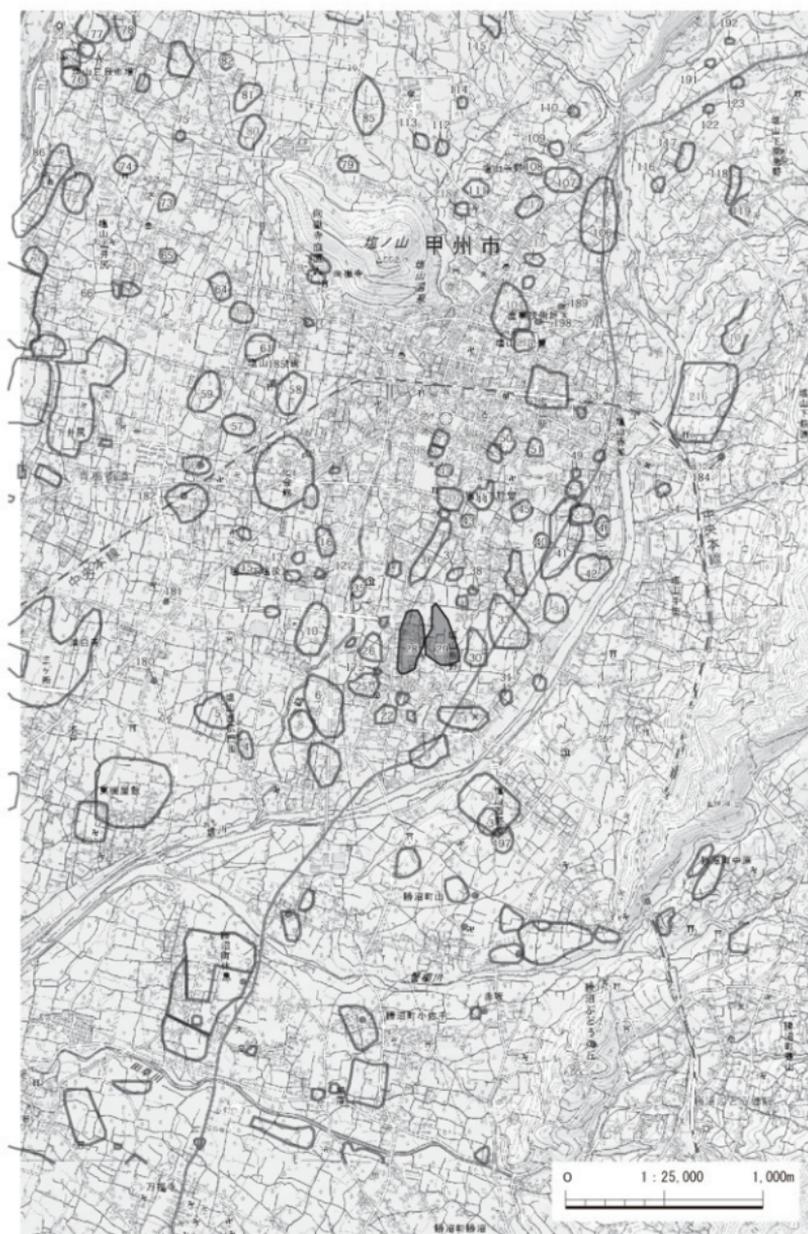
周辺では国道411号線（塩山東バイパス）の建設などに伴って、南北方向に広い範囲で多くの調査が行われている。今回の調査区の北東に位置する横井・大木戸遺跡では縄文時代前期・中期と奈良・平安時代の集落が明らかになっている。横井・大木戸遺跡の南側で、今回の調査区の東に隣接する大木戸・后畑遺跡や五反田遺跡でも古墳時代前期の集落と奈良・平安時代の集落が判明しており、特に奈良・平安時代の竪穴建物はこの辺りだけで100軒以上検出されている。南東方向の熊野八反田遺跡では古墳時代前期の集落が検出され、南西方向の西田遺跡でも古墳時代前期の方形周溝墓を伴う大きな集落の存在が明らかにされており、一次調査で7軒、二次調査では54軒もの竪穴建物が検出されて、集落の周辺域で方形周溝墓が検出されている。今回の調査区の西側に隣接する梶畑B遺跡は、市道下塩後22号線建設に伴って実施されている。梶畑B遺跡では縄文時代前期、古墳時代前期の竪穴建物が1軒づつと平安時代の竪穴建物が5軒検出されており、中世の竪穴状遺構なども1基検出されている。この地域全体の傾向としては縄文時代前期と古墳時代前期に集落や墓域がみられ、奈良・平安時代には重川と笛吹川に挟まれた扇状地を中心として大きく集落が展開していたとみることができると推定される。

また遺跡から北へ約2kmの地点には塩山の地名の由来とも言われる塩ノ山がある。紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑が撰者となった『古今和歌集』には「しほの山 差出の磯に住む千鳥 君が御代をば 八千代とぞなく」と詠まれており、「塩ノ山」は枕詞となって、古来より多くの歌人によって歌が詠まれている。調査地点の南西方向約400mには、大同2年（807年）に紀伊から勧請し成立したとされる熊野神社が位置する。遺跡周辺は、現在に残る地名からも平安時代に編纂された『和名類聚抄』に記された山梨郡10郷のうち「於曾郷」に属する地域であったと推定される歴史的な地域である。

既往の調査は南北方向に広い範囲で行われてきたが、今回の調査は東西方向の道路建設に伴うものであったため、西側の梶畑B遺跡から東側の大木戸・后畑遺跡、五反田遺跡まで含めると東西方向1kmに及ぶ調査が行われ、古代の「於曾郷」を東西方向に貫く形で発掘調査が行われたこととなる。



第1図 遺跡位置図



第2図 周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡(甲州市塩山)

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	前山遺跡	縄文	61	高林遺跡	縄文(中)・中世	201	西の原の塚	中世
2	牛島遺跡	縄文	62	堀山前遺跡	縄文(中)	202	深沢氏屋敷	
3	滝ヶ上遺跡	縄文(前～中)	63	金山遺跡	平安・中近世	204	中村氏屋敷	
4	西堀遺跡	平安	64	青木の遺跡		205	風間氏屋敷	
5	住瀧木平遺跡	縄文(中)	65	喜呂屋遺跡		206	佐田宮内左衛門屋敷	
6	西田遺跡	縄文(中)・古墳・古墳・古墳	66	上三狐神遺跡		207	山辺氏屋敷	中世
7	東山遺跡	縄文(中)	68	向原寺庭園	近世	208	池田中屋敷	中世
8	丹前山遺跡	縄文(中)	69	向原寺大方土跡	近世	209	宇賀屋敷	
9	下野田遺跡	縄文(中)	70	乙川中前遺跡	縄文・平安	210	於曾屋敷	
10	村北遺跡	奈良・平安	71	屋敷浜A遺跡	縄文(中)・平安	211	八代氏屋敷	
11	向原遺跡	奈良・平安	72	武上原前下遺跡	縄文・平安	212	保坂氏屋敷	
12	堀田A遺跡	縄文(中)	73	北原遺跡		213	於曾三郎屋敷	
13	堀田B遺跡	奈良・平安	74	高野神社遺跡		214	梅川氏屋敷	
14	堀田C遺跡	奈良・平安	75	東林遺跡		215	古谷清五郎門屋敷	
15	十王前遺跡	平安	76	屋敷浜B遺跡	縄文(前)・奈良・平安	216	平城	
16	東山遺跡	縄文	77	久遠遺跡	縄文・平安	217	西山宮春船跡	中世
17	藤原平遺跡		78	大神前遺跡	縄文(前)	218	村山氏屋敷	中世
18	清水田遺跡	奈良・平安	79	熊谷遺跡	縄文・近世	219	古原氏屋敷	
19	道替遺跡	弥生(前)～古墳	80	堀越遺跡		220	新野氏屋敷	
20	船光田遺跡		81	中瀬A遺跡		221	佐藤家遺址	
21	上塩後埜遺跡		82	中瀬B遺跡		222	新野新五左衛門屋敷	
22	中瀬遺跡	平安	83	宮ノ下遺跡		223	土相屋敷	
23	熊野前田遺跡	平安	84	大神遺跡		224	武田兵衛助屋敷	
24	熊野八反田遺跡		85	中瀬遺跡	縄文・平安			
25	熊野神社遺跡	弥生(前)～古墳	86	松原山遺跡	縄文・平安			
26	堀田A遺跡	古墳・奈良・平安	87	滝之上前遺跡	縄文(中)			
27	堀田B遺跡	古墳・奈良・平安	104	梅ノ木遺跡				
28	ケ方子遺跡	古墳・平安	105	中村遺跡	縄文			
29	坂之上・后間遺跡	平安	106	獅子之前遺跡	縄文(前)・弥生・平安			
30	五反田遺跡	古墳	107	小山平南遺跡	縄文(前)・中・平安			
31	石狩A遺跡	縄文・平安	108	札之辻東A遺跡	平安			
32	石狩B遺跡		109	札之辻東B遺跡	縄文(前)・平安			
33	横井・丸木戸遺跡	平安	110	藪山堂東遺跡	縄文・平安			
34	池田遺跡	中世	111	八栗山西遺跡	縄文(中)・平安			
35	下於曾八反田遺跡	平安	112	青田A遺跡	平安			
36	正泉A遺跡	古墳・平安	113	青田B遺跡	縄文(中)・平安			
37	正泉B遺跡		114	中瀬遺跡	平安			
38	津遺跡	縄文	115	身流山遺跡	平安			
39	新井遺跡	縄文(中)・平安	116	新原前田遺跡	縄文(中)			
40	久保山遺跡	平安	117	洗在家遺跡	縄文(前)・中・平安			
41	下西畑遺跡	縄文・弥生(前)～古墳	118	宮ノ前遺跡	平安・中世			
42	横架遺跡	中世	119	安達寺遺跡	縄文(前)・中・平安			
43	受池遺跡	平安	122	牛久保遺跡				
44	林部遺跡	縄文・平安・中世	123	原中割遺跡	縄文			
45	天神原遺跡	縄文(中)・平安	173	馬場平遺跡	旧石路・縄文(前)			
46	宮沢遺跡	縄文(中)・古墳・平安	180	切付平遺跡				
47	宇賀屋敷遺跡	奈良・平安・中世	181	髪切塚	中世・近世			
49	西堀A遺跡	平安・中世	182	おせ八郎印塚				
50	於曾屋敷遺跡	平安・中世	183	お主人稲荷塚				
51	神之木遺跡	縄文(中)・古墳・平安	184	下萩原浅間塚	平安			
52	西堀B遺跡	縄文(中)・中世	185	跡の宮塚				
53	船ノ山遺跡	縄文・古墳・平安	189	お文孫稲荷塚				
54	南畑遺跡	弥生	190	梅ノ木塚				
56	松右林遺跡		191	栗塚稲荷塚				
57	宮ノ前遺跡		192	車塚				
58	清水尻遺跡	縄文・古墳・平安	197	西野原塚瓦工場跡	近代			
59	千手院前遺跡		199	山原山氏屋敷				

第3章 調査の方法と基本層序

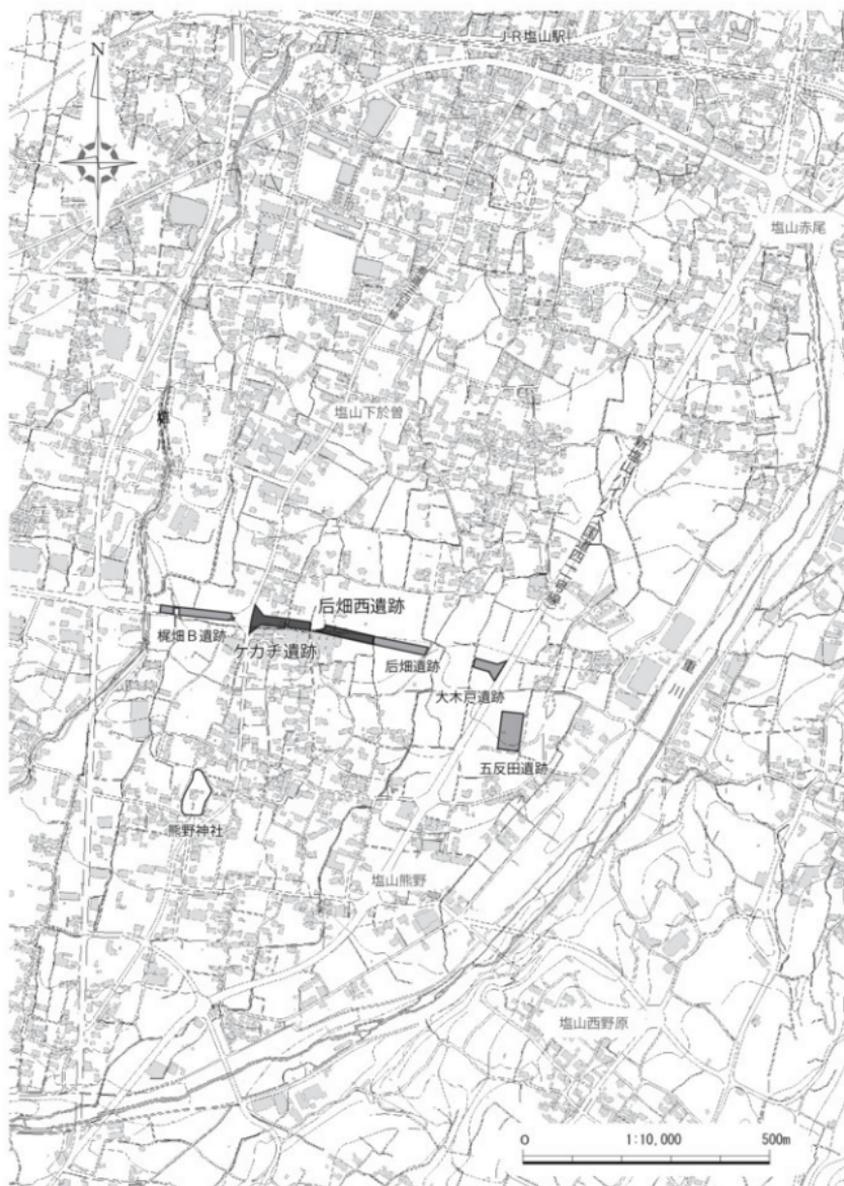
第1節 調査の方法（第3・4図）

調査前の現況は調査区の大部分がブドウやモモなどの畑で、ケカチ遺跡の西半部については宅地であった。調査区の設定は調査を行った順に后畑西遺跡をA・B・C地区、ケカチ遺跡をD・E・F・G地区とした。なお、后畑西遺跡C地区の西半部については当初ケカチ遺跡として調査を進めたが、整理作業を進める中で、旧地形や遺構の検出状況から后畑西遺跡に含めた方が理解しやすいと判断し、后畑西遺跡として報告することとした。表土除去は重機で行った。畑の耕作土や宅地の整地層など現地盤から約20～40cmほどを重機を使用して掘り下げた。掘削によって生じた排土は調査区内に仮置くこととし、調査が進むごとに排土置場と調査区を反転する形で進めた。ケカチ遺跡については宅地が隣接するため、近隣住民に配慮して排土山にシート養生を施し砂塵の飛散防止に努めた。遺構検出と遺構掘削は人力で行った。調査区の壁面や攪乱掘削で土層観察を行いながら、ジョレンなどを使用して薄く土を削って遺構検出面を決定した。遺構検出状況は写真や概略図などの記録をとった。遺構の測量は、土層断面は手実測にて行い、平面図はトータルステーションによる測量と手実測、写真実測を併用した。遺物はトータルステーションを使用して位置を記録して取上げた。遺構外出土の小片遺物などについては便宜的に一括取上げ遺物とした。トータルステーションはSOKIA CX105を使用し図化システムとしてCUBIC社「遺構くん」を用いた。また、遺構・遺物の写真撮影にはデジタル一眼レフカメラ（NikonD7000）を使用した。遺構完掘時には、ドローンやラジヘリによる空中写真撮影を実施した。下層の層位については、サブトレンチや攪乱掘削などで確認を行った。各調査区の調査を終了する際は、甲州市役所建設課および甲州市教育委員会の確認を受けた。調査区は重機を使用して埋め戻しを行い、状況によっては転圧作業や仮設道の設置を行って現状復旧し調査区を明け渡した。

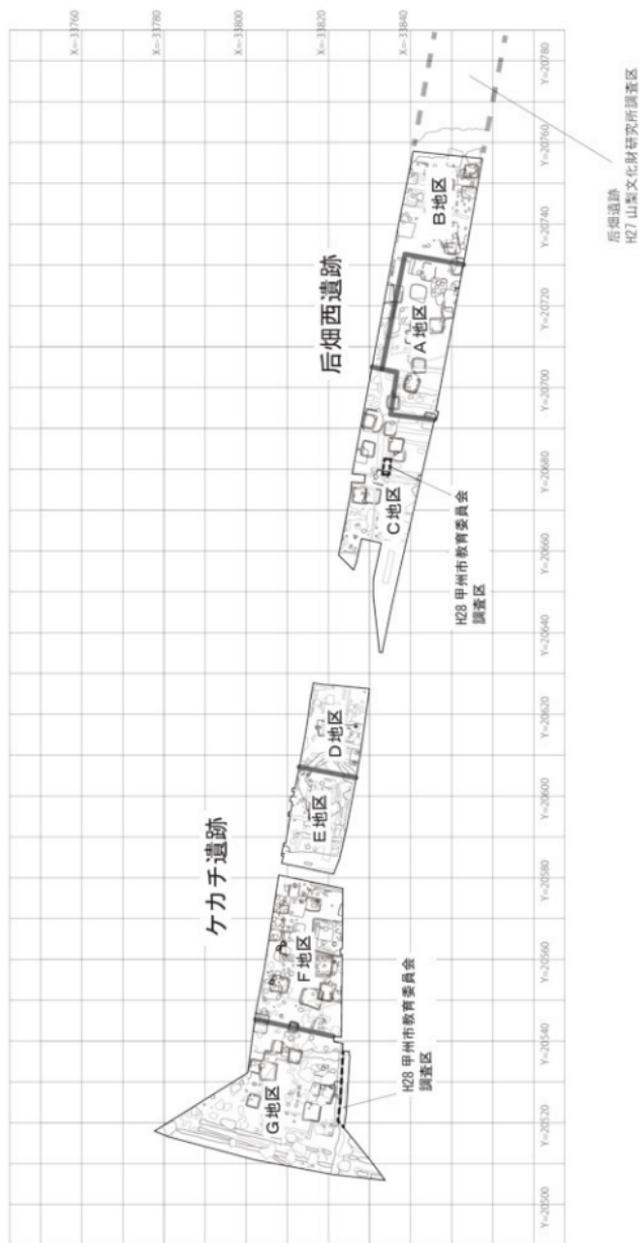
第2節 基本層序（第5・6・9・79図）

遺構検出面の標高は后畑西遺跡は376.4～377.2mを測る（第5図）。遺跡の両端は埋没谷があるためやや低くなるが概ね平坦な地形である。ケカチ遺跡の標高は376.6～377.8mを測る（第6図）。竪穴建物が集中して検出されたF地区がやや小高くなっている他、南北に長いG地区では北から南に向かってゆるやかに低くなる地形がみとれる。

基本層序は、調査区周りの壁を精査して観察した。后畑西遺跡のS I 1付近（第9図）では現況地盤から30～40cmほどの厚さの表土又は耕作土をI層とした。黒褐色砂質シルトや暗褐色砂質シルトを基調とする。II層は包含層で、遺構覆土の基調となる土であるが、調査区全面にわたって表土直下が遺構検出面であったため、土層観察記録にはほとんど使用していない。III層は地山で褐色砂やにぶい黄褐色砂を基調とする。このIII層上面で遺構検出を行った。ケカチ遺跡のS D 3付近（第79図）でも同様に現況地盤から30～50cmほどの表土・耕作土をI層とした。褐色砂質シルトなどを基調とする。ケカチ遺跡でも表土直下がIII層の遺構検出面となることが多かった。III層は黄褐色砂質シルトまたは黄褐色砂を基調とする。図示していないが、西側のF地区やG地区ではI層は宅地・駐車場の造成土による整地層で、攪乱を受けていたが、ところによっては20cmほどでIII層となり、それでも竪穴建物などの遺構が検出される状況であった。



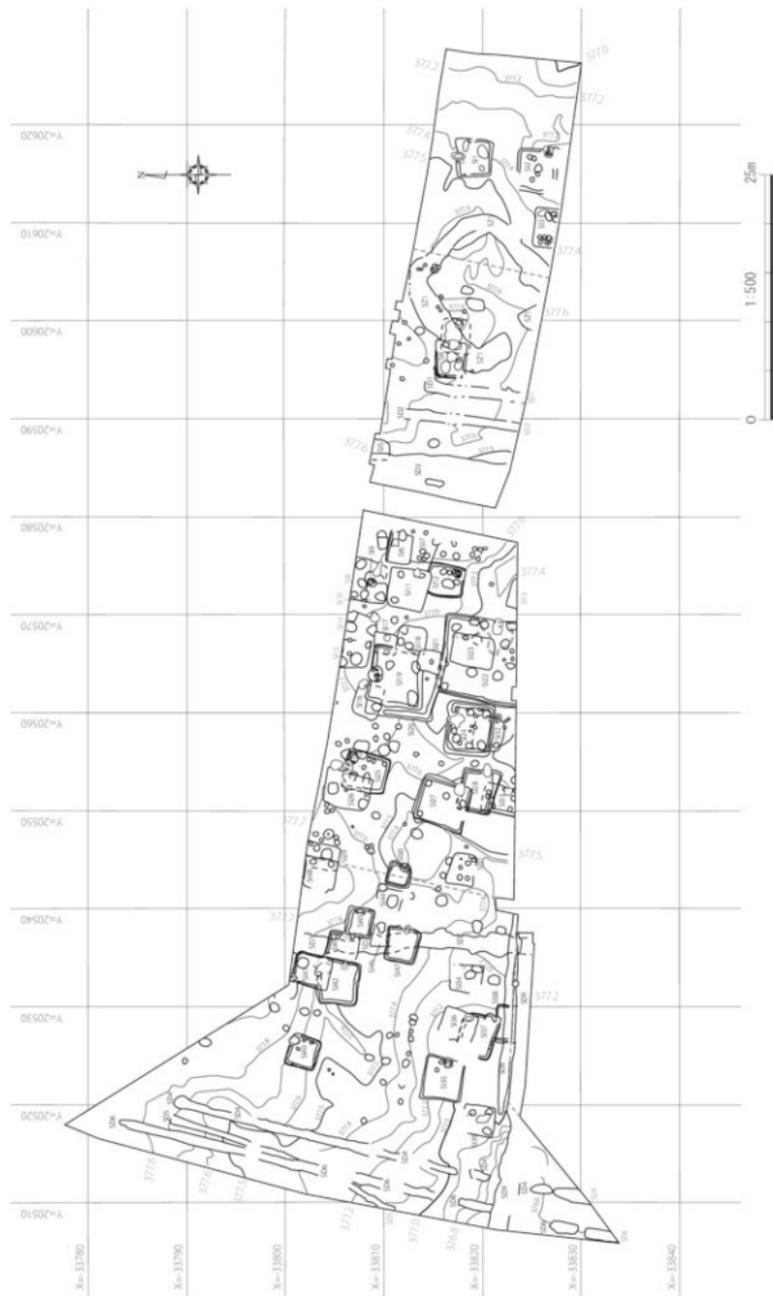
第3図 調査地点周辺図



第4図 調査区剖面 (S=1/1,200)



第5図 后畑西遺跡全体図



第6図 ケカチ遺跡全体図

第4章 遺構と遺物

第1節 后畑西遺跡

埋蔵文化財包蔵地としての名称は坂之上・后畑遺跡であるが后畑遺跡と略称し、さらに同時期に公益財団法人山梨文化財研究所が后畑遺跡の東半部の調査を行ったため、昭和測量が調査にあたった后畑遺跡の西半部を后畑西遺跡と呼称することとした。また、C地区として報告した範囲の西半部については、当初ケカチ遺跡として調査を進めていたが、旧地形や遺構の検出状況から后畑西遺跡として報告するほうが理解しやすいと判断し后畑西遺跡に含めて報告している。后畑西遺跡では、竪穴建物56軒、溝状遺構2条、土坑70基（内、中世土壘墓1基）、ピット54基を検出した。

竪穴建物（S1）

S11（第9・89図）

A地区とC地区にまたがって検出した。主軸方向はN-3°-Eである。平面形は隅丸方形で3.4m×3.3mを測る。カマドは東壁中央に位置する。幅20～35cmの周溝が全周する。遺構検出面からの深さは30cmで、覆土は上層に暗褐色砂質シルト、下層に黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち9点を図示した。1～6が土師器杯、8が土師器甕、9が須恵器甕で、7は土製の紡錘車である。1～3の杯は床面出土で、内面の見込内まで暗文が施される。4の杯の外面には線刻が施されている。

S12（第9・89図）

A地区とC地区にまたがって検出した。南側の大部分は調査区外へ延びている。主軸方向はN-9°-Eで、東西4.0mを測る。カマドは検出できなかった。遺構検出面の直上まで攪乱されており、遺構の遺存状況は不良であったが、北東コーナー部では幅20cmほどの周溝を検出した。覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物は少なく灰釉陶器の長頸壺とみられる破片を1点図示した。

S13（第10・89～92図）

A地区の西側に位置し、S14の西に隣接する。主軸方向はN-16°-Eである。平面形は隅丸方形で4.5m×3.8mを測る。カマドは東壁中央に位置しており、石組カマドである。煙道部は東壁の外側へ突出していたとみられる。幅30cmほどの周溝が全周しており、周溝内に複数の小ピットを検出した。床面で硬化面を検出した他、カマドのある東壁付近以外にも北壁中央付近の床面で焼土範囲を検出している。遺構検出面からの深さは38cmで、覆土は上層に暗褐色砂質シルト、下層に黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち35点を図示した。1～29は土師器である。1～14は杯で内面に放射状暗文、外面下位にヘラケズリを施すものが多い。13には墨書、14にはヘラ書きがみられるが、いずれも判読できない。15～17の皿は内面に放射状暗文と同心円状暗文を施すものがある。18～21は蓋で、18の内面には同心円状に暗文が施される。22は小壺で、外面は丁寧にヘラミガキする。23～29は甕である。口縁はいずれもくの字状を呈する。30・31は須恵器の甕で、32は須恵器蓋である。33は灰釉陶器の壺とみられる。34は砥石、35は石鎌である。

S14（第10・93図）

A地区の西側に位置し、S13の東に隣接する。主軸方向は南北軸とほぼ一致する。平面形は隅丸方

形で3.4m×3.3mを測る。カマドは北壁中央やや西寄りに位置していたようだが攪乱を受けていた。幅30cmの周溝がほぼ全周巡る。遺構検出面からの深さは18cmで、覆土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物は14点図示した。1～12は土師器である。1～7は坏で、内面に放射状暗文、外面下にヘラケズリを施すものが多い。8は皿である。9～11は甕、12は置きカマドの底部破片とみられる。内面に横ハケ、外面に縦ハケを施し、底面は面取りされ平坦である。13・14は灰軸陶器皿である。

S I 5 (第11・94図)

A地区の中央部で検出した。S I 7とわずかに重複し、切り合いでは先行する。主軸方向はN・4°・Eである。平面形は隅丸方形で、3.5m×3.0mを測る。カマドは北壁中央に位置し、石組カマドである。煙道部は北壁の外側へ突出していたとみられる。幅20cmの周溝が全周する。床面に硬化面を検出した。遺構検出面からの深さは34cmで、覆土は上層に黒褐色砂質シルト、下層で暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち12点を図示した。1～8は土師器である。1・2は坏で内面に放射状暗文、外面の下位にヘラケズリを施すものである。3～7は甕でくの字に反する口縁をもつ。8は甕のミニチュア土器とみられる。体部中位に角状の把手が付けられている。底部は中央部が欠損するため孔の有無は不明である。9は須恵器の高台坏、10は灰軸陶器の壺、11・12は金属製品で11は紡錘車か。中央に円孔がある。12は刀子である。

S I 6 (第11・12・95・96図)

A地区とB地区にまたがって検出した。S I 38に隣接する。主軸方向はN・2°・Eである。平面形は不整形で東西3.6mを測るが、S I 38と重複する北東コーナー部に焼土塊を検出した他、北側で別の立ち上がりも検出しており、さらにもう1軒別の竪穴建物が重複していた可能性がある。カマドは南東コーナー部に位置しており、構築材には石を使用している。遺構検出面からの深さは16cmで、覆土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち20点を図示した。1～19は土師器である。1～6は坏、7は皿で、口縁は玉縁状を呈す。8～17は甕で厚口口縁をもつものが多い。1と6は墨書土器で6は「林」とみられる。18は羽釜、19は置きカマドの底部破片で、底面を面取りしている。20は須恵器の甕である。

S I 7 (第11・12・97・98図)

A地区中央に位置する。S I 5・10と重複し、切り合いでは新しい。主軸方向はN・6°・Eである。平面形は隅丸方形で3.1m×2.2mを測る。カマドは据え付けのカマドが東壁中央やや南寄りに位置しており、左右両側に軸石が遺存する石組カマドで、中央の支柱石も遺存していた。また支柱石の上には土師器の坏が覆いかぶさった状態で出土した。さらにその上で置きカマドの破片が出土した。据え付けのカマドには支柱石や焼土などその構造や使用の痕跡が残る一方で、竪穴内の床面に焼土など置きカマドの使用痕跡は確認できなかった。また置きカマドの破片自体にも煤など実用的な使用による痕跡はみとめられない。置きカマドは、支柱石に覆いかぶさった坏の出土状況なども含めてカマド祭祀に関わる遺物と想定したい。周溝は北東部を除いて幅30cmで巡る。北東部はS I 10との重複によって視認できなかったが、全周巡っていたのではないかと推測する。遺構検出面からの深さは25cmで、覆土は灰褐色砂質シルトに黄褐色砂のブロックを含む。

出土遺物のうち18点を図示した。1～17は土師器である。1～5は坏である。1は墨書土器で体部外面に倒れて「吉」の墨書が書かれる。体部外面の下位にヘラケズリを施すものとロクロナデの

みのものがあり、内面の暗文はない。6・7は皿である。6は底面を手元ヘラケズリし、「第」の墨書が書かれる。8～12は甕で口縁は短く外反する厚口口縁である。13～15は羽釜である。16・17は置きカマドである。16はカマドの後背面、17は前面とみられ同一個体の可能性もあるが接合点がなく別図とした。18は灰釉陶器の長頸壺とみられる。

S I 8 (第13・99・100図)

A地区の南東部に位置する。S I 11・13・17・19など複数の竪穴建物と重複する。主軸方向はN-11°-Eである。平面形は隅丸方形と推測する。東西5.5mを測る。カマドは確認できなかったが東壁中央部とみられる位置で焼土を検出している。遺構検出面からの深さは36cmで、覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする。幅30cmほどの周溝が全周しており、周溝内に複数の小ピットを検出した。床面で硬化面を検出した他、カマドのある東壁付近以外にも北壁中央付近の床面で焼土範囲を検出している。遺構検出面からの深さは38cmで、覆土は上層に暗褐色砂質シルト、下層で黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち45点を図示した。1～37は土師器である。1～25は坏で、内外面ともロクロナデのみで調整するものが多い。22・23は高台坏、24は脚高高台坏、25は柱状高台坏である。26～36は甕で、口縁が厚口のもの他、内外面をナデ調整するものがみられる。37は羽釜である。38は緑釉陶器の碗とみられる破片である。39～43は灰釉陶器である。44は縄文土器の破片で、45は軽石である。

S I 9 (第15・101図)

A地区の東側に位置する。主軸方向はN-8°-Eである。平面形は隅丸方形で3.9m×3.2mを測る。カマドの痕跡は確認できなかったが、東壁中央付近に20～30cmの石が数個、投棄されたような状況で出土しており、東壁中央に石組カマドが設置されていた可能性がある。周溝は確認できなかった。遺構検出面からの深さは14cmで、覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち10点を図示した。1～8は土師器である。1～3は坏で、内外面ともロクロナデのみで調整されている。4・5は甕で、口縁は短く外反する。5の甕は内外面ともナデ調整されている。6～8は羽釜である。9・10は灰釉陶器の碗である。

S I 10 (第11・12・101・102図)

A地区の中央に位置する。S I 7と重複し、切り合いでは先行する。主軸方向はN-2°-Eである。平面形は隅丸方形で4.1m×4.0mを測る。カマドは東壁中央に位置している。カマドの左右両側の袖石が遺存しており、石組カマドである。中央には支柱石も遺存していた。周溝は確認できなかった。遺構検出面からの深さは10cmで、覆土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち11点を図示した。全て土師器で、1～4は坏、5～7は皿である。口縁が玉縁を呈するものが多く、2は体部下位にヘラケズリ、6・7は手持ちヘラケズリを施す。8～11は甕で、ナデ調整しているものが多い。

S I 11 (第16・103・104図)

A地区の東側に位置する。S I 8・17・18と重複し、切り合いではS I 8に先行し、S I 17・18より新しい。主軸方向はN-5°-Eである。平面形は隅丸方形で3.7m×3.7mを測る。カマドは南東コーナーに位置する。石の出土状況から石組カマドとみられる。周溝は確認できなかった。遺構検出面からの深さは20cmで、覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち35点を図示した。1～32は土師器である。1～16は坏で、内外面ともロクロナデのみで調整する。14～16は脚高高台坏である。17～20は皿で17の内面には線刻がある。21～23は小形の壺か。24～27は甕で、厚口口縁のものがある。28は羽釜で、鈎が口縁の上端近くに付く。

29～32は置きカマドである。29・32はカマド前面の底部、30には孔があり、カマド側面の破片とみられる。31は底部破片で内面に横ハケ、外面は縦ハケで底面は面取りされ平坦である。33は端部に孔を持つ、用途不明の手づくねの土製品である。34は須恵器の甕、35は灰軸陶器の壺である。

S I 12 (第 17・104 図)

A地区の南東部に位置する。B地区のS I 35と重複し、切り合いでは先行するとみられる。竪穴の南辺は調査区外に延びる。主軸方向は南北軸とほぼ一致する。平面形は隅丸方形で東西4.4mを測る。カマドは北壁中央に位置し、煙道部が壁の外側へ大きく突出する。幅20cmほどの周溝を西壁沿いと東壁沿いに検出した。遺構検出面からの深さは38cmで、覆土は上層に暗褐色砂質シルト、下層に黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち4点を図示した。1は土師器環で、見込内まで暗文を施し、外底面もヘラミガキする丁寧な作りである。2・3は土師器の甕で、4は須恵器の甕である。

S I 13 (第 13・14・105 図)

A地区の東側に位置する。S I 8と重複し、切り合いでは先行する。主軸方向はN-7°-Wである。わずかに調査区外に延びるが平面形はほぼ正方形の隅丸方形とみられ、東西3.4mを測る。カマドは確認されなかった。幅30cmの周溝が全周する。遺構検出面からの深さは42cmで、覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち7点を図示した。1～4は土師器の環である。5の土師器の甕は胎土・調整などから古墳時代のもつと推測する。6は灰軸陶器の皿か。7は縄文土器で燃糸文を施す。

S I 14 (第 18・105・106 図)

A地区の中央部に位置する。S I 13と重複し、切り合いでは先行する。主軸方向はN-2°-Eである。平面形は隅丸方形で4.0m×4.0mを測る。カマドは南東コーナー部に位置し、袖石が遺存しており、石組カマドである。幅40cmの周溝が全周しており、周溝内に複数の小ピットを検出した。遺構検出面からの深さは33cmで、覆土は上層に黒褐色砂質シルト、下層に褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち18点を図示した。すべて土師器で1・2・4～7は環である。内面に放射状暗文、外面下位にはヘラケズリを施す。1は線刻、2には墨書がある。3・8～11は皿である。底部を手持ちヘラケズリするもので3・9の内面には同心円状暗文が施される。8の外面には線刻が施されている。12は蓋、13～18は甕で、口縁がくの字を呈するものである。

S I 15 (第 19・106・107 図)

A地区の東側に位置する。S I 16と重複するが、遺構検出面では切り合いは確認できなかった。主軸方向はN-10°-Eである。平面形は隅丸方形で4.2m×3.1mを測る。カマドは南東コーナーに位置する。遺構検出面からの深さは20cmで、覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち14点を図示した。1～5は土師器環である。いずれもロクロナデのみで調整するもので4は脚高台である。6～8は皿で、6は耳皿である。9・10は土師器甕、11は土師器羽釜である。12～14は灰軸陶器で、12は壺、13は皿、14は碗か。

S I 16 (第 19・107 図)

A地区の東側に位置する。S I 15と重複するが切り合いは確認できなかった。主軸方向はN-10°-Eである。平面形は隅丸方形で東西3.7mを測る。カマドは南東コーナーに位置する。遺構検出面からの深さは13cmで、覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする。また、竪穴内で口縁を重ね合わせた状態で土師器環2個が出土している。内容物をサンプリングしたが、土と3個の小石の他には何も出ていない。

出土遺物のうち9点を図示した。1～5は土師器環、6は皿である。いずれもロクロナデ調整されて

いる。4と6は口縁を重ね合わせた状態で出土したものである。7は土師器甕、8は土師器羽釜、9は雁股式の鉄鍬とみられる。

S I 17 (第 13・16・107 図)

A地区の東側に位置する。S I 8・11・18と重複し、切り合いでは先行する。北西コーナー一部の立ち上がりのみを検出しており、平面形や規模は不明で、カマドや床面も確認できなかった。

出土遺物は少ないが3点を図示した。1・2は土師器環で、2の底面には線刻がある。3は土師器鉢か。ロクロ成形で、底部の切り離しは回転系切りである。

S I 18 (第 16 図)

A地区の東側に位置する。S I 11・17と重複し、切り合いではS I 11に先行し、S I 17より新しい。北西コーナーのごく一部のみを検出したため、平面形や規模は不明で、カマドや床面も確認できなかった。

図示できた出土遺物はない。

S I 19 (第 13・14・107 図)

A地区の東側に位置する。S I 8と重複し、切り合いでは先行する。北東コーナーとみられる部分のみのため、平面形や規模は不明である。カマドや床面は確認できなかった。

出土遺物のうち5点を図示した。1は土師器皿で玉縁口縁でロクロナデを施す。2・3は土師器甕で、口縁は短く外反して終わる。4は置きカマドか。底面は面取りして平坦である。5は灰釉陶器の碗である。

S I 20 (第 20・108・109 図)

B地区の東側に位置する。切り合いでは溝 14に先行する。主軸方向はN-10°-Eである。平面形は隅丸方形で南北3.5mである。建物の東壁は溝 14で切られるため、明確な立ち上がりを確認できなかったが、床面の検出状況から東西方向の規模は4.5mと推定される。カマドは北壁中央西寄りに位置し、掘方には支柱石の痕跡が残る。煙道は北壁から外へ突出する。カマド前には30cm大の石が出土しており、石組であったと推測する。遺構検出面からの深さは24cmで、覆土は上層に黒褐色砂質シルト、下層に暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち21点を図示した。1～16は土師器である。1～11は環で、1は外底面に墨書で記号がある。2の底面は静止系切り、3の高台環は放射状暗文が見込み内まで施され、外面はヘラミガキされた丁寧なつくりである。10は黒色鉢で口縁は底部から直線的に斜め外方に立ち上がる。1・3・10はカマド出土である。10と同様なタイプの小形鉢がケカチ遺跡の溝状遺構からも出土しているが、甲斐型土器の古い時期に属するものようである。5～9は外面下位をヘラケズリし、内面に放射状暗文が施される。5・9は墨書土器で5は「舎」、9は「林」か。12・13は皿で12の内面には同心円状暗文が施される。14～16は甕である。17は須恵器蓋、18は須恵器甕である。19は須恵器壺で床面上に正位に据えられた状態で出土したが、表土直下のため頸部から口縁部にかけては後世に攪乱されて欠いてしまったようである。20は縄文土器で前期末から中期初頭のものか。21は黒曜石の剥片である。

S I 21 (第 21・109 図)

B地区の東側に位置し、S I 45と重複する。切り合いでは新しい。主軸方向はN-9°-Eである。平面形は隅丸方形で東西2.8mを測り、北辺は調査区外に延びる。カマドは検出できなかった。遺構検出面からの深さは10cmで、覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物は少ないが2点図示した。1は土師器環で、調整はロクロナデのみである。2は土師器甕である。

S I 22 (第 22・109 図)

B地区の中央部に位置する。S I 24・27と重複し、切り合いではS I 24に先行するが、S I 27との前後関係は確認できなかった。主軸方向はN-5°-Eである。平面形は隅丸方形で規模は3.1m×2.7mを測る。カマドは東壁中央南寄りに位置し、煙道部は東壁から外へ突出する。遺構検出面からの深さは14cmで、覆土は灰黄褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち4点を図示した。1はカマド出土の土師器環で、内面に放射状暗文、外面下位はヘラケズリする。2・3は土師器皿で3の外底面には線刻が刻まれる。4は黒曜石の剥片である。

S I 23 (第 22・110 図)

B地区の中央部に位置する。S I 24と重複し、切り合いでは新しい。主軸方向はN-4°-Wである。平面形は隅丸方形で3.6m×3.6mを測る。カマドは南東コーナーに位置する。幅30cmの周溝が東辺を除いて巡っている。中央部に硬化面を検出している。遺構検出面からの深さは15cmで、覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち10点を図示した。1～4は土師器環で、外面下位にヘラケズリを施す。4は黒色環で口径18cmと大形である。5は土師器皿である。6～9は土師器甕である。10は須恵器甕である。

S I 24 (第 22・110 図)

B地区中央に位置する。S I 22・23と重複し、切り合いではS I 22より新しく、S I 23に先行する。主軸方向はN-7°-Eである。平面形は隅丸方形で3.0m×2.9mを測る。カマドはなく、幅20cmの周溝が全周する。北壁沿いの床面中央でほぼ完形の土師器甕が横たわった状況で出土したが、他の遺物は少ない。遺構検出面からの深さは30cmで、覆土は上層に黒褐色砂質シルト、下層で暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物は2点を図示した。1は土師器環で低径が小さく、外面下位にはヘラケズリを施す。2は甕である。外面をヘラケズリしたもので堀之内原タイプと類似するが、胎土が異なる。

S I 25 (第 23・110 図)

B地区中央に位置する。北辺は調査区外へ延びる。S K 25と重複し先行する。主軸方向はN-13°-Eである。平面形は隅丸方形で、規模は東西3.2mを測る。カマドは東壁中央南寄りに位置しており、煙道部が東壁の外側へ突出する。床面で硬化面を検出している。遺構検出面からの深さは10cmで、覆土は上層に黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち9点を図示した。1・2は土師器環、3・4は土師器皿である。ロクロナデ成形で、口縁は玉縁口縁である。5は土師器甕、6は土師器羽釜、7は須恵器の長頸壺とみられる。8・9は灰釉陶器で8は碗、9は壺である。

S I 26 (第 24・25・111 図)

B地区の東側に位置する。S I 27と重複し、切り合いでは新しい。主軸方向はN-2°-Eである。平面形は隅丸方形で3.8m×3.4mを測る。カマドは東壁中央に位置し、掘方には支柱石の痕跡が残る。周溝は幅30cmでほぼ全周巡る。遺構検出面からの深さは20cmで、覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち18点を図示した。1～16は土師器である。1～13は環で、内面に放射状暗文、外面下半にヘラケズリを施すものが多い。1・2・3・4・11・12・13は墨書土器である。1・2は「奉」か。3は「戸舎」、12は「舎」、13は「戸」か。10は刻書土器で外面に線刻を施す。14・15・16は土師器甕である。17は須恵器鉢、18は金属製品で刀子とみられる。

S I 27 (第 24・25・111・112 図)

B地区の東側に位置する。S I 22・26・28と重複し、切り合いではS I 26・28に先行する。S I 22との切り合いは確認できなかった。S I 27内で一回り内側に巡る周溝を平面プランとしてS I 29としたが、S I 27の間仕切り溝ととらえることもできる。主軸方向はN-8°-Eである。コーナ一部を確認できなかったため平面形・規模とも不明だが、規模は一辺4.2m以上と推定される。カマドは確認できなかった。床面の中央部分で硬化面を検出した。遺構検出面からの深さは10cmで、覆土は上層に黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち9点を図示した。1は土師器の黒色環、2は土師器環で内面に放射状の暗文を施す。3～5は土師器皿で、3は墨書土器であるが文字は判読できない。外底面は回転ヘラケズリが施される。6は土師器の置きカマドの前面の破片である。7は須恵器甕、8・9は灰軸陶器で8は皿、9は碗である。

S I 28 (第 24・25・112 図)

B地区中央に位置する。S I 27と重複し、切り合いでは新しい。南辺のプランが不整形であるが調査区外に別の建物がある可能性が高い。主軸方向はN-4°-Eである。平面形は隅丸方形で3.5m×3.3mを測る。カマドは南東コーナ一部に位置する。床面のカマド前とみられる位置で硬化面を検出している。遺構検出面からの深さは12cmで、覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち6点を図示した。1・2は土師器環で、内面に放射状暗文を施し、外面下半はヘラケズリする。3～5は土師器皿で、3は外底面に「奉」のようにもみえる線刻を施す。4は玉緑口縁で、下位は手持ちヘラケズリである。6は金属製品で刀子とみられる。

S I 29 (第 24・25・112 図)

B地区東側に位置する。S I 27内で一回り内側に巡る周溝を平面プランとしてS I 29とした。壁の立ち上がりやS I 27との切り合い、床面の高低差などは確認できず同一の建物の可能性がある。

出土遺物のうち3点を図示した。1・2は土師器環、3は灰軸陶器の碗である。

S I 30 (第 26・27 図)

B地区の西側に位置する。S I 35と重複し、切り合いでは先行する。南側の大部分が調査区外に延びる。主軸方向はN-7°-Eである。平面形は隅丸方形で東西3.8mを測る。カマドは確認できない。遺構検出面からの深さは27cmで、覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物は少ないが3点を図示した。1・2は土師器の環である。玉緑口縁を呈し、外面下半にヘラケズリを施す。3は厚口口縁の土師器甕である。

S I 31 (第 26・27・112・113 図)

B地区の西側に位置する。S I 34と重複し、切り合いでは新しい。主軸方向はN-3°-Wである。平面形はやや不整形な隅丸方形で3.2m×2.9mを測る。カマドは東壁中央南寄りに位置し煙道部が東壁の外側へ突出する。遺構検出面からの深さは35cmで、覆土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち10点を図示した。1～6は土師器環である。内面に放射状暗文、外面下半はヘラケズリするものである。4は高台環で、6は墨書土器であるが判読できない。7は土師器皿である。8～10は甕で、口縁はくの字状を呈す。

S I 32 (第 28・113 図)

B地区の東側に位置する。溝14に東肩を切られる。主軸方向はN-7°-Wである。平面形は隅丸方形で南北3.5mを測る。カマドは確認できなかったが床面の南東部に焼土範囲を検出しており、南東コーナ一部にあった可能性が高い。遺構検出面からの深さは10cmで、覆土は褐色砂質シルトに黄褐色砂を粒状に含む層を基調とする。

出土遺物のうち9点を図示した。1・2は土師器環である。内面に放射状暗文、外面下半にヘラケズリを施し、2の外面には線刻が刻まれるが判読できない。3は土師器高台環だが、胎土が甲斐型土器と大きく異なる。4は土師器皿で底面は回転ヘラケズリする。5は土師器羽釜の鏝部の破片である。6～8は須恵器で、6は環、7は長頸壺、8は甕である。9は灰軸陶器の碗である。

S I 33 (第26・27・113図)

B地区の西側に位置する。S I 34・35・43などと重複が激しい。切り合いではそれらの建物より新しいとした。主軸方向は南北軸とほぼ一致する。平面形は隅丸方形で3.0m×2.8mを測る。カマドは東壁中央南寄りに位置し、煙道が東壁の外側へ突出していたとみられる。幅30cmの周溝を南西コーナー部で検出した。遺構検出面からの深さは23cmで、覆土は上層に黒褐色砂質シルト、下層に暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち8点を図示した。1～3は土師器環で、口縁は玉縁状を呈し、外面下半はヘラケズリする。4は土師器の環形鉢とした。口縁端部が外方へつまみ出され、内外面とも放射状の暗文が施される。5～7は土師器甕で、5の口縁は厚口である。8は須恵器の鉢か。

S I 34 (第26・27・114図)

B地区の西側に位置する。S I 31・33・43などと重複し、切り合いではそれらの建物に先行するとした。主軸方向はN-19°-Wである。平面形は隅丸方形で南北4.6mを測る。カマドは北壁中央東寄りに位置しており、煙道が北壁の外側に大きく突出する。周溝は幅30cmである。他の建物と重複する部分以外では検出できており、全周していたとみられる。遺構検出面からの深さは32cmで、覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち4点を図示した。1～3は土師器環である。1は内面に放射状暗文、外面下半をヘラケズリする。2は口縁が玉縁状を呈する。3は底面に墨書があるが判読できない。4は土師器甕で、口縁はゆるく外反し、体部はナデ調整で仕上げる。

S I 35・36 (17・26・27・114図)

B地区の西側に位置する。S I 12・30・43などと重複する。切り合いではS I 12より新しく、S I 30に先行するとした。S I 43との切り合いは不明である。北西コーナー部しか検出できなかったため、主軸方向、平面形、規模などは不明で南辺は調査区外へ延びている。カマドの位置は東壁中央付近と推測する。煙道が東壁より外側に突出する。また、北壁の中央付近とみられる辺りでもカマドの存在を想定させる焼土範囲を検出しており、これをS I 36のカマドとしたが、壁の立ち上がりや床面は検出できず、同じ場所での建て替えやカマドの作り替えなどを考えたい。遺構検出面からの深さは21cmで、覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物は少ないが2点を図示した。1・2は土師器甕の口縁と底部である。ナデ調整を施すものでカマドから出土しており、同一個体とみられる。

S I 37 (第29・30・114図)

A地区とB地区にまたがって検出した。S I 38・39と重複し、切り合いではS I 38に先行し、S I 39より新しい。主軸方向はN-5°-Eである。平面形は隅丸方形で4.3m×3.2mを測る。カマドは南東コーナー部に位置する。カマド近くの床面で30cm大の石が3個出土しており、石組のカマドであった可能性がある。幅30cmの周溝を南西コーナー部で検出した。遺構検出面からの深さは30cmで、覆土は暗褐色砂質シルトである。

出土遺物のうち21点を図示した。1～9は土師器環である。1～3は内面に放射状の暗文を施す。5・6の口縁は外反もしくは玉縁状を呈し、ロクロ成形である。10は土師器皿で外面に線刻が施される。

11～14は土師器甕で、11・12は厚口口縁である。15～17は土師器羽釜の髷部である。18は須恵器甕、19は須恵器長頸壺、20は灰軸陶器の碗である。21は土製品で、中央に手づくねで凹状にくぼませた穴がある。

S I 38 (第29・30・115図)

B地区の西側に位置する。S I 6と重複し、切り合いでは先行する。北辺は調査区外に延びる。主軸方向はN-5°-Eである。平面形は隅丸方形で東西3.6mを測る。カマドは南東コーナー部に位置し、カマド脇に30cm大の石が出土していることから石組カマドであった可能性が高い。幅30cmほどの周溝を南西コーナー部で検出している。遺構検出面からの深さは25cmで、覆土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち13点を図示した。1は土師器の黒色環である。2～4は土師器甕で、口縁端部は2が厚口、3はゆるく外反し、4は外方に短くつまみ出される。5は土師器羽釜の髷部である。6～8は須恵器甕、9は須恵器長頸壺である。10は緑軸陶器の碗の破片か。11～13は灰軸陶器で、11が碗、12は皿、13は壺である。

S I 39 (第29・115・116図)

B地区の西側に位置する。S I 37と重複し、その床面からさらに20cm下でS I 39の床面を検出しており、切り合いではS I 39が先行する。北辺は調査区外に延びる。主軸方向は南北軸とほぼ同一である。平面形は隅丸方形で東西5.0mを測る。カマドは確認できなかった。検出した範囲では幅20cmほどの周溝が全周する。遺構検出面からの深さは52cmで、覆土は上層に黒色砂質シルト、下層で黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち19点を図示した。1～18は土師器である。1～10は環で、見込内まで放射状に暗文を施すものが多い。9は口径18.4cmと大形でほぼ方形である。5は外底面に線刻を施し、10も外底面に墨書があるが判読できない。11・12は皿で、内面に同心円状暗文が施される。11は底面を回転ヘラケズリし、12の底面は手持ちヘラケズリされ、「丈主」と墨書がある。13～18は土師器の甕である。19は須恵器の壺とみられる。

S I 40 (第31・117図)

B地区の西側に位置する。S I 44と重複し、切り合いでは先行する。主軸方向はN-10°-Eである。平面形は隅丸方形で東西3.9mを測る。カマドはほとんど遺存していなかったがわずかに焼土が残っており、東壁中央北寄りに位置していたと推定される。床面に硬化面を検出している。遺構検出面からの深さは15cmで、覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち10点を図示した。1～3は土師器環でロクロナデのみの調整である。4は土師器の脚高台台環で、5は土師器皿である。6は古墳時代の台付甕か。7は須恵器の長頸壺で、8は灰軸陶器の碗、9は灰軸陶器皿である。10は銭貨で、北宋元豊元年(1078年)初鑄の「元豊通宝」とみられる。

S I 41 (第32・33・117・118・119図)

B地区中央部に位置する。S I 42と重複し、切り合いでは新しい。主軸方向はN-4°-Wである。平面形は隅丸方形で4.0m×3.5mを測る。カマドは東壁中央南寄りに位置し、掘方には支柱石の抜き取り痕が残る。周溝は幅40cmで、竪穴の南南部の壁沿いに検出した。遺構検出面からの深さは35cmで、覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち29点を図示した。1～26は土師器である。1～15は環で、カマド出土の1・2・5・6・7は見込内まで放射状暗文を施し、外面下位をヘラケズリする。1・2・3・7・11・12の外底面には線刻が刻まれる。4・10・14・15は墨書土器である。4は不明、10は「南」か。14は不明、15は「北」

か。16～19は蓋である。16の蓋はつまみがつき、内面は放射状暗文を施す。17・18は口縁から天井部への立ち上がりが比較的急なつくりである。19の外面には不明の墨書がある。20～26は土師器甕で、口縁はくの字口縁である。27・28は須恵器で、27が坏、28が甕である。29は金属製品で、鉄製である。手鎌であった可能性がある。

S I 42 (第32・33・119図)

B地区中央部に位置する。S I 41と重複し、切り合いでは先行する。主軸方向はN-15°-Wである。平面形は隅丸方形で2.8m×2.7mを測る。カマドは北壁中央東寄りに位置しており、煙道は北壁の外へ突出する。幅20cmの周溝が全周する。南壁沿いの床面中央で俵形の石の集石が出土している。遺構検出面からの深さは53cmで、覆土は黒色砂質シルトを基調とする。

出土遺物は少なく3点を図示した。1は土師器甕である。2・3は南壁沿いの床面中央で出土した俵形の石の集石のうち、2点を図示したものである。

S I 43 (第26・27・119図)

B地区の西側に位置する。S I 33・34・35などと重複する。S I 33・34の掘方確認を進める過程で検出しており、切り合いでは先行する。S I 35との新旧関係は不明である。主軸方向はN-10°-Wである。平面形は隅丸方形で4.0m×3.2mを測る。カマドは東壁中央に位置しており、カマド自体が東壁から大きく突出した形となっている。遺構検出面からの深さは18cmで、覆土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物は1点図示した。1は土師器坏で口縁端部は肥厚し、外面下半をヘラケズりする。

S I 44 (第31・119図)

B地区の西側に位置する。S I 40と重複し切り合いでは新しい。大部分が調査区外へ延びている。平面形の形状から竪穴建物としたが、覆土は砂質土を基調とした互層となっていた。遺構検出面からの深さも80cm近くに及ぶため、溝状遺構の屈曲部である可能性が高い。

出土遺物は土師器坏を1点図示した。

S I 45 (第21・119図)

B地区の東側に位置する。S I 21と重複し切り合いでは先行する。主軸方向はN-14°-Eである。平面形は隅丸方形で南北3.9mを測る。床面やカマドは確認できなかったが南東コーナーで周溝を検出している。遺構検出面からの深さは10cmで、覆土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物は少ないが3点図示した。1は土師器坏で口縁端部が肥厚する。2・3は灰釉陶器で2は皿、3は碗か。

S I 46 (第34・35・119図)

C地区の東側に位置し、S I 47・49に隣接する。主軸方向はN-4°-Eである。平面形は隅丸方形で3.4m×3.0mを測る。カマドは東壁中央南寄りに位置する。幅20cmの周溝が北東部から南西部にかけて巡っており、周溝内では小ピットを複数検出している。遺構検出面からの深さは20cmで、覆土は上層ににぶい黄褐色砂質シルト、下層に暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち8点を図示した。1～3は土師器坏で外面下半をヘラケズリし、1・2は内面に放射状暗文を施す。4・5は皿で内面に同心円状暗文を施す。5の外底面には「千」の墨書が書かれる。6・7は土師器の蓋で、7は破片で判読できないが墨書される。8は土師器甕である。

S I 47 (第34・35・120図)

C地区の東側に位置する。S I 48と重複し、切り合いでは新しい。主軸方向はN-4°-Eである。平面形は隅丸方形で3.7m×3.6mを測る。カマドは北東コーナーに位置する。幅30cmの周溝が全周

しており、周溝内に複数の小ピットを検出している。床面では東半部に硬化面を検出した。遺構検出面からの深さは37cmで、覆土は上層に褐色砂質シルト、下層で暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち13点を図示した。1～7は土師器環で内面に放射状暗文、外面下半にヘラケズリを施すものが多い。2・6の外面には類似する記号が線刻される。8は土師器甕で、9は土師器の置きカマドの底部とみられる破片である。10・11は須恵器の蓋である。12・13は須恵器の長頸壺か。接合点はないが同一個体の可能性が高い。

S I 48 (第34・35・121図)

C地区の東側に位置する。S I 47と重複し、切り合いでは先行する。主軸方向はN・7°・Eである。平面形は隅丸方形で南北3.1mを測る。カマドは北壁中央東寄りまたは北東コーナーに位置していた痕跡があるが、S I 47に攪乱されたとみられる。周溝は幅20～30cmほどで南壁から西壁に沿った範囲を巡る。遺構検出面からの深さは35cmで、覆土はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物は少なく3点を図示した。1は土師器甕、2は縄文土器、3は環状の金属製品である。

S I 49 (第36・37・122・123図)

C地区の東側に位置する。S I 54の大部分に覆い被さる形で検出しており、切り合いではS I 54より新しい。主軸方向はN・12°・Eである。平面形は南壁の遺存状況がよくなかったためやや不整形ではあるが隅丸方形である。規模は5.4m×5.0mと后畑西遺跡で検出した建物の中では最大である。カマドは南東コーナーに位置しており、カマド両側に袖石が遺存する石組カマドである。幅20cmの周溝が南壁付近で途切れるが、全周していたとみられる。遺構検出面からの深さは33cmで、覆土は上層ににぶい黄褐色砂質シルト、下層は暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち29点を図示した。1～26は土師器である。1～7は環である。床面出土の3は口縁端部がやや肥厚し、外面下半にヘラケズリを施す。4・5は墨書土器である。4は口縁端部が外反する。体部下半はヘラケズリし「五」とみられる墨書が書かれる。5は判読できない。7は高台環である。8～10は皿である。11～20は甕で、口縁端部が厚いものとゆるく外反し体部をナデ調整するものがある。21・22は土師器羽釜である。23～26は置きカマドで、23・26は底部破片、24は上端部、25は焚口部分の破片とみられる。27は須恵器の蓋、28は灰釉陶器の碗である。29は金属製品で、カマド前で出土した刀子である。

S I 50 (第38・39・123図)

C地区東側に位置する。S I 51と重複し、切り合いでは新しい。北壁は調査区外へ延びる。主軸方向はN・12°・Eである。平面形は隅丸方形で東西3.4mを測る。カマドは確認できなかった。幅30cmの周溝を東壁のみで検出した。表土直下で検出したため覆土はあまり残っていなかったが、床面の硬化面を検出している。遺構検出面からの深さは5cmで、覆土は褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち6点を図示した。1～4は土師器環である。2は盤状環で、床面出土であるが下層のS I 51に帰属する遺物が混入したものとみられる。5は土師器甕、6は土師器羽釜の鈎部の破片である。S I 51 (第38・39・124図)

C地区の東側に位置する。S I 50と重複し、切り合いでは先行する。主軸方向はN・8°・Eである。平面形は隅丸方形で、規模は3.9m×3.4mである。カマドは北壁中央やや西寄りに位置する。幅20cmの周溝が全周する。遺構検出面からの深さは28cmで、覆土は上層に暗褐色砂質シルト、下層は黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち7点を図示した。1～3は土師器の盤状環である。1・2の底面は静止系切り後、ヘラケズリする。4は高台環で、見込内まで暗文を施し、外面はヘラミガキする。5～7は土師器甕で、

5と7は体部にナデ調整を施す。

S I 52 (第40・124・125図)

C地区中央に位置する。S I 53と重複し、切り合いでは先行する。主軸方向はN-5°-Eである。平面形は隅丸方形で、規模は東西3.8m、南北は3.7mと推定する。北壁はS I 53の攪乱を受け、東壁は現代の下水道管によって攪乱されていた。北壁中央で焼土などのカマド痕跡を検出している。周溝は攪乱されている北壁沿いと東壁沿いを除き、幅20cmで全周する。遺構検出面からの深さは30cmで、覆土は暗褐色砂質シルトを基調とする。また、竪穴覆土の上面では下水道管による攪乱からわずかに外れて獣骨が出土している。中世陶器を伴って出土しており、中世のものと同推定される。分析を行ったところ、獣骨は馬の下顎骨で13歳と推定されている。

出土遺物のうち15点を図示した。1～7は土師器環である。内面に放射状暗文、外面下半をヘラケズリするものが多い。8・9は土師器皿で外面の下位は回転ヘラケズリを施す。10は土師器甕、11は須恵器蓋である。12は須恵器壺、13は須恵器甕である。14は灰釉陶器の皿か。15は馬の下顎骨と同位置で出土した。常滑焼とみられる中世陶器の甕である。

S I 53 (第40・125・126図)

C地区中央部に位置する。S I 52と重複し、切り合いでは新しい。主軸方向はN-5°-Eである。平面形は隅丸方形で、規模は4.1m×3.9mである。カマドは東壁中央南寄りに位置する。幅20cmの周溝が南壁沿いをのぞいて全周する。南壁沿いも遺存していたとみられるがS I 52との重複のため確認できなかった。遺構検出面からの深さは48cmで、覆土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち31点を図示した。1～25は土師器である。1～11は環で、口縁が肥厚し外面下半にヘラケズリを施すものが多い。2・7・8は墨書土器である。2は墨痕がわずかに残るのみである。7・8は文字とみられるが判読できない。9は外面に線刻で「吉」と刻まれており、11にはヘラ書きがある。12～14は皿で口縁は肥厚し、外面下位は手持ちヘラケズリを施す。14は墨書土器で「五」と書かれる。S I 49のNo.4の墨書土器にも「五」とみられる文字が書かれるが筆跡は異なるようにみえる。15～19は甕である。口縁がやや厚口となるものが多い。20～22は羽釜の罅部の破片である。23・24・25は置きカマドの底面の破片とみられる。26は須恵器短頸壺、27は須恵器甕である。28～31は灰釉陶器で、28～30は碗、31は皿である。

S I 54 (第36・37・127図)

C地区東側に位置する。S I 49と重複し、切り合いでは先行する。北壁は調査区外へ延びる。主軸方向はN-14°-Eである。平面形は隅丸方形で、規模は東西3.5mである。カマドは南東コーナーに位置する。幅20cmの周溝が調査区外となっている部分のをのぞいて全周する。S I 49の直下で検出したが、掘り込みが深く遺存状況は良好であった。遺構検出面からの深さは63cmで、覆土は上層に黒褐色砂質シルト、下層で暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち10点を図示した。1は土師器環で口縁は玉縁状を呈し、外面下半をヘラケズリする。2・3は高台杯、4は土師器皿である。5～7は土師器甕で、厚口口縁である。8は土師器の置きカマドか。9は須恵器甕、10は灰釉陶器の碗である。

S I 55 (第41・127図)

C地区中央部に位置する。昭和測量の調査期間中は竪穴の南東部分にあたるところに電柱が建てられており、調査不能であった。昭和測量は南東部以外の調査を行い、南東部については平成28年7月から8月にかけて甲州市教育委員会があらためて調査を行い完掘している。主軸方向はN-15°-Eである。平面形は隅丸方形で、規模は3.7m×3.6mである。カマドは北壁中央に位置し、煙道は北壁の外側に突

出する。幅 20cm の周溝が南東コーナーをのぞいて全周する。遺構検出面からの深さは 26cm で、覆土は上層に暗褐色砂質シルト、下層に黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物が少なく 4 点を図示した。1・2 は土師器環で、玉縁口縁で、体部外面は下半ヘラケズリを施す。3 は土師器裏で体部をナデ調整するものである。4 は縄文土器である。

S I 56 (第 41・127 図)

C 地区中央部に位置する。竪穴の北東コーナーを部分的に検出しており、大部分は南側の調査区外へ延びる。また西半部は攪乱され遺存していなかった。主軸方向は推定で N-13°-E である。平面形や規模は不明である。北壁中央にあたると思われる部分で、カマド痕跡とみられる焼土を検出している。幅 20cm の周溝を北東コーナー部で確認できた。遺構検出面からの深さは 20cm で、覆土は上層に暗褐色砂質シルト、下層に黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物は 3 点を図示した。1 は土師器環で見込内まで放射状暗文を施す。2・3 は土師器裏である。

溝状遺構 (S D・溝)

S D 1・2 (第 7 図)

C 地区西側に位置する。S D 1 は東西方向に走る。長さ 4.4m、幅 40cm、遺構検出面からの深さ 25cm を測る。S D 2 は S D 1 と直交する軸線で、南北方向に走る。長さ 2.9m、幅 60cm、遺構検出面からの深さ 14cm を測る。当初、S D 1 と S D 2 が竪穴建物の周溝など方形プランを構成すると想定したが、対となる溝は検出できず、カマドや床面、壁面の立ち上がりなども検出されなかった。図示できた出土遺物はない。

溝 14 (第 7・128 図)

C 地区東側に位置する。大部分は山梨文化財研究所が調査を行った后畑遺跡の範囲に含まれ、遺構番号も山梨文化財研究所が付したものになっている。后畑西遺跡調査区では溝の西肩を検出し、そこで出土した須恵器裏を 3 点図示した。

土坑 (S K) (表 2・6)

S K 68 (第 8・128・129 図)

C 地区西側に位置する。平面形は長楕円形で、長径 1.27m、短径 88cm、遺構検出面からの深さ 38cm を測る。土坑は表土直下で検出した。掘り下げたところ上面で 30cm 大の石を 3 個検出した。さらに上面の石を取り外すと人骨が出土した。出土状況からは、土坑を掘った後に底面の両側に 10～20cm の石を並べて土止めたような状態とし、その間の空間に、頭を北にして東側に体を向け足を折り曲げた状態の被葬者を横たわせ、最後に 30cm 大の石 3 個を上に乗せて埋葬したとみられる。副葬品はなく他の出土遺物もないが、埋葬状況から中世の土壌墓と推測している。人骨の遺存状況はあまり良くなかったが、分析を行ったところ、頭蓋骨と下顎骨、四肢骨の一部であることが判明した。20 歳代の女性と推定されている。

后畑西遺跡のその他の土坑についての規模や出土遺物は土坑一覧表や遺物観察表を参照されたい。

ピット (S P) (表 3・6)

后畑西遺跡全体で 54 基検出した。土坑より小さくおおむね長径 50cm 程度までのものをピットとした。個々の規模や出土遺物はピット一覧表や遺物観察表を参照されたい。

第2節 ケカチ遺跡

ケカチ遺跡は后畑西遺跡の西側に位置する調査区である。后畑西遺跡の調査区とは約30mの間隔があるが、この範囲は甲州市教育委員会による事前の試掘調査で埋没谷の存在が指摘されており、遺構が検出されなかったため本調査の対象外となっている。后畑西遺跡西端部の深掘り調査によっても埋没谷の東肩を検出し、谷を埋め立てたとみられる造成土を確認している。この埋没谷より西側の範囲をケカチ遺跡として報告する。

調査前の現況はD・E地区はブドウ・モモの耕作地であった。近世以降の耕作によるものとみられる東西方向、南北方向の溝状の攪乱を検出した他、現代のゴミ穴も多く検出した。F・G地区は宅地および駐車場で、G地区では、径1m近くの大きな石がまとめて廃棄された大きなゴミ穴による攪乱を多数検出した。こうした状況にもかかわらず、浅い所では表土下20cmほどで多くの遺構・遺物を検出した。

ケカチ遺跡では竪穴建物49軒、方形周溝墓1基、溝状遺構9条の他、土坑94基、ピット166基を検出した。

竪穴建物（S1）

S11（第47・131図）

D地区の中央部に位置する。主軸方向は南北軸とほぼ一致する。平面形は隅丸方形で3.9m×3.6mを測る。カマドは北壁中央に位置し、煙道部は北壁より外側に突出する。床面には部分的に硬化面を確認した。幅20～35cmの周溝が全周する。遺構検出面からの深さは17cmで、覆土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち11点を図示した。1～7は土師器環である。2・3は竪穴内南側の床面で重なって出土したものである。見込内まで放射状暗文を施し、外面はヘラミガキする丁寧なつくりである。2は内面に黒色処理が施される。4～7は口縁が玉縁状を呈する。8は土師器皿である。9～11は土師器甕で、9・10の口縁は厚口で、11は口縁端部を短く外反させる。

S12（第48・131図）

D地区の中央部に位置する。近現代のゴミ穴などによって北東部以外のコーナー部は大きく攪乱されている。主軸方向はN-7°-Eで、規模は4.4m×4.1mである。カマドは東壁の南寄りに位置する。周溝は30～40cmの幅でほぼ全周する。遺構検出面までの深さは28cmで、覆土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち11点を図示した。1～5は土師器環である。1～4は見込内まで放射状暗文を施し、外面はヘラミガキするものである。6は土師器蓋で、外面に同心円状、内面に放射状の暗文が施される。7は土師器甕である。8～11は須恵器で、8は環、9は高台環、10・11は蓋である。

S13（第49・132図）

D地区の西側に位置する。方形周溝墓S21に隣接する。南壁は調査区外へ延びる。主軸方向はN-8°-Eである。平面形は隅丸方形で東西4.0mを測る。カマドは確認できなかった。床面で部分的に硬化面を検出している。他に床面でピットを多数検出した。埋土では遺構との違いを判別できず遺構番号を付したが、竪穴の北側で検出した溝状の攪乱と位置関係が一致しており、攪乱の底面を検出している可能性が高い。遺構検出面からの深さは25cmで、覆土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち11点を図示した。1～9は土師器環である。1は盤状環である。見込内に放射状暗文を施す。2は黒色環で見込に放射状暗文を施し、外底面はヘラミガキする。3は口縁に油煙が付着す

る。4～9は墨書土器である。外面下半にヘラケズリを施すものが多い。4・5・7は「南」、9は「合」と読める。10は土師器の小型壺か。口縁端部を上方につまみ上げ、外面はヘラミガキする。11は器台で、透かしの孔が3カ所ある。

S I 4 (第50・132・133・134図)

E地区中央部に位置し、南北方向に併走するSD1・2に隣接する。方形周溝墓SZ1と重複し、切り合いでは新しい。主軸方向はN-3°-Eである。平面形は隅丸方形で3.7m×3.1mを測る。カマドは東壁中央に位置しており、支柱石が遺存していた。周溝は幅20cmで竪穴の西半部の壁沿いを巡る。遺構検出面からの深さは38cmで、覆土は上層に暗褐色砂質シルト、下層に黒褐色砂質シルトを基調とする。またS I 4の西側でも床面とみられる硬化面やカマド痕跡とみられる焼土ブロックなどを検出している。壁の立ち上がりは検出できなかったが硬化面の広がりやカマド痕跡の位置からほぼ同規模の竪穴建物が重複していたと推定される。

出土遺物のうち20点を図示した。1～6・9・10は土師器環である。1～6の口縁は玉縁状を呈し、外面下半にヘラケズリを施す。2～6・9・10は墨書土器である。2～6は体部外面に倒位で墨書される。2～4は「合」、5・6は「門」と読める。また、それぞれ口縁部を中心に油煙が付着しており、灯明皿としても用いられた可能性が高い。9・10は外底面に墨書され、9は判読できないが、10は「掾」か。内面に放射状暗文が施され、やや丁寧な作りであることから他の出土遺物より古い時期のものとみられる。7・8・11～13は土師器皿である。口縁部が玉縁状を呈し、外面は手持ちヘラケズリを施す。11～13は墨書土器で、11は外底面に「合」と墨書されているだけでなく、見込に「得」とヘラ書きされる。12は文字とみられるが判読できず、13は外面にわずかな墨痕が残る。14・15は土師器鉢で、口縁は厚口である。16・17は甕である。18は須恵器長頸壺の口縁か。19は須恵器蓋である。20は金属製品で角釘が折れ曲がったものとみられる。

S I 5 (第49・135図)

E地区の北西部に位置する。SD3と重複し、切り合いでは先行する。北壁は調査区外へ延びる。南東コーナーのみ検出できたため、主軸方向や平面形、規模は不明である。カマドは確認できなかった。遺構検出面からの深さは24cmで、覆土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち6点を図示した。1～3は土師器環である。内面に放射状暗文を施し、外面下半はヘラケズリする。4は土師器皿で、内面に同心円状の暗文を施す。5は土師器甕で、口縁はくの字状を呈する。6は砥石で表裏二面に使用痕がみられる。

S I 6 (第51・52・53・135図)

F地区の東側に位置する。S I 7と隣接するが、切り合いは不明である。主軸方向はN-9°-Eである。平面形は隅丸方形で3.1m×2.5mを測る。建物の東壁付近は攪乱されているが、焼土などのカマド痕跡を東壁中央付近で検出している。北壁沿いに検出した周溝状の溝は、直上を通っていた水道管の影響を受けている可能性が高い。遺構検出面からの深さは10cmで、覆土は暗褐色土を基調とする。

出土遺物のうち10点を図示した。1～6は土師器環である。口縁は玉縁状を呈するものが多い。7は土師器蓋、8・9は土師器羽釜の口縁から鈹部にかけての破片で、10は須恵器甕である。

S I 7 (第51・52・53・135図)

F地区の東側に位置する。S I 6と隣接し、切り合いは不明である。南西コーナーの壁面のわずかな立ち上がりのみを検出したため、主軸方向や平面形、規模は不明である。東壁は攪乱されているが、カマドは南東コーナーに位置していた可能性がある。遺構検出面からの深さは5cmで、覆土は暗褐色土を基調とする。

出土遺物のうち 11 点を図示した。1～3 は土師器環で、1 は内面に放射状暗文、外面下半をヘラケズリする。4 は土師器皿で外面下位に回転ヘラケズリを施す。5・6 は土師器甕である。7・8 は土師器羽釜である。7 は鈎部より下位に、8 は外面全体に煤が付着する。9～11 で灰釉陶器である。9 は碗、10 は蓋で、11 は長頸壺か。

S I 8 (第 51・52・53・136 図)

F 地区の東側に位置する。S I 9・10 と重複し、切り合いでは先行する。主軸方向は N-10°-E である。切り合いが激しく平面形の形状は不明であるが、規模は東西 4.3m を測る。カマドは南東部に位置し、煙道部が長く伸びる形状である。位置関係からは S I 9 のカマドとみることができ、検出面では覆土の遺存状況が悪く判別できなかった。ここでは S I 8 に帰属するものとしておきたい。遺構検出面からの深さは 9cm で、覆土は暗褐色土を基調とする。

出土遺物のうち 6 点を図示した。1～3 は土師器環である。1・2 の調整はロクロナデのみである。3 は墨書土器で、外底面に文字が書かれているが判読できない。4 は土師器の小壺で内外面とも丁寧にヘラミガキする。5 は土師器甕で口縁端部が短く外反するものである。6 は縄文土器で沈線文の上にボタン状の粘土が貼り付けられる。

S I 9 (第 51・52・53・136 図)

F 地区の東側に位置する。S I 8・10 と重複し、切り合いでは S I 10 に先行する。平面形の形状は不整形で、主軸方向は計測できない。規模は南北 2.0m と小さく、壁の立ち上がりも不明瞭であったことから S I 8 に属する浅い掘り込みであった可能性もある。遺構検出面からの深さは 11cm で、覆土は暗褐色土を基調とする。

出土遺物のうち 4 点を図示した。1 は土師器甕で口縁端部は短く外反する。2 は土師器羽釜の鈎部である。3 は須恵器甕の破片だが内面に平滑な面があり、転用碗として使用した可能性もある。4 は灰釉陶器で長頸壺である。

S I 10 (第 51・52・53・136・137 図)

F 地区の東側に位置する。S I 8・9 と重複し、切り合いでは新しい。主軸方向は N-5°-E である。平面形は隅丸方形である。規模は 2.2m × 2.0m と小形であるが、北東コーナーのカマドの検出を根拠に竪穴建物とした。遺構検出面からの深さは 15cm で、覆土は暗褐色土を基調とする。

出土遺物のうち 14 点を図示した。1～13 は土師器である。1～4 は環で調整はロクロナデのみである。5 は器種不明の底部破片で、ロクロナデ成形で底部をヘラケズリする。6～8 は甕で、口縁端部が短く外反し、ナデ調整するものである。9～12 は羽釜である。13 は置きカマドで底面は面取りして平坦である。内面に横ハケ、外面に縦ハケを施す。14 は灰釉陶器の碗である。

S I 11 (第 51・52・53・137 図)

F 地区の東側に位置する。S I 12 と重複し、切り合いでは新しい。主軸方向は N-13°-E である。平面形は隅丸方形で 4.1m × 4.1m を測る。カマドは東壁中央南寄りに位置する。カマド周りの石の出土状況から、石組であった可能性が高い。遺構検出面からの深さは 18cm で、覆土は暗褐色土を基調とする。

出土遺物のうち 9 点を図示した。1～6 は土師器環である。内面に放射状暗文、外面下半にヘラケズリを施すものが多い。5 は外底面に墨書があるが、文字は判読できない。7・8 は甕で、口縁はくの字状を呈する。9 は須恵器蓋である。

S I 12 (第 51・52・53・137・138 図)

F 地区の東側に位置する。S I 11 と重複し、切り合いでは先行する。主軸方向は N-10°-E である。

平面形は隅丸方形で、規模は3.8m×3.4mを測る。カマドは南東コーナーに位置する。周溝は幅20～30cmでほぼ全周巡っていたとみられる。遺構検出面からの深さは12cmで、覆土は暗褐色土を基調とする。

出土遺物のうち12点を図示した。1は土師器皿で、2は土師器脚高台、3は土師器環である。いずれも調整はロクロナデである。4～6は土師器甕で、口縁は4が厚口、5はゆるく外反し、6は端部を短く外反させる。7～9は三足土器か。いわゆる足釜とみている。7は脚部上位の破片で外面に煤が付着する。8は脚部下位で、先端は獣脚状に成形される。9は脚部中位の破片か。三足土器はS I 12の他、S K 15やS I 18など周辺の遺構から局所的に出土している。10は須恵器環である。11は須恵器甕の破片だが転用硯である。内面に使用痕とみられる平滑面を持ち墨痕が残る。12は灰軸陶器の碗である。

S I 13 (第54・138図)

F地区の東側に位置する。南側の大部分は調査区外に延びる。主軸方向はN-17°-Eである。平面形は隅丸方形とみられ、規模は東西3.0mを測る。カマドは確認されなかった。遺構検出面からの深さは15cmで、覆土は暗褐色土質シルトを基調とする。

出土遺物は2点を図示した。2点とも土師器環で、1は外面下半をヘラケズリするが、2はロクロナデのみである。

S I 14 (第54・138図)

F地区中央部に位置する。S I 15と重複するが、遺構検出面では覆土があまり遺存しておらず切り合いは確認できなかった。また、重複や攪乱のため主軸方向・平面形・規模等も不明であるが、南東コーナーと推定される位置にカマドを検出したことから竪穴建物とした。遺構検出面からの深さは9cmで、覆土は暗褐色土を基調とする。

出土遺物のうち5点を図示した。1は土師器環で、2は土師器蓋、3は置きカマドの底部破片か。4は灰軸陶器の碗で、5は灰軸陶器の皿である。

S I 15 (第54・138図)

F地区中央部に位置する。S I 14と重複するが、切り合いは確認できなかった。主軸方向はN-6°-Eである。平面形はやや不整形な隅丸方形で2.9m×2.7mを測る。床面とカマドは確認できなかったが、方形プランを検出したことから竪穴建物とした。遺構検出面からの深さは6cmで、覆土は暗褐色土を基調とする。

出土遺物のうち5点を図示した。1・2は土師器環である。1の口縁は玉縁状を呈し、外面下位にヘラケズリを施す。3は須恵器環で内外面に火燬がみられる。4は須恵器甕で、5は灰軸陶器の碗である。

S I 16 (第55・56・57・138・139図)

F地区の中央部に位置する。S I 19・20と重複し、切り合いでは新しい。主軸方向はN-17°-Eである。平面形は隅丸方形で南北2.7mを測る。カマドは北東コーナーに位置する。遺構検出面からの深さは25cmで、覆土は暗褐色土を基調とする。

出土遺物のうち11点を図示した。1～6は土師器環で口縁は玉縁状を呈し、外面は下半にヘラケズリを施すものが多い。1・5は墨書土器であるが文字は判読できない。7～9は土師器甕である。口縁は厚口口縁である。10・11は土師器羽釜で、11は口縁部がやや内湾する。

S I 17 (第55・56・57・139図)

F地区中央部に位置する。S I 18・19と重複し、切り合いではS I 19より新しい。S I 18との切り合いは確認できなかった。覆土がほとんど残っておらず床面も確認できなかったが、東壁中央にカ

マド痕跡を検出しており竪穴建物とした。主軸方向はN-10°-Eである。平面形は隅丸方形、規模は南北2.4mと推定される。遺構検出面からの深さは9cmで、覆土は暗褐色土を基調とする。

出土遺物は少ないが5点を図示した。1・2は土師器環で、口縁は玉縁状を呈し、調整はロクロナデである。3・4は土師器羽釜で、3は口縁部が内湾する。5は須恵器の甕である。

S I 18 (第55・56・57・140図)

F地区中央部に位置する。S I 17・19・21と重複し、切り合いではS I 19より新しい。S I 17・21との切り合いは確認できなかった。カマドは検出していないが、方形プランを検出したことから竪穴建物とした。主軸方向はN-10°-Eである。平面形は隅丸方形で、南北3.0mである。遺構検出面からの深さは21cmで、覆土は暗褐色土を基調とする。

出土遺物のうち11点を図示した。1・2は黒色高台環である。内面は放射状暗文が施される。3・4は土師器環で調整はロクロナデである。5は土師器甕で、6・7は土師器羽釜の鈿部である。8・9は三足土器の脚部とみられる。10は須恵器壺で、11は灰釉陶器の碗である。

S I 19・20(第55・56・57・140・141図)

F地区中央部に位置する。S I 16・17・18・21と重複し、切り合いでは先行する。主軸方向はN-8°-Eである。現場調査時に建物内の内側に巡る溝のプランをS I 19、外側の壁面の立ち上がりと周溝を持つプランをS I 20としたが、北壁と東壁は同一であり床面レベルもほぼ同一である。切り合いは確認できなかった。S I 19とした平面形はやや不整形な隅丸方形で規模は6.0×5.9mとなる。溝は幅40～50cmで巡っており、北壁と東壁部分はS I 20と重複する。S I 20の平面形は隅丸方形である。規模は7.2m×7.2mと同時期の竪穴建物としては大形で、遺跡内では南側に隣接するS I 22に次ぐ大きさである。周溝は幅45～60cmで全周巡っている。検出したカマドは一基で北壁中央に位置する。支柱穴がS P 69・70・71と3基遺存している。北西側に位置していたとみられる一基は現代のゴミ穴によって攪乱されていた。柱間は東西方向のS P 70・71間が芯々距離で3.0m、S P 69・70間が2.7mである。遺構検出面からの深さは54cmで、覆土は暗褐色土を基調とする。

S I 19として取り上げた出土遺物は10点を図示した。1～5は土師器環である。1～3は見込内まで放射状暗文を施す。3は墨書土器で、外底面にわずかに墨痕が残る。4・5は玉縁口縁で、外面下半にヘラケズリを施す。6は土師器甕で、口縁は厚口である。7は土師器羽釜とみられる口縁部破片である。8～10は須恵器で、8・9は環で、10は鉢である。

S I 20として取り上げた出土遺物は4点を図示した。1・2は土師器環である。1は内面に放射状暗文を施し、外面はヘラミガキする。2は見込内まで放射状暗文を施し、見込境はヘラミガキする。外底面に「南」の墨書がある。3は土師器皿で、口縁がやや肥厚し、外面下位は手持ちヘラケズリである。4は須恵器高台環である。

S I 19・20の出土遺物は大きく2時期に分かれて混入している。玉縁口縁の環など新しい時期の遺物は重複する他の建物の遺物の時期とほぼ一致している。床面やカマド出土の遺物がないため断定できないが、古い時期の遺物がやや主体的であり、土師器環が見込内まで放射状暗文を施される古い時期に帰属する建物ととらえておきたい。

S I 21 (第55・56・57・141図)

F地区中央部に位置する。S I 19・20と重複し、切り合いでは新しい。方形プランを検出したことから竪穴建物としたが、床面やカマドは確認できなかった。主軸方向はN-10°-Eである。平面形は隅丸方形で、規模は2.3m×2.2mを測る。遺構検出面からの深さは22cmで、覆土は暗褐色土を基調とする。

出土遺物は少ないが4点図示した。1は土師器環で、見込内まで放射状暗文を施し、外面はヘラケズ

りする。2は土師器甕である。3は須恵器環で、4は灰釉陶器の碗である。

S I 22 (第 58・59・60・142～146 図)

F 地区中央部に位置する。S I 20・21・23 と重複し、切り合いでは S I 21・23 に先行するが、S I 20 との切り合いは確認できなかった。南壁は調査区外まで延びる。主軸方向は N-10°-E である。平面形は隅丸方形である。規模は東西 8.3m、南北方向は検出した範囲で 8 m 以上に及び、床面積は 50 m² を越えると推定される。今回調査を行った后畑西遺跡・ケカチ遺跡で検出された 100 軒以上に及ぶ竪穴建物の中で最大の大きさである。カマドは東壁中央南寄りに位置する。カマドの掘方は長径 1.6 m、短径 1.0 m であるが、カマド周りでは東西 3.5 m、南北 3.5 m の広範囲に白色粘土が検出されている。周溝は幅 30cm で東壁のカマド付近を除いて全周する。また、主柱穴が検出されており S P 76～79 の 4 基で構成される。柱間は東西方向に並ぶ S P 76・78 間が 3.5m、南北方向の S P 76・77 間が 2.9 m である。床面はほぼ全面にわたって硬化面が確認された。床面では須恵器製の二面硯や鉄製錘などが出土している。遺構検出面からの深さは 40cm で、覆土は暗褐色土を基調とする。さらに、和歌刻書土器が出土している。本書の刊行に先立ち、平成 29 年 9 月 3 日に甲州市で開催された古代史シンポジウムにおいて和歌刻書土器として一般公開された。和歌刻書土器は S I 22 の覆土の最上層中から出土している。

出土遺物のうち 68 点を図示した。1～48 は土師器である。1 は土師器皿で、見込内に仮名で和歌をヘラ書きした和歌刻書土器である。和歌刻書土器の解説案や字母などについては甲州市文化財調査報告書第 25 集『古代史しんぼじうむ「和歌刻書土器の発見」ケカチ遺跡と於曾郷』に詳しい。口縁は玉縁状を呈し、外面はロクロナデのみの調整である。甲斐型土器の最終段階の時期に属する。2～26・28・29 は環である。2～20 は見込内まで放射状や格子目状に暗文を施し、体部外面や底面をヘラミガキした丁寧なつくりのものが多い。6 は底面を静止糸切りで切り離した後、外周をヘラケズリする。9・12 はカマド出土で、15・16 は高台環である。17・18・28・29 は墨書土器で、いずれも外底面に墨書がある。17 は記号か。18・28 は判読できず、29 は「西」か。21～25 は口縁が玉縁状を呈し、外面の調整はロクロナデのみである。26 は脚高高台環である。27・30・31 は皿で、口縁が玉縁状を呈し、外面の調整はロクロナデのみである。32 の皿は見込に同心円状の暗文が施される。33～38 は蓋である。33 はつまみから口縁までが遺存しており、内面には放射状暗文が施される。34・36 は外面に同心円状の暗文が施されている。38 は墨書土器である。記号か。39 は鉢、40～45 は甕である。39・40 は床面出土である。43・44 の口縁は厚口である。46 は羽釜か。47・48 は置きカマドか。47 はカマド前面の庇とみられる破片である。48 はカマド側面とみている。外面には文字とみられるヘラ書きが明瞭に刻まれているが 1/2 が失われており判読できない。また一端部に円孔の痕跡がわずかに遺存する。49～61 は須恵器である。49～54 は環で、49～51 は高台環である。55～58 は蓋である。59 は壺、60 は甕の底部である。61 は二面硯である。硯面は高さ 4mm ほどの仕切りで 2 面に分けられる。広い面は非常に滑らかで長軸方向に使用痕とみられる擦痕が観察できる。狭い面は広い面と比べるとザラザラとした感触の粗い面で、成形時の痕跡とみられる線状の凹みなども残る。広い面は黒墨に使用されたとみられるが、狭い面からは分析の結果、ベンガラが検出され、朱墨を用いた二面硯であることが判明した。縁は硯面より 6mm 程高くつくられており、ヘラ状工具で成形したとみられる。硯の裏面はヘラケズリの調整痕が残る他、2カ所にヘラで区画されたわずかな盛り上がりが見られる。脚部の剝離痕とみられる。床面からの出土である。62 は灰釉陶器の碗、63 は縄文土器である。中期か。64 は打製石斧である。65～68 は金属製品で、65 は鉄鏃である。66 は鉄製錘で、高さ 3.1cm、幅 2.8cm、厚さ 2.7cm を測る。重さは錆の付着した状態で 95.1 g である。上部に紐孔がついており、竿秤の錘として使用したと想定

される。67は刀子で、68は袋状鉄斧とみられる。

S I 23 (第58・59・60・147図)

F地区中央部に位置する。S I 22と重複し、切り合いでは新しい。S I 22の覆土の掘り下げ過程でS I 22とは異なる床面とその上で分布する焼土を検出したため竪穴建物とした。壁面の立ち上がりは検出できなかったが、床面の検出範囲から推定した建物の主軸方向はN-10°-Eで、平面形は隅丸方形、規模は4.3m×3.2mを測る。カマドは東壁中央に位置する。このカマドを完掘したほぼ真下からS I 22の主柱穴であるS P 75を検出している。遺構検出面からの深さは25cmで、覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち19点を図示した。1～13は土師器である。1～3・9の坏は見込み内まで放射状暗文を施す。1・3は外底面をヘラミガキし、3には墨書が残るが判読できない。2は高台坏である。4～8は玉縁口縁で、外面下位にヘラケズリを施すものが多い。7はカマド出土である。10・11は蓋である。12は羽釜で、13は甕で、口縁は厚口である。14～18は須恵器で、14は高台坏、15は坏、18は甕である。19は金属製品で、刀子とみている。

S I 24 (第61・62・148～153図)

F地区中央に位置する。S I 32と重複し、切り合いでは先行する。主軸方向はN-6°-Eである。平面形は隅丸方形で、規模は5.4m×4.8mを測る。カマドは北壁中央やや東寄りに位置し、周溝は幅20～40cmで全周する。遺構検出面からの深さは43cmで、覆土は暗褐色土を基調とする。

出土遺物は多く、82点を図示した。1～66は土師器である。1～27は坏である。内面に放射状暗文を施し、外面下半にヘラケズリを施すものが多い。11～13・16～20・23～27は墨書土器あるいは刻書土器である。11は外底面に墨書され「後」と読める。12・16は外面に同様なヘラ書きがあり、記号とも文字ともみえるが判読できない。18の黒色坏には見込みと外底面に「井」の字状に線刻が施される。23・27は墨書で「南」か。28～39は皿である。外面下位にヘラケズリを施し、内面は同心円状暗文を施すものと放射状暗文を施すものがある。28は刻書土器で、外底面にヘラ書きがあり、記号とも文字ともみえるが判読できない。29・30は墨書土器で外底面に墨書が残る。40は脚高台皿である。41～49は蓋である。内外面に同心円状あるいは放射状に暗文を施すものも多く、44～47にはそれぞれつまみ部が遺存する。50・51は高坏である。50は坏部で、51の脚柱部は断面八角形状を呈する。52～61は甕である。52～55の口縁はく字状を呈し、56・57は口縁が短く外反し、内外面をナデ調整するものである。62～64は羽釜で、鈿部が短く、やや粗雑なつくりである。65・66は置きカマドの口縁部である。67～74は須恵器である。67・68は坏、69は高台坏である。70・71は蓋で、72は壺か。73は瓶の把手部とみられる。74は須恵器甕の破片であるが、内面が滑らかになっており、転用硯とみられる。75～78は灰釉陶器で、75・76は碗、77・78は皿で、78は段皿である。79は砥石である。4面に使用痕がある。80～82は金属製品で、80・81は刀子、82は角釘である。

S I 25 (第63・153・154・155図)

F地区西側に位置する。S I 26と重複し、切り合いでは先行する。主軸方向はN-14°-Eである。平面形は隅丸方形で、規模は4.5m×4.0mを測る。カマドは北壁中央に位置しており石組カマドである。焼土がカマド前で検出された他、北東コーナー部でも検出されている。この北東コーナー部の床面では坏が正位に据えられた状態で並んで出土している。周溝は幅30cmでほぼ全周する。遺構検出面からの深さは35cmで、覆土は暗褐色土を基調とする。

出土遺物のうち33点を図示した。1～28は土師器である。1～15は坏で、口縁が玉縁状を呈し、内面に放射状暗文、外面下半にヘラケズリを施すものが多い。1・3・4は墨書土器で、1は「合」、

3は「万」か。4は判読できない。7・11・15は内面に黒色処理を施す。16～20は皿である。外面下位は回転ヘラケズリするものと手持ちヘラケズリするものがある。21・22は鉢、23～25は甕である。26・27は羽釜で、28は置きカマドの底部である。29～32は灰釉陶器で、29・31は碗、30は皿、32は短頸壺か。33は金属製品で鎌である。

S I 26 (第63・155・156図)

F地区西側に位置する。S I 25と重複し、切り合いでは新しい。主軸方向はN-13°-Eである。平面形は隅丸方形で4.7m×3.7mを測る。カマドは北東コーナーに位置し、石組カマドである。図上ではカマド自体が東壁の外側に突出した状況となっているが、S I 25カマドとの重複などにより東壁の立ち上がりの判別は困難であった。東壁がもう少し東側に位置していた可能性もある。周溝は幅30cmでほぼ全周巡る。遺構検出面からの深さは22cmで、覆土は暗褐色土を基調とする。

出土遺物のうち9点を図示した。1は土師器皿で、墨書土器である。外底面に墨書されるが判読できない。2は土師器蓋で、外面はヘラミガキする。内面は放射状暗文を施し、ヘラ書きがある。3は土師器環で調整はロクロナデのみである。4は脚高高台環である。5は土師器甕で、口縁はほとんど外反せず、体部はナデ調整する。6は置きカマドの底部である。7～9は灰釉陶器で、7・8は碗、9は皿である。

S I 27 (第64・65・156・157図)

F地区西側に位置する。S I 28と重複し、切り合いでは新しい。主軸方向はN-12°-Eである。平面形は隅丸方形で、規模は5.4m×4.9mを測る。カマドは東壁の南寄りに位置し、中央に支柱石が遺存していた。周溝は幅20～30cmでほぼ全周する。遺構検出面からの深さは23cmで、覆土は暗褐色土を基調とする。

出土遺物のうち23点を図示した。1～20は土師器である。1～6は環で、口縁は玉縁状を呈し、外面下半にヘラケズリを施す。1～5は墨書土器で、1～3は正位で、4・5は倒位でいずれも「須」と書かれる。7は高環である。内底面はヘラミガキされる。8～14は皿である。外面下位は手持ちヘラケズリされる。8・13は墨書土器で、8の外底面にも「須」と書かれる。14は外底面にヘラ書きがある。15・16は小形の壺で、16の底面には墨書があるが判読できない。17・18・19は土師器甕である。20は置きカマドで、焚口底部の破片である。21は須恵器壺、22・23は灰釉陶器で、22は碗、23は長頸壺とみられる。

S I 28 (第64・65・158図)

F地区西側に位置する。S I 27と重複し、切り合いでは先行する。主軸方向はN-14°-Eである。平面形は隅丸方形で4.4m×3.8mを測る。カマドは東壁中央南寄りに位置し、煙道部が東壁の外側へ突出する。周溝は幅30cmで、南壁沿いでは50～80cmと広がって全周する。遺構検出面からの深さは35cmで、覆土は黒褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち18点を図示した。1～7は土師器環である。内面に見込み内まで放射状暗文を施すものが多い。3・4・5は墨書土器で、3は見込み内に同心円状に暗文を施し、外底面は「南」と墨書する。4は「合」、5は「□酒」か。8は土師器高環の脚柱部である。9は土師器蓋か。天井部が高く持ち上がる形状とみている。内面には放射状暗文を施す。10は土師器蓋で外面は同心円状と放射状の暗文が施される。11～14は土師器甕で、口縁はくの字状である。16・17は須恵器で、16は環である。内面に漆とみられる付着物がある。17は壺である。18は灰釉陶器の碗である。15は石製品で、提砥である。中央に紐孔を穿ち、一端部は使用により断面三角形状となっている。

S I 29 (第66・159図)

F地区とG地区にまたがって検出された。S I 48と重複し、切り合いでは先行する。カマドは北東コーナーに位置していたとみられる。カマド位置から北壁はわずかに調査区外となっているとみられる。遺構検出面からの深さは20cmで、覆土は暗褐色砂を基調とする。

出土遺物のうち14点を図示した。1～7は土師器環である。いずれも体部の調整はロクロナデのみである。8は土師器皿か。内面にヘラ書きがある。9が土師器甕である。10・11は土師器羽釜で、鈿部は短い。12は土錘である。完形で出土しており、重さは281.8gを測る。上部には紐孔が通る。上端には紐孔が通る軸と直行する方向に浅い溝状の刻みがあり、紐を十字にかけるのに都合の良い形状である。下端は中央がやや窪みが直立する。13・14は灰釉陶器の碗である。

S I 30 (第67・159図)

F地区とG地区にまたがって検出した。S I 44に隣接する。主軸方向はN-14°-Eである。平面形は隅丸方形で、規模は2.5×2.5mを測る。カマドは東壁の南寄りに位置する。周溝は、幅20cmで全周する。遺構検出面からの深さは25cmで、覆土は暗褐色砂を基調とする。

出土遺物は少ないが4点を図示した。1は土師器環で、外面下半をヘラケズリする。2・3は土師器皿で、見込み内に同心円状の暗文を施す。2の外面は回転ヘラケズリである。4は置きカマドの焚口底部の破片である。

S I 31 (第66・160図)

F地区西側に位置する。S I 27に隣接する。主軸方向はN-9°-Eである。平面形はやや不整形な隅丸方形で3.2m×2.8mを測る。カマドは確認できなかった。遺構検出面からの深さは20cmで、覆土は暗褐色土を基調とする。

出土遺物のうち10点を図示した。1・3・4は土師器環、2は土師器皿である。体部の調整はロクロナデのみである。5は土師器羽釜である。6は須恵器長頸壺である。7は緑釉陶器の碗で、8・9は灰釉陶器の碗である。10は鉄滓で、下端は碗状を呈する。

S I 32 (第61・62・160図)

F地区中央に位置する。S I 24と重複し、切り合いでは新しいとみられるが、S I 24の床面までの掘り下げ後に検出したため、北壁は確認できなかった。主軸方向はN-10°-Eである。平面形は隅丸方形で、規模は東西3.5mを測る。カマドは東壁中央南寄りに位置しており、煙道部は東壁より外側に突出する。遺構検出面からの深さは20cmで、覆土は暗褐色細砂を基調とする。

出土遺物のうち5点を図示した。1～3は土師器環である。1は墨書土器である。外面に「大」とみられる文字が書かれる。内面はわずかに放射状暗文が残る。2・3は玉縁口縁で、体部の調整はロクロナデのみである。4は土師器甕で体部はナデ調整する。5は中世陶器の甕の口縁部か。

S I 33 (第64・65・160・161図)

F地区の西側に位置する。S I 28と重複し、切り合いでは新しいとみられるが、S I 28の床面までの掘り下げ後に検出したため、北壁は確認できなかった。南壁もわずかに調査区外に延びる。主軸方向はN-14°-Eである。平面形は不明で、規模は東西2.8mを測る。カマドは東壁中央南寄りとみられる位置にあり、石組カマドである。周溝は幅40cmで西壁沿いに検出した。遺構検出面からの深さは15cmで、覆土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち10点を図示した。1～4は土師器環である。1は内面に放射状暗文、外面下半はヘラケズリする。2・3の口縁は玉縁状を呈し、外面はロクロナデ調整である。4は脚高台である。5・6・7は皿である。5・7は口縁端部に油煙が付着し、5は墨書土器で体部外面に「御」と書かれる。8・

9は土師器甕で厚口口縁である。10は置きカマドの底部である。

S I 34 (第68・161図)

G地区中央に位置する。S I 36に隣接する。主軸方向はN-7°-Eである。平面形は隅丸方形で3.2m×2.8mを測る。カマドは確認できなかったが、焼土範囲を東壁中央付近で検出している。遺構検出面からの深さは5cmで、覆土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物は少ないが3点図示した。1・2は土師器環で、体部の調整はロクロナデのみとみられる。3は須恵器甕の口縁部である。

S I 35 (第69・161図)

G地区中央に位置する。主軸方向はN-9°-Eである。平面形は隅丸方形で規模は4.7m×4.1mである。カマドは東壁中央南寄りに位置し、カマドは石組カマドである。遺構検出面からの深さは12cmで、覆土は暗褐色砂質シルトを基調とする。

出土遺物のうち11点を図示した。1～4は土師器環である。口縁は玉縁状を呈し、内面に放射状暗文、外面は下半ヘラケズリを施す。1は外面に「北」とみられる墨書がある。5～8は土師器皿である。外面下位は手持ちヘラケズリまたは回転ヘラケズリである。6・7は墨書土器で、外底面に「北」と書かれる。9は土師器甕、10は土師器羽釜で、11は灰軸陶器の壺である。

S I 36 (第70・71・162図)

G地区中央に位置する。S I 37と重複し、切り合いでは新しい。主軸方向はN-18°-Eである。平面形は隅丸方形で規模は3.6m×3.2mである。カマドは東壁の南寄りに位置し、石組カマドであったとみられる。遺構検出面からの深さは30cmで、覆土は暗褐色砂を基調とする。

出土遺物のうち6点を図示した。1～5は土師器環である。口縁は玉縁状を呈し、外面に下半ヘラケズリを施すものが多い。4・5は黒色環で、5は口径16.6cmと大形である。6は土師器蓋のつまみ部である。

S I 37 (第70・71・162図)

G地区中央部に位置する。S I 36・38と重複し、切り合いではS I 36に先行し、S I 38より新しい。主軸方向はN-18°-Eである。平面形は隅丸方形で東西4.7mを測る。カマドは東壁の南寄りに位置する。周溝は幅30cmで、掘乱された部分を除いて全周する。遺構検出面からの深さは30cmで、覆土は暗褐色砂を基調とする。

出土遺物のうち20点を図示した。2～12は土師器環である。口縁がやや外反または肥厚し、外面下半はヘラケズリするものが多い。2・3・4・8～12は墨書土器である。2は「林」か。3・4は「北」である。他は遺存状況が悪く判読できない。1・14・15・16は土師器皿である。外面下位は回転ヘラケズリまたは手持ちヘラケズリを施す。13は土師器高環である。1・16は墨書土器で、1は外底面に「万」、16は「北」と読める。17・18は土師器甕である。19は置きカマドの底部破片とみられる。20は灰軸陶器碗である。

S I 38 (第70・71・163図)

G地区中央に位置する。S I 37・S D 8と重複し、切り合いではそれぞれに先行する。主軸方向はN-3°-Eである。平面形は隅丸方形で、東西3.9mを測る。カマドは確認できなかった。周溝は幅30cmで、重複部分以外で検出している。遺構検出面からの深さは22cmで、覆土は暗褐色砂を基調とする。

出土遺物のうち8点を図示した。1・2は土師器環である。2は墨書土器で外面に「北」と書かれる。3・4は土師器皿で、外面下位は手持ちヘラケズリを施す。4の墨書は「北」か。5は土師器蓋である。

6・7は土師器甕で、8は須恵器環である。

S I 39 (第69・163図)

G地区西側に位置する。北壁の大部分は現代のゴミ穴に攪乱されている。主軸方向はN-9°-Eである。平面形は隅丸方形で3.2m×3.0mを測る。カマドは確認できなかった。床面中央部に硬化目を検出した。遺構検出面からの深さは22cmで、覆土は暗褐色砂を基調とする。

出土遺物のうち6点を図示した。1～4は土師器環である。1は墨書土器であるが、残存部がわずかで判読できない。2・3・4の体部の調整はロクロナデのみである。5・6は土師器甕である。

S I 40 (第72・163・164図)

G地区中央に位置する。主軸方向はN-15°-Eである。平面形は隅丸方形で3.3m×3.1mを測る。カマドは北壁の東寄りに位置する。両側の袖石が遺存しており石組カマドである。中央には支柱石も遺存する。周溝は幅30cmで全周する。遺構検出面からの深さは15cmで、覆土は上層に暗褐色砂、下層に褐色差を基調とする。

出土遺物のうち12点を図示した。1～7は土師器環である。口縁は玉縁状を呈し、外面下半はヘラケズリを施す。3～7は墨書土器である。3～6はいずれも外面に倒位で「吉」と書かれ、7は「号」である。8は土師器皿で、外面に「合」と墨書される。9・10は土師器甕で、口縁は厚口である。11は置きカマドの前面上部である。12は須恵器蓋である。

S I 41 (第73・74・75・164図)

G地区中央部に位置する。S I 42・49と重複し、切り合いでは前者より新しく、後者に先行する。主軸方向はN-13°-Eである。平面形は隅丸方形で3.8m×3.3mを測る。カマドは確認できなかった。周溝は幅20cmで、S I 42・49との重複部分以外で検出した。遺構検出面からの深さは20cmで、覆土は上層にオリーブ褐色砂、下層に暗褐色砂質シルトを基調とする。また竪穴の南側でウマの骨が出土している。図上ではS I 42のカマド上のS K 79の位置であるが、土坑としての平面形は検出できず掘方も判別できなかったためS I 41上面からの出土としておきたい。このウマについては別章で触れるが、年齢13歳、体高110cm台前半の小形馬であったと推定されている。

出土遺物のうち11点を図示した。1～5は土師器環である。1は内面を黒色処理し、外面下半はヘラケズリする。2～5の体部の調整はロクロナデのみである。6は土師器で器台形土器としておく。台部の内側には赤彩が施される。7・8は土師器甕で、7は口縁端部が短く外反し、8の体部はナデ調整する。9・10は土師器羽釜で、11は須恵器壺である。

S I 42 (第73・74・75・165・166図)

G地区中央部に位置する。S I 41・43と重複し、切り合いではS I 41に先行しS I 43より新しい。主軸方向はN-8°-Eである。平面形は隅丸方形で4.5m×4.3mを測る。カマドは北壁中央東寄りに位置する。カマドの検出状況は非常に良好で、粘土で構築した立方体状のカマド本体に焚口や掛口までもが確認できる状況であった。煙道は短く北壁の外へ突出する。幅20～30cmの周溝がほぼ全周する。床面では東壁沿いの中央でも焼土が検出されている。遺構検出面からの深さは55cmで、覆土は暗褐色砂を基調とする。

出土遺物のうち35点を図示した。1～28は土師器である。1～13・17は環である。口縁が玉縁状を呈し、外面下半にヘラケズリを施すものが多い。3・8・15・16・17は墨書土器である。3・17は「西」か。8は倒位で「福」か。15は判読できなかった。16は「合」である。7の黒色環は大形で口径は16.1cmを測る。13は脚高高台環で、脚部の開きが少なく直立する。18・19は皿である。口縁は玉縁状で、外面下位は手持ちヘラケズリを施す。20～23は土師器甕で、口縁は厚口口縁である。24～26

は土師器羽釜である。27・28は置きカマドで、28は前面の焚口底部破片である。29～31は須恵器で、29は高台杯、30は高坏である。31は甕だが、内面が滑らかで転用甕であった可能性ある。32は緑釉陶器の蓋か。33・34は灰釉陶器の壺である。35は黒曜石の石鎌である。

S I 43 (第74・75・76・166図)

G地区東側に位置する。S I 42・S I 45・S D 7と重複し、切り合いではS I 42に先行しS D 7より新しい。S I 45との切り合いは確認できなかった。主軸方向はN-11°-Eである。平面形は隅丸方形で南北3.2mを測る。カマドは東壁中央南寄りに位置する。周溝は幅20cmで北東コーナーのみ検出した。遺構検出面からの深さは25cmで、覆土は暗褐色砂を基調とする。

出土物のうち6点を図示した。1～3は土師器坏である。1は黒色坏で、口縁は玉縁状を呈し、内面に放射状暗文、外面下半にヘラケズリを施す。2・3は墨書土器である。2は外面に「須」と書かれる。3は外底面にわずかに墨痕が残るが破片のため判読できない。4は土師器皿である。5は厚口口縁の甕で、6は置きカマドの底部である。

S I 44 (第76・77・167図)

G地区東側に位置する。西半部は現代のゴミ穴に大きく攪乱されておりコーナー部を検出できなかったため主軸方向と平面形は不明だが、カマドを検出したため竪穴建物とした。規模は南北2.5mを測る。カマドは北東コーナーに位置し、石組カマドであったとみられる。

出土物は少ないが4点を図示した。1は土師器坏、2は土師器皿である。いずれも体部の調整はロクロナデのみである。3は甕で、口縁端部を短く外反させる。4は灰釉陶器の碗である。

S I 45 (第76・77・167図)

G地区東側に位置する。S I 43と重複するが切り合いは確認できなかった。主軸方向はN-10°-Eである。平面形は隅丸方形で、規模は3.0m×2.7mを測る。カマドは東壁中央に位置し、石組カマドとみられる。周溝は幅30～40cmでほぼ全周する。遺構検出面からの深さは40cmで、覆土は暗褐色砂を基調とする。

出土物のうち12点を図示した。1～5は土師器坏である。口縁は玉縁状を呈し、外面は下半ヘラケズリである。4・5は墨書土器で、4は「万□」か。倒位に二文字書かれているとみている。5はわずかに墨痕が残るが破片のため判読できない。6は土師器高坏の脚柱部で、水平断面は多角形状を呈す。7は土師器甕である。8・9は羽釜である。10・11は須恵器壺である。12は灰釉陶器の段皿である。

S I 46 (第76・77・167図)

G地区東側に位置する。S I 47・S D 7と重複し、切り合いでは両者より新しいとみられるが、重複のため壁の立ち上がりの検出が困難で、南壁は確認できなかった。主軸方向はN-10°-Eである。北西コーナーしか検出できなかったため平面形・規模は不明である。カマドは東壁中央北寄りに位置する。遺構検出面からの深さは20cmで、覆土は極暗褐色砂を基調とする。

出土物のうち11点を図示した。1～4は土師器坏である。口縁は玉縁状を呈し、外面は下半ヘラケズリを施す。2は墨書土器で、外面下位に墨痕が残るが破片のため判読できない。3は刻書土器で、外面に線状のヘラ書きがある。5は土師器皿か。墨書土器であるが、破片のため判読できない。6は黒色高台杯である。見込に暗文が施される。7は土師器甕で、厚口口縁である。8は須恵器甕で、9は緑釉陶器の碗か。10は灰釉陶器の碗である。11は不明の金属製品である。一端部に孔がある。

S I 47 (第76・77・168・169図)

G地区東側に位置する。S I 46・S D 7と重複し、前者に先行し後者より新しい。主軸方向はN-12°-Eである。平面形は隅丸方形で3.7m×3.4mを測る。カマドは東壁中央に位置し、石組カマドであ

る。煙道部は東壁より外側に突出している。周溝は幅20～30cmで全周する。遺構検出面からの深さは30cmで、覆土は暗褐色砂を基調とする。

出土遺物のうち18点を図示した。1～9・11・12・13は土師器環である。1～9は見込内まで放射状暗文を施し、外面下半はヘラケズりするものが多く、13は外底面をヘラミガキする。2・7・8・9は墨書土器で、2・7は「成」で、8・9は破片のため判読できない。11・12の口縁は玉縁状を呈し、外面は下半ヘラケズりする。12は口径16.8cmと大形の黒色環である。10は土師器皿か。墨書土器で外面に書かれた文字は「北」とみられる。14・15は土師器の置きカマドである。15は側面の破片か。16・17は須恵器で、16は蓋、17は甕である。18は金属製品で、袋状鉄斧である。刃部から柄部との接合部まで比較的遺存状況は良好である。

S I 48 (第66図)

F地区とG地区にまたがって検出した。カマド・床面は確認できなかったが方形プランの検出を根拠に竪穴建物としている。S I 29と重複し、切り合いでは新しい。主軸方向はN-10°-Eである。平面形はやや不整形な隅丸方形で南北3.4×3.2mを測る。遺構検出面からの深さは28cmで、覆土は暗褐色砂を基調とする。

出土遺物は少なく図示できた遺物はない。

S I 49 (第73・74・75・169図)

G地区中央に位置する。S I 41と重複し、切り合いでは新しい。西壁は現代のゴミ穴によって攪乱され、北壁と東壁は調査区外へ延びる。主軸方向は不明で、平面形は隅丸方形か。規模は東西2.5mである。カマドは南東コーナーに位置する。遺構検出面からの深さは14cmで、覆土は暗褐色砂を基調とする。

出土遺物は少ないが2点を図示した。1は土師器環で体部の調整はロクロナデのみである。2は甕で体部の調整はハケとナデである。

S L 1 (カマド) (第72・170図)

G地区西側でS I 40の南に位置する。カマド痕跡のみを検出し、床面や壁面が確認できなかったものをS Lとした。1基のみである。

出土遺物は2点図示した。1は土師器環で、内面に放射状暗文を施す。2は土師器甕である。

方形周溝墓 (SZ)

S Z 1 (第78・170・171図)

D地区とE地区にまたがって検出した。S I 4と重複し、切り合いでは先行する。周溝のみが確認され、南側の一角は調査区外に延びるが、それを除いては周溝のほぼ全体を検出している。主軸方向はN-50°-Eである。平面形は隅丸方形で、規模は13.5m×13.0mを測る。周溝は幅1.7m～2.9mで、遺構検出面からの深さは58cmである。南西側の一边は途切れて陸橋状となる。陸橋の幅は1.9mである。覆土は上層に黒褐色砂質シルト、下層に暗褐色砂質シルトを基調としたレンズ状の堆積である。周溝内の墳丘部にあたる部分は平面を精査するとともにサブトレンチを設定して堆積状況を確認した。S K 10・11とした浅い土坑2基を検出し、掘削した土壌はフルイにかけたが何も検出できなかった。サブトレンチでは部分的に盛土を思わせる堆積があったもののほぼ全面地山層であった。西側の周溝に重複して平安時代の竪穴建物が検出されていることから考えて、その時期には墳丘は削平されていたとみられる。出土遺物は多くなく、プラスチックコンテナにして2箱に収まる程度である。E地区側の西半部では比較的まとまって出土したが、D地区側の東半部は非常に希薄な状況であった。

出土遺物のうち10点を図示した。全て土師器である。1・2は高坏で、内外面ともヘラミガキする。3・4は壺で、内外面ともヘラミガキし、3の外側は赤彩が施される。5～8は甕である。5は折り返し口縁で、内面下位は黒化する。9は台坏甕である。10は北陸系の装飾器台とみられる。内外面ともヘラミガキし、赤彩する。坏部の中位に透かしの円孔が、下位には刻み目が施される。

溝状遺構（SD）

SD1（第79・172図）

E地区中央部で検出した。SD2と並走し北東から南西方向に走る溝状遺構である。北端はS14の西付近で途切れて終わり、南側は調査区外まで延びる。調査区内で検出できた長さは10.2mである。主軸方向はN-7°-Eで、ほぼ一直線である。幅1.2mで遺構検出面からの深さは54cmである。覆土は上層に暗褐色砂質シルト、下層に黒褐色砂質シルトがレンズ状に堆積する。断面形は逆台形状である。SD2との間隔は芯々距離で3.0m、両内側の先端間で2.0mを測る。遺構検出面では上端間の範囲に硬化面などの遺構は確認できなかった。

出土遺物のうち4点を図示した。1は土師器坏で、内面に放射状暗文を施し、外底面はヘラミガキする。2～4は須恵器で、2は坏、3は高台坏、4は蓋である。

SD2（第79・172図）

E地区中央部で検出した。SD1と並走し北東から南西方向に走る溝状遺構である。北端は攪乱に切られたところで途切れ、その先は調査区内では確認できない。南側は調査区外まで延びる。調査区内で検出できた長さは11.5mである。主軸方向はN-7°-Eで、ほぼ一直線である。幅1.2mで遺構検出面からの深さは47cmである。覆土は上層、下層とも黒褐色砂質シルトを基調とし、レンズ状に堆積する。断面形は逆台形状である。

出土遺物のうち16点を図示した。1～11は土師器である。1は盤状坏で、見込内まで放射状暗文を施す。2～6は坏で、見込内まで放射状暗文を施すものが多い。3・4・6は墨書土器である。3・4は同じ記号か。6は判読できない。7は高台坏で、8は黒色坏である。9は黒色鉢とした。底部は静止糸切りである。10は蓋である。11は脚高高台坏である。12は手づくね成形の土製品で、中央が凹む。13～16は須恵器で、13は高台坏、14・15は坏、16は蓋である。

SD3（第79・173図）

E地区西側に位置する。S15と重複し、切り合いでは新しい。南北に走る溝状遺構で、南北の調査区外へ延びる。主軸方向はN-3°-Eである。東肩部分のみの検出で、西肩は現在の生活道路をまたいだF地区でも検出されなかった。推定される最大幅は6mである。遺構検出面からの深度は55cmである。覆土は暗褐色砂質シルトや黄褐色砂質シルトなどを基調とする。互層状に堆積する礫層や細砂層が観察でき、水流があったと推測する。底面付近では酸化鉄分が沈殿する。

出土遺物のうち9点を図示した。1は土師器皿で、内面に同心円状暗文が施される。2・3は土師器甕で3は台付甕である。4は土師器羽釜の鏝部である。5は須恵器の蓋、6は灰釉陶器の壺である。7・8は中世陶器か。7は皿、8は甕である。9は金属製品で火打ち金である。中央に円孔が1つある。

SD4（第81・174図）

G地区西側に位置する。SD6と並走し、北東から南西方向に走る溝状遺構である。北端は攪乱で途切れて終わり、その先は調査区内では確認できない。南側は途中で途切れながら断続的に調査区外まで延びる。調査区内で検出した長さは43mである。主軸方向はN-14°-Eで、ほぼ一直線である。幅1.2mで遺構検出面からの深さは50cmである。覆土は暗褐色砂を基調としレンズ状に堆積する。断面形は逆

台形状である。S D 6 との間隔は芯々距離で 3.0m、両内側の上端間で 2.2m を測る。上端間の範囲を精査したが、遺構検出面では硬化面などの遺構は確認できなかった。

出土遺物のうち 28 点を図示した。1～20 は土師器である。1 は底部からの立ち上がりが環や皿と異なっているとみられ鉢とした。底部の切り離しは静止糸切りである。2～7・9・10・13～17 は坏である。内面は見込内まで放射状暗文を施し、外面はヘラミガキするものが主体的である。13～17 は墨書土器である。13～15 は同じ記号が外底面に墨書される。16 は判読できない。17 は「北」か。8 は土師器皿である。内面は同心円状に暗文を施し、外底面は回転ヘラケズリする。11・12 は高坏である。11 は坏部内面に放射状暗文と螺旋状暗文が施される。12 は内面に放射状暗文を施し、外面はヘラミガキする。18 は壺で内外面口ロナデで成形される。19・20 は甕である。21 は手づくねの土製品で、中央が凹む。22～28 は須恵器である。22・23 は坏で、24 は高台坏、25・26・27 は蓋で、28 は甕である。

S D 5 (第 81・174 図)

G 地区西側に位置する。北東から南西方向にゆるく湾曲しながら走る溝状遺構である。S D 6 と重複し、切り合いでは先行する。北端は攪乱で途切れて終わり、その先は調査区内では確認できない。南西方向に調査区外まで延びる。調査区内で検出した長さは 24 m である。幅 70cm で遺構検出面からの深さは 20cm である。覆土は極暗褐色砂を基調としレンズ状に堆積する。

出土遺物が少なく、図示できたのは 1 点で、1 は縄文土器深鉢の口縁部である。

S D 6 (第 81・175・176 図)

G 地区西側に位置する。S D 5 と重複し、切り合いでは新しい。S D 4 と並走し、北東から南西方向に走る溝状遺構である。北端は途切れて終わる。南側は途中で途切れながら断続的に調査区外まで延びる。途切れる箇所は、並走する S D 4 と一致しており、陸橋状となっていた可能性がある。調査区内で検出した長さは 52 m である。主軸方向は N-14°-E で、ほぼ一直線である。幅 1.0m、遺構検出面からの深さは 60cm である。覆土は上層、下層とも黒褐色砂質シルトを基調とし、レンズ状に堆積する。断面形は逆台形状である。

出土遺物のうち 35 点を図示した。1～23 は土師器である。1～8 は坏で、見込内まで放射状暗文を施し、外面はヘラミガキするものが多い。5～8 は墨書土器である。5・7 は同じ記号を外底面に墨書する。また 7 は 3 条の直線状の線刻を施した後に、墨書したとみられる。9・11 は鉢か。9 は短く立ち上がって終わる器形で、口縁には油煙が付着する。11 は口縁部が外反し、端部を上方につまみ上げる。10 は土師器皿である。12 は高坏で坏部内面は放射状暗文を施し、外面はヘラミガキする。13～20 は土師器蓋である。内面は放射状暗文を施すものが多い。21・22 は甕である。21 は口口成形で底部の切り離しは回転糸切りである。23 は置きカマドである。内外面とも横位のヘラナデ調整が施される。24～33 は須恵器である。24～27 は坏、28・29 は高台坏、30・31・32 は蓋である。33 は陶硯の脚部とみられる。34 は中世陶器の長頸壺か。35 は縄文土器深鉢の口縁部である。

S D 7 (第 80・177 図)

G 地区西側で検出した。わずかに蛇行しながら南北方向に走る溝状遺構である。S I 43～47 と重複し、切り合いではそれぞれに先行する。調査区内で検出した長さは 24 m である。幅は 1.3～2.5m を測り、遺構検出面からの深さも 70～150cm と一定せず、平面形が瘤状に膨らむ部分は溜池状に深くなっている。覆土は極暗褐色砂を基調として、にぶい黄褐色粗砂や褐色砂などが入り混じって互層状に堆積しており、流水と滞水を繰り返した状況がみとれる。

出土遺物のうち 6 点を図示した。1・2 は土師器坏である。内面は放射状暗文を施し、外面下半はヘラケズリする。3 は縄文土器深鉢の口縁部である。4～6 は打製石斧である。

S D 8 (第 45・70・177 図)

G 地区の南端部を東西方向に走る。S I 38・S D 7 と重複し、切り合いではそれぞれより新しい。西は S I 39 の南側で途切れ、東側は調査区外へ延びる。調査区内で検出した長さは 20.5 m である。幅 1.0m を測り、遺構検出面からの深さは 10cm である。覆土は暗褐色砂を基調とする。

出土遺物のうち 5 点を図示した。1～3 は土師器環である。1・2 は内面に放射状暗文を施す。3 の底部はやや台状を呈す。4 は土師器皿で内面に同心円状暗文を施し、外底面には「北」と墨書される。5 は須恵器鉢で口縁端部は上方につまみ上げる。

S D 9 (第 45・70・177 図)

G 地区南端部を S D 8 と並走する形で東西方向に走る。S D 7 と重複し、切り合いでは新しい。調査区外の東西両側へ延びており、調査区内で検出した長さは 30m である。幅 2.3m を測り、遺構検出面からの深さは 38cm である。覆土は暗褐色さを基調とする。

出土遺物のうち 4 点を図示した。1 は墨書土器である。土師器環で、内面に放射状暗文を施し、外底面に墨書するが、破片のため判読できない。2 は須恵器長頸壺である。3・4 は中世陶器か。3 は天目茶碗で、4 の甕は常滑焼とみられる。

土坑 (S K) (表 4・7)

ケカチ遺跡全体で 94 基検出した。ピットより大きい規模のものを土坑とした。個々の規模や出土遺物は土坑一覧表や遺物観察表を参照されたい。

ピット (S P) (表 5・7)

ケカチ遺跡全体で 166 基検出している。土坑より小さくおおむね長径 50cm 程度までのものをピットとした。規模が大きい場合も柱穴とみられるものは S P とした場合もある。個々の規模や出土遺物はピット一覧表や遺物観察表を参照されたい。

表2 后畑西濃鋸土机 (SK) 一覧表

機種番号	長径cm	短径cm	深さcm	機種番号	長径cm	短径cm	深さcm	機種番号	長径cm	短径cm	深さcm	機種番号	長径cm	短径cm	深さcm
SK1	97	-	24	SK17	106	-	24	SK37	98	-	27	SK55	56	-	17
SK2	121	106	39	SK20	86	-	6	SK38	75	-	17	SK56	72	65	15
SK3	53	-	22	SK21	72	-	40	SK39	117	60	48	SK57	79	53	27
SK4	58	50	32	SK22	52	-	21	SK40	97	-	22	SK58	64	42	24
SK5	116	82	50	SK23	74	-	14	SK41	61	15	15	SK59	101	93	46
SK6	93	-	24	SK24	113	85	28	SK42	74	62	21	SK60	111	84	34
SK7	84	-	24	SK25	207	170	80	SK43	119	108	42	SK61	127	-	29
SK8	104	84	22	SK26	121	87	10	SK44	(111)	-	13	SK62	136	-	31
SK9	90	-	22	SK27	78	39	23	SK45	86	65	15	SK63	(108)	-	28
SK10	103	-	13	SK28	98	-	36	SK46	92	81	22	SK64	57	-	36
SK11	113	92	24	SK29	99	77	26	SK47	(110)	23	17	SK65	72	50	33
SK12	131	91	28	SK30	63	-	17	SK48	112	90	18	SK66	73	46	27
SK13	111	77	29	SK31	70	-	15	SK49	72	-	13	SK68	127	88	38
SK14	123	103	19	SK32	95	78	17	SK50	76	54	28	SK69	154	-	35
SK15	98	70	30	SK33	(75)	-	25	SK51	54	15	15	SK70	(247)	-	70
SK16	95	79	13	SK34	92	62	25	SK52	103	77	22	-	-	-	-
SK17	(50)	-	10	SK35	102	80	21	SK53	65	51	44	-	-	-	-
SK18	60	-	23	SK36	85	71	70	SK54	77	-	35	-	-	-	-

表3 后畑西濃鋸ビット (SP) 一覧表

機種番号	長径cm	短径cm	深さcm												
SP1	36	-	46	SP17	47	-	22	SP32	52	-	19	SP66	42	36	36
SP2	45	33	32	SP18	31	-	21	SP33	55	41	16	SP67	22	18	47
SP3	29	-	10	SP19	66	49	29	SP34	44	37	13	SP68	31	-	22
SP4	37	-	11	SP20	57	41	38	SP35	50	-	30	SP69	30	-	63
SP5	42	-	15	SP21	50	-	22	SP36	51	-	17	SP70	40	-	40
SP6	20	-	33	SP22	58	45	19	SP37	56	46	33	SP71	48	40	26
SP7	46	37	15	SP23	66	46	26	SP38	58	-	23	SP72	40	30	14
SP8	54	-	54	SP24	55	45	41	SP39	75	51	22	SP73	46	-	27
SP9	75	-	9	SP25	79	68	43	SP40	58	48	12	SP74	26	-	18
SP10	32	-	94	SP26	66	50	33	SP42	42	34	8	SP75	38	-	18
SP14	33	17	27	SP28	45	-	24	SP43	34	-	23	-	-	-	-
SP15	33	-	29	SP30	40	-	11	SP44	(50)	-	22	-	-	-	-
SP16	47	-	37	SP31	43	-	28	SP45	33	-	40	-	-	-	-

表4 ケチヤ濃鋸土机 (SK) 一覧表

機種番号	長径cm	短径cm	深さcm	機種番号	長径cm	短径cm	深さcm	機種番号	長径cm	短径cm	深さcm	機種番号	長径cm	短径cm	深さcm
SK9	101	55	18	SK30	112	95	18	SK51	83	65	19	SK72	98	74	29
SK10	180	72	26	SK31	131	115	20	SK52	65	-	22	SK73	67	60	32
SK11	204	124	24	SK32	(104)	-	33	SK53	64	50	21	SK74	71	64	28
SK12	97	83	33	SK33	(88)	-	23	SK54	94	61	30	SK75	99	79	43
SK13	116	85	28	SK34	81	68	17	SK55	(94)	-	26	SK76	68	59	27
SK14	(96)	-	19	SK35	87	71	16	SK56	(83)	-	13	SK77	72	56	26
SK15	134	116	27	SK36	101	71	13	SK57	122	87	32	SK78	88	56	38
SK16	100	81	38	SK37	92	73	44	SK58	(122)	54	54	SK79	88	71	14
SK17	(48)	-	10	SK38	95	81	11	SK59	(116)	-	16	SK82	106	81	30
SK18	57	-	23	SK39	78	71	17	SK60	108	-	19	SK83	119	113	43
SK19	72	-	24	SK40	59	52	49	SK61	125	98	50	SK84	124	-	38
SK20	111	83	28	SK42	110	102	11	SK62	135	103	13	SK85	63	60	20
SK21	101	78	31	SK42	162	111	84	SK63	102	76	54	SK86	60	46	16
SK22	(69)	-	19	SK43	117	108	42	SK64	190	64	26	SK87	(58)	-	23
SK23	98	81	32	SK44	(110)	-	13	SK65	72	67	8	SK88	52	39	19
SK24	107	93	28	SK45	93	72	19	SK66	83	66	16	SK89	62	50	23
SK25	130	82	27	SK46	173	68	24	SK67	108	88	21	SK90	54	38	25
SK26	76	60	30	SK47	128	117	20	SK68	108	84	30	SK91	63	59	27
SK27	(97)	-	37	SK48	(106)	-	14	SK69	136	103	42	SK92	70	54	28
SK28	61	-	25	SK49	(94)	-	16	SK70	67	59	16	SK93	48	37	24
SK29	(100)	-	19	SK50	128	97	21	SK71	91	67	26	SK94	121	106	20

表5 ケチヤ濃鋸ビット (SP) 一覧表

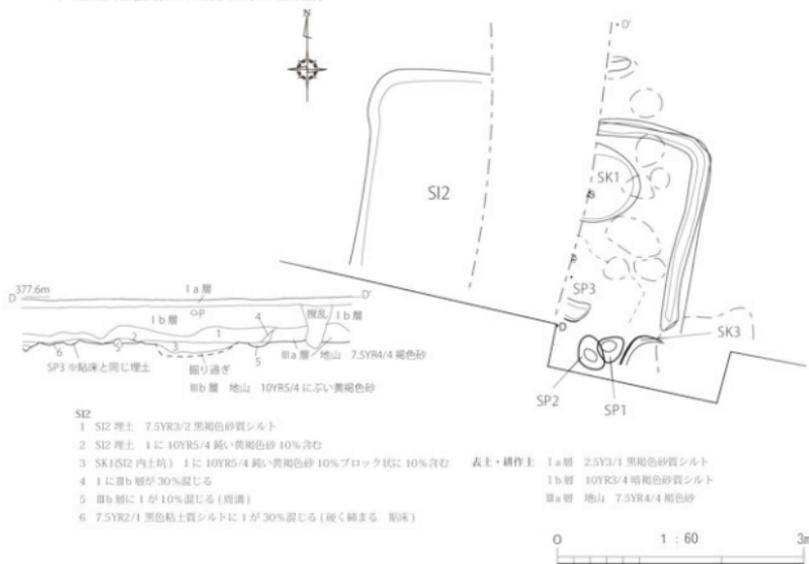
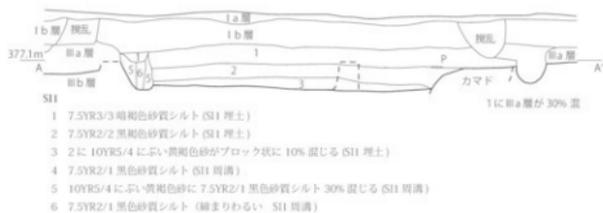
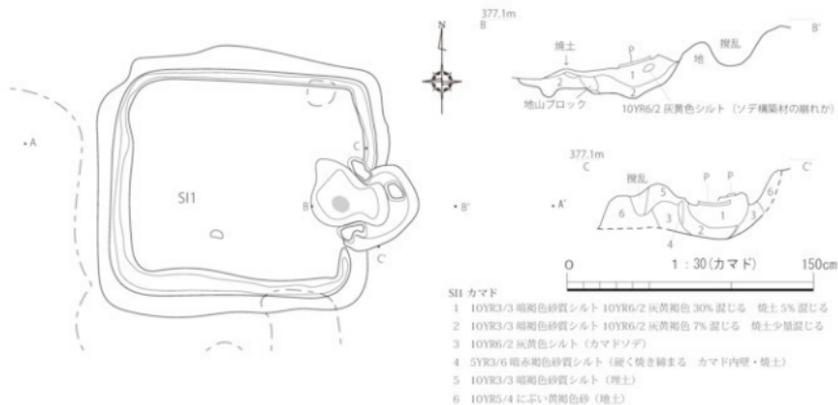
機種番号	長径cm	短径cm	深さcm	機種番号	長径cm	短径cm	深さcm	機種番号	長径cm	短径cm	深さcm	機種番号	長径cm	短径cm	深さcm
SP11	37	46	17	SP50	59	52	15	SP89	39	-	35	SP128	59	-	32
SP12	54	42	10	SP51	109	-	15	SP90	66	52	13	SP129	57	49	32
SP13	87	77	25	SP52	50	41	24	SP91	22	-	17	SP130	(42)	-	23
SP14	43	-	41	SP53	50	43	21	SP92	89	75	19	SP131	(73)	-	29
SP15	52	44	15	SP54	(88)	-	18	SP93	41	-	18	SP132	20	-	15
SP16	63	48	14	SP55	55	46	21	SP94	71	-	13	SP133	(32)	-	21
SP17	56	-	17	SP56	44	37	14	SP95	101	79	16	SP134	57	51	19
SP18	(61)	-	38	SP57	72	61	10	SP96	(98)	-	10	SP135	43	33	21
SP19	42	-	11	SP58	62	42	12	SP97	60	50	60	SP136	60	51	16
SP20	43	36	27	SP59	77	59	10	SP98	49	-	36	SP137	46	-	23
SP21	(35)	-	20	SP60	71	56	20	SP99	59	-	36	SP138	44	36	16
SP22	46	37	23	SP61	49	49	24	SP100	44	42	17	SP139	34	-	9
SP23	36	-	26	SP62	70	53	15	SP101	72	58	13	SP140	34	29	15
SP24	(37)	-	15	SP63	41	-	15	SP102	119	-	86	SP141	45	30	36
SP25	52	45	21	SP64	39	33	25	SP103	57	52	20	SP142	48	43	21
SP26	(26)	-	23	SP65	35	-	22	SP104	49	24	24	SP143	36	24	10
SP27	39	33	18	SP66	43	37	14	SP105	83	64	28	SP144	43	38	15
SP28	44	37	32	SP67	71	50	18	SP106	46	36	19	SP145	31	25	15
SP29	56	35	33	SP68	45	40	13	SP107	46	33	15	SP146	33	24	9
SP30	28	-	17	SP69	137	101	42	SP108	49	-	9	SP147	41	31	14
SP31	33	27	14	SP70	128	86	60	SP109	30	-	11	SP148	(39)	-	12
SP32	25	-	24	SP71	173	104	33	SP110	49	36	32	SP149	38	33	154
SP33	31	-	26	SP72	102	86	32	SP111	40	-	19	SP150	46	40	15
SP34	36	30	19	SP73	29	-	17	SP112	42	36	13	SP151	(31)	-	11
SP35	45	27	20	SP74	50	35	12	SP113	68	-	12	SP152	47	40	17
SP36	35	-	28	SP75	58	48	6	SP114	70	-	13	SP153	51	41	14
SP37	33	-	25	SP76	116	102	61	SP115	61	-	12	SP154	62	45	12
SP38	41	33	51	SP77	(98)	-	71	SP116	82	65	23	SP155	61	54	32
SP39	46	40	43	SP78	111	94	46	SP117	49	41	9	SP156	39	-	18
SP40	39	29	49	SP79	102	98	57	SP118	55	48	59	SP157	56	38	96
SP41	44	-	25	SP80	(51)	-	12	SP119	40	40	55	SP158	72	58	25
SP42	25	20	7	SP81	3	37	18	SP120	25	45	45	SP159	69	59	22
SP43	52	-	29	SP82	39	27	13	SP121	88	70	59	SP160	64	59	16
SP44	43	-	32	SP83	82	76	31	SP122	86	-	42	SP161	51	400	10
SP45	(24)	-	42	SP84	44	36	31	SP123	33	-	15	SP162	58	43	34
SP46	36	22	24	SP85	38	-	14	SP124	(99)	-	39	SP163	93	71	9
SP47	41	29	21	SP86	26	-	12	SP125	41	-	19	SP164	65	-	24
SP48	63	51	16	SP87	88	75	28	SP126	106	96	38	SP165	64	51	29
SP49	50	43	8	SP88	31	-	21	SP127	51	-	37	SP166	75	66	41



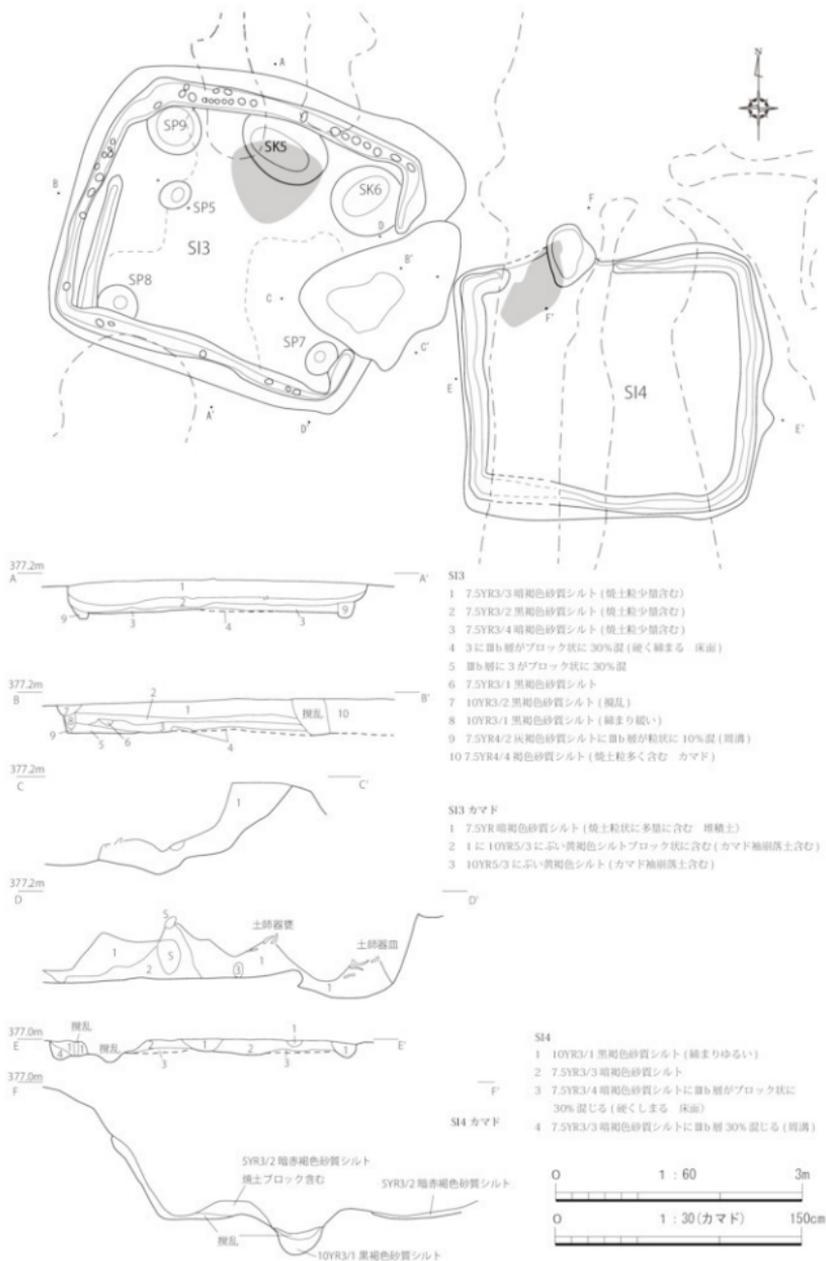
第7图 后垆西遗址A·B地区 遗构全体图



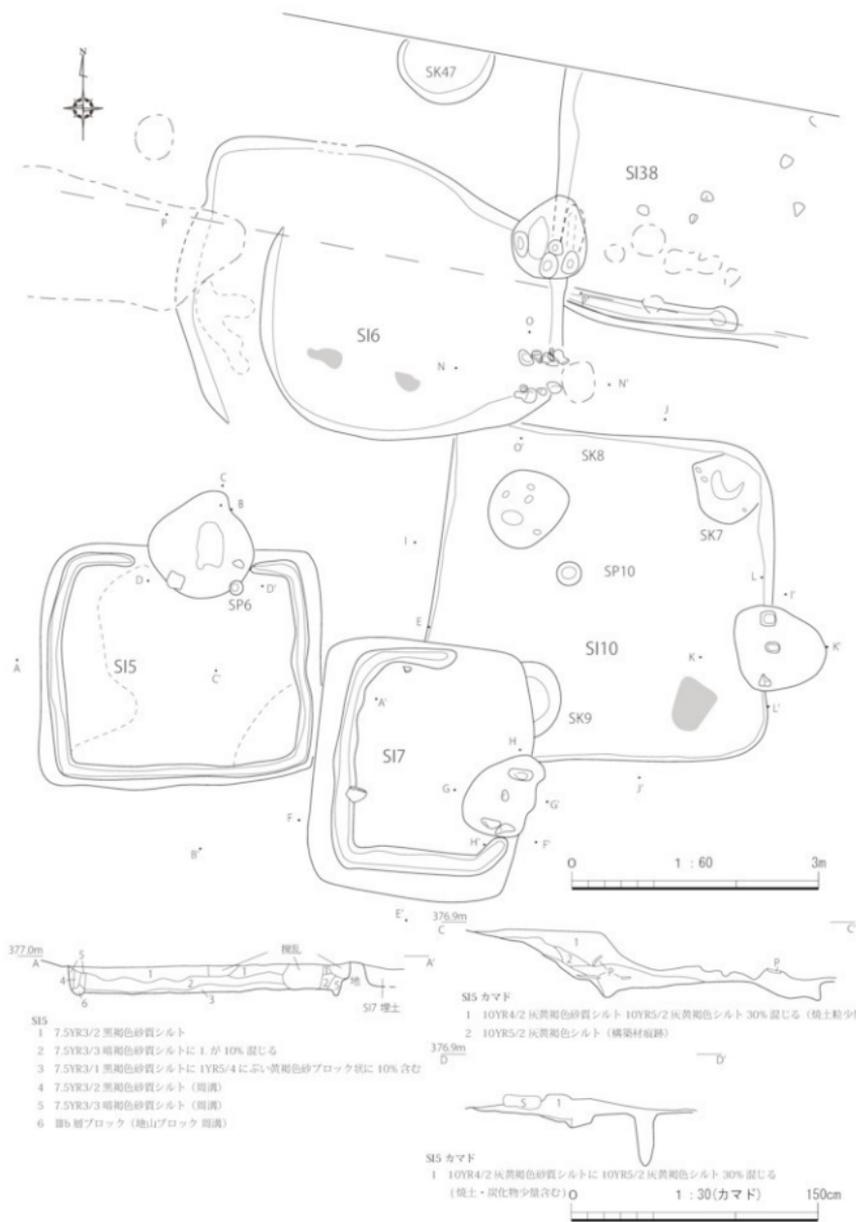
第8图 后周西遗址B·C地区 遺構全体図



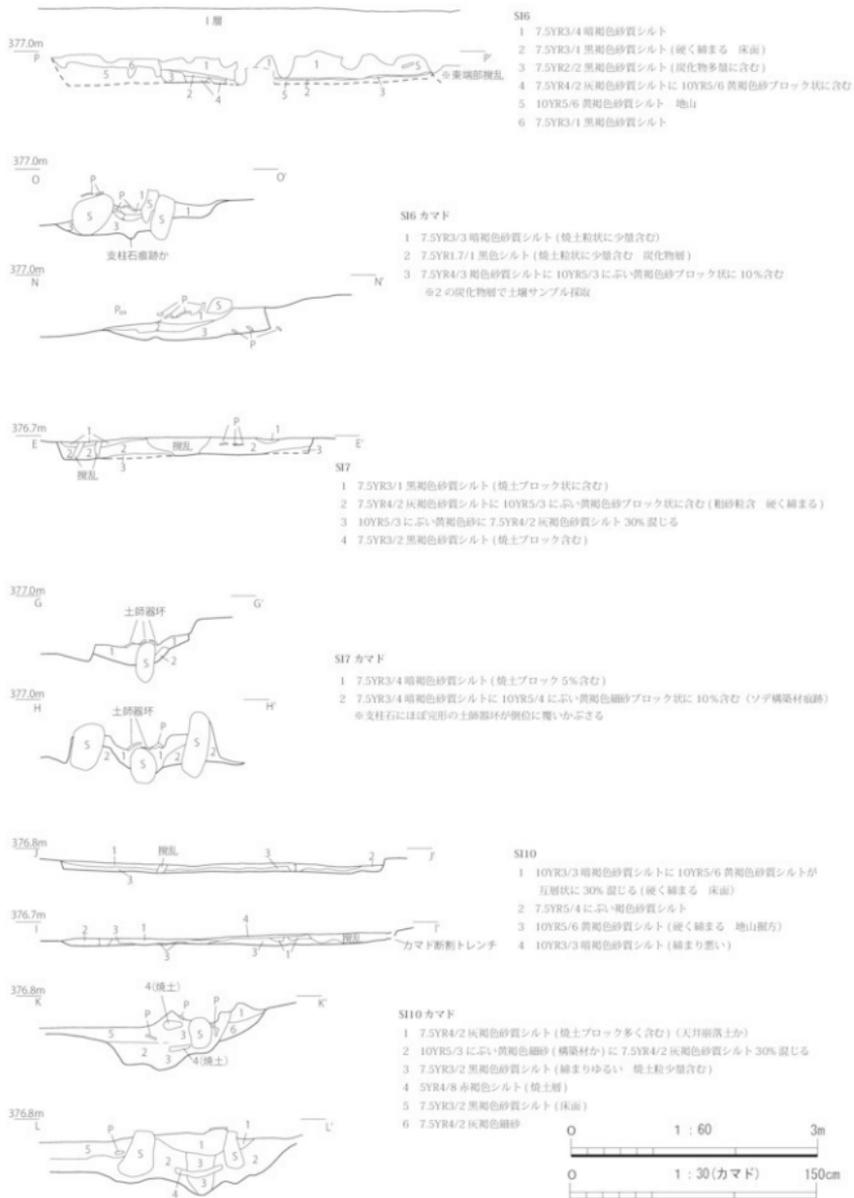
第9図 后畑西竪穴建物 S I 1・2



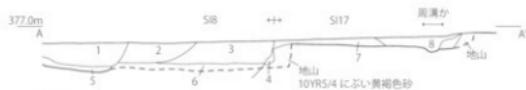
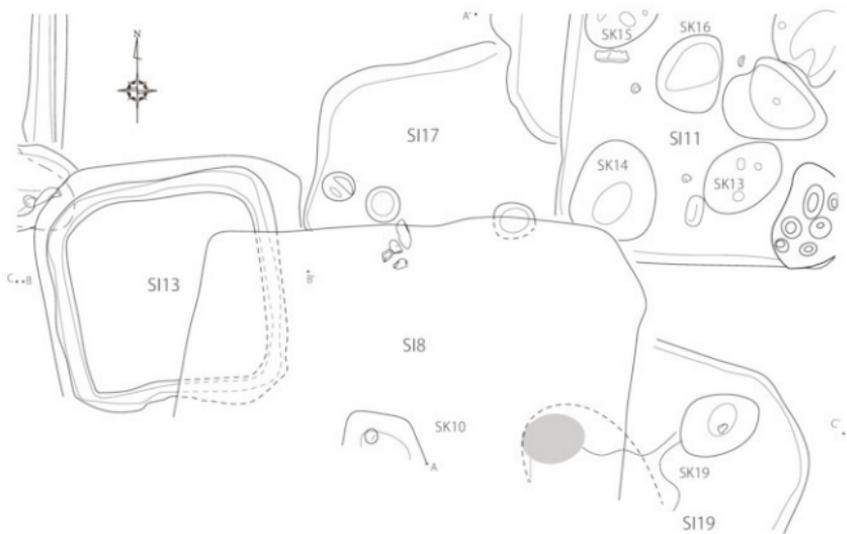
第10図 后畑西竪穴建物 S13・4



第11図 后畑西整穴建物S15・6・7・10



第12図 后畑西竪穴建物 S16・7・10

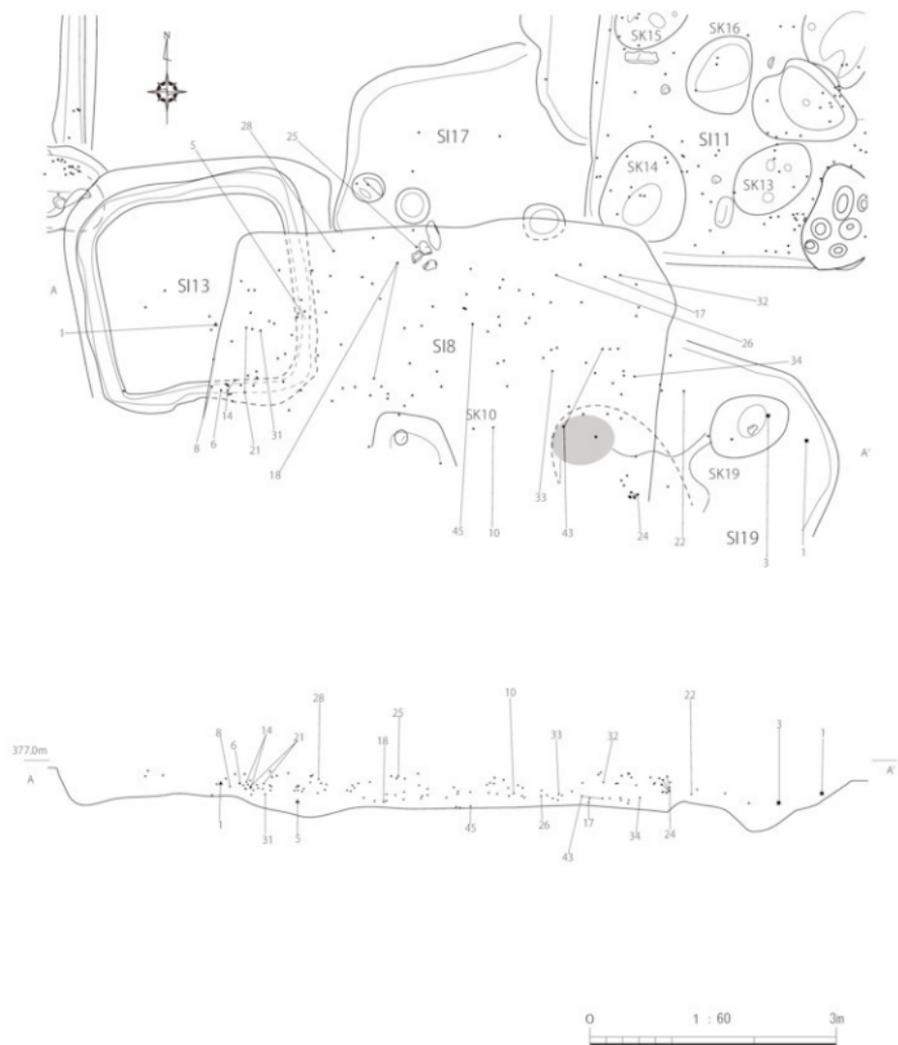


S18-17

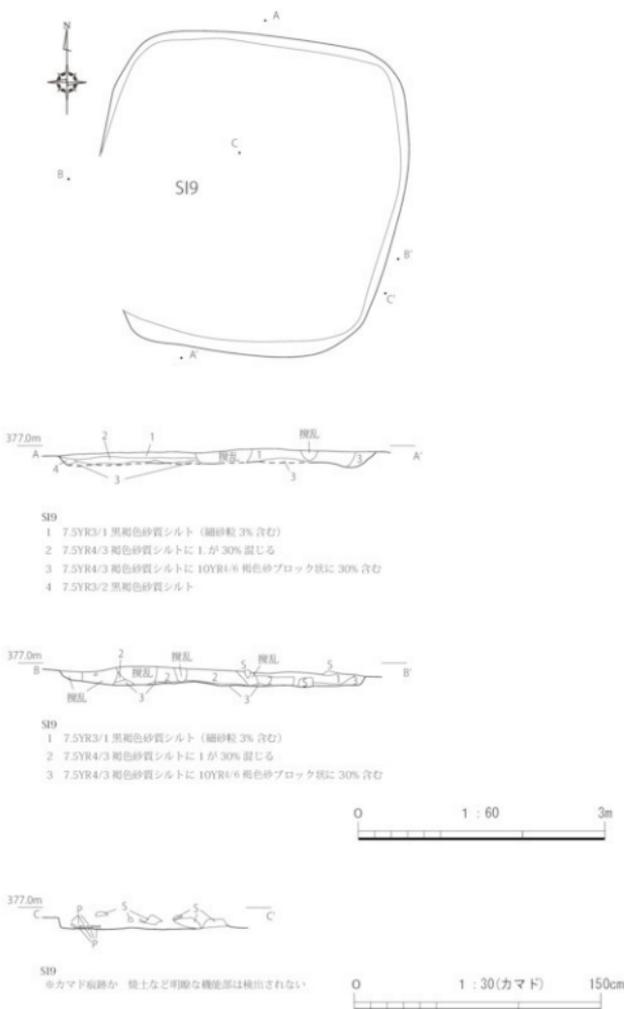
- 1 10YR2/3 黒褐色砂質シルト (土坑か)
- 2 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト (炭化物少量混じる)
- 3 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト
- 4 3に10YR5/4 に近い黄褐色砂が30%混じる (濁溝か)
- 5 10YR2/3 黒褐色砂質シルトに10YR5/4 に近い黄褐色砂が粒状に少量混じる (土坑か)
- 6 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルトに10YR5/4 に近い黄褐色砂が粒状に少量混じる (硬く締まる 床面)
- 7 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルトに10YR5/4 に近い黄褐色砂10%混じる (別建物か 浅いオチ)
- 8 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト (炭化物粒状に少量混じる) (別建物か 浅いオチ)



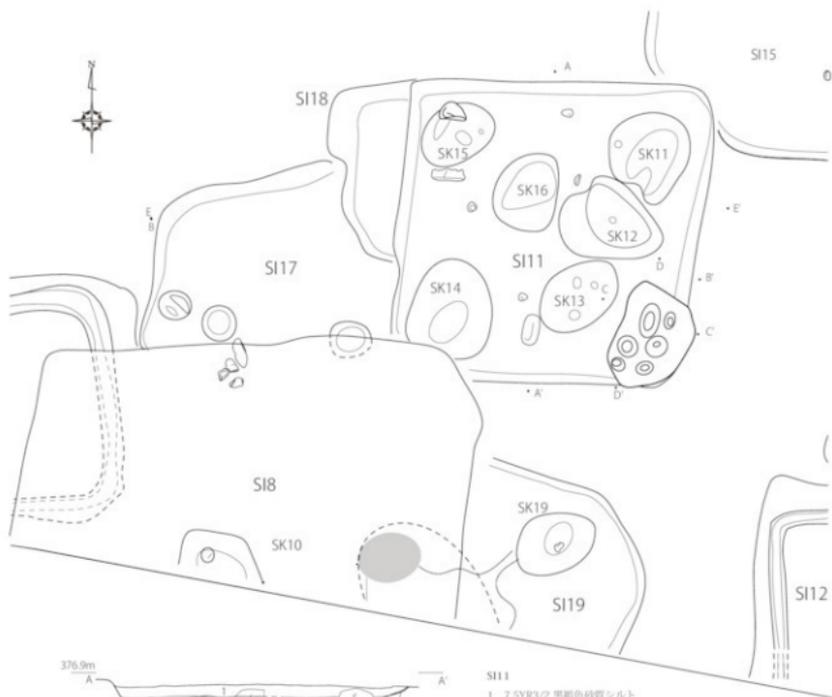
第13図 后畑西竪穴建物 S18・13・17・19



第14图 后畑西竖穴建物 S18・13・19



第15図 后畑西竪穴建物 S I 9



S111

- 1 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト
- 2 1に10YR4/6 褐色砂ブロック状に含む
- 3 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト (固く締まる 床面)



S111

- 4 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト (固く締まる)
- 5 4に地山ブロック含む
- 6 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルトに10YR4/4 褐色砂 10%混じる



S111カマド

- 1 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト (焼土ブロック状に含む)



S111カマド

- 1 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト (焼土ブロック状に含む)

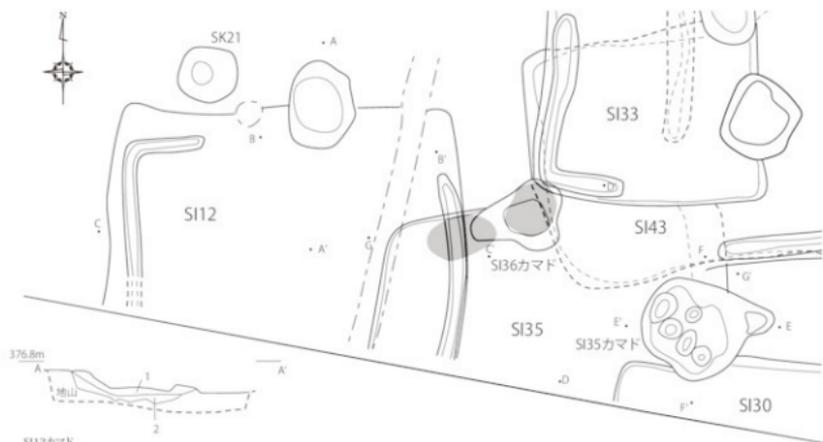
0 1 : 30 (カマド) 150cm



S117・18・11

0 1 : 60 3m

第16図 后畑西竪穴建物 S111・17・18



376.8m



SI12カマド

- 1 7.5YR4/2 灰褐色砂に 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト 30% 混じる (焼土ブロック含む カマド構築材崩れ)
- 2 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルトに 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト 30% 混じる (機能面か)

地山 7.5YR5/4 に近い黄褐色砂 (小礫混じり)

376.8m



SI12カマド

- 1 7.5YR4/2 灰褐色砂に 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト 30% 混じる (焼土ブロック含む カマド構築材崩れ)
- 2 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルトに 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト 30% 混じる (機能面か)
- 3 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト (硬く締まる 床面)

地山 7.5YR5/4 に近い黄褐色砂 (小礫混じり)

377.2m

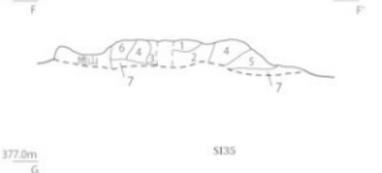


0 1 : 60 3m

376.7m



376.7m



377.0m



376.6m



SI33

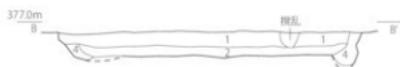
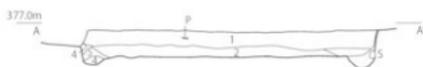
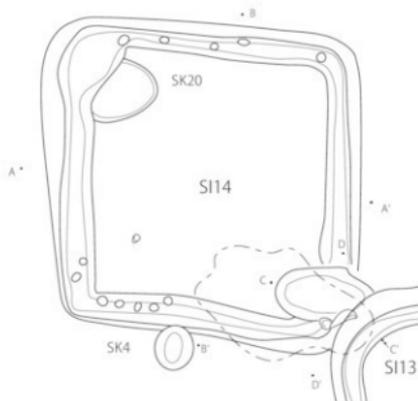
- 1 10YR3/3 暗褐色砂質シルトに 10YR5/3 に近い黄褐色砂ブロック状に 7% 含む
- 2 10YR3/4 暗褐色砂質シルトに 10YR5/3 に近い黄褐色砂ブロック状に 10% 含む (焼土粒状に少量含む)

SI35カマド

- 1 7.5YR5/3 に近い褐色砂質シルト (焼土ブロック 30% 含む)
- 2 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト (焼土粒状に 7% 混じる・炭化物少量混じる)
- 3 5YR5/6 明赤褐色シルト (焼土層)
- 4 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルトに 7.5YR5/2 灰褐色シルト 10% 混じる (焼土粒状に 3% 含む ソデ構築材)
- 5 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト
- 6 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト
- 7 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
- 8 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト (焼土粒状に 3% 含む)
- 9 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
- 10 9 に焼土ブロック多く含む (焼土層)
- 11 10YR5/3 に近い黄褐色砂
- 12 5YR5/4 に近い赤褐色シルト
- 13 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (炭化物少量含む 焼土層)

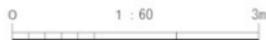
0 1 : 30(カマド) 150cm

第17図 后畑西竪穴建物 S112・35



S114

- 1 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト
- 2 7.5YR4/3 褐色砂質シルト
- 3 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
- 4 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトに 10YR5/4 に近い黄褐色細砂ブロック状に 30% 含む (締まり悪い、円満)
- 5 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (締まり悪い、円満)

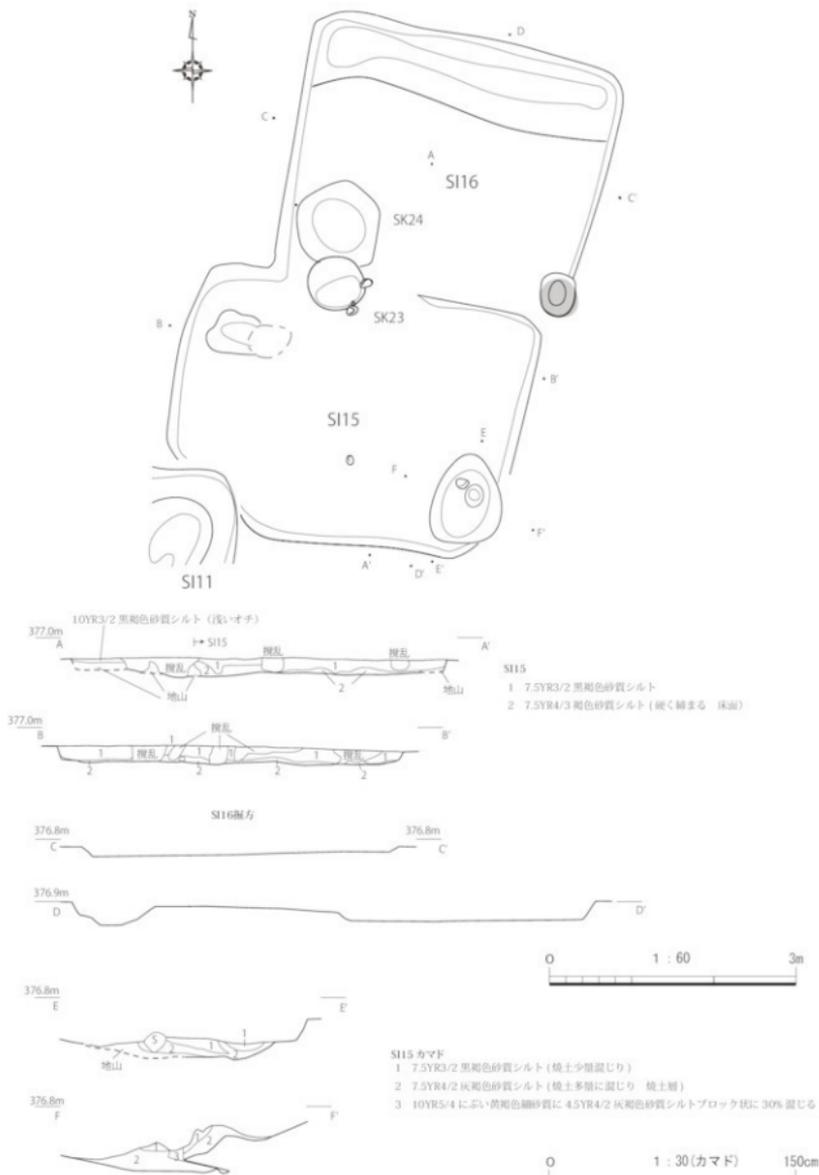


S114カマド

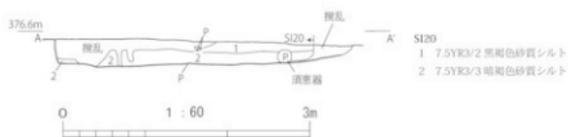
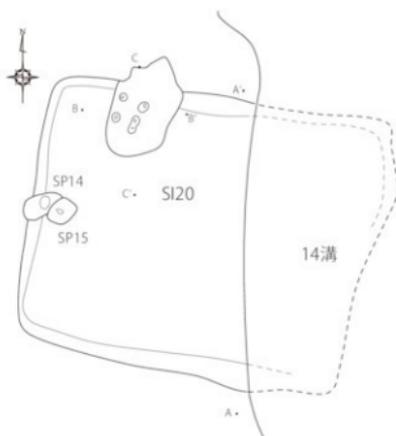
- 1 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト (焼土ブロック状に 30% 含む 焼土断)
- 2 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト (焼土粒状に少量含む)
- 3 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト (焼土ブロック状に 30% 含む 焼土断)
- 4 10YR5/4 に近い黄褐色細砂 (ソデ)
- 5 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト



第18図 后畑西竪穴建物 S 114



第19図 后畑西竪穴建物 S I 15・16

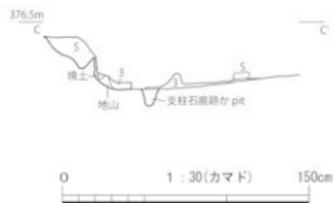


- SI20
- 1 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト
 - 2 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト

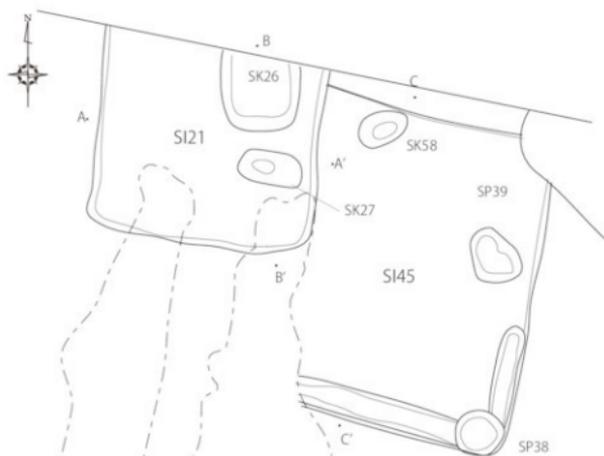


SI20 カマド

- 1 10YR5/3 に富み黄褐色細砂 (硬く締まる ソデ)
- 2 1 に焼土 10% 混じる (カマド内壁)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト (炭化物多く含む 灰床部)
- 4 10YR3/2 黒褐色砂質シルトに 1 がブロック状に混じる (埋積土)
- 5 10YR3/2 黒褐色砂質シルトに地山 30% 混じる



第20図 后畑西竪穴建物 S I 20



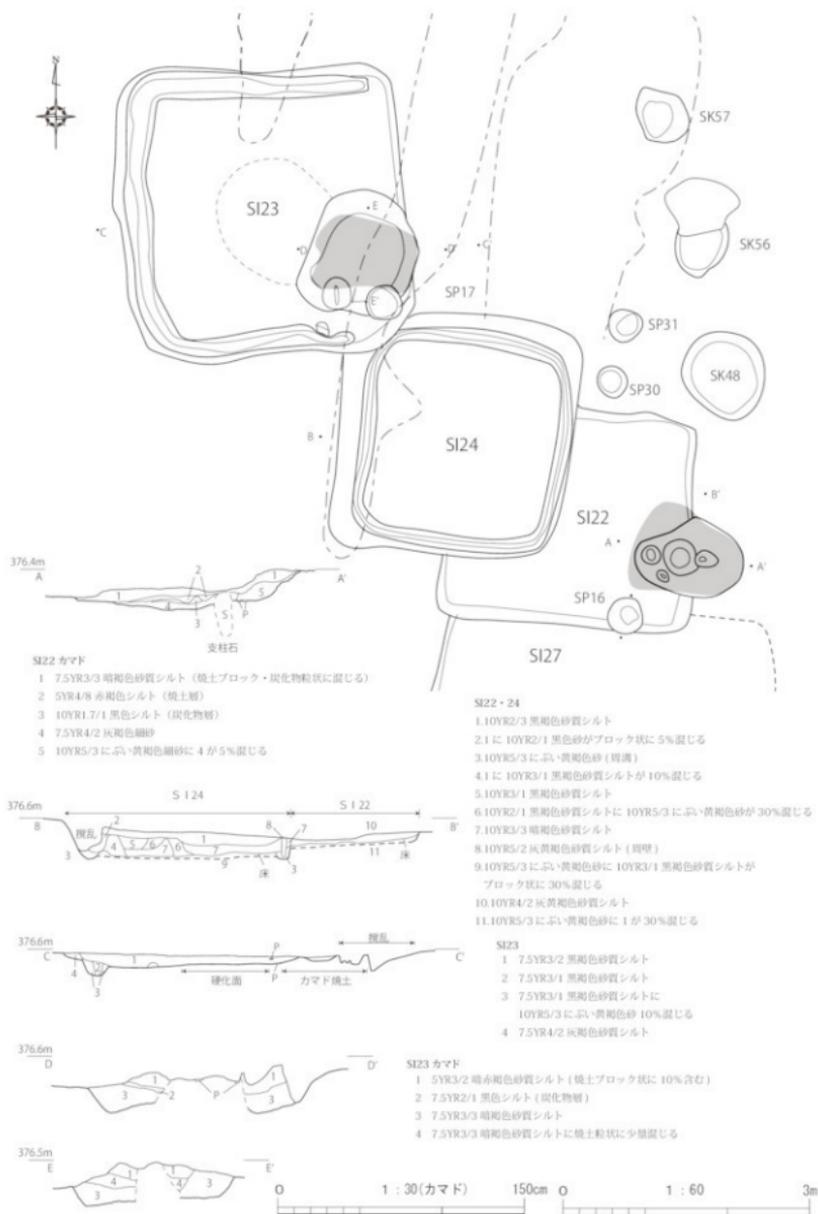
SI21
1 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルトに（炭化物・焼土少量混入する）



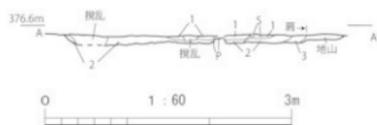
SI45
10YR4/2 灰褐色砂質シルト



第21図 后畑西竪穴建物 S I 21・45

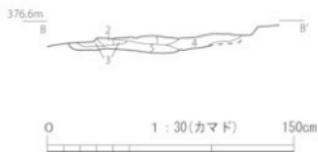


第22図 后畑西竪穴建物 S122・23・24



SI25

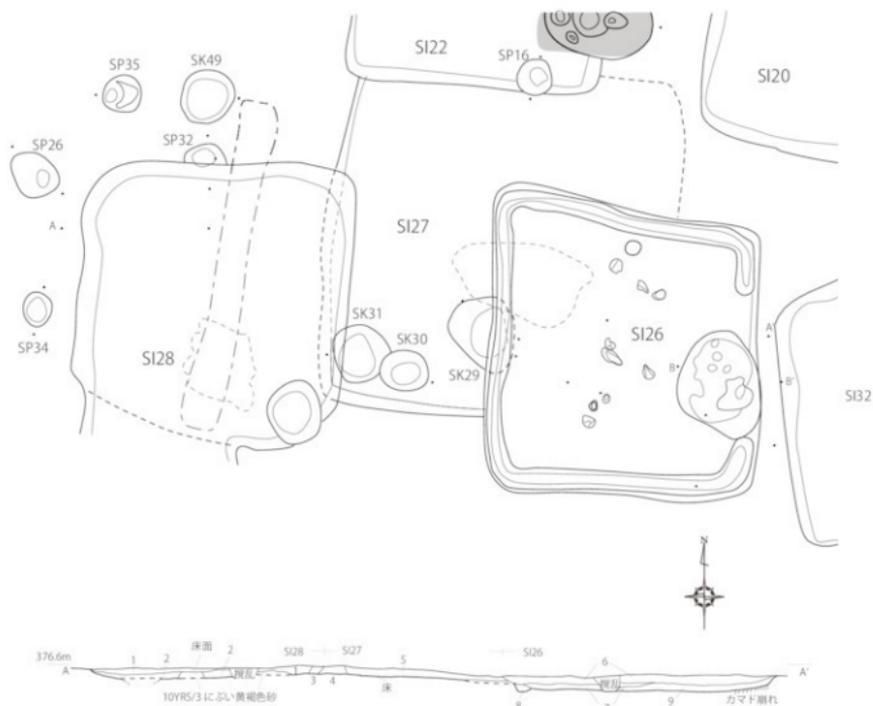
1. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト (炭化物粘状に7%混じる)
2. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト
3. 10YR4/6 褐色砂質シルト



SI25 カマド

1. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (焼土粒・炭化物を含む 焼土層)
2. 2.5YR4/2 暗灰黄色砂質シルト (構築材ブロック)
3. 10YR2/1 黒色シルト (炭化物層)
4. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト (焼土粒状炭化物 炭粒状を含む)
5. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (硬く締まる 床面)

第23図 后畑西竪穴建物 S 125



S126-27-28

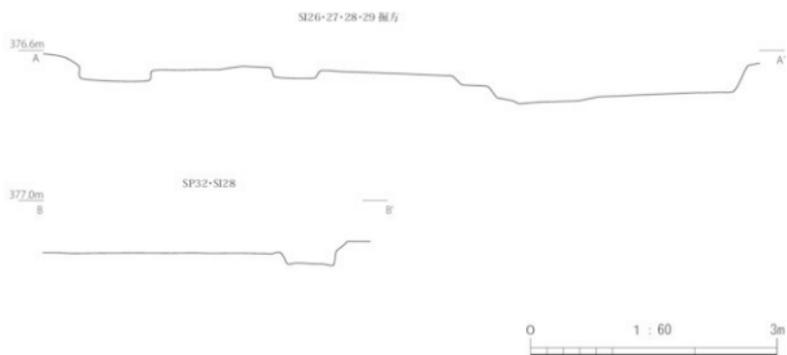
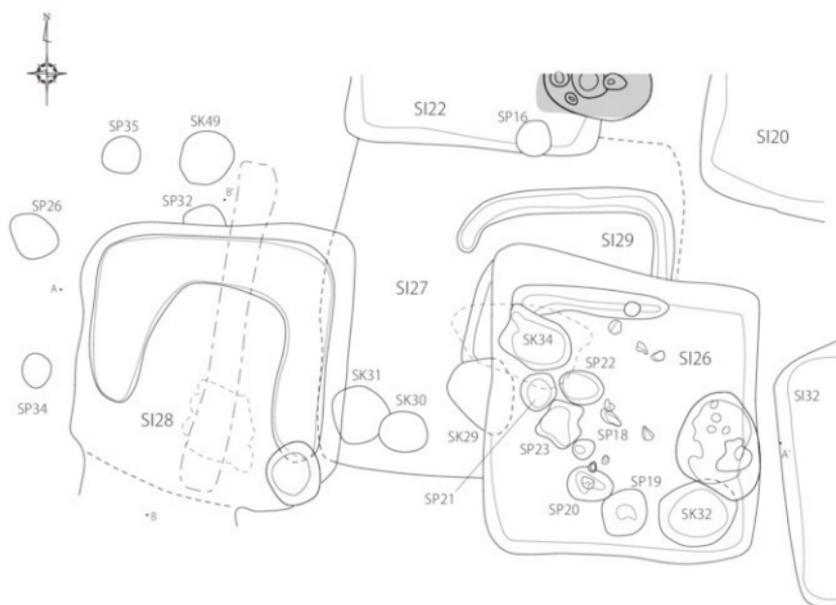
- | | |
|--|--|
| 1 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト (堆積土) | 6 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (炭化物少量含む) |
| 2 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルトに 10YR5/3 に近い黄褐色砂 10%混じる (床下) | 7 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト (炭化物7%含む) |
| 3 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト | 8 7.5YR2/1 黒色砂質シルトに 10YR5/3 黄褐色砂ブロック状に 30%混じる (溝溝) |
| 4 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト (焼土粒状に少量混じる) | 9 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト |
| 5 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルトに 10YR5 に近い黄褐色砂ブロック状に 10%含む | |



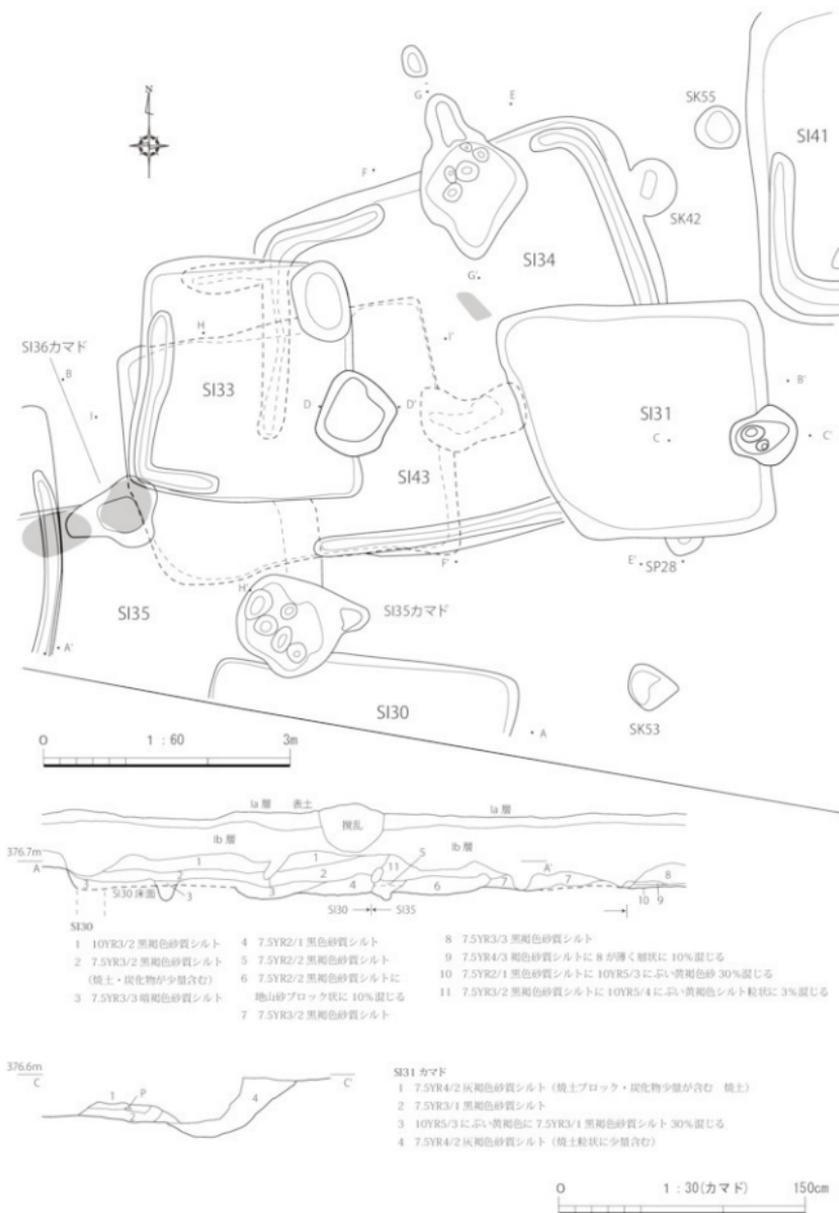
S126 カマド

- | |
|---|
| 1 10YR3/3 暗褐色砂質シルト (焼土ブロック多く含む 焼土層) |
| 2 10YR3/3 暗褐色砂質シルト (炭化物7%含む 炭化物層) |
| 3 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルトに 10YR5/3 に近い黄褐色砂 30%混じる |

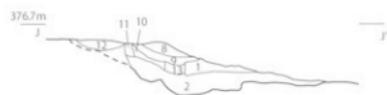
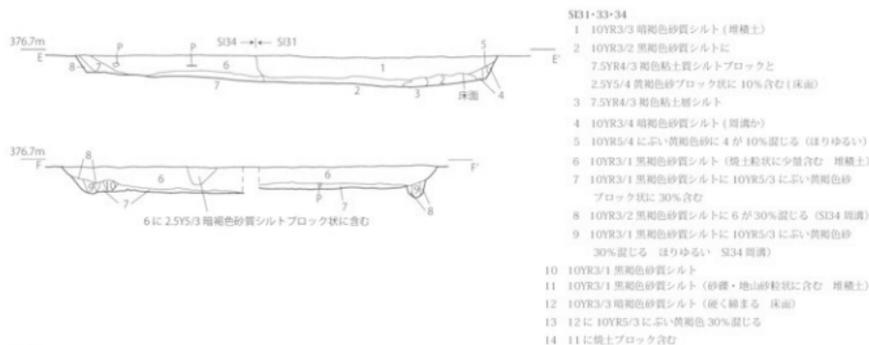
第24図 后畑西竪穴六建物 S 126・27・28・29



第25图 后畑西竖穴建物 S 126・27・28・29



第26図 后畑西壑穴建物 S130・31・33・34・35・36・43



- S33 カマド**
- 1 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト (黄土ブロック状に含む 増積土)
 - 2 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルトに 10YR5/3 にふい黄褐色砂が 30%混じる

- S34 カマド**
- 1 7.5YR4/2 灰黄褐色砂質シルト (黄土粒状に 3%含む 増積土)
 - 2 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト
 - 3 7.5YR4/2 灰黄褐色砂質シルトに 7.5YR6/2 灰褐色シルト 10%混じる (黄土 3%含む ソフト構築材)
 - 4 10YR3/3 暗褐色砂質シルト
 - 5 5YR4/4 にふい赤褐色シルト (増積土)
 - 6 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト (炭化物類 埋溜み)
 - 7 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト
 - 8 7.5YR6/2 灰褐色シルト (黄土粒状に 7%含む 構築材)

- S35 カマド**
- 1 7.5YR5/3 にふい褐色砂質シルト (黄土ブロック 30%含む)
 - 2 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト (黄土粒状に 7%混じる 炭化物少量混じる)
 - 3 5YR5/6 赤褐色シルト (増積土)
 - 4 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルトに 7.5YR5/2 灰褐色シルト 10%混じる (黄土粒状に 3%含む ソフト構築材)
 - 5 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト
 - 6 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト
 - 7 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
 - 8 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト (黄土粒状に 3%含む)
 - 9 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
 - 10 9 に黄土ブロック多く含む (増積土)
 - 11 10YR5/3 にふい黄褐色砂
 - 12 5YR5/4 にふい赤褐色シルト (増積土)
 - 13 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (炭化物少量含む)

- S43**
- 1 10YR3/3 暗褐色砂質シルト (増積土)
 - 2 10YR5/4 にふい黄褐色砂に 1 が 30%混じる



第27図 后畑西竪穴建物 S 130・31・33・34・35・36・43



SI32

- 1 10YR4/4 褐色砂質シルトに 10YR5/3 に近い黄褐色粘状に少量混じる (埋積土)
- 2 10YR5/3 に近い黄褐色砂に 10YR4/4 褐色砂質シルトが混じる (掘く跡まる 床面)

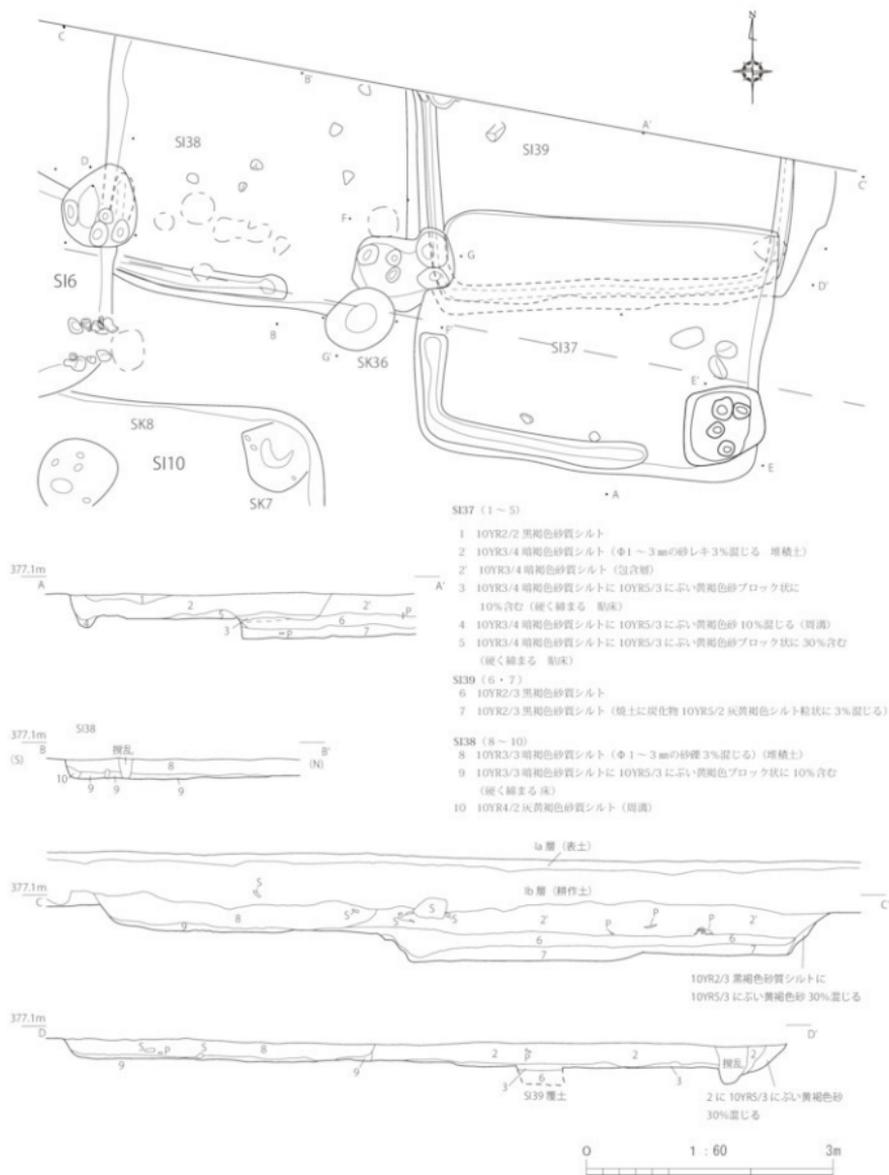


SI32

- 1 10YR4/4 褐色砂質シルトに 10YR5/3 に近い黄褐色粘状に少量混じる (埋積土)
- 2 10YR5/3 に近い黄褐色砂に 10YR4/4 褐色砂質シルトが混じる (掘く跡まる 床面)



第28図 后畑西竪穴建物 S I 32



第29図 后畑西竪穴建物 S137・38・39



SI37 カマド

- 1 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (焼土粒状に少量含む)
- 2 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト



SI38 カマド

- 1 7.5YR4/4 褐色粘土質シルトに 5YR4/8 暗褐色砂質シルト (焼土) をブロック状に 30%含む 天井部分灰 (焼土層)
- 2 7.5YR3/2 黒色砂質シルト (炭化物、焼土少量混じる)
- 3 10YR1.7/1 黒色シルトに 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト 30%混じる (炭化物層)
- 4 5YR4/8 赤褐色シルト 火床部分 (焼土層)
- 5 10YR3/2 黒褐色砂質シルトに 10YR5/3 に近い黄褐色砂 30%混じる

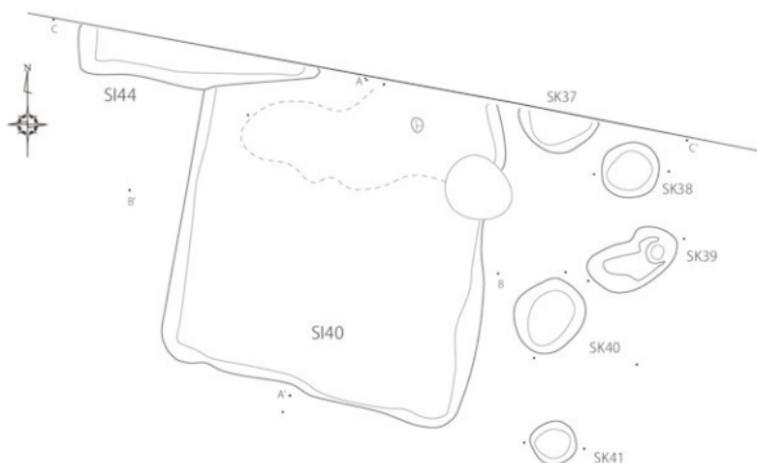


SI38 カマド

- 6 10YR6/4 に近い黄褐色細砂に 7.5YR4/4 褐色砂質シルトブロック状に 10%混じる (ソデ構築材)
- 7 10YR3/2 黒色砂質シルト

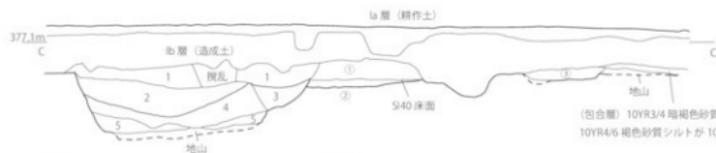


第30図 后畑西竪穴建物 S I 37・38



S140

- 1 10YR3/2 黒色砂質シルト
- 2 10YR3/2 黒色砂質シルト (粘土粒状に少量含む)
- 3 7.5YR4/4 褐色砂質シルトに1が10%混じる
- 4 7.5YR4/4 褐色砂質シルトに1がブロック状に30%混じる (硬く締まる)



S140

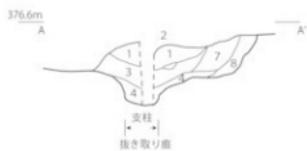
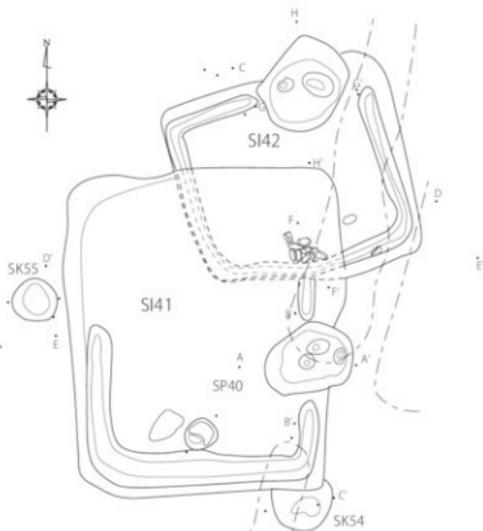
- ① 10YR3/3 暗褐色砂質シルト
- ② 1に10YR4/6 褐色砂質シルト (地山) が30%混じる
- ③ 10YR3/4 暗褐色砂質シルト

S144

- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルトに10YR4/6 褐色砂質シルト7%混じる
- 2 10YR3/4 暗褐色砂に10YR4/1 褐色砂質シルトが互層状に30%混じる
- 3 10YR3/1 黒褐色砂質シルトに10YR3/4 暗褐色砂30%混じる (10YR5/4 に多い黄褐色砂粒状に10%含む)
- 4 10YR5/4 に多い黄褐色砂に2.5Y3/1 黒褐色砂質シルトが層状に30%混じる
- 5 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト

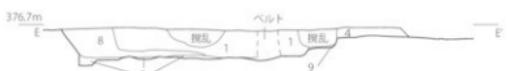
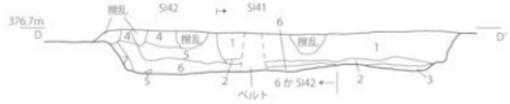
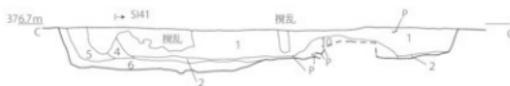


第31図 后畑西竪穴建物 S140・44



S141 カマド

- 1 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト (焼土 10%混着) 天井崩落部か
- 2 5YR4/6 赤褐色シルト (焼土) 天井崩落部か
- 3 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト (焼土 3%混着)
- 4 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト (焼土 2.5Y/2 暗灰黄色シルト少量含む)
- 5 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルトに 10YR5/4 に近い黄褐色砂 30%混着 (ソデカ)
- 6 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
- 7 10YR3/4 暗褐色砂質シルト
- 8 10YR3/3 暗褐色砂質シルト

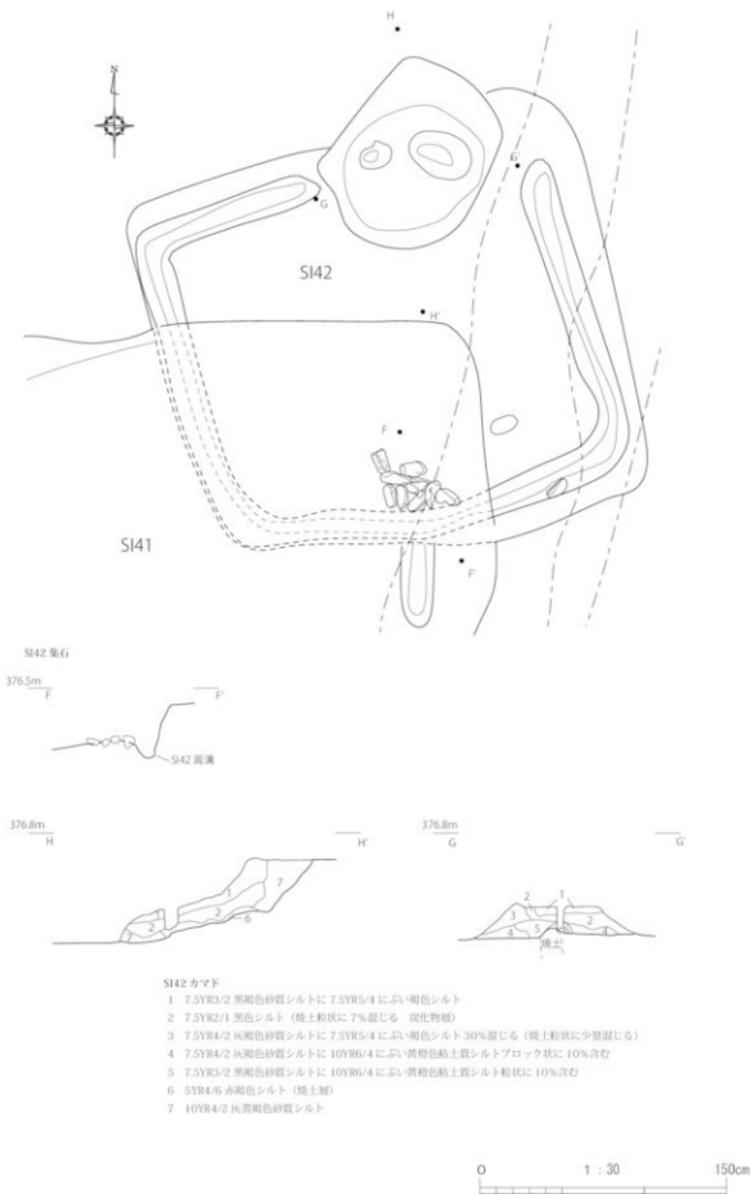


S141 (1 ~ 3・8 ~ 10)・S142 (4 ~ 7)

- 1 10YR2/3 黒褐色砂質シルト (10YR5/6 黄褐色シルト粒状 $\Phi 1$ mmの砂粒をそれぞれ3%含む)
- 2 10YR2/2 黒褐色砂質シルトに 10YR4/4 褐色砂質シルト 薄く層状に 10%混着 (硬く締まる 黄味)
- 3 10YR4/4 褐色砂質シルトに 10YR5/3 に近い黄褐色砂 30%混着
- 4 10YR2/1 黒褐色砂質シルト
- 5 10YR2/1 黒褐色砂質シルトに 10YR5/3 に近い黄褐色砂が ブロック状に 10%含む
- 6 10YR2/2 黒褐色砂質シルトに 10YR5/4 に近い黄褐色砂が ブロック状に 30%含む
- 7 10YR5/4 に近い黄褐色砂 (地山)
- 8 10YR3/3 暗褐色砂質シルト
- 9 10YR3/3 暗褐色砂質シルトに 10YR5/4 に近い黄褐色砂 30%混着 (充填)
- 10 10YR2/2 黒褐色砂質シルト (焼土粒状に 7%含む S141 カマド)



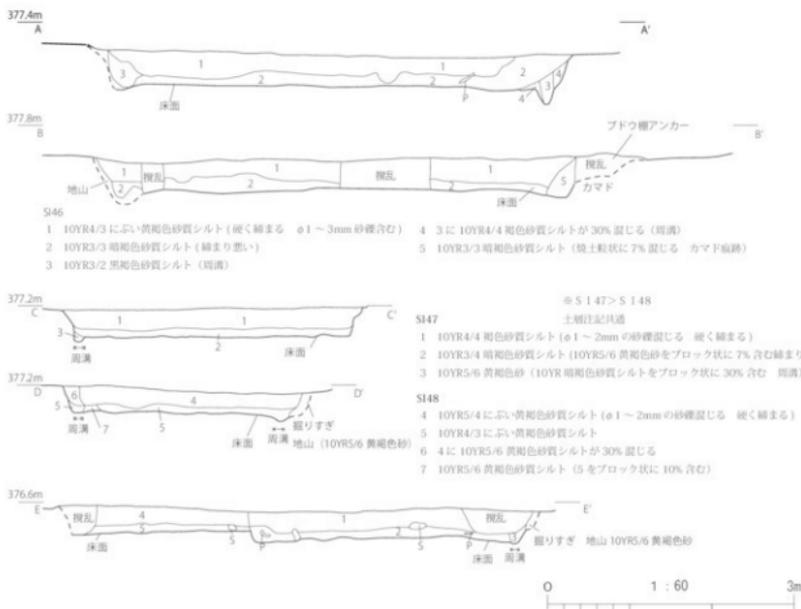
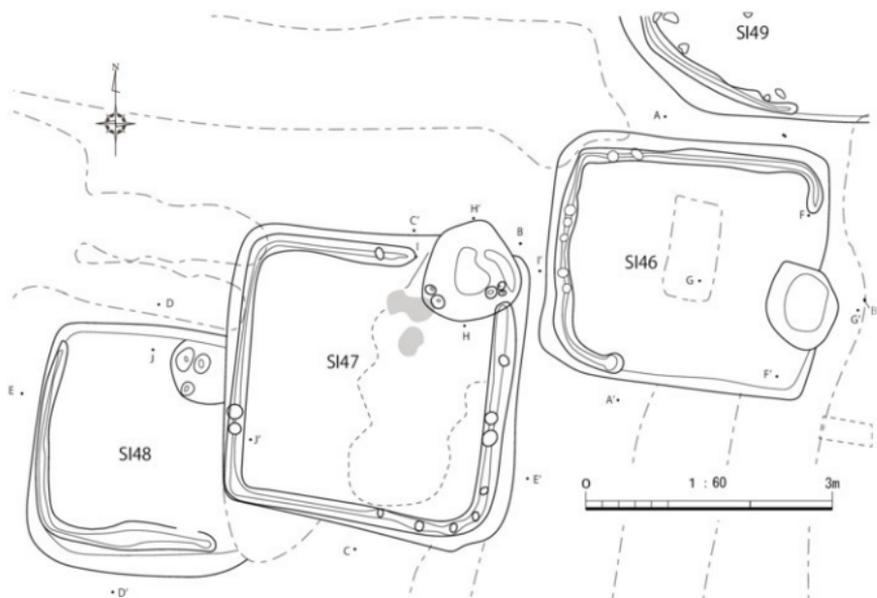
第32図 后畑西竪穴建物 S141・42



SI42 ガマド

- 1 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルトに 7.5YR5/4 に赤い褐色シルト
- 2 7.5YR2/1 黒色シルト（焼土粒状に 7%混じる 炭化物層）
- 3 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルトに 7.5YR5/4 に赤い褐色シルト 30%混じる（焼土粒状に少量混じる）
- 4 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルトに 10YR6/4 に赤い黄褐色粘土質シルトブロック状に 10%含む
- 5 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルトに 10YR6/4 に赤い黄褐色粘土質シルト粒状に 10%含む
- 6 5YR4/6 赤褐色シルト（焼土層）
- 7 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト

第33図 后畑西壁穴建物 S141・42



第34図 后畑西竪穴建物 S 146・47・48

377.3m
F



SI46 カマド

- 1 焼土ブロック (5YR3/6 暗赤褐色砂質シルト 硬く締まる)
- 2 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト (焼土粒状に 7% 含む)
- 3 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルトに 10YR5/6 黄褐色砂が 30% 混じる
- 4 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト

377.3m
G



372.3m
H



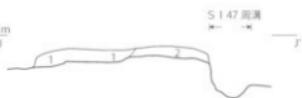
SI47 カマド

- 1 7.5YR4/4 褐色砂質シルト (炭化物粒状に 2%・焼土粒状に 3% 含む 焼土層)
- 2 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト (焼土ブロック状に 30% 含む 焼土層) 天井崩れか
- 3 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト (焼土粒状に 3% 含む)
- 4 5YR3/6 暗赤褐色シルト (火床 焼土層)
- 5 5YR4/8 赤褐色シルト (硬く締まる 焼土ブロック)
- 6 5YR3/6 暗赤褐色シルト (硬く締まる カマド内壁)
- 7 7.5YR4/6 褐色シルト (焼土・炭化物粒状に 7% 含む カマドソデ)
- 8 10YR3/4 暗褐色砂質シルトに 10YR 黄褐色砂 30% 混じる (カマドソデ)

377.3m
I



377.1m
J

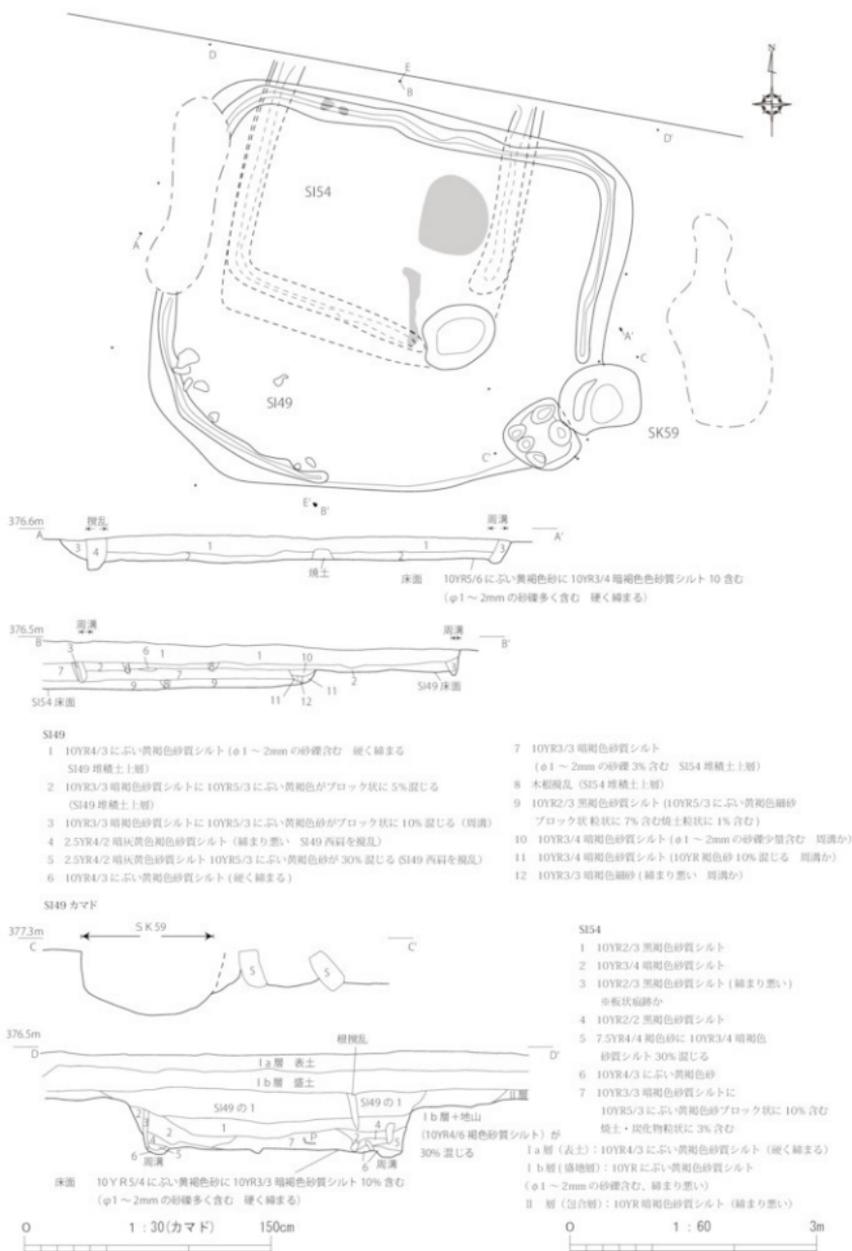


SI48 カマド

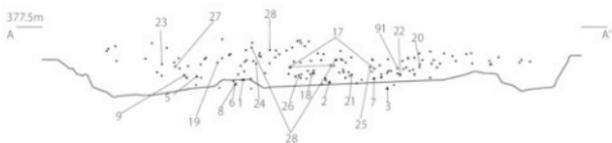
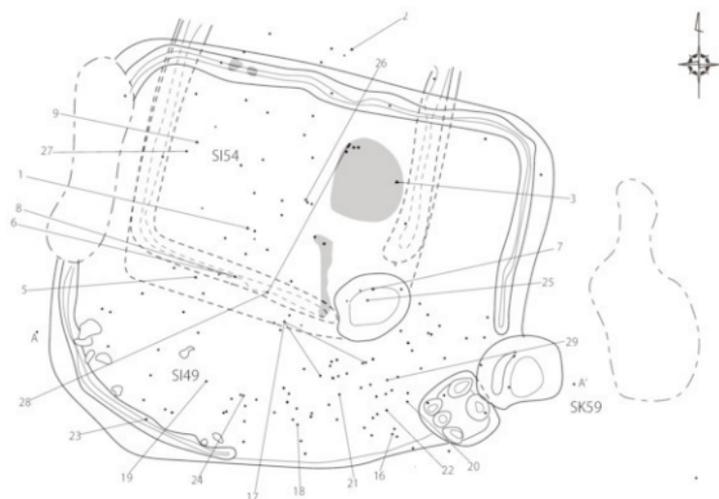
- 1 10YR2/3 黒褐色砂質シルト (炭化物粒状に 5% 含む)
 - 2 10YR5/3 濃い黄褐色砂質シルト (硬く締まる 焼土ブロック状に 10% 含む)
- ◎2はカマドソデ遺存部



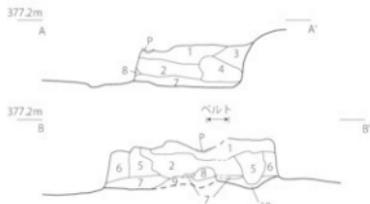
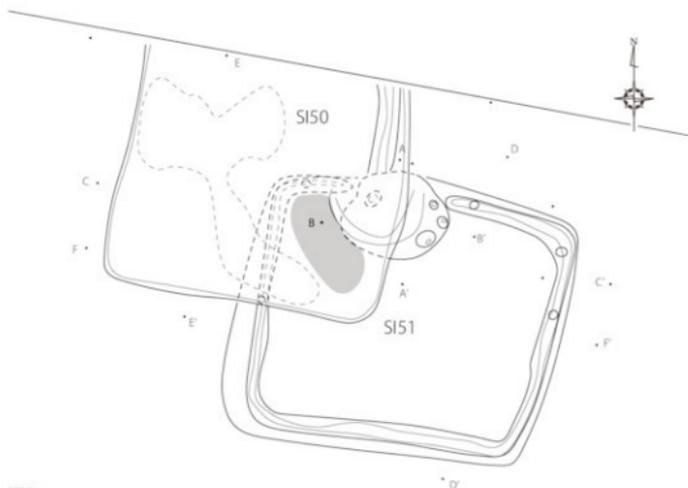
第35図 后畑西壱穴建物 S 146・47・48



第36図 后畑西竈穴建物 S149・54

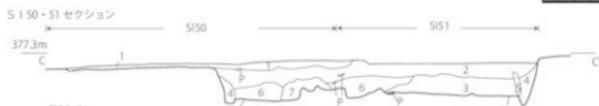


第37图 后畑西竖穴建物 S149・54



S151 カマド

- 1 7.5YR4/4 色砂質シルトに 10YR 灰黄褐色粘土質シルトブロック状に 30% 含む (灰化物 焼土 7% 含む)
- 2 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト (焼土少量含む)
- 3 5YR4/2 灰褐色砂質シルトに 10YR5/4 に近い黄褐色砂 30% 混じる
- 4 7.5YR3/3 増褐色砂質シルトに 10YR6/2 灰黄褐色粘土質シルト粒状に 3% 含む
- 5 7.5YR3/4 増褐色砂質シルトに 10YR6/2 灰黄褐色粘土質シルトブロック状に 10% 含む
- 6 10YR3/3 増褐色砂質シルト (焼土ブロック状に 3% 含む 増積土)
- 7 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト
- 8 7.5YR3/3 増褐色砂質シルトに 10YR5/4 に近い黄褐色粗砂 30% 含む (焼土粒状に少量含む ブロック土)
- 9 7.5YR4/6 褐色砂 (池山焼熟土)
- 10 7.5YR3/3 増褐色砂質シルト



S150-S151

- 1 10YR4/4 褐色砂質シルト (S 150)
- 2 10YR3/4 増褐色砂質シルト (硬く締まる S 151)
- 3 10YR2/3 黒褐色砂質シルト (焼土粒状に少量含む 10YR5/4 に近い黄褐色細砂ブロック 3% 含む S 151)
- 4 10YR2/3 黒褐色砂質シルトに 10YR5/4 に近い黄褐色ブロック状に 30% 含む (周溝 S 151)
- 5 10YR5/4 に近い黄褐色砂 (締まり悪い S 151)
※ S 150 > S 151
- 6 10YR3/4 増褐色砂質シルト (焼土粒状 3% 含む)
- 7 10YR4/4 褐色砂質シルト (10YR5/3 に近い黄褐色砂ブロック状に含む 焼土粒状に少量含む S 151 カマドか)

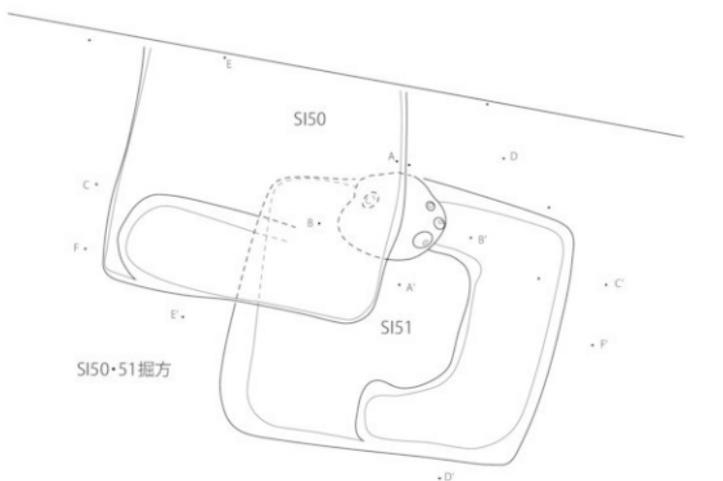
S 151 セクション



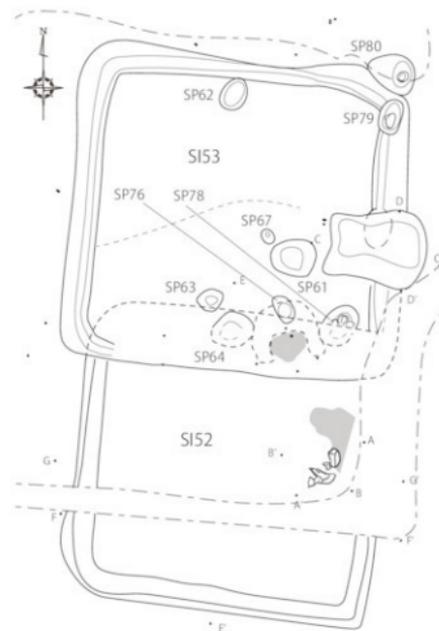
- 1 10YR4/4 褐色砂質シルト (S 150)
- 2 10YR3/4 増褐色砂質シルト (硬く締まる S 151)
- 3 10YR2/3 黒褐色砂質シルト (焼土粒状に少量含む 10YR5/4 に近い黄褐色細砂ブロック 3% 含む S 151)
- 4 10YR2/3 黒褐色砂質シルトに 10YR5/4 に近い黄褐色砂ブロック状に 30% 含む (周溝 S 151)



第38図 后畑西竪穴建物 S 150・51



第39図 后畑西竖穴建物 S150・S1

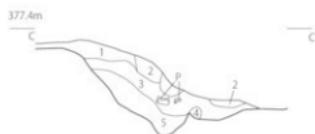
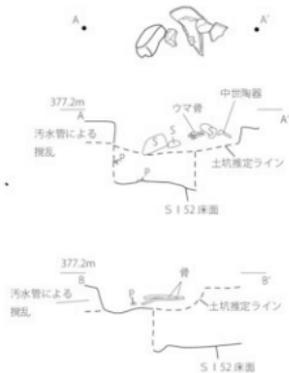


S152

- 1 10YR3/4暗褐色砂質シルト(硬く締まる ϕ 1~2mmの砂粒%含む土層堆積土1b層相当)
- 2 10YR3/4暗褐色砂質シルトに10YR4/6暗褐色粘粒ブロック状に7%含む
- 3 10YR3/3暗褐色砂質シルト
- 4 3.に10YR5/4にぶい黄褐色粘粒ブロック状に10%含む(雨漬)
- 5 10YR5/4にぶい黄褐色砂に10YR3/4暗褐色砂質シルトが30%混じる
- 6 10YR3/3暗褐色砂質シルト
- 7 10YR3/3暗褐色砂質シルトに7.5YRにぶい褐色しものとブロック状に30%含む、焼土ブロック10%含む(カマド痕跡か)

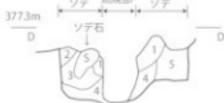


ツマ骨出土状況



S153 カマド

- 1 7.5YR3/3暗褐色砂質5mm焼土粒10%
- 2 7.5YR3/3暗褐色砂質シルト焼土ブロック50%
- 3 7.5YR3/4暗褐色砂質シルト10~30mm焼土ブロック10%
- 4 2.5YR6/4にぶい黄褐色砂質シル(地山がブロック状に混入したものと考えられる)
- 5 7.5YR3/3暗褐色砂質シルト 5~10mm焼土ブロック10%

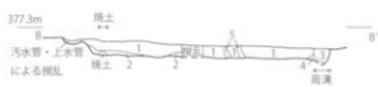
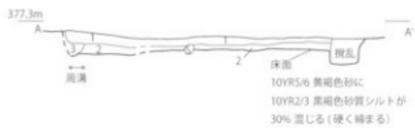
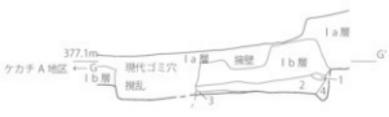
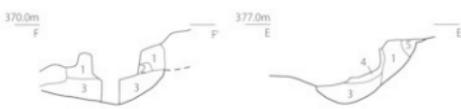
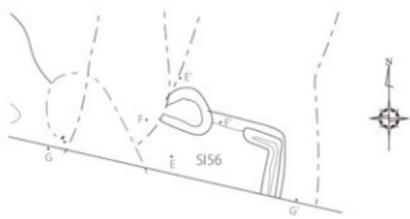


S153 カマド

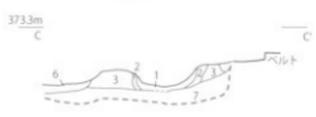
- 1 2.5YR4/6赤褐色 焼土
- 2 7.5YR4/3褐色砂質シルト1mm炭化物1%焼土粒7%5mm炭化粒1%
- 3 5YR4/3にぶい赤褐色砂質シルト5mm焼土粒7%5mm炭化粒1%
- 4 5YR4/3にぶい赤褐色砂質シルト5mm焼土粒2%50mm地山ブロック
- 5 2.5YR6/4にぶい黄褐色砂質シルト(地山を両側のソデに使っている)



第40図 后畑西竪穴建物 S152・53



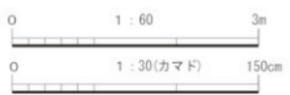
- S155
- 1 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (硬く締まる ϕ 1~2mm の砂礫 3% 含む 土層厚積 1b 層相当)
 - 2 10YR2/3 黒褐色砂質シルトに 10YR4/4 褐色砂ブロック状に 10% 含む
 - 3 10YR2/3 黒褐色砂質シルトに 10YR5/6 黄褐色砂をブロック状に 30% 含む締まり悪い (間溝)
 - 4 10YR5/6 黄褐色砂に 10YR2/3 黒褐色砂質シルトを 30% 含む
 - 5 10YR5/6 黄褐色砂ブロック



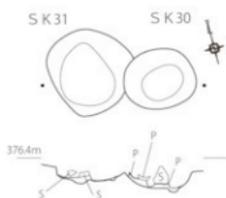
- S155 カマド
- 1 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト (黄土粒状に 10% 含む カマド増積土)
 - 2 5YR5/6 明赤褐色シルト (硬く締まる カマド内壁黄土層)
 - 3 10YR5/3 にふい黄褐色シルト (カマドソツ)
 - 4 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (黄土粒状に 3% 含む 床面)
 - 5 10YR3/3 暗褐色砂質シルト (締まり悪い黄土粒状 3% 含む 床下土)
 - 6 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (増積土)
 - 7 10YR5/6 黄褐色砂 (地山)

- S156 カマド
- 1 10YR4/4 褐色砂質シルトに 10YR 5 黄褐色粘土質シルトをブロック状に 7% 含む (カマドソツ)
 - 2 10YR5/4 にふい黄褐色シルト (ブロック土)
 - 3 7.5YR4/4 褐色砂質シルト
 - 4 3 に 5YR5/6 明赤褐色粘土質シルトをブロック状に 10% 含む (黄土層 火床)
 - 5 10YR4/6 褐色砂質シルト

- S156 壁地層
- 1b 層: 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (ϕ 1~2mm の砂礫 5% 含む)
 - 1 10YR5/6 黄褐色砂 (地山ブロック) ϕ 1b 層
 - 2 10YR3/3 暗褐色砂質シルト (増積土)
 - 3 10YR2/3 黒褐色砂質シルト 10YR5/4 にふい黄褐色シルト粒状に 5% 含む (増積土)
 - 4 10YR3/3 暗褐色砂に 10YR5/4 にふい黄褐色砂 30% (間溝)



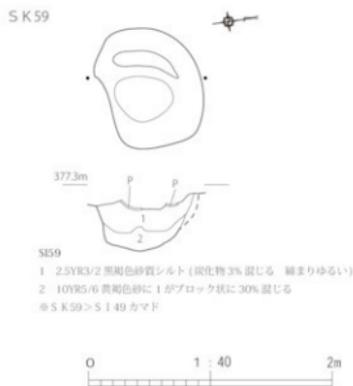
第41図 后畑西竪穴建物 S155・56



- SK32
- 1 10YR2/1 黒色砂質シルト (柱状か)
 - 2 10YR3/3 暗褐色砂質シルトに10YR6/3 にぶい黄褐色砂30%混じる (焼土、炭化物粒状に少量混じる)

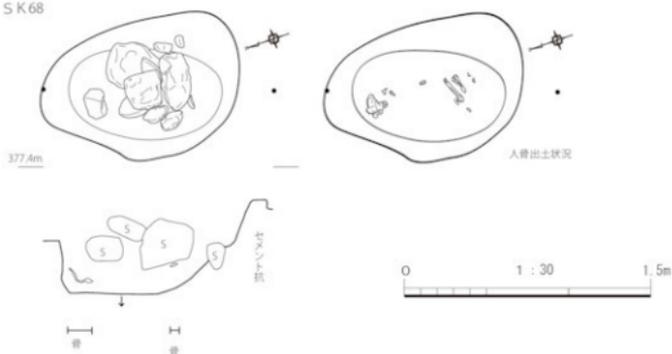


- SK47
- 1 10YR4/1 褐色砂質シルトに10YR5/6 黄褐色砂がブロック状に30%混じる

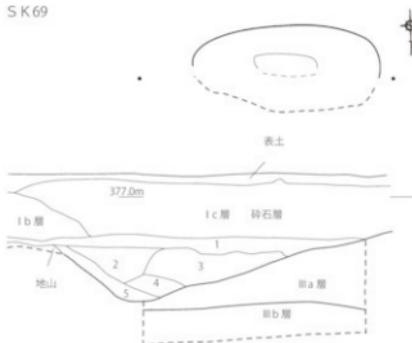


第42図 后畑西土坑 (1)

SK 68



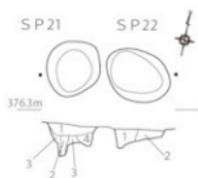
SK 69



SK69

- 1 10YR3/4 暗褐色砂質シルトにⅢa層 10%混じる(硬く締まる)
- 2 10YR4/4 暗褐色砂質シルトにⅢa層 10%混じる
- 3 10YR4/4 暗褐色砂質シルトにⅢa層 30%混じる
- 4 10YR5/4 に近い黄褐色砂質シルト
- 5 Ⅲa層に 10YR5/4 に近い黄褐色砂質シルト 10%混じる

地山 Ⅲa層: 10YR5/6 黄褐色砂質シルト(硬く締まる)
Ⅲb層: 2.5Y3/4 黄褐色砂にφ3~5cmの礫多く含む



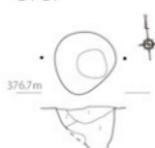
SP21

- 1 10YR3/1 黒褐色砂質シルト
- 2 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト(締まりゆるい)(柱面分)
- 3 10YR5/3 に近い黄褐色砂に 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト 10%混じる
- 4 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト

SP22

- 1 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルトに 10YR5/3 黄褐色砂ブロック状に 10%含む
- 2 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルトに 10YR5/3 黄褐色砂ブロック状に 10%含む

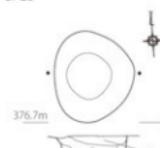
SP24



SP24

- 1 10YR2/1 黒色砂質シルト
- 2 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
- 3 1に 10YR5/3 に近い黄褐色砂 30%混じる

SP25

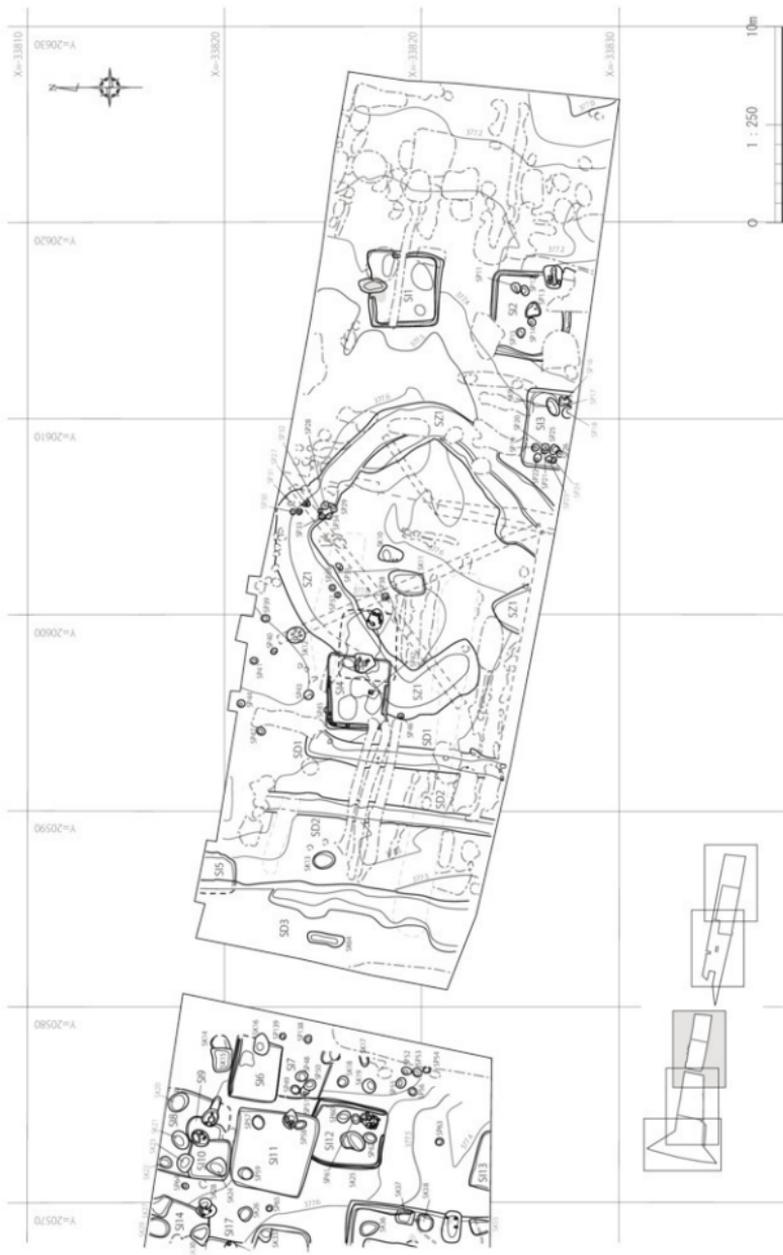


SP25

- 1 10YR2/1 黒色砂質シルト
- 2 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
- 3 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト



第 43 図 后畑西土坑 (2)



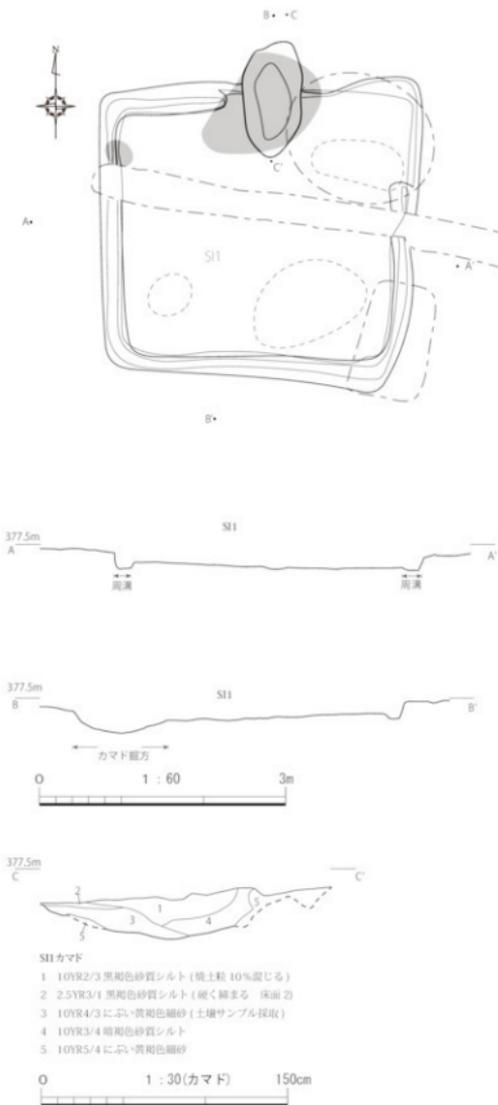
第44図 ケカ子遺跡D・E地区 遺構全体図



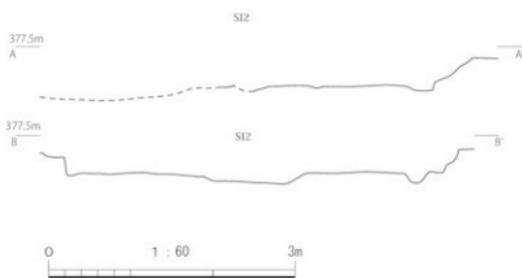
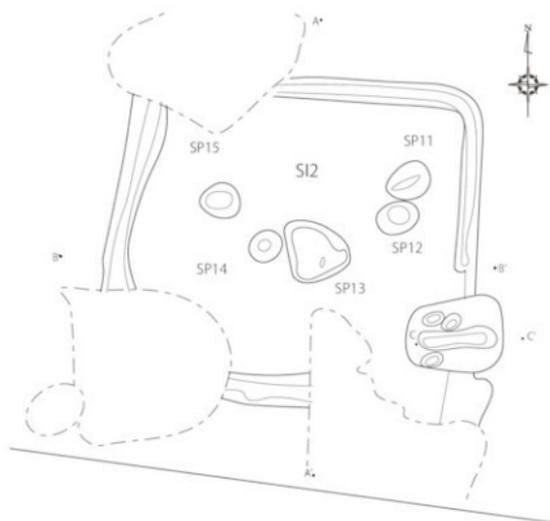
第45図 ケカ子遺跡F・G地区 遺構全体図



第 46 図 ケカ子遺跡 G 地区 遺構全体図



第47図 ケカチ竪穴建物 SI1

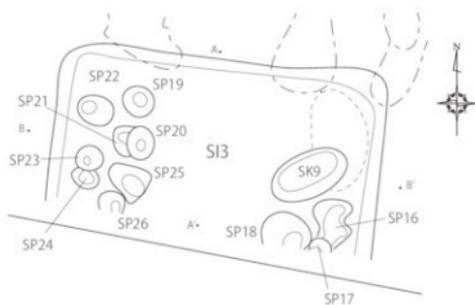


S12カマド

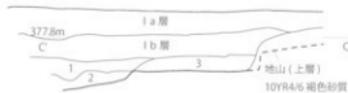
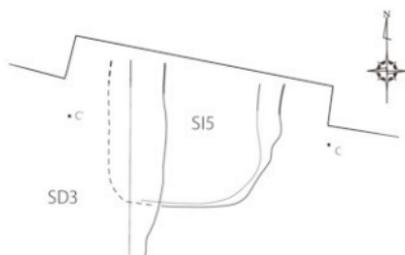
1 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルト (焼土10%含む 硬く締まる)



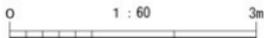
第48図 ケチ手竪穴建物 S12



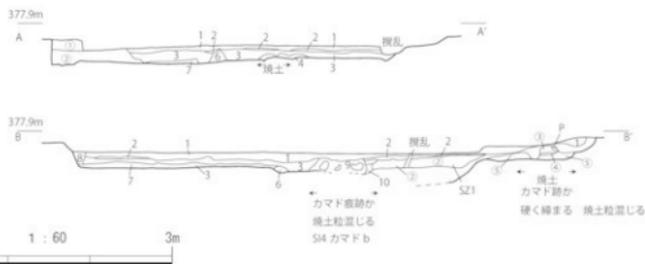
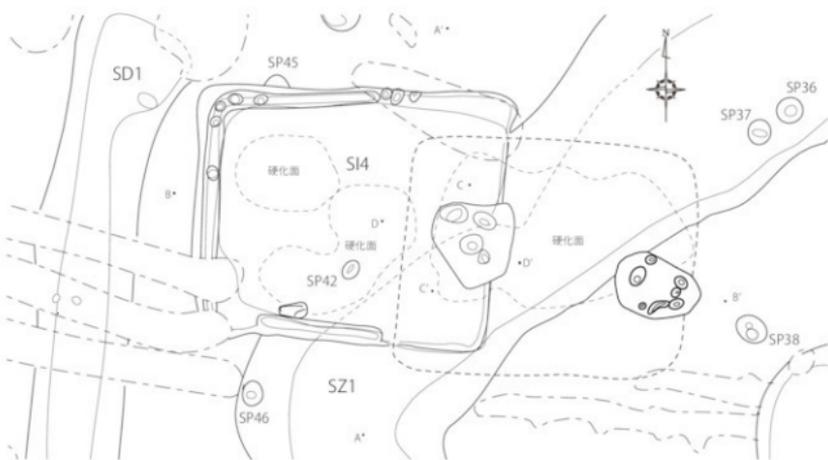
- S13
- 1 10YR3/4 褐色砂質シルト (細まりゆるい)
 - 2 地山に1が30%混じる
 - 3 10YR3/3 褐色砂質シルト
 - 4 10YR4/4 褐色砂質シルト (φ5 cm礫含む)



- S15
- 1 10YR5/3 に富み・黄褐色細砂 φ2 ~ 5 cm の礫多く含む 酸化鉄分 7% 混じる ④SD3
 - 2 10YR5/3 に富み・黄褐色細砂 φ2 ~ 5 cm の礫多く含む 酸化鉄分 互層状に 7% 混じる ④SD3 の底面
 - 3 10YR3/4 褐色砂質シルトに 10YR5/4 に富み・黄褐色砂質シルトが 30% 混じる (S15)
- 1a層: 耕作土 1b層: 10YR4/4 褐色砂質シルト (現代)



第49図 ケカチ竪穴建物 S13・5



S14

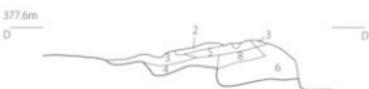
- 1 10YR3/3 暗褐色砂質シルト
- 2 10YR5/4 暗褐色砂質シルト (硬く締まる 堅床)
- 3 10YR2/3 黒褐色砂質シルト
- 4 10YR2/3 黒褐色砂質シルト (焼土粒状に7% 10YR5/4 に濃い黄褐色砂質シルト粒状に3%混じる 焼土層)
- 5 10YR2/3 黒褐色砂質シルト (焼土粒状に5% 10YR5/4 に濃い黄褐色砂質シルトブロック状に10%混じる)
- 6 10YR5/4 に濃い黄褐色砂質シルトに 10YR2/3 黒褐色砂質シルト 10%混じる
- 7 10YR2/3 黒褐色砂質シルトに 10YR5/4 に濃い黄褐色砂質シルト 10%混じる
- 8 10YR3/4 暗褐色砂質シルトに 10YR5/4 に濃い黄褐色砂質シルトブロック状に10%含む (薄層状)
- 9 10YR2/3 黒褐色砂質シルトに 7.5YR5/6 明褐色砂質シルトブロック 焼土 炭化物含む(カマド)
- 10 10YR3/4 暗褐色砂質シルト

SZ1 埋土

- ① 10YR2/2 黒褐色砂質シルト
- ② 10YR2/3 黒褐色砂質シルトに 10YR5/6 黄褐色細砂ブロック状に10%混じる

S14 カマド a

- ③ 7.5YR4/4 褐色砂質シルト (焼土粒少混入する 塊状土)
- ④ 5YR5/8 明赤褐色砂質シルト (硬く締まる 焼土層)
- ⑤ 10YR4/6 褐色砂質シルト (断面)

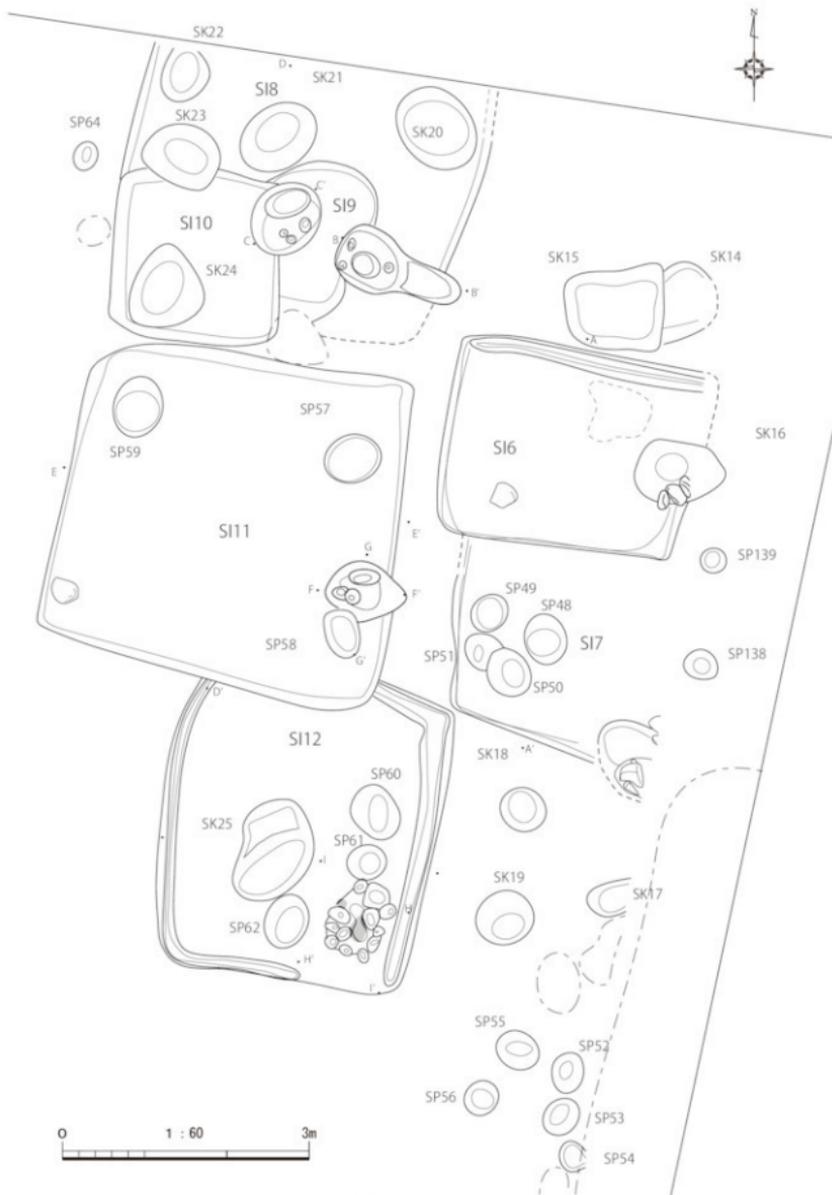


0 1:30(カマド) 150cm

S14カマドb

- 1 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルト
- 2 5YR5/8 明赤褐色砂質シルト (硬く締まる 焼土) ※天井部崩壊か
- 3 7.5YR3/1 黒褐色砂質シルトに2がブロック状に10%混じる
- 4 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルトに2が粒状に7%混じる
- 5 7.5YR5/6 明褐色砂質シルト (焼土層)
- 6 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト
- 7 7.5YR4/6 褐色砂質シルト (カマドソデ)
- 8 6に2がブロック状に30%混じる

第50図 ケチ子竈穴建物 S14



第51図 ケチ堅穴建物 S16~12



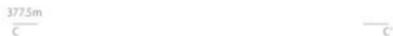
S16・7

- 1 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土が 30% 含む 炭化物 2% 含む
- 2 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土が 20% 10YR2/3 黒褐色土 10% 含む 炭化物 2% 含む シルト質土 締まりあり 粘性あり



S18・9

- 1 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/4 褐色土 5% 含む 焼土粒 5% 炭化物 5% 含む 締まりやや強い 粘性やや強い シルト質土 S19 カマド覆土
- 2 10YR4/4 褐色土に 焼土粒 30% 炭化物 2% 含む 締まりあり 粘性やや強い シルト質土 S19 カマド覆土
- 3 10YR3/4 暗褐色土に 10YR3/3 暗褐色土 10% 含む 焼土粒を 10% 炭化物を 3% 含む 締まりやや強い 粘性あり シルト質土 S18 カマド覆土
- 4 10YR3/4 暗褐色土に 10YR2/2 黒褐色土が 30% 含む 焼土粒 2% 炭化物 3% 含む 締まりあり 粘性あり シルト質土 S18 カマド覆土
- 5 10YR4/6 褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 5% 含む 締まりあり 粘性あり シルト質土 S18 カマド覆土
- 6 10YR4/6 褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 20% 含む 焼土粒 5% 炭化物 2% 含む 締まりあり 粘性あり シルト質土 S19 カマド覆土



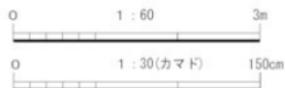
S10 カマド

- 1 10YR4/4 褐色土に 10YR3/4 暗褐色土が 20% 含まれる ϕ 1cm 大の小礫を 10% 含む 焼土粒 2% 炭化物 2% 含む 締まりあり 粘性やや強い シルト質土



S18 ~ 11

- 1 10YR3/3 暗褐色土に 10YR3/2 黒褐色土を 10% 含む 炭化物 2% 白色粒 5% ϕ 0.5cm 以下の小礫を微量に含む 締まりあり 粘性弱い
- 2 10YR4/4 褐色土に 10YR3/4 暗褐色土を 30% 含む 白色粒を 5% 含む 締まりあり 粘性弱い
- 3 10YR2/2 黒褐色土に 10YR3/4 暗褐色土を 30% 含む 白色粒を 5% 含む 締まりやや強い 粘性やや強い

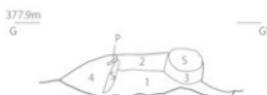


第52図 ケカチ竈穴建物 S16~12



S11 カマド

- 1 10YR3/3 暗褐色土に焼土粒 30% 含む
締まりやや弱い、粘性やや弱い
- 2 10YR3/3 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 5% 含む 焼土粒 20% 含む
締まりあり 粘性あり



S11 カマド

- 1 10YR3/3 暗褐色土に焼土粒 30% 含む 締まりやや弱い 粘性やや弱い
- 2 10YR3/3 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 5% 含む 焼土粒 20% 含む 締まりあり 粘性あり
- 3 10YR4/3 褐色土に φ0.2cm 以下の小礫を多く含む 締まりなし 粘性なし
- 4 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土が 10% 含む 焼土粒 40% 炭化物を微量に含む
締まりあり 性やや弱い



S12 カマド

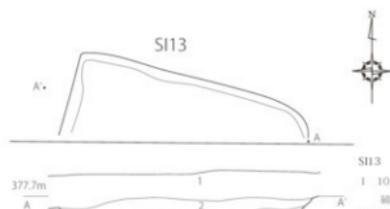
- 1 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 30% 含む 焼土粒 5% 炭化物 3% 含む
締まりあり 粘性弱い
- 2 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 40% 含む 白色粒 5% 含む 締まりあり 粘性なし
シルト質土 S 19 カマド覆土
- 3 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 30% 含む 白色粒 5% 含む
締まりあり 粘性なし
- 4 10YR3/4 暗褐色土に 10YR2/2 に黒褐色土が 20% 含む 焼土粒 20% 含む 白色粒 5% 含む
締まり弱い 粘性弱い



S12



第53図 ケカチ竪穴建物 S 16 ~12



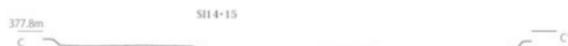
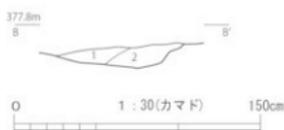
SI13

- 1 10YR2/3 黒褐色土に 10YR4/6 褐色土 5% 含む
 締まり強い 粘性やや弱い
- 2 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 10% 含む 締まりやや弱い 粘性あり
- 3 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 30% 含む 10YR5/6 黄褐色土 10% 含む
 白色粒子を微量に含む 締まりあり 粘性あり
- 4 10YR4/6 褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 10% 10YR5/6 黄褐色土 20% 含む 白色粒子を微量に含む
 締まりあり 粘性あり



SI14カマド

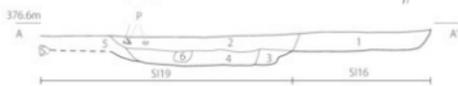
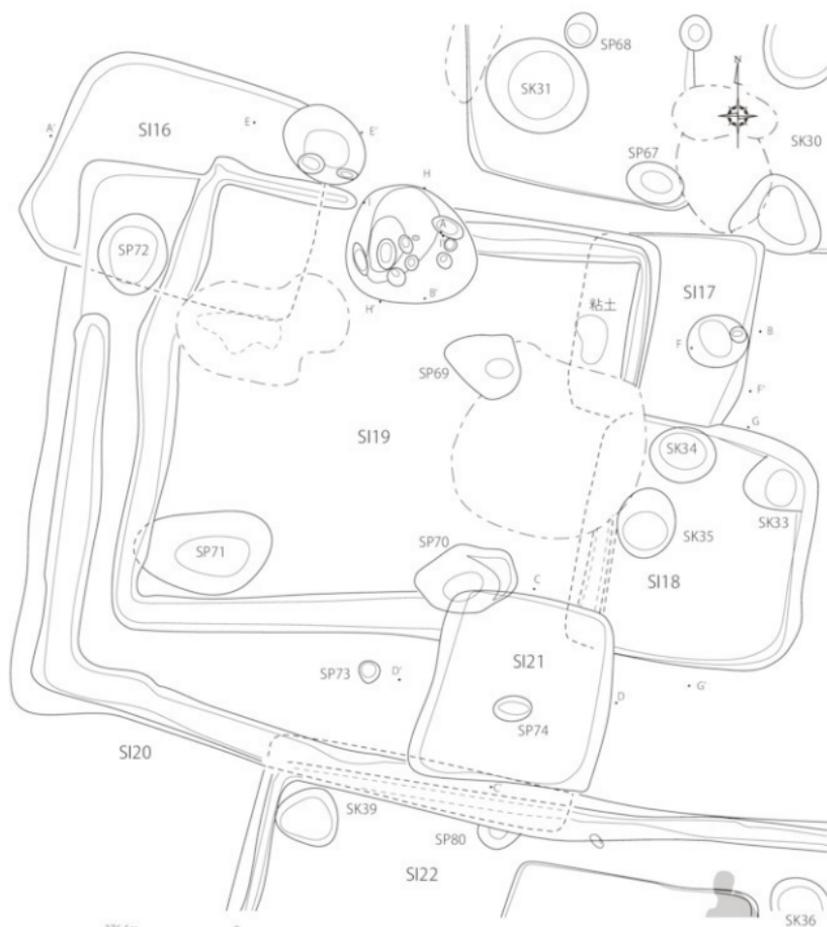
- 1 10YR4/4 褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 20% 焼土粒 30% 含む
 締まりあり 粘性あり
- 2 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 10% 焼土粒 3% 含む
 締まりやや弱い 粘性あり



SI15

- 1 10YR2/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土を 20% 含む
 炭化物を 2% 含む 締まりあり 粘性あり
- 2 10YR4/6 褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 30% 含む
 締まりあり 粘性弱い

第54図 ケカチ堅穴建物 S 113・14・15



SI16

- 1 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 20% 白色粒子 5% 炭化物 2% 含む
締まり強い 粘性やや強い (SI16)
- 2 10YR3/4 暗褐色土に 10YR3/2 黒褐色土 10% 白色粒子 5% 炭化物 2%
粘土粒 2% 含む 締まり強い 粘性やや強い (SI19)
- 3 10YR4/6 褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 30% 含む 締まり強い 粘性やや強い (SI19)
- 4 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 20% 含む 締まり強い 粘性やや強い (SI19)
- 5 10YR4/3 に近い黄褐色土に焼土粒 2% 含む 締まり強い 粘性あり (SI19)
- 6 10YR4/4 褐色土に 10YR5/6 黄褐色土 5% 含む 締まりあり 粘性あり (SI19)



第55図 ケカチ竪穴建物 S I 116~21



SI17-19

- 1 10YR3/4暗褐色土に10YR4/6褐色土を5%含む 締まりあり 粘性あり
- 2 10YR3/4暗褐色土に10YR4/6褐色土10%含む 白色粒3%含む 締まりあり 粘性あり
- 3 10YR3/3暗褐色土に10YR4/6褐色土10%含む 焼土粒を5%含む 締まりあり 粘性あり



SI21

- 1 10YR3/4暗褐色土に10YR4/6褐色土10%含む 炭化物3%含む 締まりあり 粘性あり
- 2 10YR3/4暗褐色土に10YR4/6褐色土30%含む 締まりあり 粘性あり



SI16 カマド

- 1 10YR3/4暗褐色土に焼土粒30%含む 白色粒子を2%含む 炭化物3%含む 締まりあり 粘性あり
- 2 10YR3/4暗褐色土に10YR4/6褐色土10%含む 締まりあり 粘性やや弱い



SI17 カマド

- 1 10YR3/4暗褐色土に10YR4/6褐色土20%含む 焼土粒2%含む 炭化物2%含む 締まりあり 粘性やや弱い
- 2 10YR3/1暗褐色土に焼土粒40%含む 炭化物1%含む 締まりあり 粘性弱い
- 3 10YR3/4暗褐色土に10YR4/6褐色土10%含む 締まりあり 粘性やや弱い
- 4 10YR3/4暗褐色土に10YR5/6黄褐色土3%含む 白色粒を微量に含む 締まりあり 粘性やや弱い

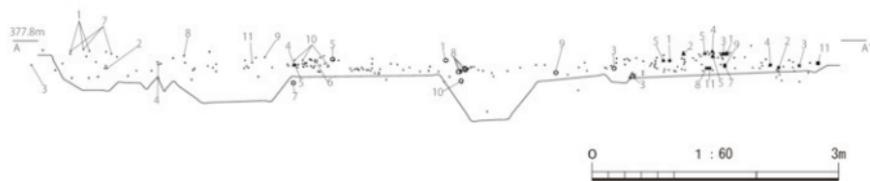
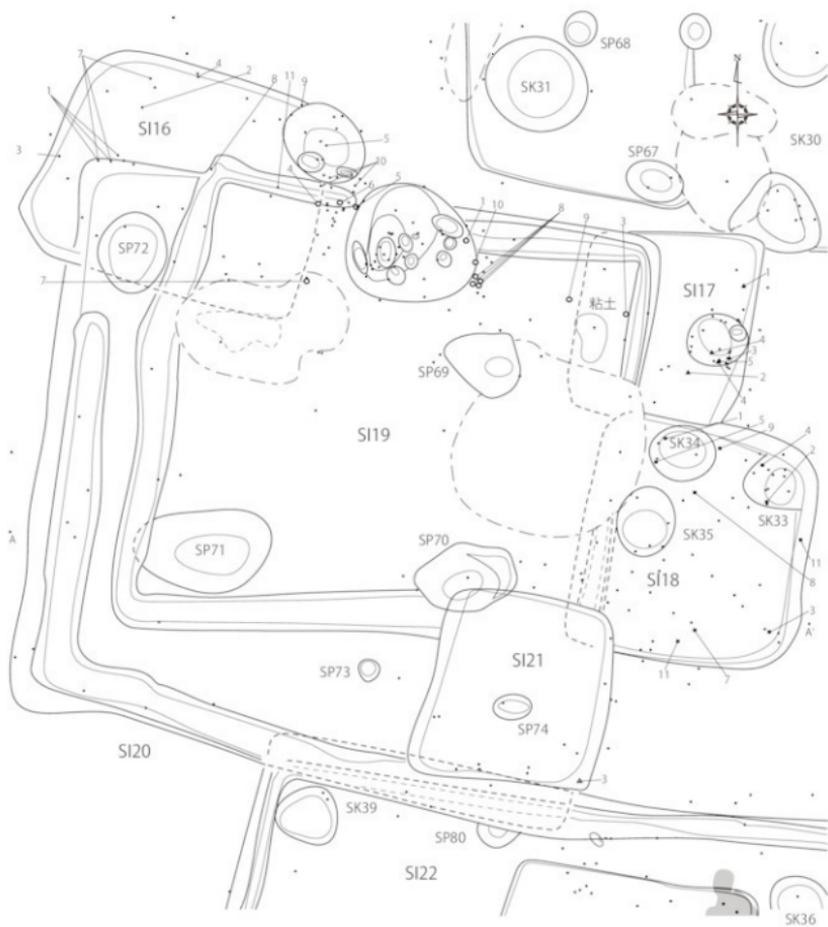


SI19 カマド

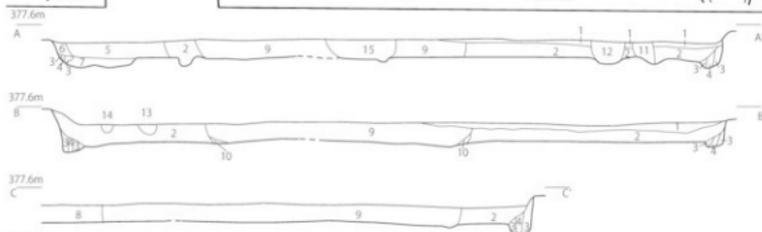
- 1 2.5YR3/3暗オリーブ褐色土に焼土粒2% 炭化物1% 白色粒2%含む 締まりあり 粘性あり
- 2 2.5YR3/3暗オリーブ褐色土に焼土粒20% 炭化物1% 白色粒2%含む 締まりあり 粘性あり
- 3 2.5YR3/3暗オリーブ褐色土に10YR3/4暗褐色土20% 10YR4/6褐色土5% 焼土粒30% 白色粒子3%含む 締まりあり 粘性あり
- 4 10YR3/4暗褐色土に焼土粒20% 炭化物3%含む 締まりやや弱い 粘性あり
- 5 10YR6/2灰黄褐色灰 灰層 締まりあり 粘性なし
- 6 7.5YR3/4暗褐色土に焼土粒40%含む 締まりやや弱い 粘性やや弱い
- 7 10YR3/4暗褐色土に10YR4/6褐色土5% 焼土粒5% 白色粒2%含む 締まりあり 粘性あり
- 8 2.5YR4/6オリーブ褐色土 締まりあり 粘性弱い カマド底部
- 9 10YR4/6褐色土に10YR3/4暗褐色30%含む 締まりあり 粘性弱い



第56図 ケカチ竪穴建物 S116~21



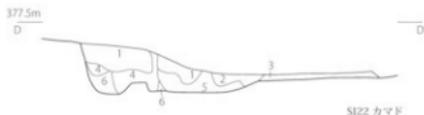
第57図 ケカチ竪穴建物 S 116~21



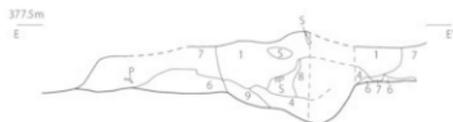
SI22・23

- | | |
|--|--|
| <p>1 10YR2/3 黒褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 40% 含む 締まりあり 粘性やや弱い</p> <p>2 10YR3/3 暗褐色土に 10YR3/2 黒褐色土 30% 含む 白色粒子を 3% 含む 締まりあり 粘性やや弱い</p> <p>3 10YR4/4 褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 40% 含む 締まりあり 粘性やや弱い</p> <p>4 10YR3/4 暗褐色土に 10YR2/2 に黒褐色土 5% 含む 締まりやや弱い 粘性やや弱い</p> <p>5 2.5YR4/3 オリーブ褐色土に 10YR6/6 明黄褐色土 20% 含む 白色粒子 2% 焼土粒 1% 含む 締まり強い 粘性強い 粘土層</p> <p>6 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/4 褐色土 30% 含む 締まりあり 粘性あり</p> | <p>7 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土を 10% 含む 締まりやや弱い 粘性やや弱い</p> <p>8 10YR2/3 黒褐色土に 10YR3/4 に暗褐色土が 30% 含む 焼土粒 1% 炭化物 1% 含む 締まりあり 粘性あり</p> <p>9 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土が 30% 含む 白色粒子 5% 焼土粒 2% 炭化物 2% 含む 締まりあり 粘性あり</p> <p>10 10YR4/6 暗褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 30% 含む 締まりあり 粘性やや弱い</p> <p>11 10YR2/3 黒褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 20% 含む 白色粒子 2% 含む 締まりあり 粘性あり</p> <p>12 10YR2/3 黒褐色土に 10YR3/4 暗褐色土が 30% 含む 締まり強い 粘性やや弱い</p> <p>13 10YR2/3 黒褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 40% 含む φ1cm 程度の小礫を微量含む 締まり強い 粘性あり</p> <p>14 10YR2/3 黒褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 10% 含む 炭化物 1% 含む 締まりあり 粘性あり</p> |
|--|--|

第58図 ケカチ堅穴建物 S 1 22・23



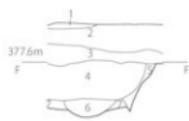
- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色土に焼土粒 20% 含む 締まりあり 粘性強い 粘土層
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色土に 燃焼ブロックを 30% 含む 炭化物を 5% 含む 締まりあり 粘性強い
- 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色土に 10YR5/8 黄褐色土を 5% 含む 燃焼粒 2% 炭化物 2% 含む 締まりあり 粘性強い 粘土層
- 4 10YR3/4 暗褐色土に焼土粒 30% 含む 締まりあり 粘性あり
- 5 焼土ブロックに 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土を 10% 含む 炭化物を微量に含む 締まりあり 粘性あり
- 6 10YR5/6 黄褐色土に焼土粒 3% 含む 締まりあり 粘性弱い



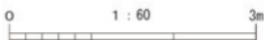
- 7 2.5Y4/3 オリーブ褐色土に炭化物を 2% 含む 締まり強い 粘性強い 粘土層
- 8 7.5YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 5% 含む 焼土ブロックを 40% 含む 炭化物 2% 含む 締まりあり 粘性あり
- 9 10YR3/4 暗褐色土に 2.5Y4/4 オリーブ褐色土を 20% 焼土粒を 10% 含む 締まりあり 粘性あり



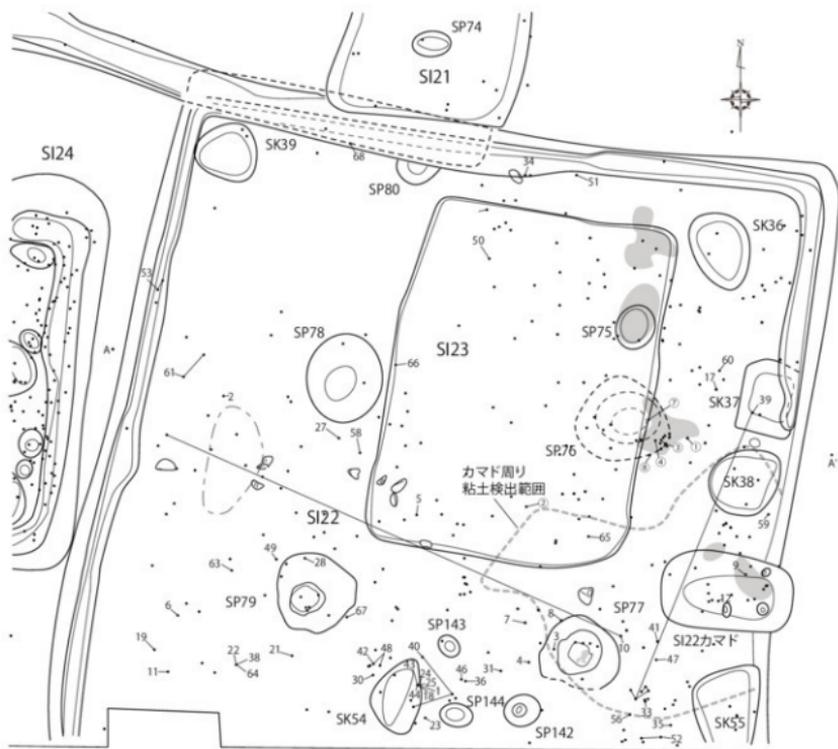
- 1 10YR3/3 暗褐色土に焼土粒 20% 含む 締まりやや強い 粘性あり
- 2 10YR3/3 暗褐色土に焼土粒 3% 含む 締まりあり 粘性あり
- 3 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土を 30% 含む 炭化物を 2% 含む 締まりあり 粘性あり
- 4 10YR4/6 褐色土に 10YR3/4 暗褐色土を 10% 含む 締まりあり 粘性やや弱い



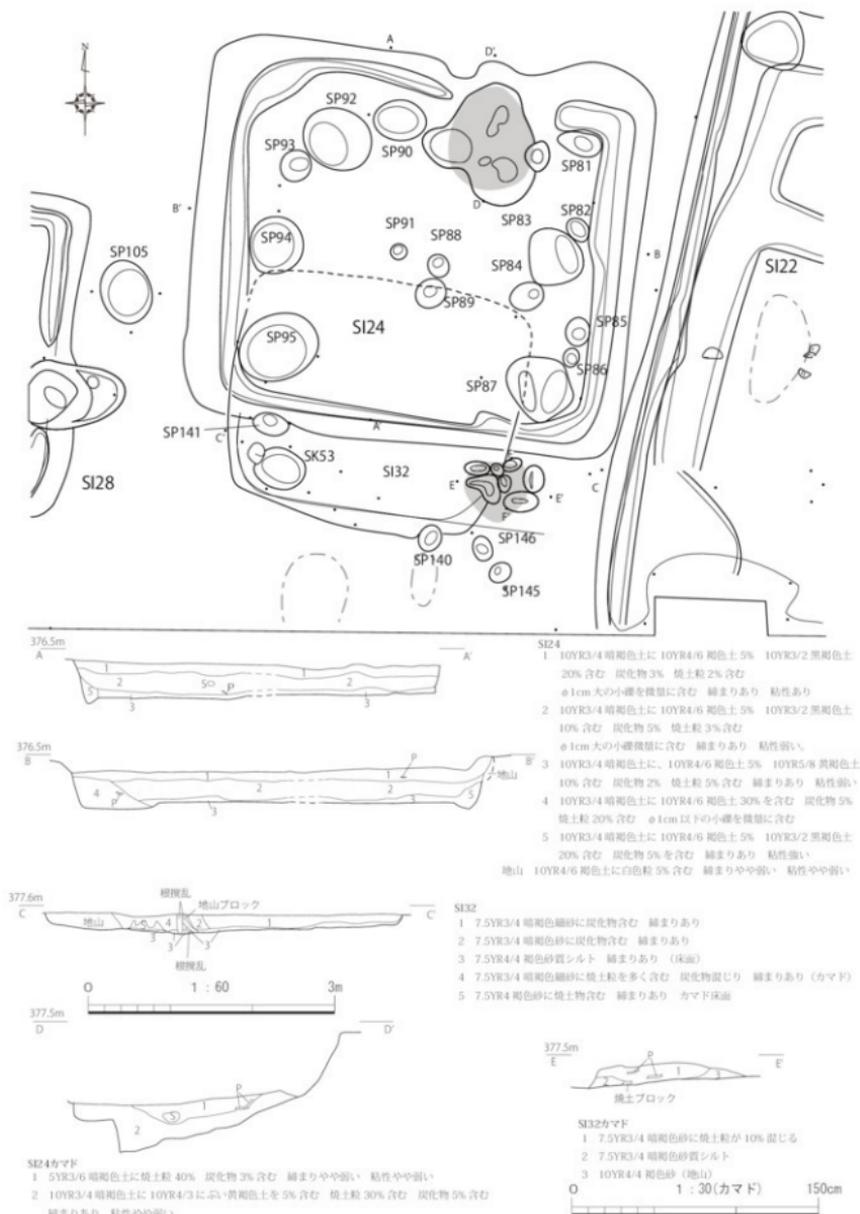
- 1 10YR5/4 に 2.5Y 黄褐色土に 6YR3/4 暗褐色土 10% 含む 締まり弱い 粘性弱い
- 2 10YR3/2 黒褐色土に炭化物を微量に含む 締まりあり 粘性あり
- 3 10YR3/2 黒褐色土に 10YR3/4 暗褐色土を 30% 含む 締まりやや強い 粘性あり
- 4 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土を 10% 含む 炭化物を 2% 含む 締まりあり 粘性あり
- 5 10YR4/6 褐色土に 10YR3/4 暗褐色土を 30% 含む炭化物を微量に含む 締まりやや強い 粘性あり
- 6 10YR3/4 暗褐色土に 10YR5/8 黄褐色土を 20% 含む 締まりあり 粘性強い
- 7 10YR5/8 黄褐色土に 10YR3/4 暗褐色土を 5% 含む 締まりあり 粘性弱い



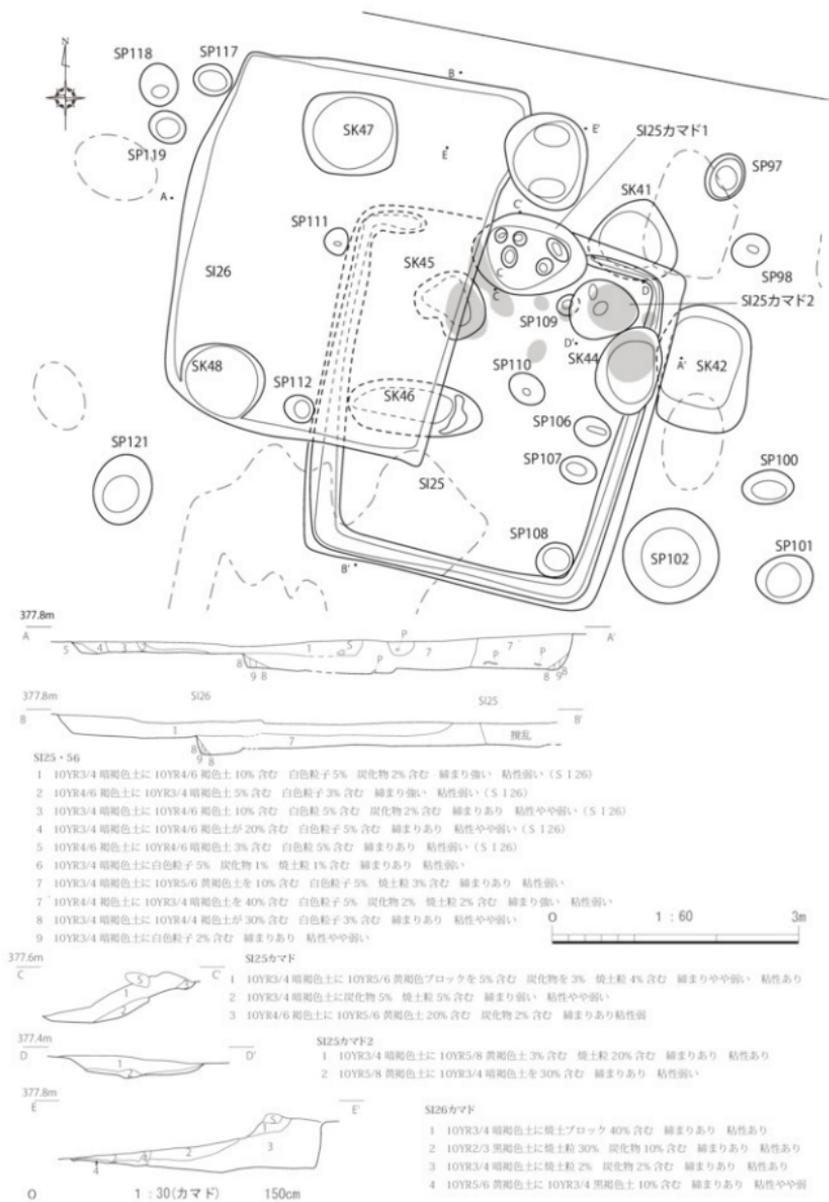
第59図 ケカチ竪穴建物 S 122・23



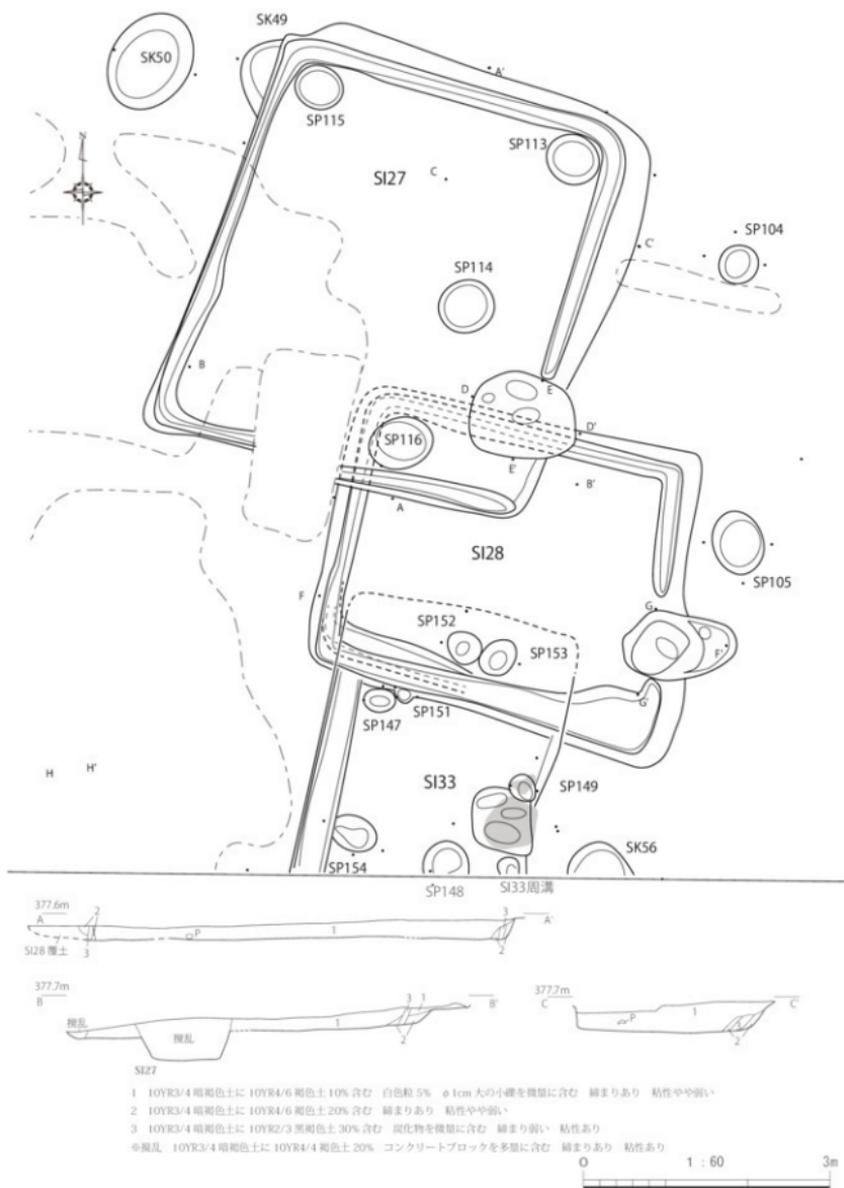
第60図 ケチ竪穴建物 S122・23



第61図 ケチ子堅穴建物 S124・32



第63図 ケカチ竪穴建物 S 125・26



第64図 ケカチ竪穴建物 S 127・28・33

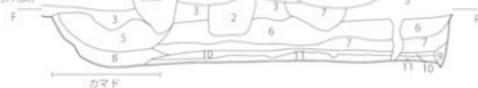
377.7m



377.5m



377.6m



S128

- 1 10YR3/2 黒褐色土に炭化物を微量に含む 締まりあり 粘性あり
- 2 10YR3/3 暗褐色土に炭化物を3%含む 締まりやや弱い 粘性あり
- 3 10YR3/2 黒褐色土に10YR3/4 暗褐色土を30%含む。炭化物を微量に含む。締まりやや弱い。粘性あり
- 4 10YR3/1 黒褐色土に炭化物を2%含む 締まりやや弱い 粘性あり
- 5 10YR3/3 暗褐色土に10YR4/4 褐色土を30%含む 焼土粒を10%含む 炭化物を5%含む 締まりあり 粘性あり
- 6 10YR3/4 暗褐色土に10YR4/4 褐色土を30%含む 焼土粒を3% 炭化物を2%含む 締まりあり 粘性あり
- 7 10YR3/3 暗褐色土に焼土粒を2% 炭化物を2%含む 締まりあり 粘性あり
- 8 7.5YR3/4 暗褐色土に10YR3/6 黄褐色土を20%含む 焼土粒を30% 炭化物を5%含む 締まりあり 粘性やや弱い
- 9 10YR3/4 暗褐色土に10YR4/4 褐色土を10%含む 締まりあり 粘性あり
- 10 10YR4/6 褐色土に10YR5/4 暗褐色土を5%含む 締まり強い 粘性あり
- 11 10YR5/6 黄褐色土に10YR3/4 暗褐色土を5%含む 締まりあり 粘性あり

377.3m



377.4m



S127 カマド

- 1 10YR3/4 暗褐色土に焼土粒30%含む 炭化物10%含む。締まり弱い 粘性あり
- 2 10YR4/6 褐色土に焼土ブロック40%含む 炭化物3%含む 締まりあり 粘性やや弱い
- 3 10YR3/4 暗褐色土に10YR4/6 褐色土5%含む 締まりやや弱い 粘性あり
- 4 10YR4/4 褐色土に10YR5/8 黄褐色土5% 10YR3/4 暗褐色土10%含む 炭化物3%含む S128 覆土
- 5 10YR4/4 褐色土に10YR3/4 暗褐色土30% 10YR5/6 黄褐色土5% 炭化物3% 焼土粒2%含む 締まり強い 粘性強い

S128 カマド

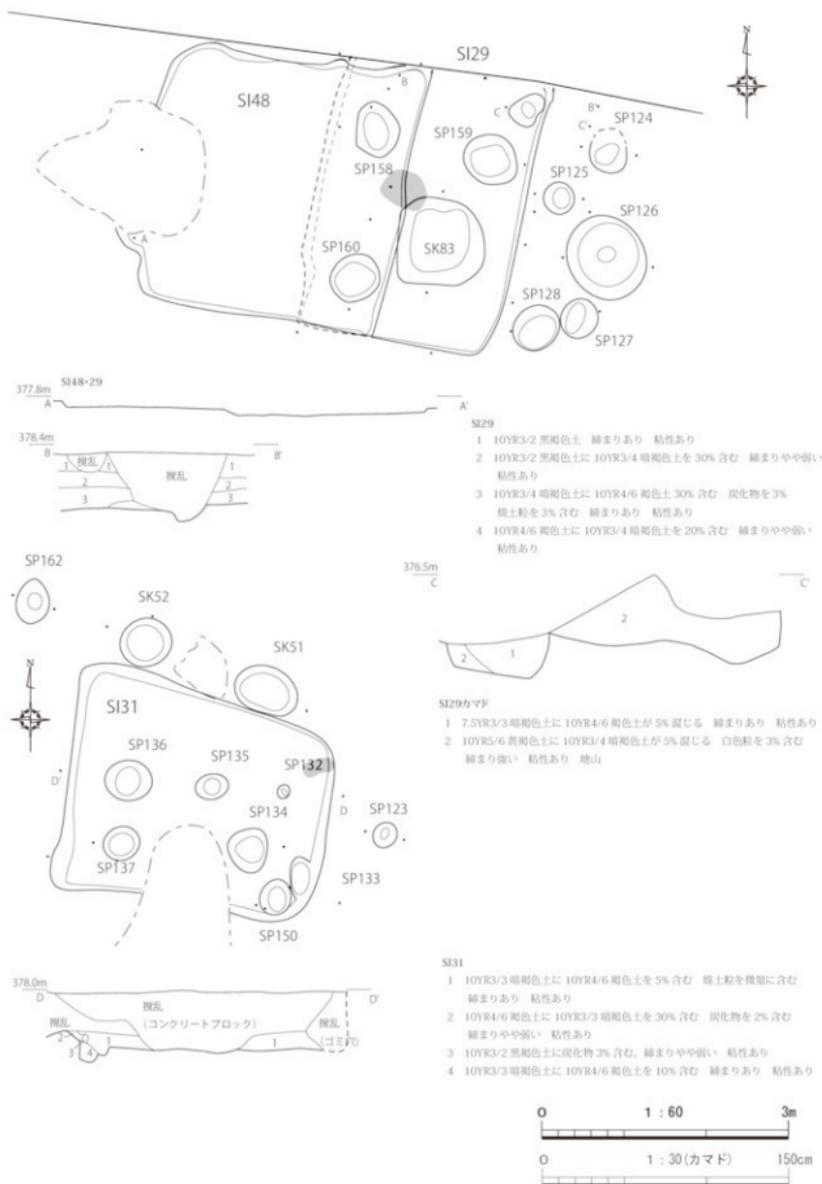
- 1 10YR3/4 暗褐色砂質シルトに焼土粒が5%混じる 締まり悪い
- 2 7.5YR4/6 褐色砂質シルトに焼土粒が30%混じる 締まり悪い
- 3 10YR4/6 暗褐色砂質シルトに焼土粒が30%混じる
- 4 10YR4/4 褐色細砂に焼土粒が5%混じる
- 5 10YR4/6 褐色細砂

S128・33

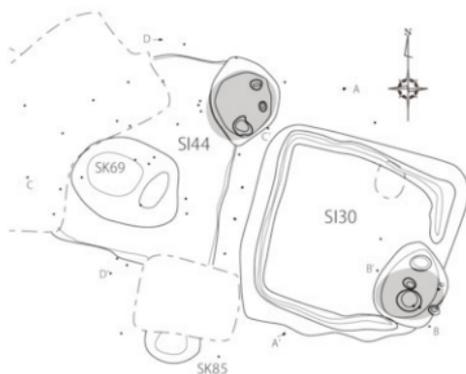
- 1 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルト(焼土粒が2%混じる S128 堆積土)
- 2 7.5YR3/2 黒褐色砂質シルトに7.5YR3/4 暗褐色砂質シルトが10%混じる 締まり悪い (S128 覆土)
- 3 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルトに10YR4/4 褐色砂が5%混じる (S1 覆土)
- 4 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルトに7.5YR3/2 黒褐色砂質シルトが5%混じる (S128 覆土)
- 5 10YR3/4 暗褐色砂質シルトに10YR4/4 褐色砂質シルトが5%混じる 炭化物が2%混じる (S133 堆積土)



第65図 ケカチ竪穴建物 S127・28・33



第66図 ケカチ竪穴建物 S 129・48・31



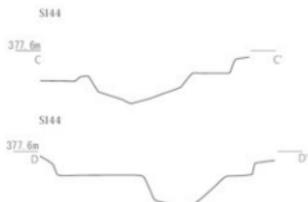
SI30

- 1 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 20% 含む 白色粒子 10% 炭化物 3% 含む 締まり強い 粘性強い
- 2 10YR4/4 褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 20% 含む 白色粒子 10% 含む 締まり強い 粘性強い

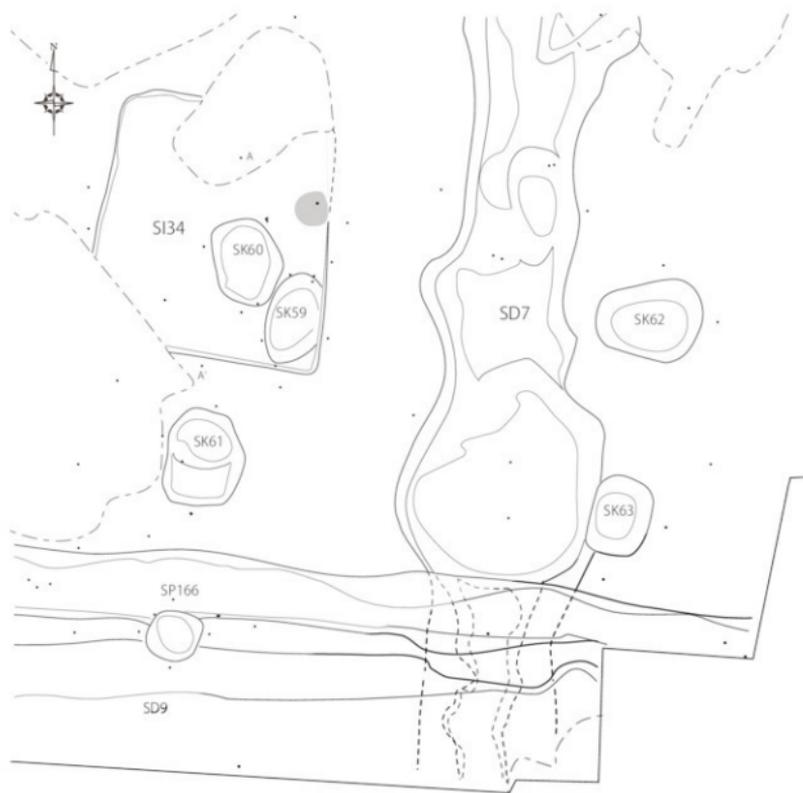


SI30カマド

- 1 10YR3/3 暗褐色土に 焼土粒 5% 炭化物 2% 含む 締まり強い 粘性あり
- 2 10YR2/3 黒褐色土に ϕ 1cm 以下の焼土ブロックを 3% 含む 炭化物を 2% 含む 締まりやや強い 粘性あり
- 3 10YR2/3 黒褐色土に 10YR4/6 褐色土 10% 含む 焼土粒 3% 炭化物 2% 含む 締まり強い 粘性あり
- 4 10YR4/4 褐色土に 白色粒子 3% 含む 締まり強い 粘性あり



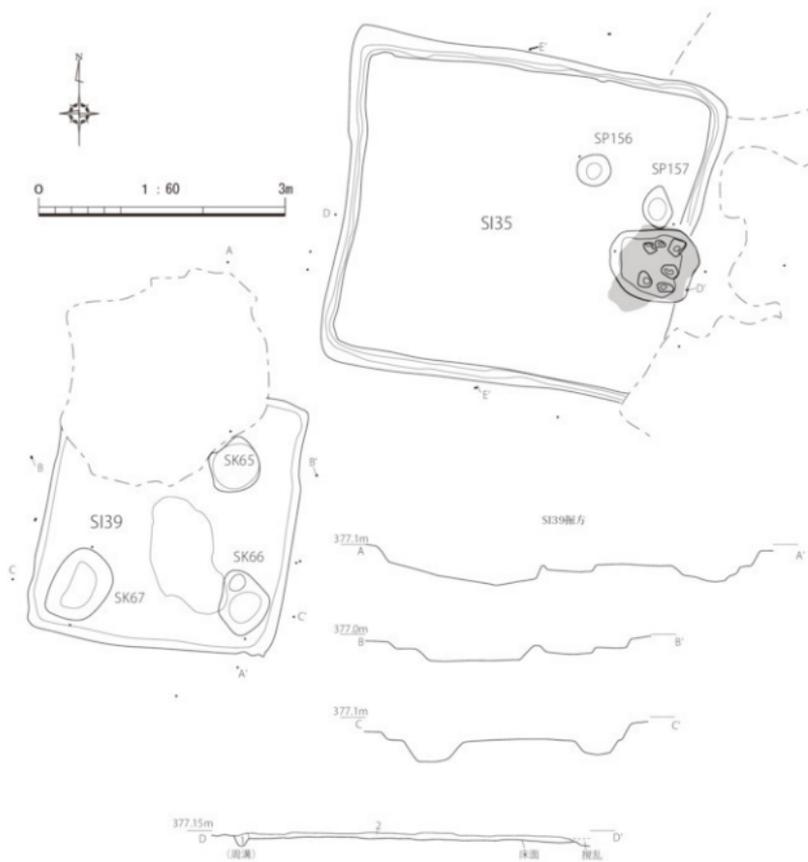
第67図 ケカチ竪穴建物 S I 30・44



SI34
1 10YR3/4 暗褐色砂質シルト (Φ1mmの砂礫 焼土粒上に少量混じる)



第68図 ケカチ竪穴建物 S I 34

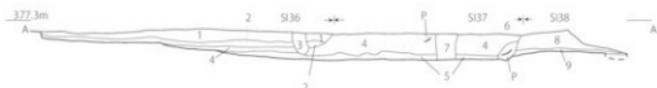
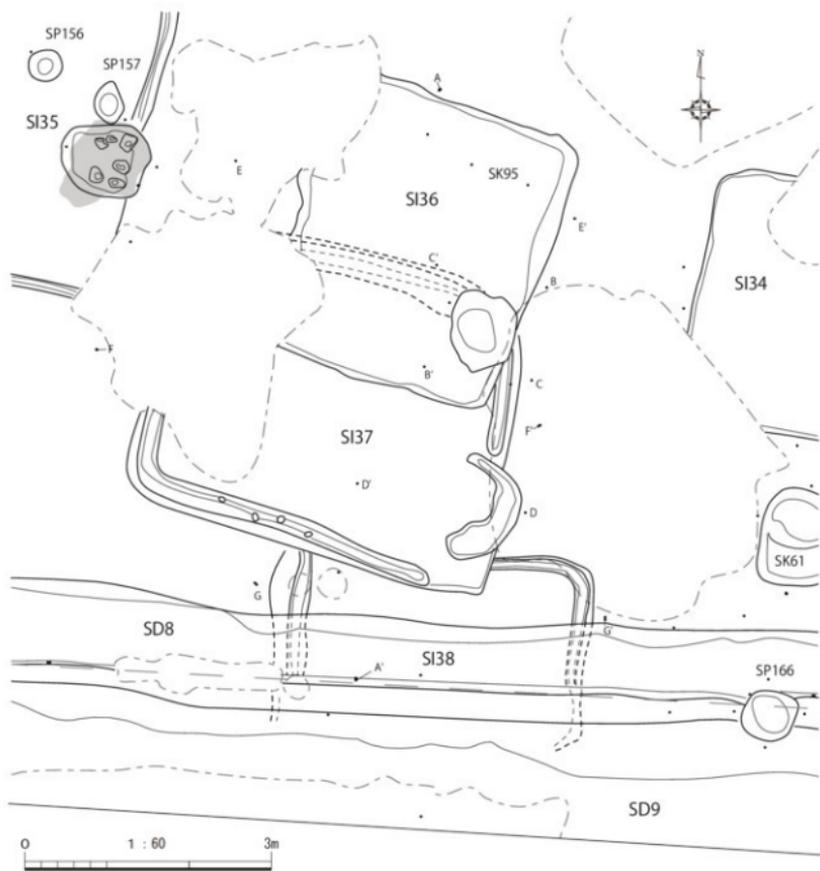


- SI35
- 1 7.5YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 10%混じる
 - 2 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 30%混じる (跡まる 床面)



- SI35
- 1 10YR3/4 暗褐色砂
 - 2 0YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 30%混じる (跡まる) 床面
 - 3 10YR3/4 暗褐色砂に炭化物が散在に混じる 跡まり混、(SI36 周溝)
 - 4 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 10%混じる (SI36 周溝)

第69図 ケカチ竪穴建物 S I 35・39

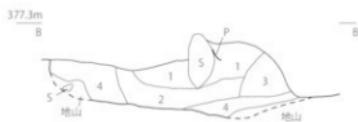


SI36・37・38

- 1 10YR3/4 暗褐色砂 小礫が混じる (SI36 堆積土)
- 2 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が5%混じる 小礫が混じる 締まる SI36 床面 (SI36 堆積土)
- 3 10YR3/4 暗褐色砂 小礫・土粒・炭化物が混じる SI36 周溝か (SI36 堆積土)
- 4 7.5YR3/4 暗褐色砂に 10YR3/2 黒褐色砂が10%混じる 小礫・焼土粒が混じる (SI37 堆積土)
- 5 10YR3/2 黒褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が5%混じる 締まる SI37 床面 (SI37 堆積土)
- 6 10YR3/3 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が3%混じる 炭化物を微細に含む 締まりゆるい SI37 周溝 (SI37 堆積土)
- 7 10YR3/4 暗褐色砂 炭化物・焼土粒が微細に混じる (ピット)
- 8 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂がロックが混じる 小礫・焼土粒が微細に混じる (SD8 堆積土)
- 9 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が10%混じる 締まる (SI38 堆積土)

地山 10YR4/6 褐色砂 (サブトレンチ)

第70図 ケカチ堅穴建物 S 136・37・38



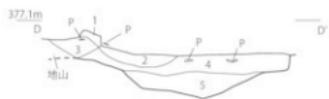
SI36 カマド

- 1 7.5YR3/4 暗褐色砂 焼土粒 10%、炭化物 3%混じる (カマド崩壊土)
- 2 10YR3/4 暗褐色砂 焼土粒・炭化物が微量に混じる (カマド崩壊土)
- 3 7.5YR3/4 暗褐色砂に小礫混じる (カマドソデ構築材)
- 4 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/4 褐色砂 10% 小礫混じる (SI37 埋戻土)
- 地山 10YR4/6 褐色砂



SI37 カマド

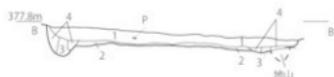
- 1 7.5YR3/4 暗褐色砂に焼土粒が微量に混じる (カマド崩壊土)
- 2 10YR3/4 暗褐色砂に炭化物・焼土粒が微量に混じる (カマド堆積土)
- 3 10YR3/4 暗褐色砂質シルトに 10YR5/3 に近い黄褐色土が混じる (カマドソデ)
- 4 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 締まる
- 5 7.5YR3/4 暗褐色砂質シルトに ϕ 1 cm以下の小礫が微量に混じる



第71図 ケカチ竪穴建物 S I 36・37・38

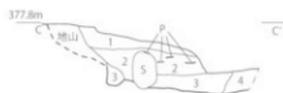


SL1



SI40

- 1 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 5%混じる
炭化物小塊が微量混じる
- 2 10YR4/6 褐色砂に 10YR3/4 暗褐色砂が 30%混じる
- 3 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 30%混じる
炭化物が微量混じる 細まりゆるい
- 4 10YR4/6 褐色砂に 10YR3/4 暗褐色砂が 10%混じる

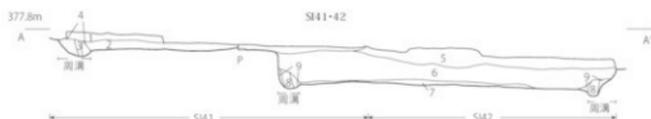
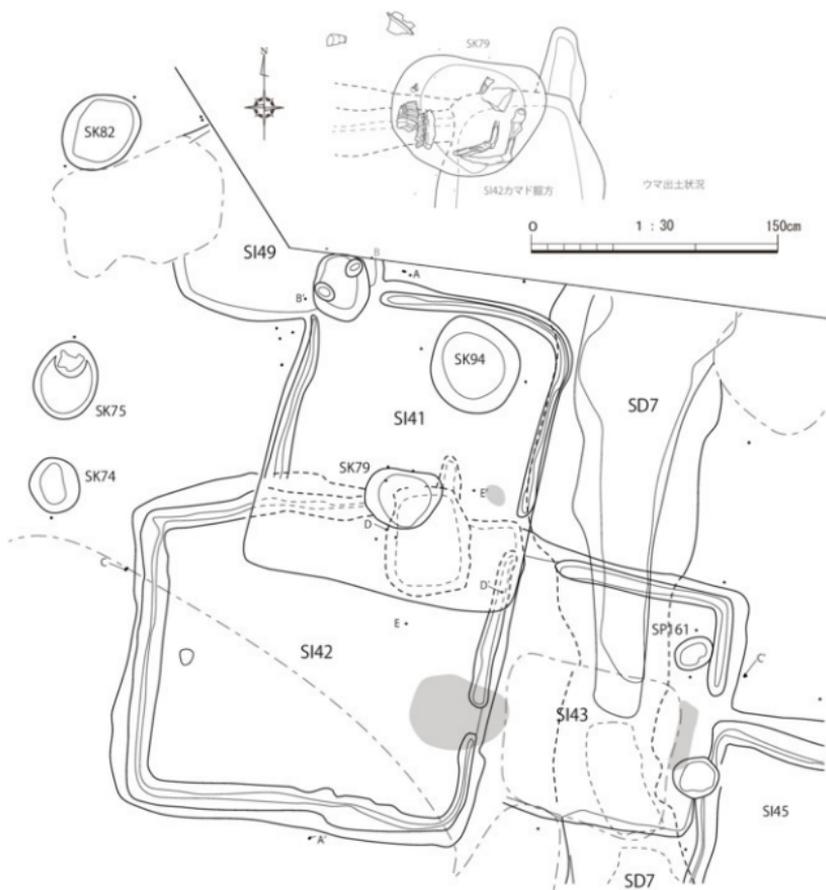


SI40 カマド

- 1 10YR3/4 暗褐色砂に 白色粘土・焼土粒が微量に混じる
(カマド天井崩落)
- 2 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 5%混じる
焼土ブロック、炭化物が混じる (カマド天井崩落)
- 3 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 30%混じる
炭化物が混じる (カマド内埋積土)
- 4 10YR3/3 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 40%混じる
細まる SI40 床面
- 5 10YR4/4 褐色砂に 白色粘土・焼土粒が混じる 細まる (カマドソデ)



第72図 ケカチ竪穴建物 S140

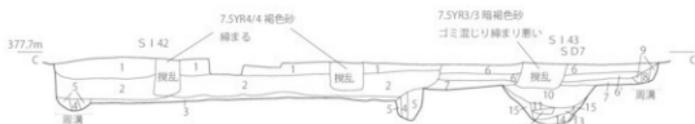


S141-42

- | | |
|---|--|
| 1 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂に小礫が混じる (SI41 堆積土) | 5 10YR3/4 暗褐色砂に小礫 白色粒子が混じる (SI42 堆積土) |
| 2 7.5YR3/4 暗褐色砂に白色粒子が微量に混じる (SI41 堆積土) | 6 10YR3/4 暗褐色砂に黄土粒 白色粒子、炭化物が微量に混じる (SI42 堆積土) |
| 3 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 10%混じる
締まりゆるい (SI41 周溝) | 7 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 10%混じる (SI42 堆積土) |
| 4 10YR4/6 褐色砂に 10YR3/4 暗褐色砂が 20%混じる (SI41 周溝) | 8 10YR3/4 暗褐色砂 締まりゆるい (SI42 周溝) |
| | 9 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 5%混じる (SI42 周溝) |



第73図 ケチ堅穴建物 S 141・42・43・49



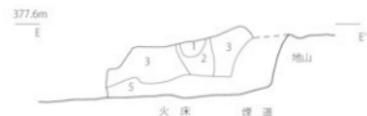
S142・43

- 1 10YR3/4 暗褐色砂 小礫 白色粘土混じり (S 142 堆積土)
- 2 10YR3/4 暗褐色砂に焼土粒 白色粘土 炭化物が微量に混じる (S 142 堆積土)
- 3 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 10% 混じる
- 4 10YR3/4 暗褐色砂 締まりゆるい (S 142 堆積土・埋溝)
- 5 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 5% 混じる (S 142 堆積土・埋溝)
- 6 7.5YR3/4 暗褐色砂 小礫 白色粘土が混じる (S 143 堆積土)
- 6' 10YR3/4 暗褐色砂に 白色粘土が微量に混じる
- 7 10YR4/6 褐色砂に 10YR3/4 暗褐色砂が 40% 混じる 締まる 灰り床 (S 143 堆積土)
- 8 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 5% 混じる 締まりゆるい (S 143 堆積土・埋溝)
- 9 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 20% 混じり 締まりゆるい (S 143 堆積土・埋溝)
- 10 7.5YR3/4 暗褐色砂に 7.5YR2/3 極暗褐色砂が 30% 混じる 7.5TR4/4 褐色粘砂が微量に混じる 締まりゆるい (S D7 堆積土)
- 11 7.5YR2/3 極暗褐色砂質シルト 締まりゆるい (S D7 堆積土)
- 12 10YR5/4 にぶい黄褐色粘砂 砂層 (S D7 堆積土)
- 13 10YR4/3 にぶい黄褐色粘砂 砂層 (S D7 堆積土)
- 14 10YR5/4 褐色にぶい黄褐色粘砂に ϕ 2cm 大の礫が多量に混じる 砂層層 (S D7 堆積土)
- 15 10YR4/4 褐色砂に 10YR3/4 暗褐色砂が 30% 混じる 締まりゆるい (S D7 堆積土)



S142 カマド

- 1 10YR4/4 褐色砂に 焼土粒 炭化物が微量に混じる (カマドかけ口)
- 2 10YR3/4 暗褐色砂に 焼土ブロックが 30% 混じる (カマドかけ口)
- 3 10YR3/4 暗褐色砂に 焼土粒が 5% 混じる 炭化物が微量に混じる 締まる (カマドソデ)
- 4 10YR4/6 褐色砂に ϕ 2cm 大の小礫が混じる (貫口)
- 5 10YR3/3 暗褐色砂質シルトに 焼土粒が微量に混じる (カマド内堆積土)

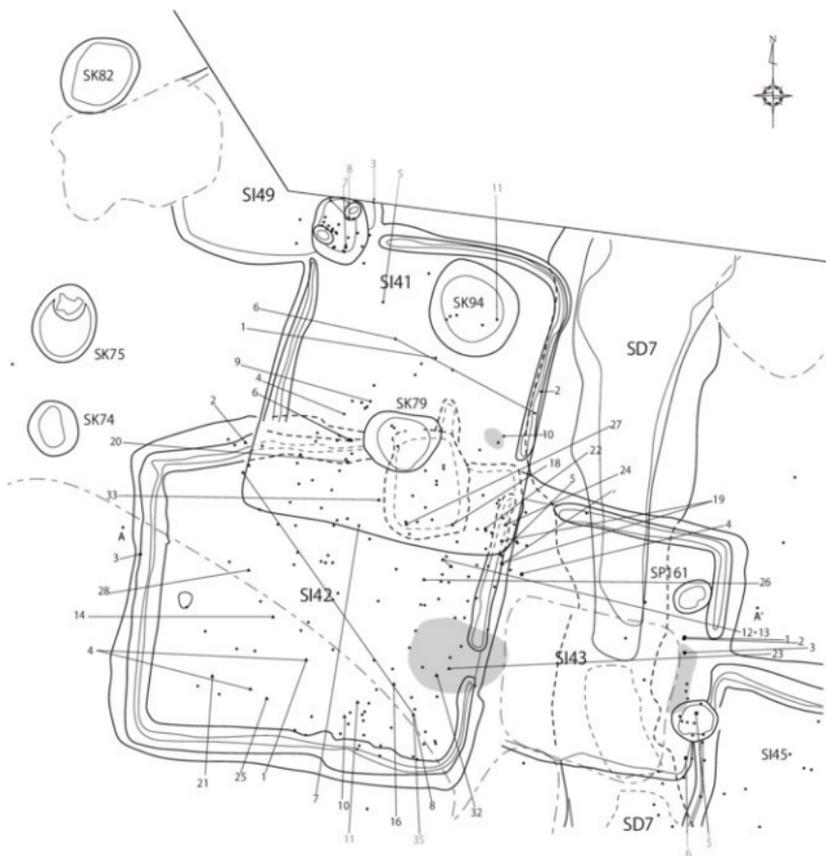


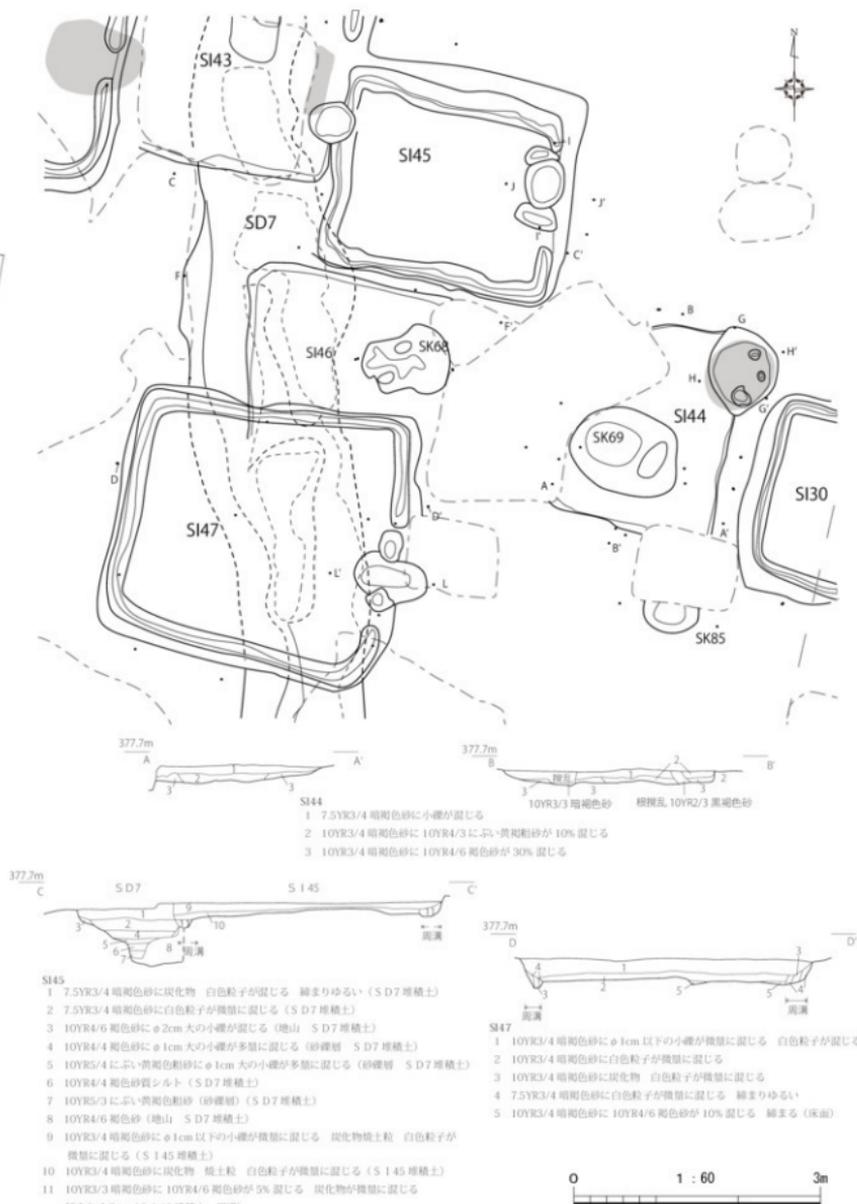
S149 カマド

- 1 10YR6/3 にぶい黄褐色粘土質に焼土ブロックが 30% 含む (カマドソデ)
- 2 5YR5/6 明赤褐色粘土質シルト (焼土層・ソデ内壁)
- 3 10YR5/1 暗灰色シルト (灰層)
- 4 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトに 10YR6/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 5% 含む (カマドソデ)



第74図 ケカチ竪穴建物 S 141・42・43・49



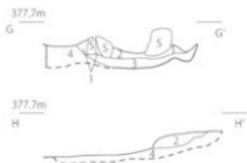


第76図 ケカチ竪穴建物 S 144~47



SI46

- 1 7.5YR2/3 極暗褐色砂に炭化物 小礫が微量に混じる (S 146 堆積土)
 - 2 7.5YR2/3 極暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 10% 混じる 締まる (S 146 堆積土・床石)
 - 3 10YR2/3 黒褐色砂に 10YR3/4 暗褐色砂が 5% 混じる。締まりゆるい (S 146 堆積土・埋溝)
 - 4 10YR3/4 暗褐色砂 (S 146 堆積土)
 - 5 10YR2/3 黒褐色砂 (S 147)
 - 6 7.5YR2/3 極暗褐色砂 炭化物が微量に混じる (S 147)
 - 7 10YR2/3 黒褐色細砂 締まりゆるい (S D7)
 - 8 10YR4/6 褐色砂に 10YR2/3 黒褐色砂が 5% 混じる (S D7)
 - 9 10YR2/3 暗褐色砂 (S D7 堆積土)
 - 10 10YR3/4 暗褐色砂に φ1cm 大の小礫が多量に混じる 砂礫層 (S D7 堆積土)
 - 11 10YR4/3 に多い黄褐色粗砂 砂層 (S D7 堆積土)
 - 12 10YR4/3 に多い黄褐色粗砂に φ1cm 大の小礫が多量に混じる 砂礫層 (S D7 堆積土)
 - 13 10YR3/4 暗褐色粗砂 (S D7 堆積土)
 - 14 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 締まりゆるい (S D7 堆積土)
 - 15 10YR4/4 褐色粗砂 砂層 (S D7 堆積土)
 - 16 10YR4/4 褐色粗砂に φ1cm 大の小礫が多量に混じる 砂層 (S D7 堆積土)
- 地山 10YR4/6 褐色砂 (S D7 堆積土)



SI44 カマド

- 1 10YR6/2 灰黄褐色粘土に 7.5YR4/3 褐色砂質シルト 30% 混じる (カマド袖)
- 2 7.5YR4/3 褐色砂に 10YR6/2 灰黄褐色粘土ブロック状を 10% 含む (堆積土)
- 3 7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト
- 4 10YR5/6 黄褐色砂質シルト硬く締まる 焼熟して多少赤化 (地山)

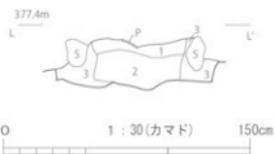


SI45 カマド

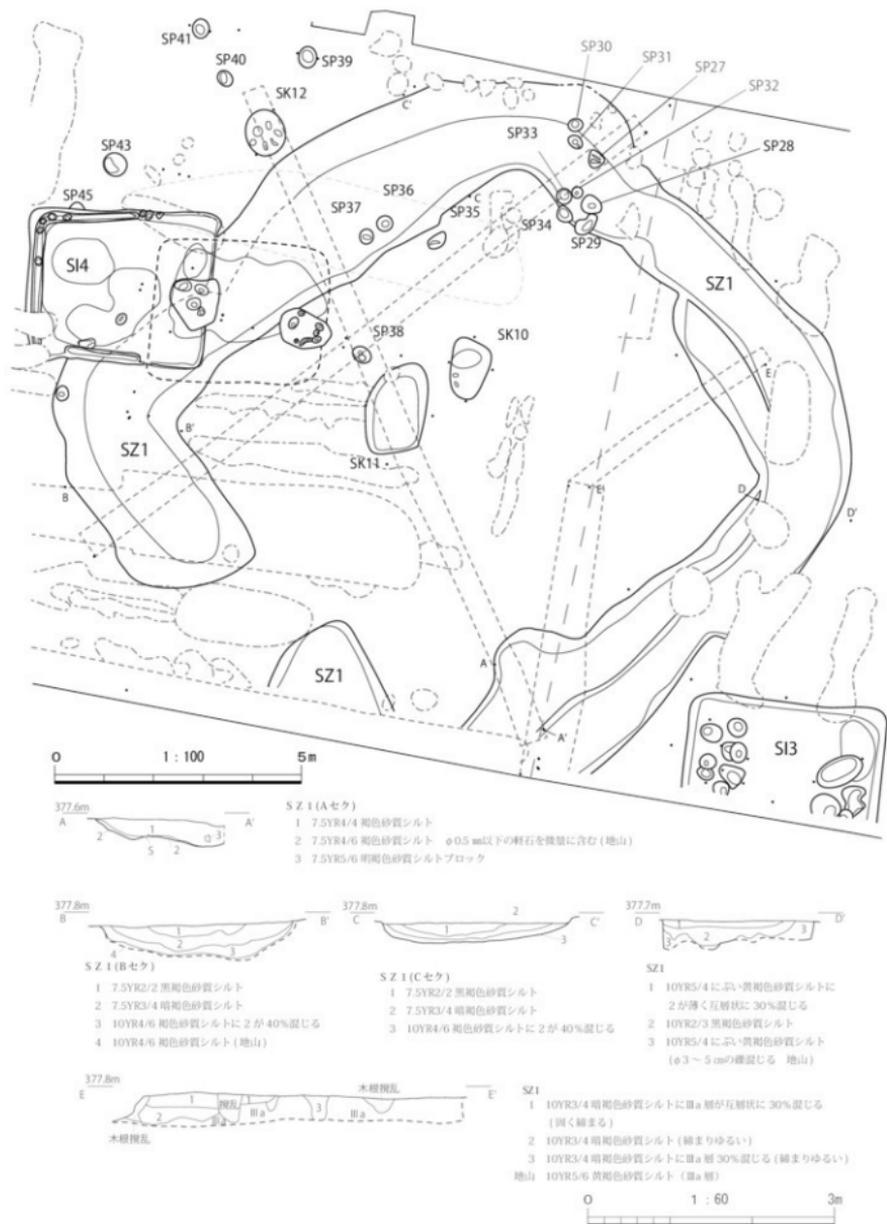


SI47 カマド

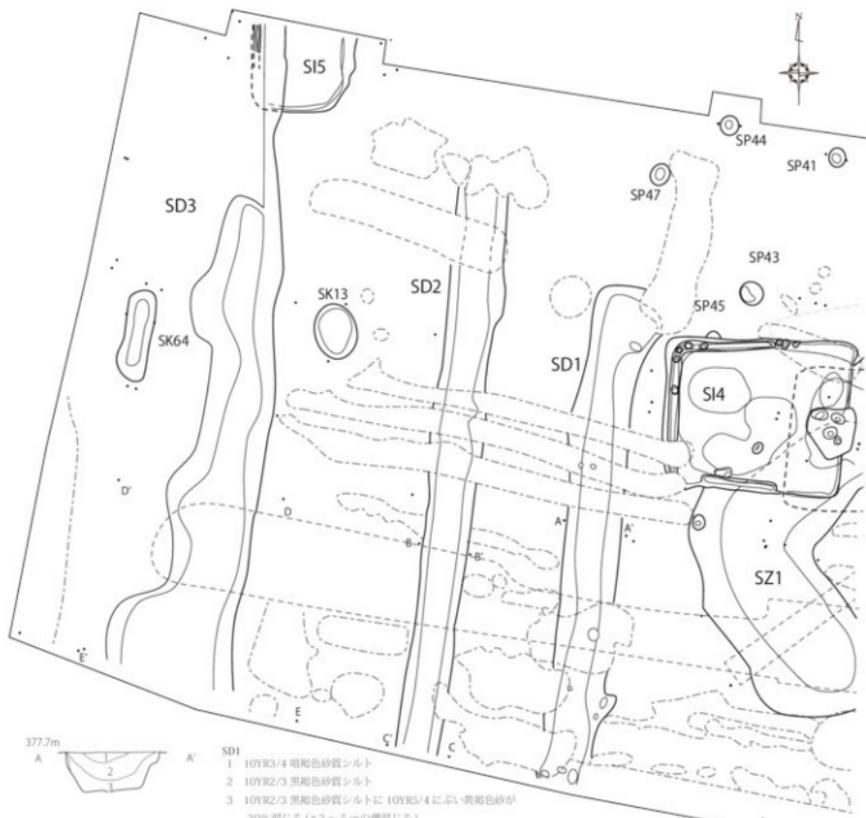
- 1 10YR4/6 褐色砂に焼土ブロックが混じる カマド崩落土
- 2 10YR3/4 暗褐色砂に焼土、炭化物が混じる
- 3 10YR4/4 褐色砂に 10YR3/4 暗褐色砂が 30% 混じる 焼土粒混じる カマド袖



第77図 ケカチ堅穴建物 S 144~47



第78図 ケチチ方形周溝墓 SZ1



SD1
 1 10YR3/4 暗褐色砂質シルト
 2 10YR2/3 黒褐色砂質シルト
 3 10YR2/3 黒褐色砂質シルトに 10YR5/4 に近い黄褐色砂が 30%混じる (φ2~5cmの礫混じる)



SD2
 1 10YR3/4 暗褐色砂質シルト
 2 10YR2/3 黒褐色砂質シルト
 3 10YR2/3 黒褐色砂質シルトに 10YR5/4 に近い黄褐色砂質シルトブロック状に 30%含む

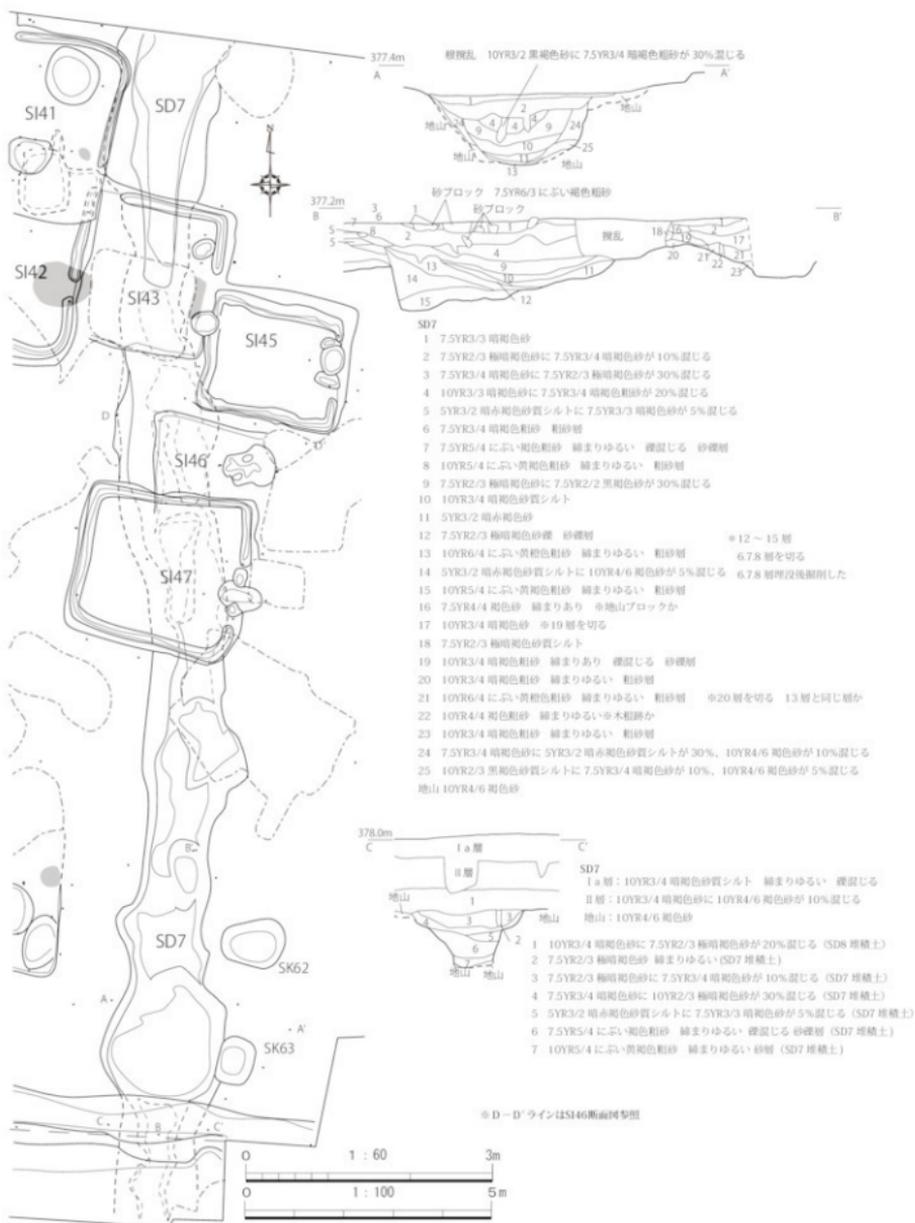


SD3
 1 10YR4/4 褐色砂質シルト (1b層)
 2 10YR3/4 暗褐色砂質シルト φ5~10cmの礫含む
 3 10YR5/6 黄褐色砂質シルトに 10YR4/4 褐色砂質シルトが互層状に 30%混じる 固く締まる
 4 10YR5/3 に近い黄褐色細砂 φ2~5cmの礫多く含む 酸化鉄分互層状に 7%混じる ※SD3の底面



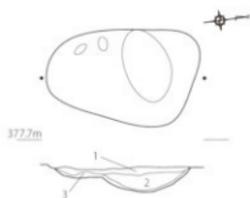
- 概況
- ① 10YR3/4 暗褐色砂質シルトに 10YR5/4 に近い黄褐色砂質シルトがブロック状に 10%混じる
 - ② 10YR3/3 暗褐色砂質シルトに 10YR4/6 褐色砂質シルトが薄く層状に 5%混じる
 - ③ 10YR3/3 暗褐色砂質シルトに 10YR4/6 褐色砂質シルトがブロック状に 10%混じる
 - ④ 10YR5/3 に近い黄褐色細砂 φ2~5cmの礫多く含む 酸化鉄分 7%混じる
 - ⑤ 10YR3/4 褐色砂質シルト (φ0.5~1cmの礫多く含む)
 - ⑥ 2.SY5/4 黄褐色細砂 (固く締まる)
- 1 10YR3/4 暗褐色砂質シルト φ5~10cmの礫含む SD3 埋土
 2 10YR5/3 に近い黄褐色細砂 φ2~5cmの礫多く含む 酸化鉄分 7%混じる
 3 10YR3/3 暗褐色砂質シルトに 10YR4/6 褐色砂質シルトがブロック状に 10%混じる
 4 10YR5/3 に近い黄褐色細砂 φ2~5cmの礫多く含む 酸化鉄分互層状に 7%混じる ※SD3の底面
 5 10YR3/4 褐色砂質シルト (φ0.5~1cmの礫多く含む)
 6 2.SY5/4 黄褐色細砂 (固く締まる)
 1a層: 耕作土 1b層: 10YR4/4 褐色砂質シルト (現代)

第79図 ケチ溝状遺構 SD1・2・3



第80図 ケチ溝状遺構 SD7

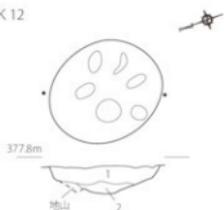
SK 10



SK 10

- 1 7.5YR5/6 明褐色砂質シルトに 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルトが 40%混じる
- 2 7.5YR4/4 褐色砂質シルトと 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルトが互層状に堆積
- 3 7.5YR5/6 明褐色砂質シルト (地山)

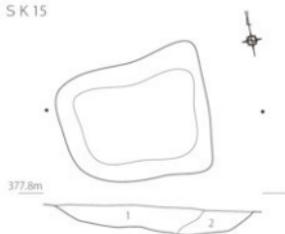
SK 12



SK 12

- 1 10YR3/4 暗褐色砂質シルト
- 2 10YR5/4 に赤い黄褐色砂質シルトに 1 が 30%混じる

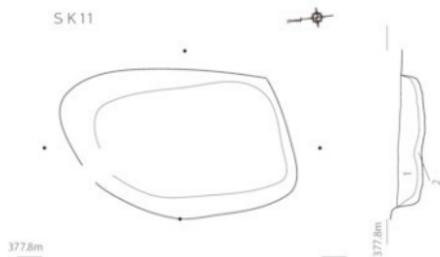
SK 15



SK 15

- 1 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/4 褐色土 10%
10YR2/3 黒褐色土 10% 炭化物 2% 含む
締まりやや強い 粘性あり
- 2 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土を 30% 含む
締まりあり 粘性あり

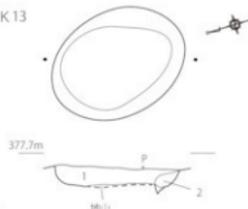
SK 11



SK 11

- 1 10YR4/6 褐色砂質シルト
- 2 10YR3/4 暗褐色砂質シルト

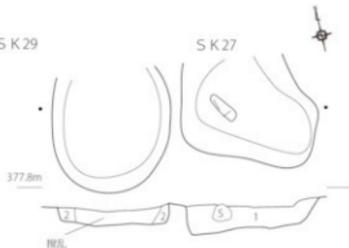
SK 13



SK 13

- 1 10YR3/4 暗褐色砂質シルトに 10YR5/4 に赤い黄褐色砂質シルトが 10%混じる
- 2 10YR3/4 暗褐色砂質シルトに 10YR5/4 に赤い黄褐色砂質シルトをブロック状に 30%含む

SK 29

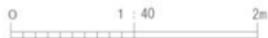


SK 27

- 1 10YR3/4 暗褐色土に 10YR5/6 黄褐色土を 20% 含む 白色粘土 3% 鐵土粒を微量に含む
締まりあり 粘性やや弱い

SK 29

- 2 10YR3/4 暗褐色土に 10YR5/6 黄褐色土を 30% 含む 白色粘土 2% 含む
締まりあり 粘性あり



第 82 図 ケカチ土坑 (1)

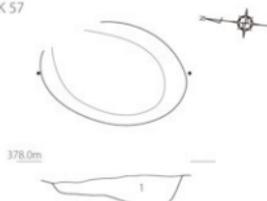
SK 47



SK 47

- 1 10YR3/4 暗褐色土に 10YR2/3 黒褐色土 20% 炭化物 3% 含む
締まりやや強い、粘性弱い
- 2 10YR4/6 褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 30% 含む
締まりやや強い、粘性弱い

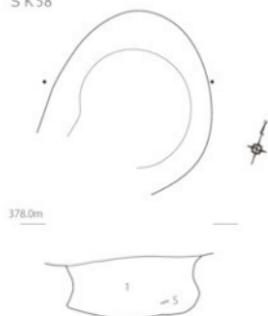
SK 57



SK 57

- 1 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 20% 混じる
焼土粒、炭化物が微量に混じる 締まりゆるい

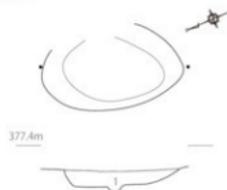
SK 58



SK 58

- 1 7.5YR3/4 暗褐色砂

SK 59



SK 59

- 1 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 10% 混じる 焼土粒、炭化物が微量に混じる

SK 60



SK 61



377.4m



SK 60

- 1 7.5YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 5% 混じる
煤が微量に混じる
- 2 7.5YR4/6 褐色砂に 7.5YR3/4 暗褐色砂が 10% 混じる
地山 10YR4/6 褐色砂

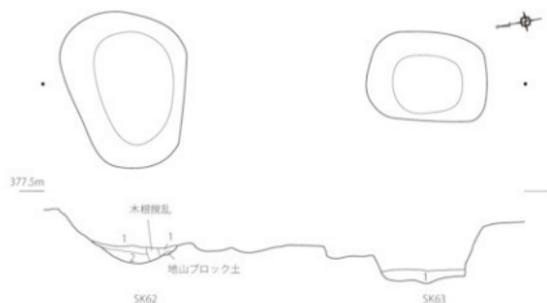
SK 61

- 1 7.5YR3/4 暗褐色砂に炭化物、焼土粒が微量に混じる
- 2 7.5YR3/4 暗褐色砂に 7.5YR4/6 褐色砂が 10% 混じる
地山 10YR4/6 褐色砂



第 83 図 ケカチ土坑 (2)

SK62



※SK60～63柱穴がSD7より新しいと推定される

SK62・63

1. 10YR3/4 暗褐色砂質シルト（機土・炭化物粒状に少量含む）
2. 10YR5/6 黄褐色砂に1が30%混じる

SK63

SK64



SK64

1. 10YR3/4 暗褐色砂
2. 2.5YR3/2 暗赤褐色砂中鉄分層（ノジュール）
3. 7.5YR4/4 褐色砂に10YR4/6 褐色砂が5%混じる
4. 7.5YR5/3 に近い褐色粗砂
5. 7.5YR4/4 褐色砂

SK65



SK65

1. 10YR3/4 暗褐色砂に10YR4/6 褐色砂が30%混じる
2. 10YR4/4 褐色砂

SK66

1. 10YR3/4 暗褐色砂に10YR4/6 褐色砂が30%混じる
2. 10YR4/4 褐色砂

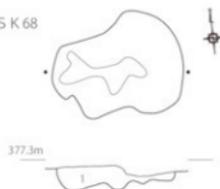
SK67



SK67

1. 10YR3/4 暗褐色砂に10YR4/6 褐色砂が20%混じる
2. 10YR4/6 褐色砂に10YR3/4 暗褐色砂が5%混じる

SK68



SK68

1. 10YR3/4 暗褐色砂に10YR4/6 褐色砂が30%混じる
炭化物、粘土粒が混じる
※SI46 カマドか

SK69



SK69

1. 10YR6/6 明暗褐色粗砂
2. 10YR3/4 暗褐色砂 細まりゆるい
3. 10YR3/4 暗褐色砂にφ1cm以下の礫が多量に混じる
4. 10YR6/3 に近い黄褐色粗砂



第84図 ケカチ土坑（3）

SK73



377.7m



SK73

- 1 10YR3/4 暗褐色砂に白色粒子が微量に混じる
- 2 10YR4/4 褐色砂に 10YR3/4 暗褐色砂が 10%混じる
- 3 10YR3/3 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 10%混じる
結まりゆるい

SK72



SK72



SK72

- 1 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 10%混じる
- 2 10YR4/6 褐色砂に 10YR3/4 暗褐色砂が 30%混じる

SK71



SK71



SK71

- 1 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂に炭化物が混じる

SK75



377.9m



※木根攪乱が

SK74・75

- 1 10YR3/4 暗褐色砂質シルト
- 2 10YR3/4 暗褐色砂質シルトに 10YR5/6 黄褐色砂 30%混じる 木根あり 結まりゆるい
- 3 10YR3/4 暗褐色砂質シルト
- 4 10YR5/6 黄褐色砂に 10YR3/4 暗褐色砂質シルト 10%混じる

SK74



SK74



SK76



377.9m



SK76

- 1 10YR3/3 暗褐色砂質シルト

SK77



377.5m



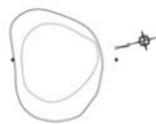
SK77

- 1 10YR3/4 暗褐色砂質シルト

SK78

- 2 10YR3/3 暗褐色砂質シルトに 10YR5/6 黄褐色砂 30%混じる

SK79



377.6m



SK79

- 1 7.5YR2/3 極暗褐色砂に ϕ 1 cm 以下の小礫が微量に混じる

SK82

- 2 10YR3/4 暗褐色砂に ϕ 1 cm 以下の小礫、白色粒子が混じる
- 3 10YR3/4 暗褐色砂に 塊土粒、炭化物、白色粒子が微量に混じる
- 4 10YR3/4 暗褐色砂 結まりゆるい
- 5 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 5%混じる

SK82



378.0m



SK82

- 1 10YR3/4 暗褐色砂 結まりゆるい
- 2 10YR4/6 褐色砂に 10YR3/4 暗褐色砂が 30%混じる 結まりゆるい



第 85 図 ケカチ土坑 (4)



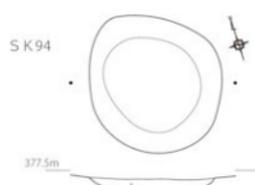
SK84

- 1 7.5YR2/3 極暗褐色砂質シルトに白色粘子が微量に混じる 締まりゆるい
- 2 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 10% 混じる



SK85

- 1 10YR4/6 暗褐色砂に ϕ 1cm以下の小礫が微量に混じる
- 2 10YR4/6 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 30% 混じる ϕ 1cm以下の小礫が微量に混じる



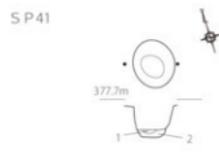
SK94

- 1 10YR5/6 黄褐色砂に 10YR3/4 暗褐色砂が 40% 混じる



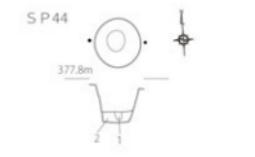
SP39

- 1 10YR2/3 黒褐色砂質シルト 締まりゆるい 柱状か
- 2 10YR2/3 黒褐色砂質シルトに 10YR5/4 に近い黄褐色砂質シルトがブロック状に 30% 混じる



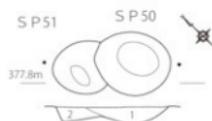
SP41

- 1 10YR2/3 黒褐色砂質シルト 締まりゆるい 柱状か
- 2 10YR2/3 黒褐色砂質シルトに 10YR5/4 に近い黄褐色砂質シルトがブロック状に 30% 混じる



SP44

- 1 10YR2/3 黒褐色砂質シルト 締まりゆるい 柱状か
- 2 10YR2/3 黒褐色砂質シルトに 10YR5/4 に近い黄褐色砂質シルトがブロック状に 30% 混じる



SP51

- 1 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 10% 10YR3/2 黒褐色土 20% 含む 締まりあり 粘性やや弱い
- 2 10YR2/3 黒褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 30% 含む 締まりあり 粘性あり



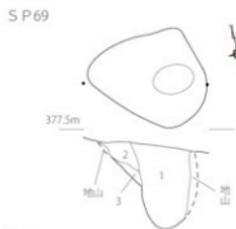
SP50

- 1 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 5% 含む 炭土粒を微量に含む 締まりあり 粘性やや弱い
- 2 10YR4/6 褐色土に 10YR3/4 暗褐色土を 5% 含む 締まり強い 粘性強い



SP64

- 1 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 10% 含む 炭化物 3% 含む 締まりやや弱い 粘性やや弱い
- 2 10YR4/6 褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 5% 含む 締まりやや強い 粘性やや弱い



SP69

- 1 10YR3/4 暗褐色土に 10YR2/3 黒褐色土 10% 10YR4/4 褐色土を 10% 含む 炭化物 2% 含む 締まりやや強い 粘性やや強い
 - 2 10YR3/3 暗褐色土に 10YR2/3 黒褐色土 10% 10YR4/4 褐色土を 20% 含む 締まりやや弱い 粘性強い
 - 3 10YR3/4 暗褐色土に 10YR5/6 黄褐色土 30% 含む 締まりやや弱い 粘性弱い
- 地山: 10YR5/6 黄褐色土 締まりやや弱い 粘性弱い



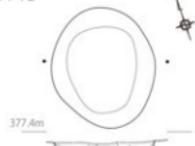
SP70

- 1 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 30% 含む 締まりやや弱い 粘性弱い
- 2 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 5% 含む 炭化物を微量に含む 締まり強い 粘性あり



第 86 図 ケカチ土坑 (5)

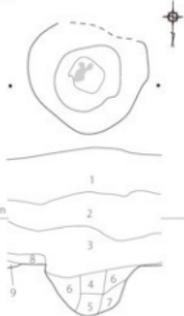
SP72



SP72

- 1 10YR4/4 褐色土に 10YR5/6 黄褐色土を 5% 含む
炭化物 3% 含む 締まりあり 粘性あり
- 2 10YR4/4 褐色土に 10YR5/6 黄褐色土を 30% 含む
炭化物を 3% 含む 締まりあり 粘性あり
- 3 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/4 褐色土 20% 含む
炭化物を 2% 含む 締まり弱い 粘性あり

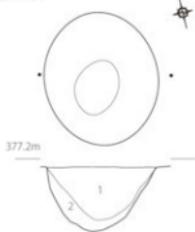
SP77



SP77

- 1 10YR3/2 黒褐色土に炭化物を微量に含む
締まりあり 粘性あり
- 2 10YR3/2 黒褐色土に 10YR3/4 褐色土を 30% 炭化物を 2%
焼土粒 3% 含む 締まりやや弱い 粘性あり
- 3 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土を 30% 炭化物を 3%
焼土粒を 5% 含む 締まりあり 粘性あり
- 4 10YR3/2 黒褐色土に 10YR3/4 暗褐色土を 20%
炭化物を 5% 含む 締まりやや弱い 粘性あり
- 5 10YR3/3 暗褐色土に 10YR5/6 黄褐色土を 5% 炭化物を 3%
焼土粒を 5% 含む 締まり弱い 粘性やや弱い
- 6 10YR3/3 暗褐色土に 10YR2/2 黒褐色土を 30% 含む
締まりややあり 粘性あり
- 7 10YR5/6 黄褐色土に 10YR3/3 暗褐色土を 5% 含む
締まりやや弱い 粘性弱い
- 8 2.5YR4/3 オリーブ褐色土に 10YR3/3 暗褐色土を 30%
10YR5/6 黄褐色土を 10% 含む 締まりあり 粘性強い
- 9 10YR5/8 黄褐色土に 10YR3/4 暗褐色土を 5% 含む
締まりあり 粘性弱い

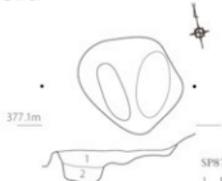
SP78



SP78

- 1 10YR2/3 黒褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 40%
炭化物 10% 含む 締まりやや弱い 粘性あり
- 2 10YR4/6 褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 30%
炭化物 3% 含む 締まり弱い 粘性やや弱い

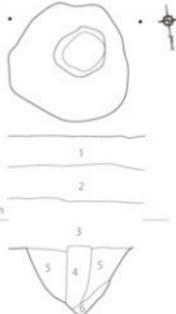
SP87



SP87

- 1 10YR3/4 暗褐色土に 10YR3/4 褐色土 30% 焼土粒 5%
炭化物 2% 含む 締まりあり 粘性あり
- 2 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 10%
10YR5/8 黄褐色土 5% 含む 焼土粒 2% 含む
締まりあり 粘性あり

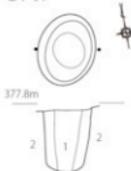
SP79



SP79

- 1 10YR3/2 黒褐色土に 10YR3/4 暗褐色土を 30% 炭化物を微量に含む 締まり強い 粘性強い
- 2 10YR2/3 黒褐色土に炭化物を微量に含む 締まりあり 粘性あり
- 3 10YR2/3 黒褐色土に 10YR4/6 褐色土を 5% 含む 締まりあり 粘性あり
- 4 10YR2/3 黒褐色土に 10YR3/4 暗褐色土を 30% 含む 締まりやや弱い 粘性あり
- 5 10YR3/4 暗褐色土に 10YR2/3 黒褐色土を 20% 含む 締まりやや弱い 粘性あり
- 6 10YR4/6 褐色土 締まりやや弱い 粘性弱い

SP97



SP97

- 1 10YR2/3 黒褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 30% 含む
締まりやや弱い 粘性やや弱い
- 2 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 10% 含む
締まりやや弱い 粘性やや弱い

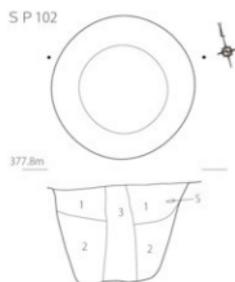
SP98



SP98

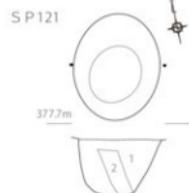
- 1 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 3% 含む
炭化物を微量に含む
締まりやや弱い 粘性あり
- 2 10YR4/6 褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 5% 含む
締まりあり 粘性あり





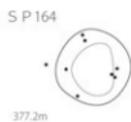
SP102

- 1 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 30%
10YR5/6 黄褐色土 5% 含む
締まりやや弱い、粘性あり
- 2 10YR2/3 黒褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 20% 含む
締まりやや弱い、粘性あり
- 3 10YR2/3 黒褐色土に 10YR3/4 暗褐色土 10%
10YR4/6 褐色土 5% 炭化物 5% 含む
締まりやや弱い、粘性あり



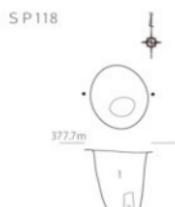
SP121

- 1 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 5% 10YR5/8 黄褐色土 3% 含む
締まりやや弱い、粘性あり
- 2 10YR3/4 暗褐色土に 10YR2/2 黒褐色土 5% 含む 締まり弱い、粘性あり



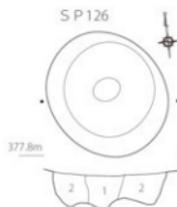
SP164

- 1 10YR3/4 暗褐色砂質シルトに
10YR2/3 黒褐色砂が 5% 混じる
- 2 10YR3/4 暗褐色砂
- 3 10YR4/4 褐色細砂に $\phi 1$ cm 大の小礫が多量に混じる



SP118

- 1 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 20%
炭化物を 3% 含む 締まり強い、粘性あり
- 2 10YR4/6 褐色土に炭化物を 3% 含む
締まり弱い、粘性あり

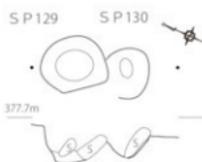


SP119

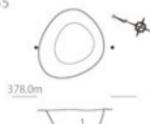
- 1 10YR3/4 暗褐色土に 10YR4/6 褐色土 20% 含む
締まりやや強い、粘性あり
- 2 10YR3/4 暗褐色土に炭化物を 2% 含む
締まり弱い、粘性あり

SP126

- 1 10YR3/3 暗褐色土に 10YR2/2 黒褐色土 5%
炭化物 5% 含む 締まりやや弱い、粘性あり
- 2 10YR3/4 暗褐色土に 10YR5/8 黄褐色土 5%
10YR3/4 褐色土を 3% 含む 締まりあり 粘性あり

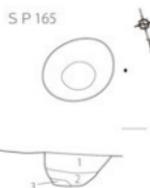


SP155



SP155

- 1 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/6 褐色砂が 20% 混じる
締まりゆるい



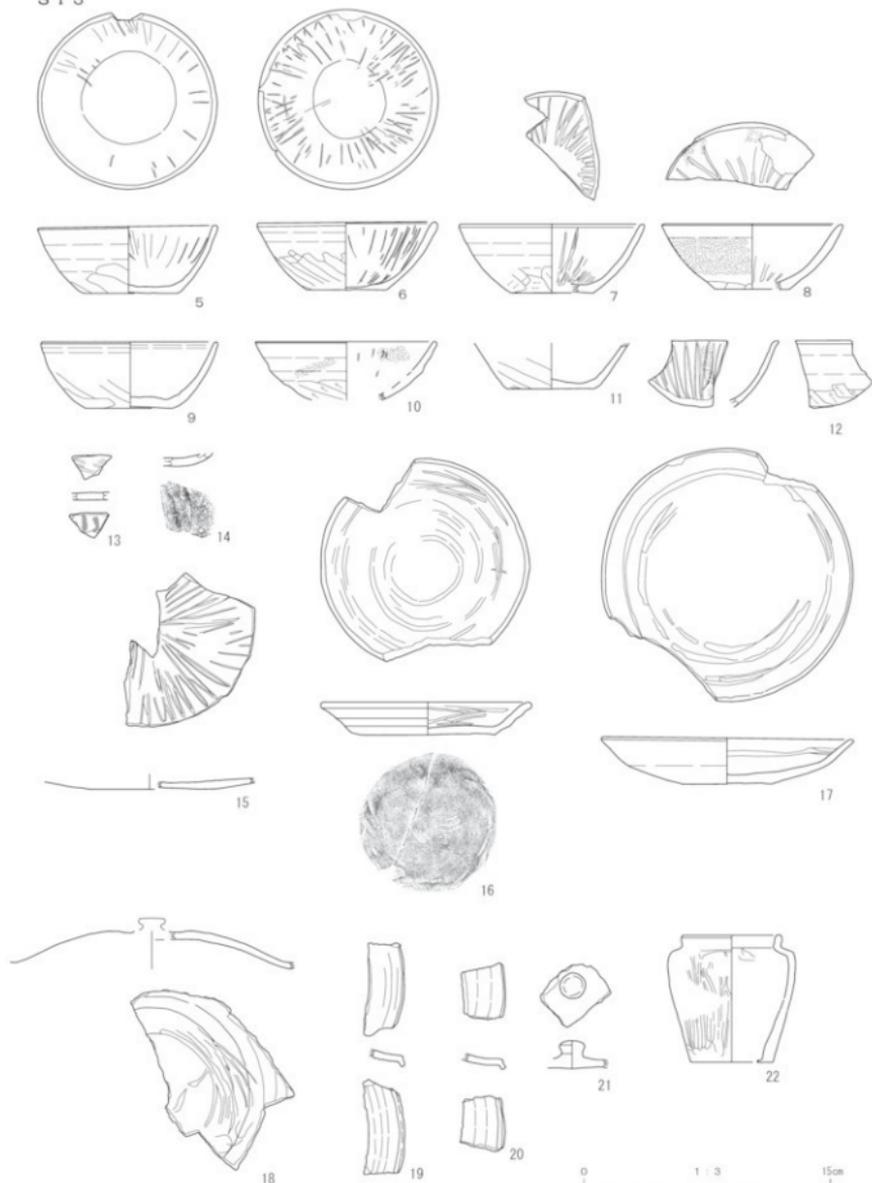
SP165

- 1 10YR3/4 暗褐色砂に 10YR4/4 褐色砂が 30% 混じる
- 2 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 締まりゆるい
- 3 10YR4/6 褐色砂 締まりゆるい



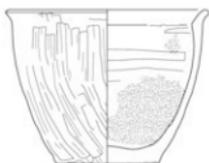
第 88 図 ケカチ土坑 (7)

S 13

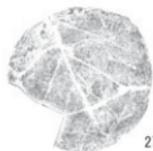


第90圖 后畑西遺物 S 13

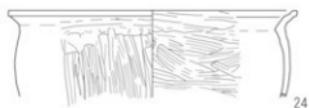
S 1 3



23



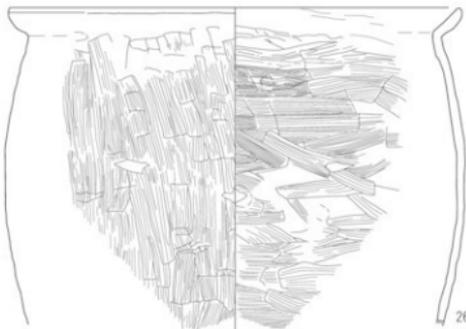
27



24



25



26

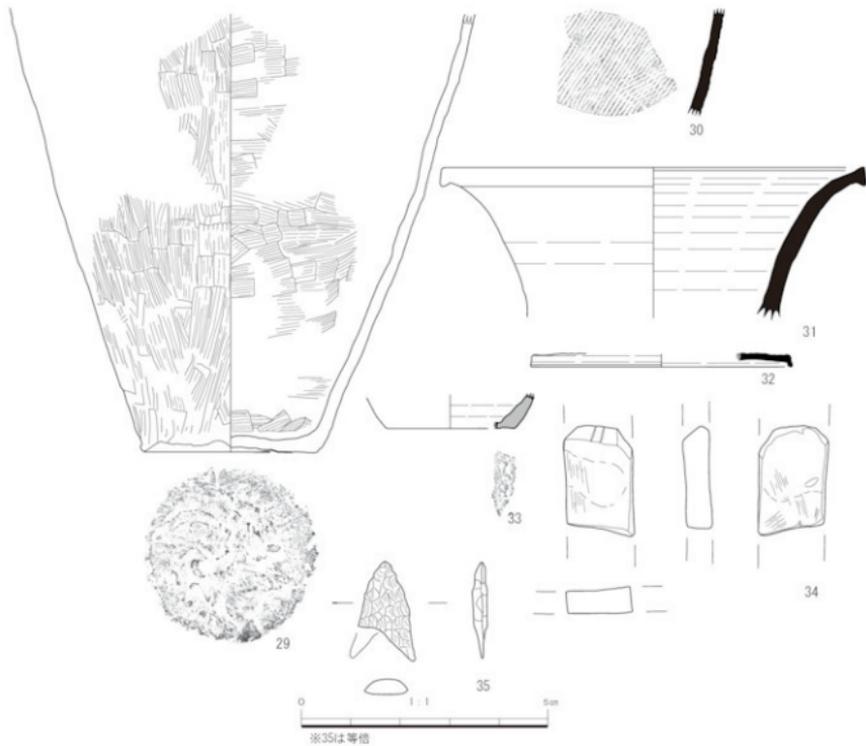


28

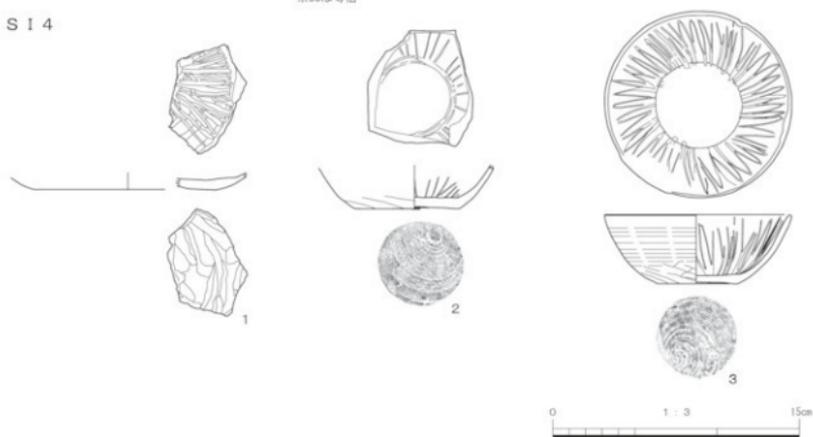


第91图 后畑西遺物 S 1 3

S 1 3

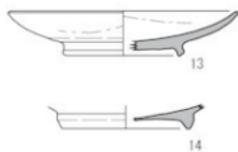
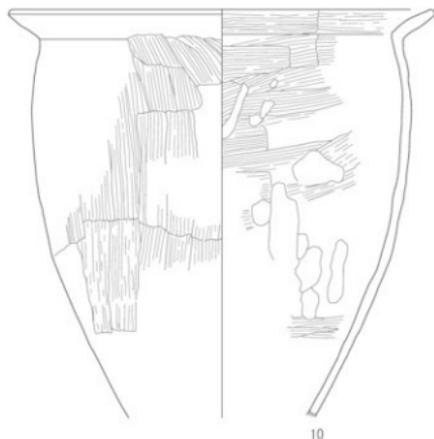
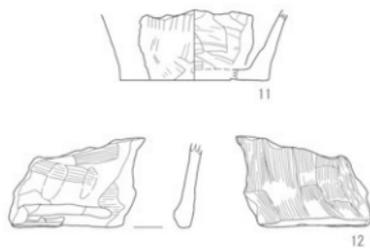
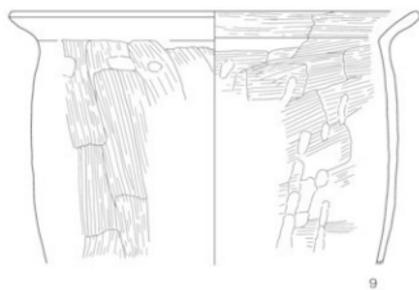
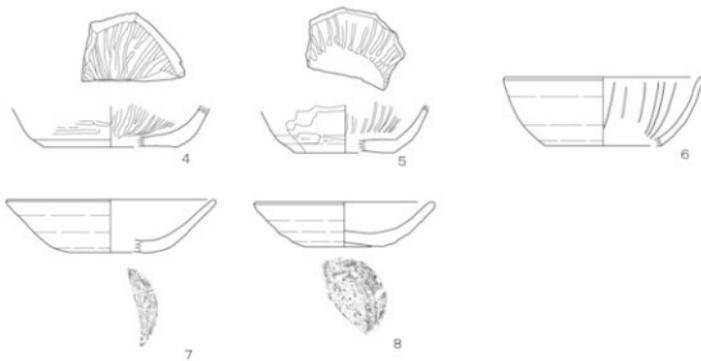


S 1 4



第 92 図 后畑西遺物 S 1 3・4

S 1 4



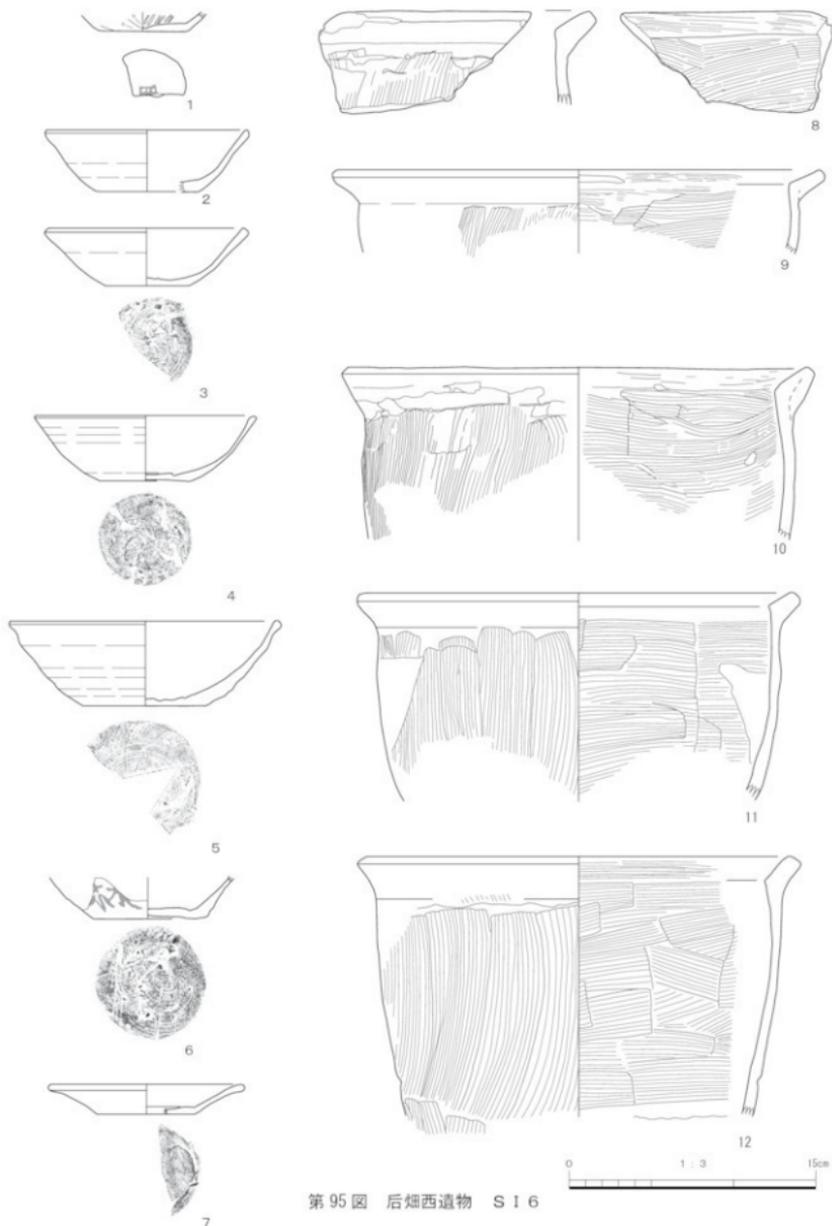
第 93 圖 后畑西遺物 S 1 4

S 15



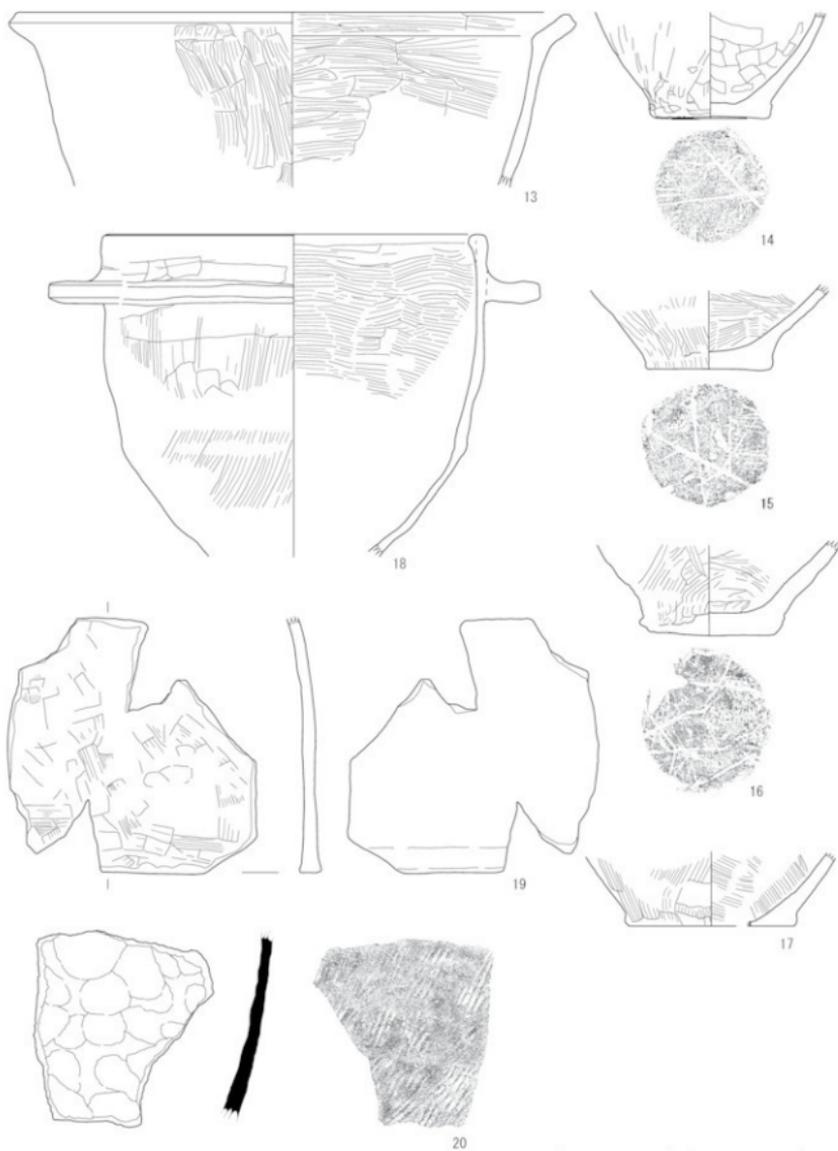
第94图 后畑西遺物 S 15

S 16



第 95 圖 后畑西遺物 S 16

S 1 6



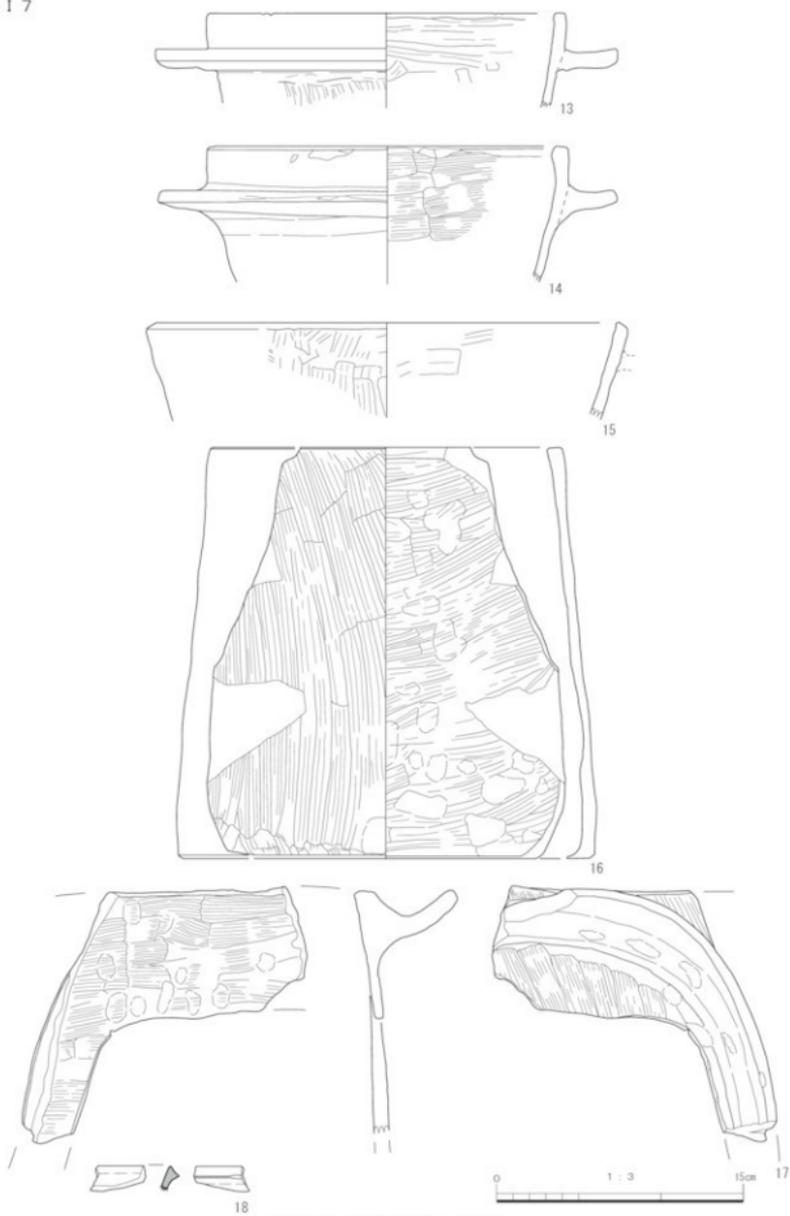
第 96 圖 后畑西遺物 S 1 6

S 17

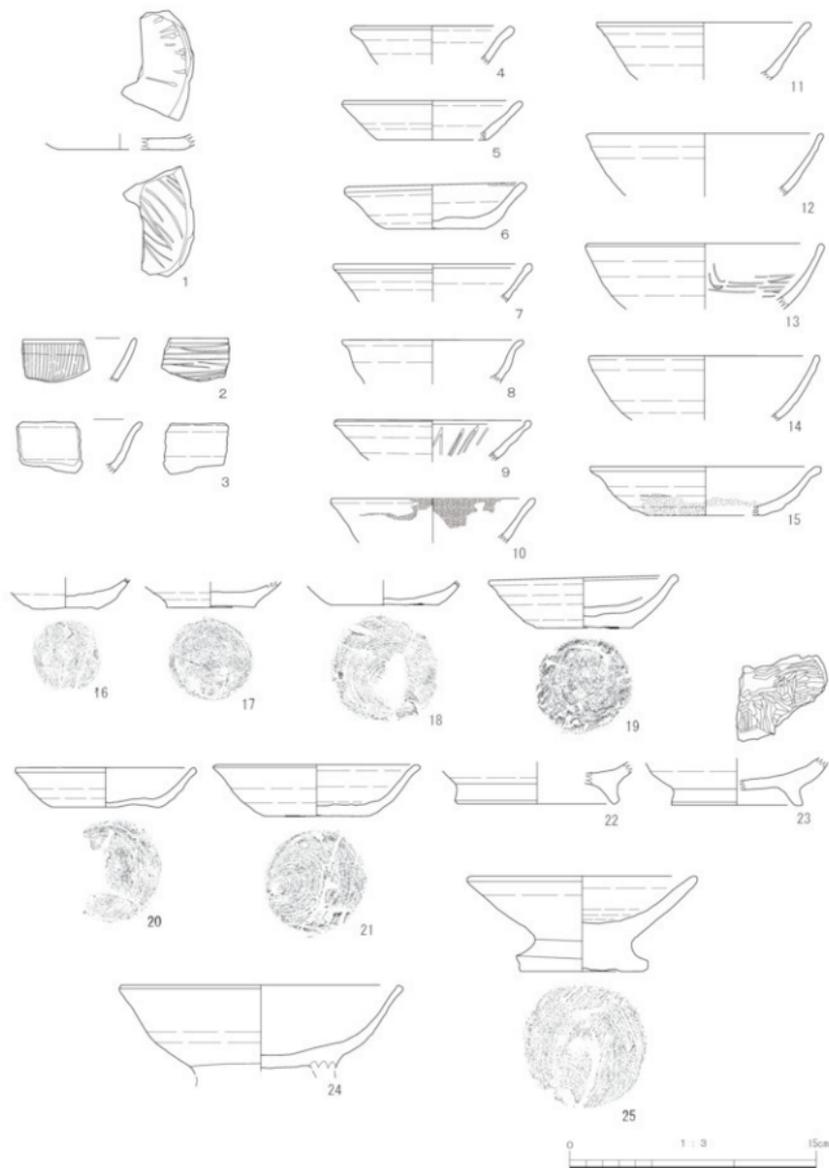


第 97 图 后畑西遺物 S 17

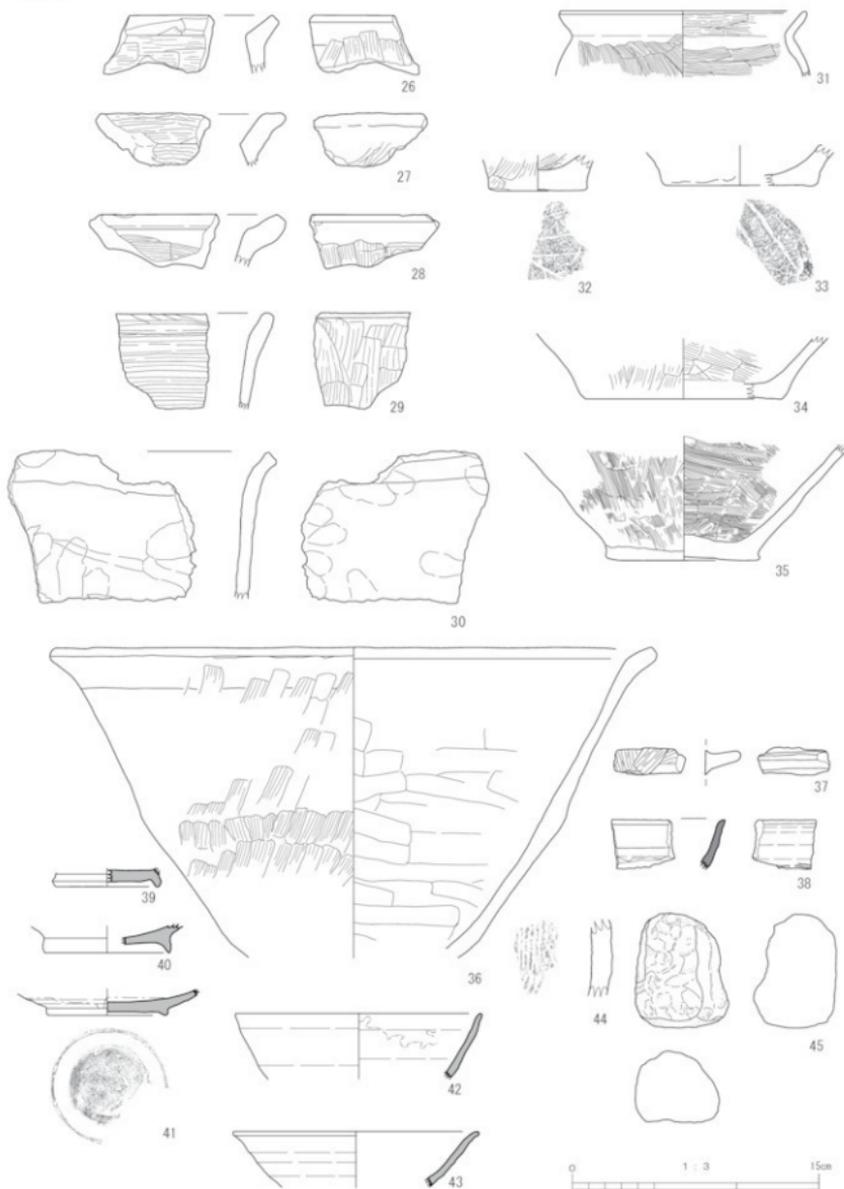
S 17



第98図 后畑西遺物 S 17

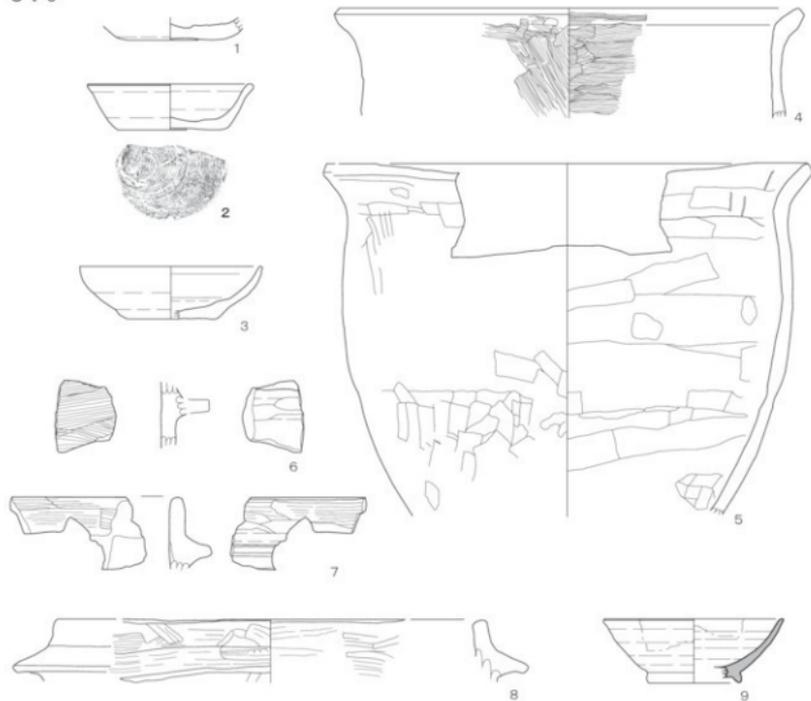


第 99 图 后畑西遺物 S 18

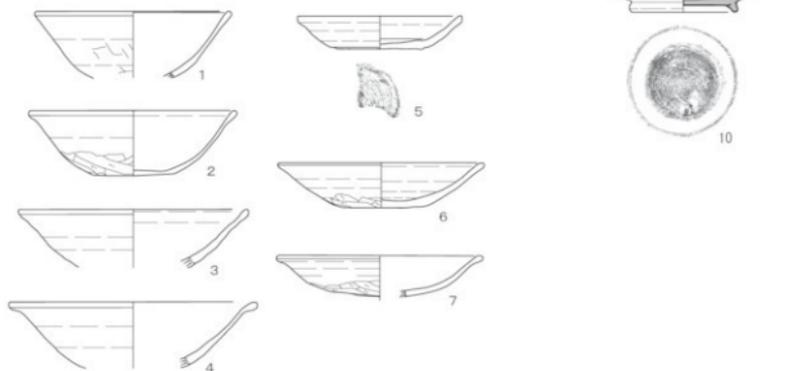


第100圖 后畑西遺物 S 18

S 19



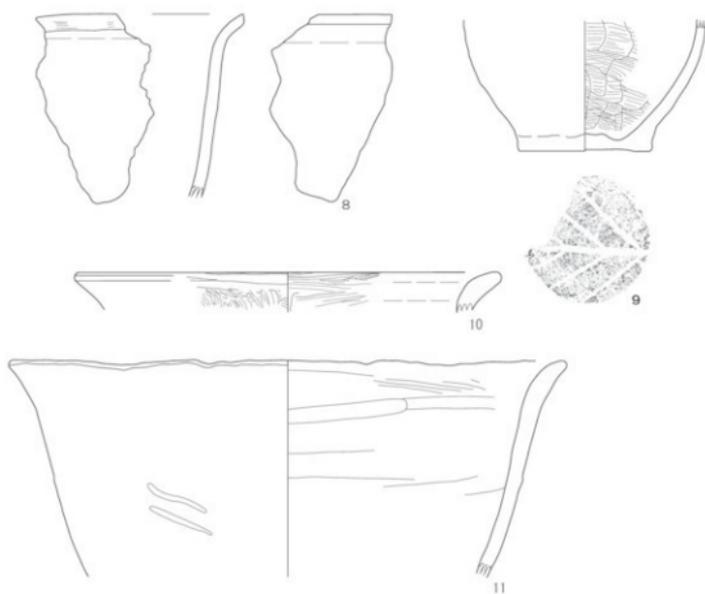
S 110



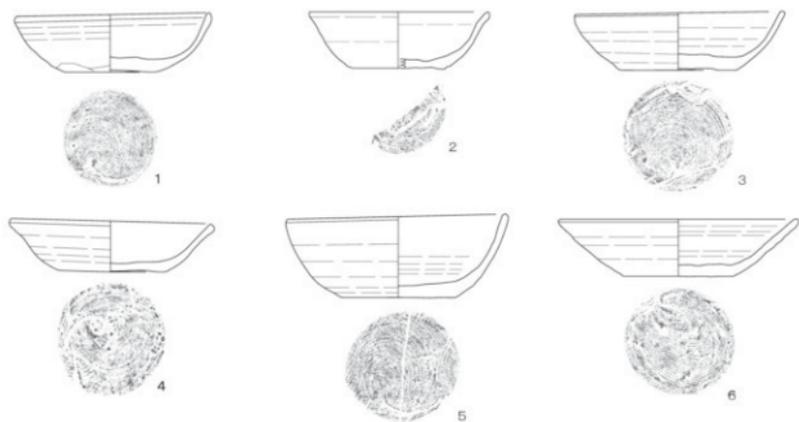
第101图 后畑西遺物 S 19・10



S I 1 0



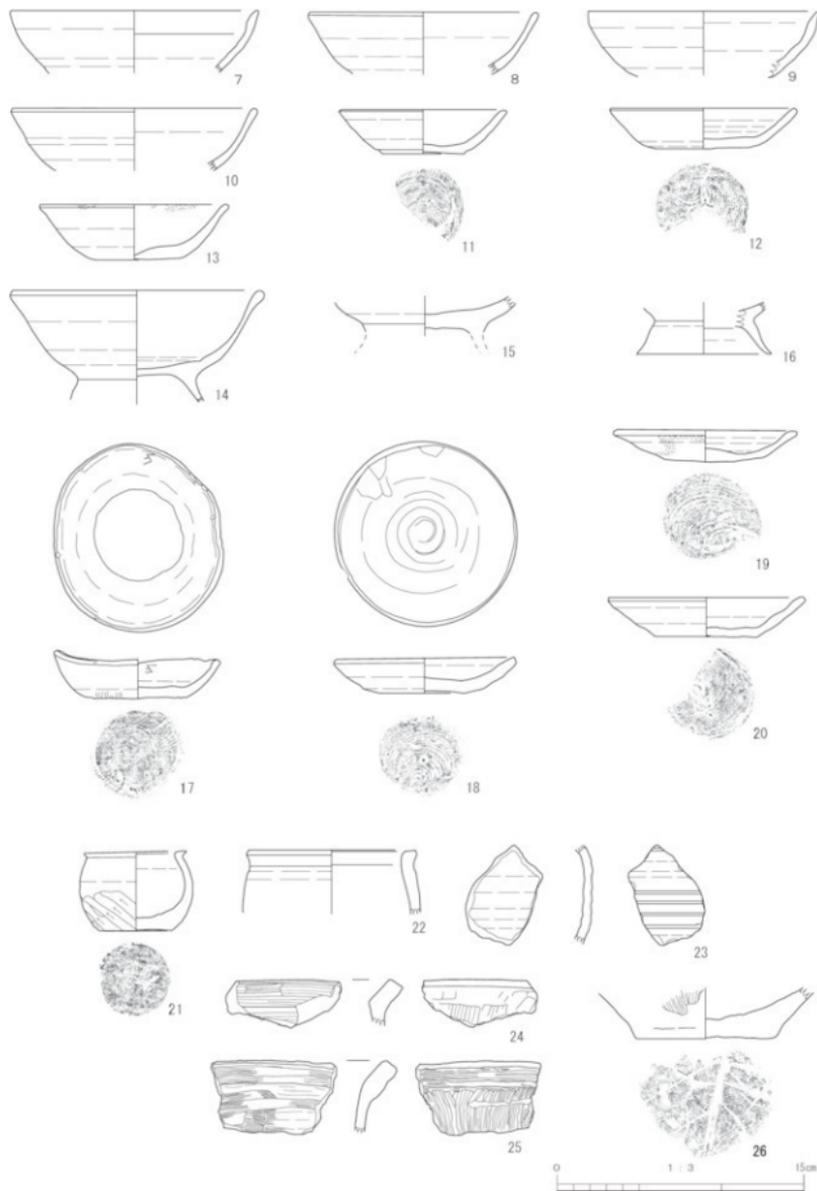
S I 1 1



第 102 圖 后畑西遺物 S I 1 0

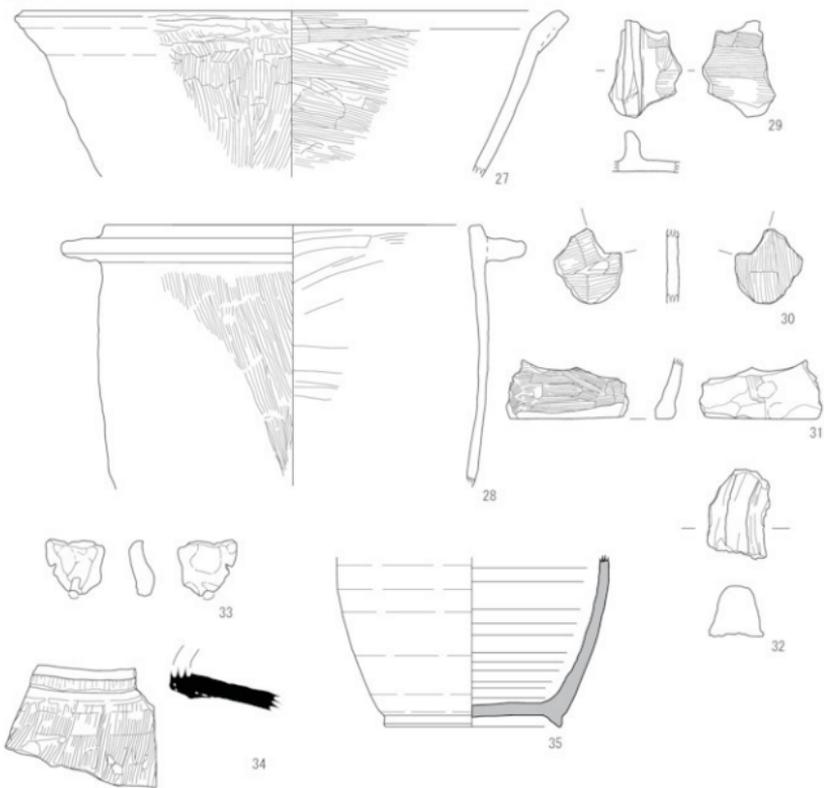


S 1 1 1

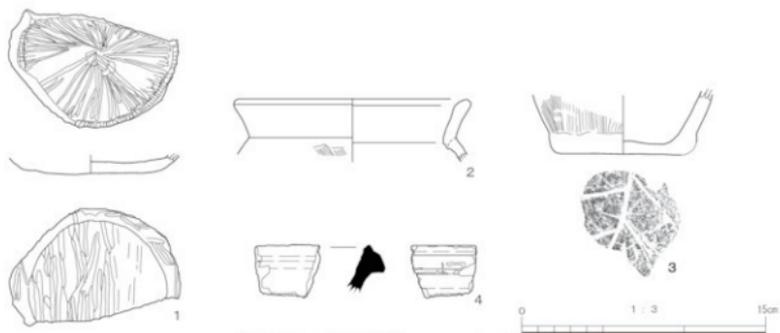


第 103 图 后畑西遺物 S 1 1 1

S I 1 1

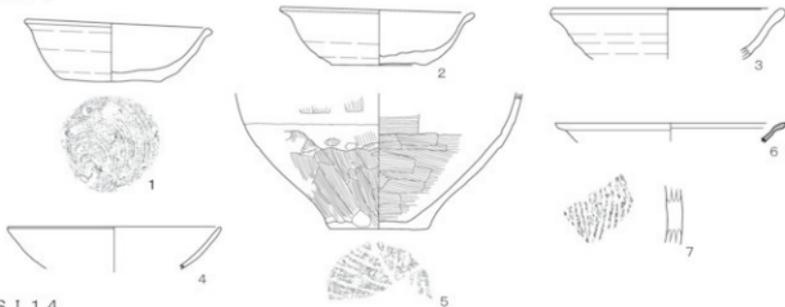


S I 1 2

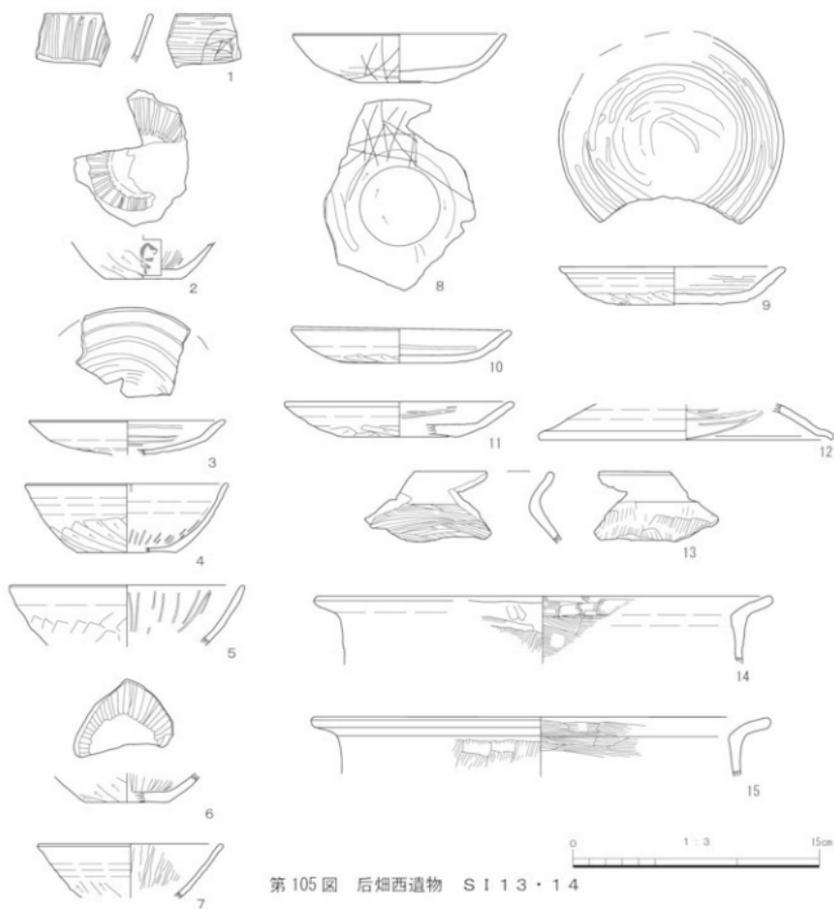


第 104 图 后畑西遺物 S I 1 1 · 12

SI 13

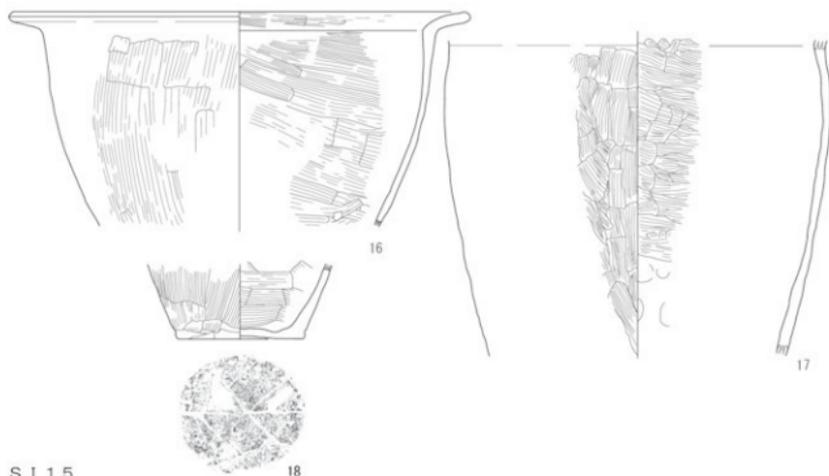


SI 14

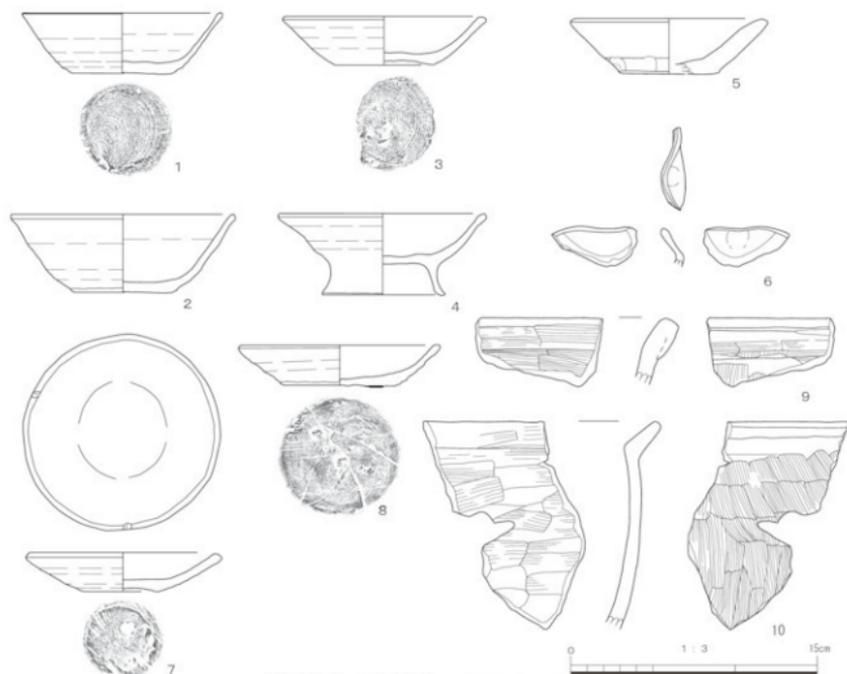


第 105 图 后畑西遺物 SI 13 · 14

S I 14

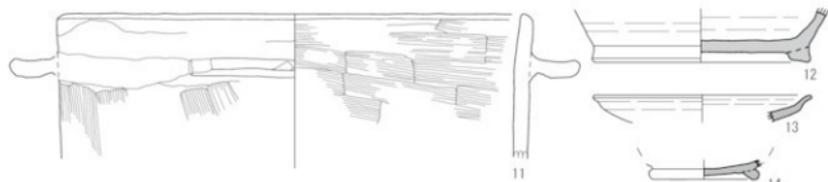


S I 15

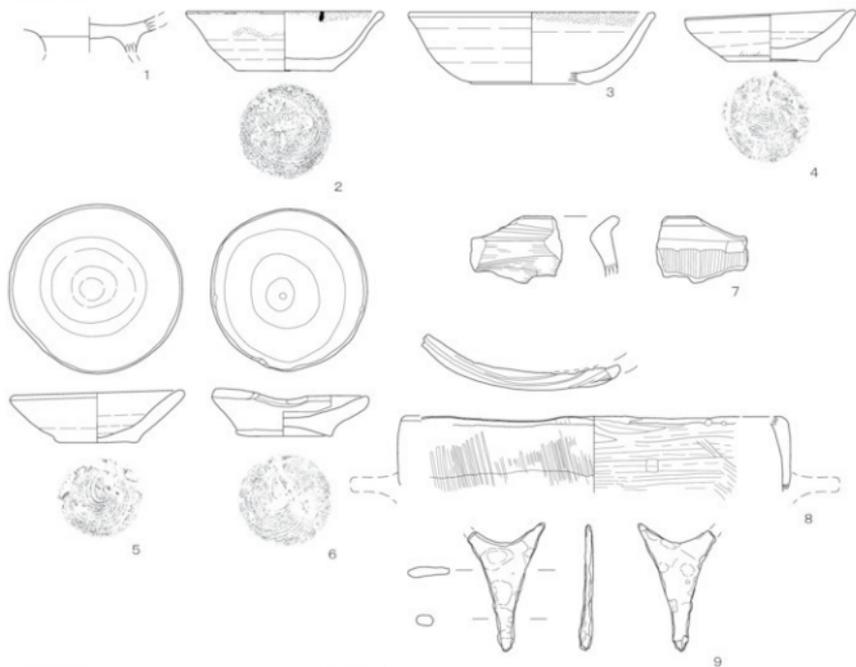


第106図 后畑西遺物 S I 14・15

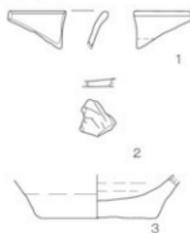
S 115



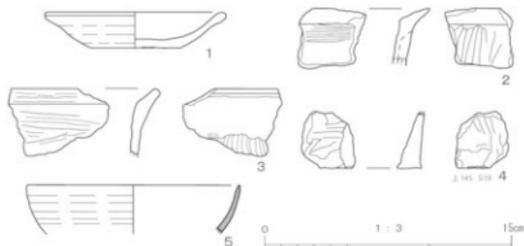
S 116



S 117

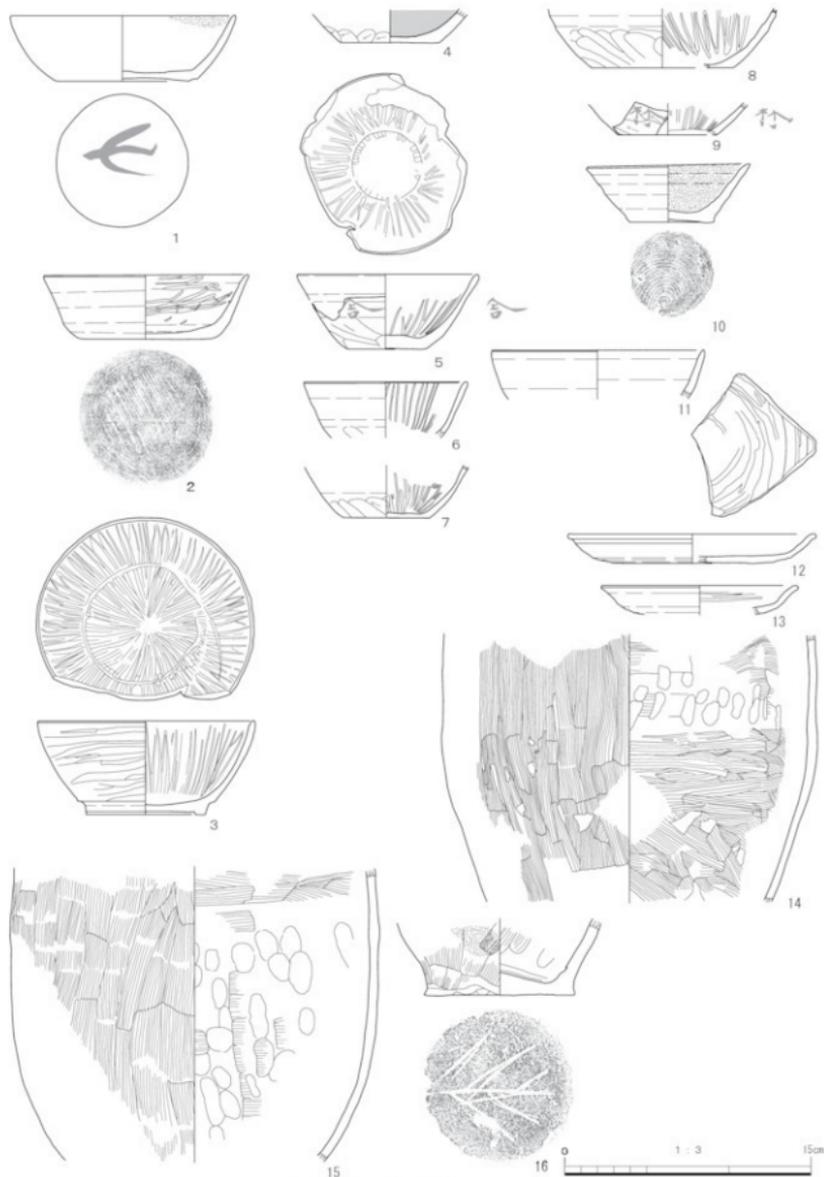


S 119



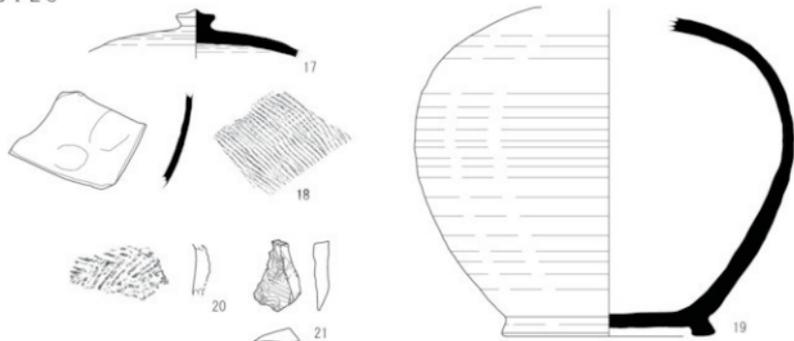
第 107 图 后畑西遺物 S 115~17・19

S 120



第108圖 后畑西遺物 S 120

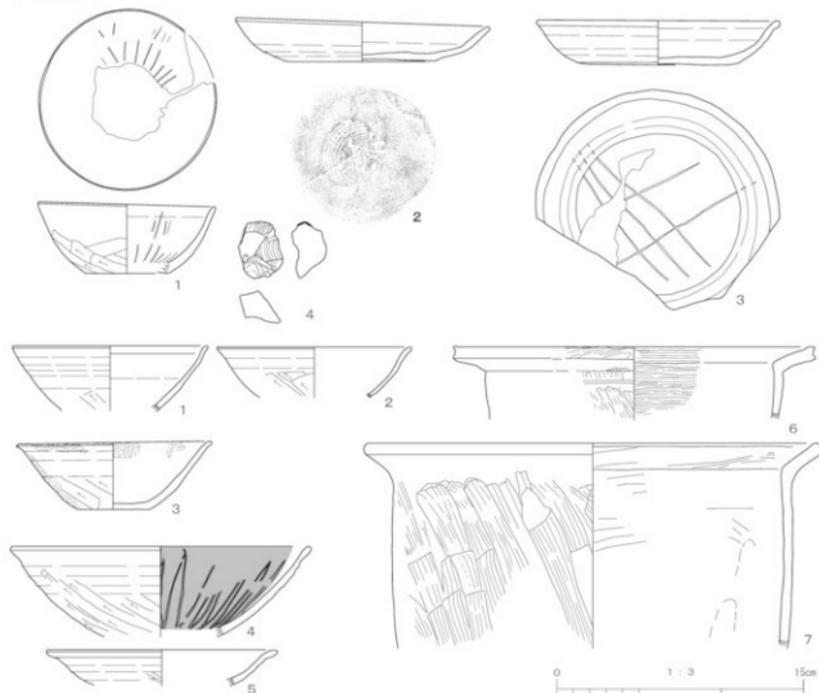
S I 2 0



S I 2 1

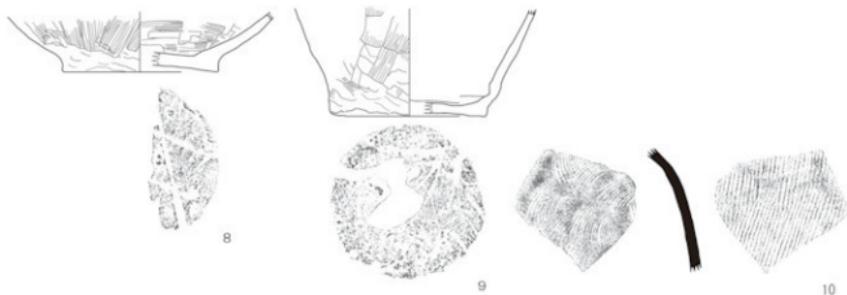


S I 2 2

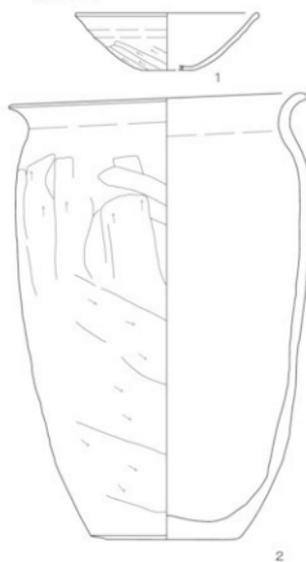


第 109 图 后畑西遺物 S I 2 0 · 2 1 · 2 2

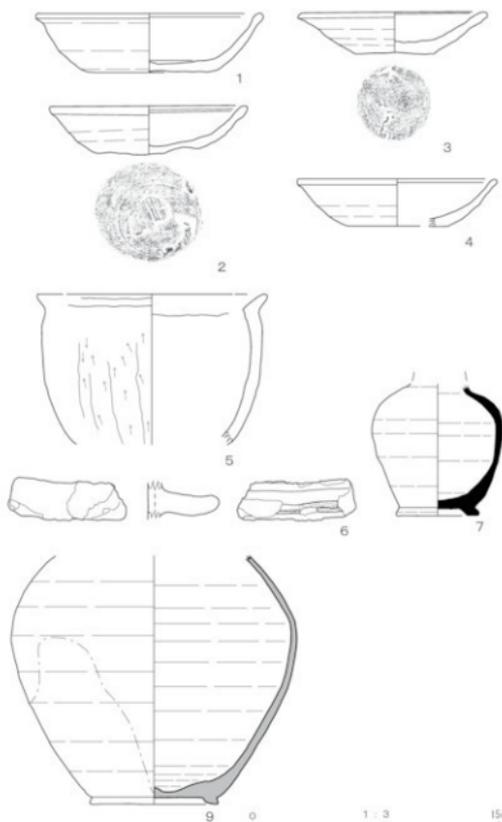
S 1 2 3



S 1 2 4



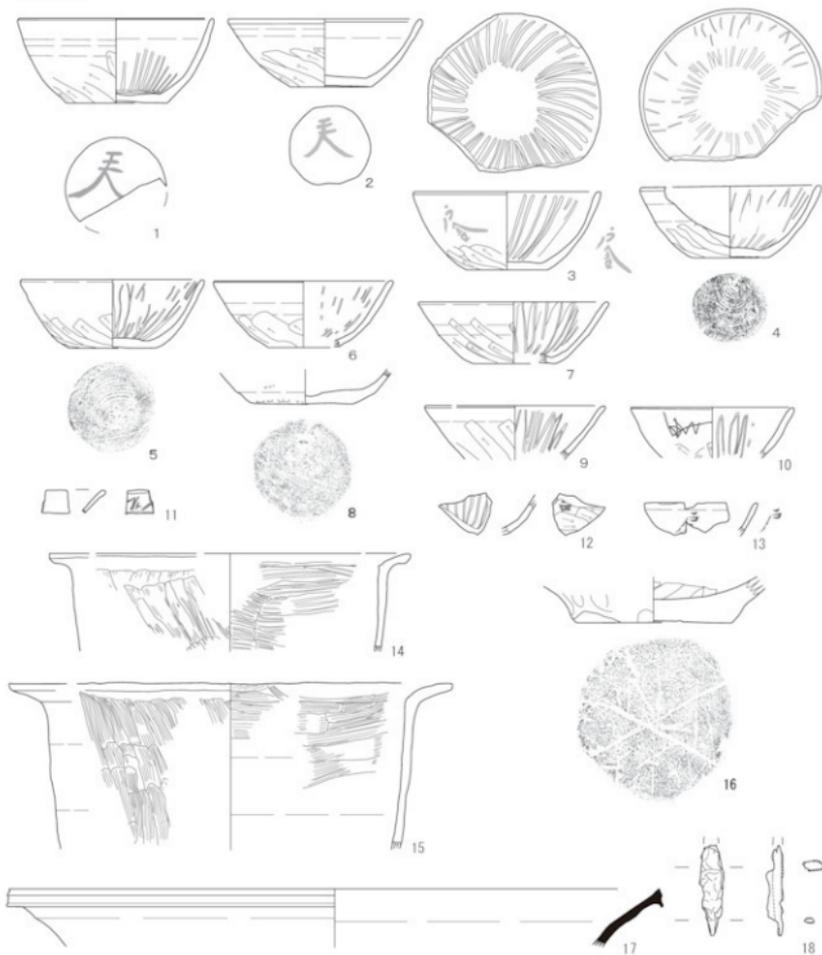
S 1 2 5



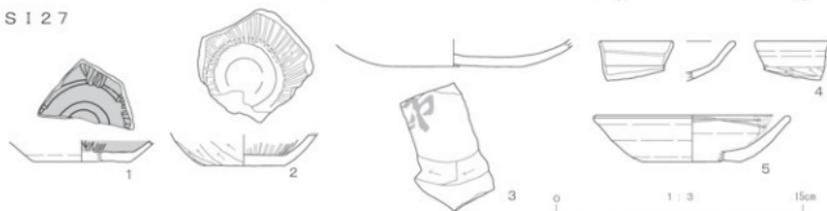
第 110 图 后畑西遺物 S 1 2 3 · 2 4 · 2 5



S 1 2 6

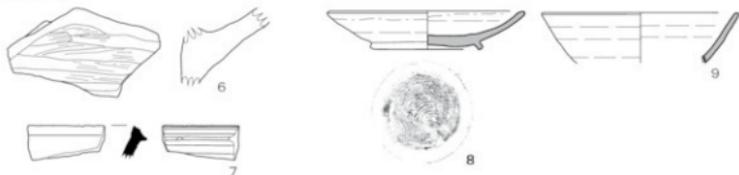


S 1 2 7

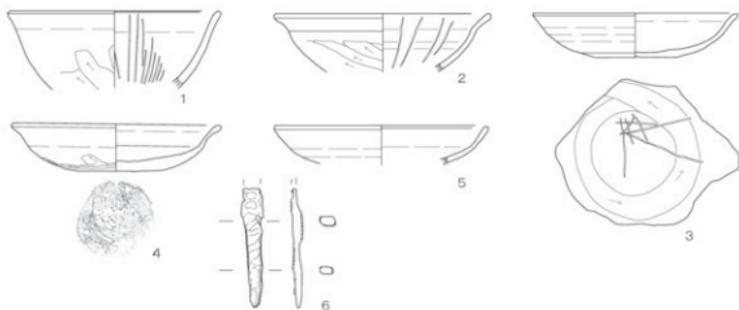


第 111 图 后畑西遺物 S 1 2 6 · 2 7

S I 27



S I 28



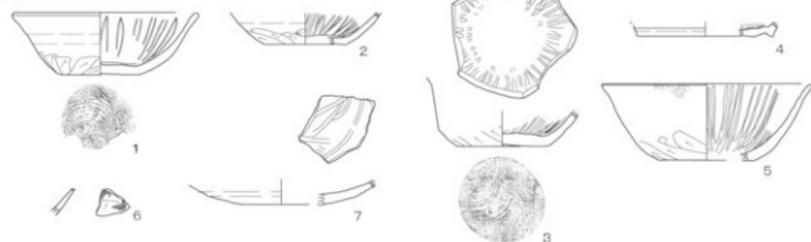
S I 29



S I 30

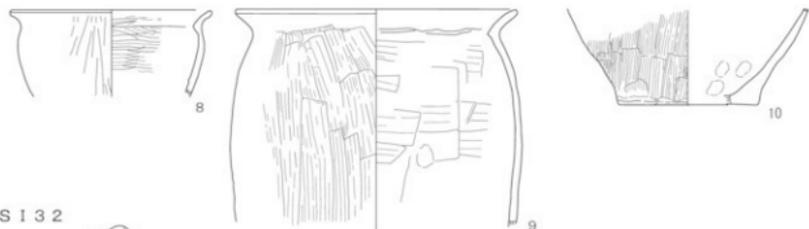


S I 31

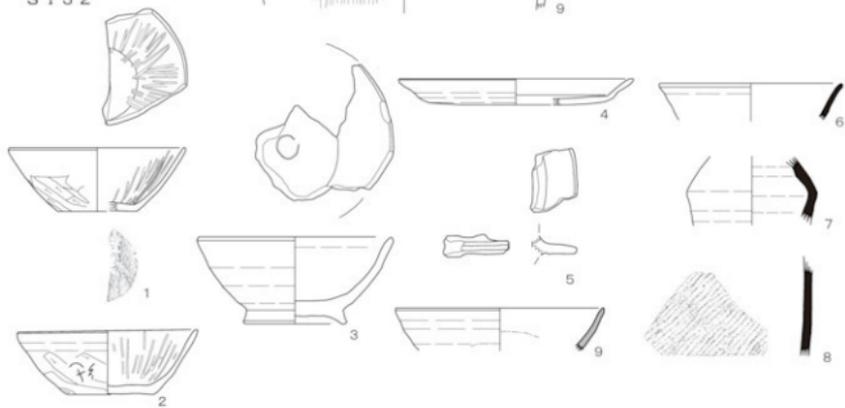


第112図 后畑西遺物 S I 27~31

S 131



S 132

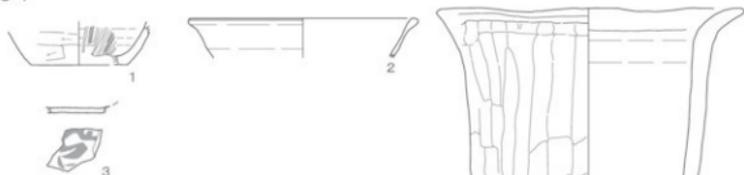


S 133

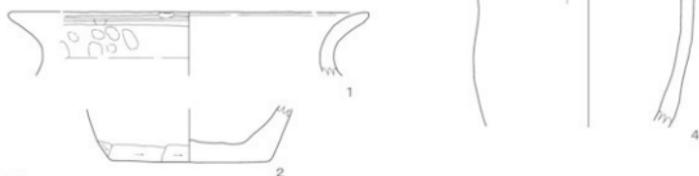


第 113 图 后畑西遺物 S 131 · 32 · 33

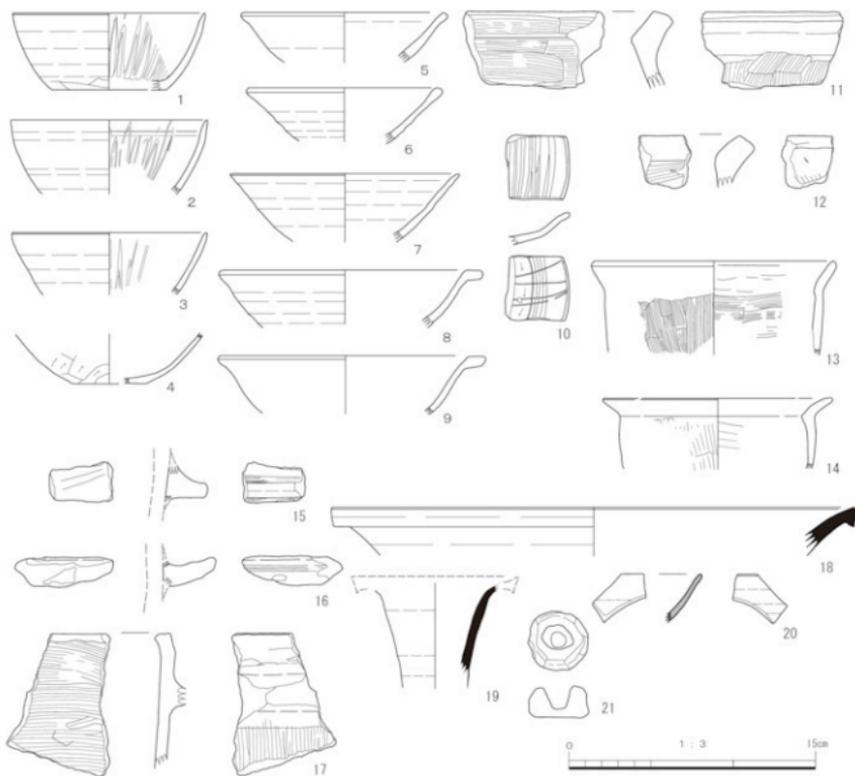
S 134



S 135

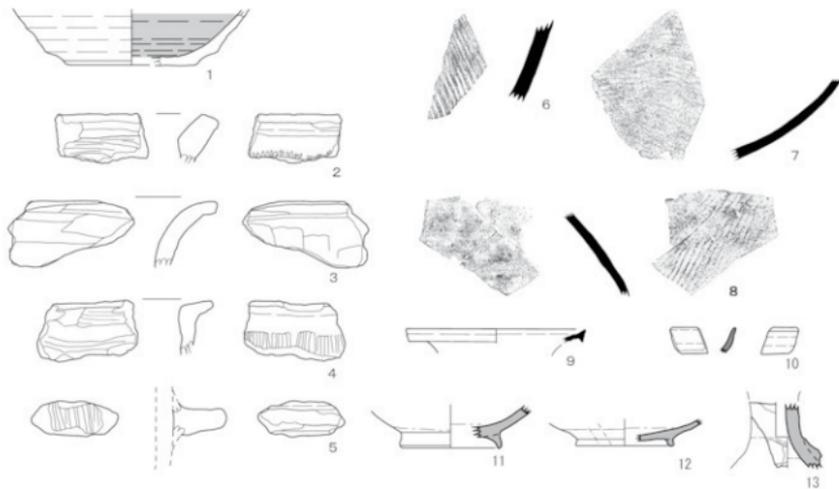


S 137

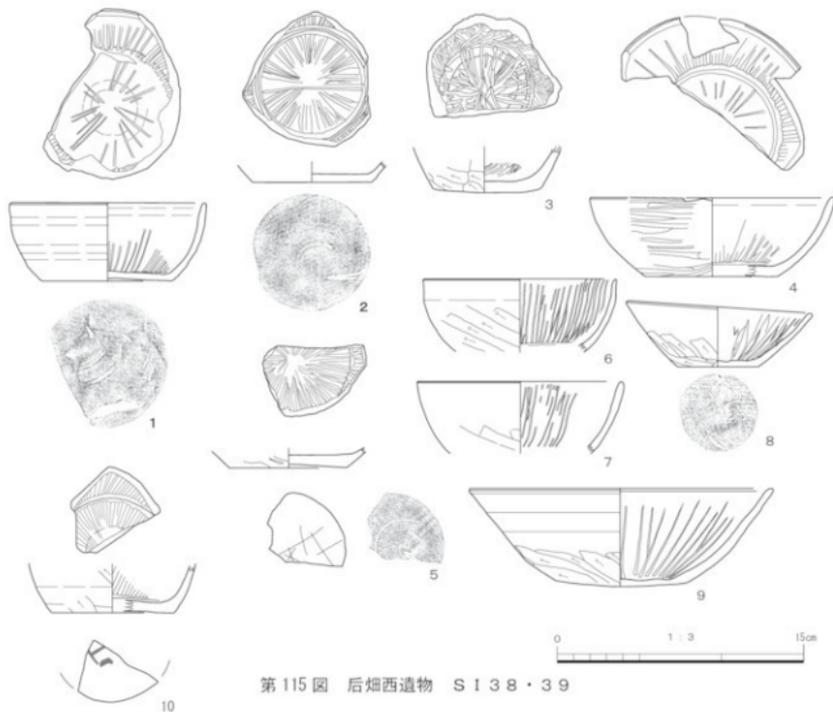


第 114 图 后畑西遺物 S 134 · 35 · 37

S 138



S 139



第 115 圖 后畑西遺物 S 138 · 39

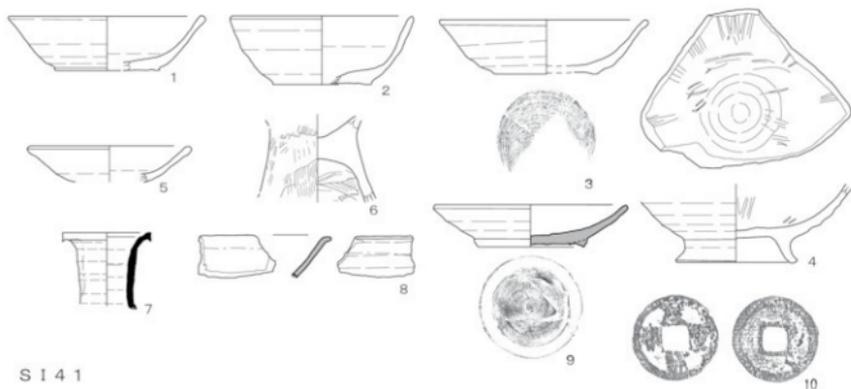
S 139



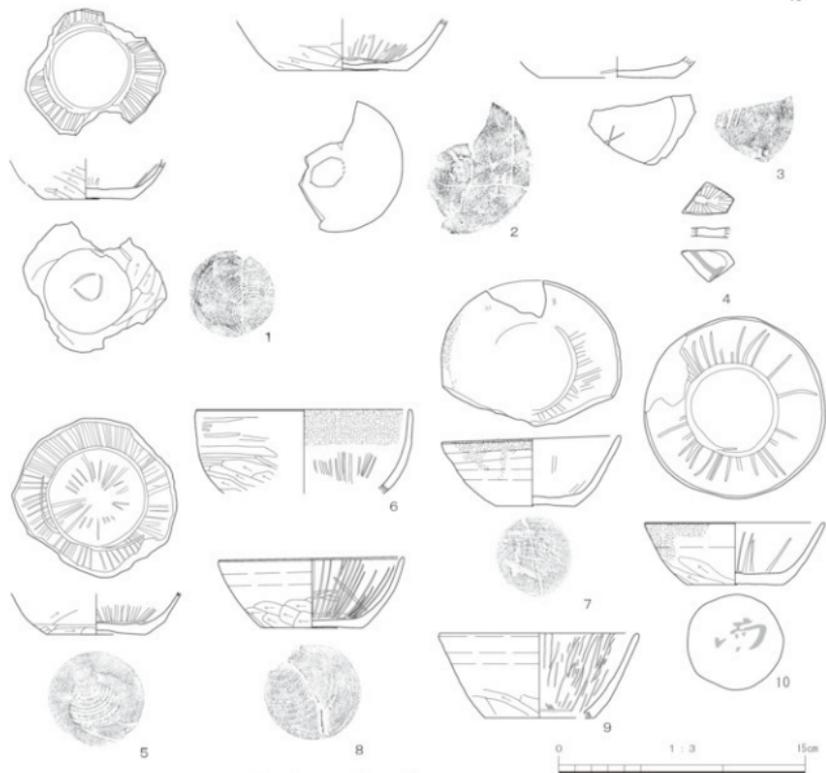
0 1 3 15cm

第 116 圖 后畑西遺物 S 139

S 140



S 141



0 1:3 15cm

第 117 图 后畑西遺物 S 140 · 4 1

S I 4 1

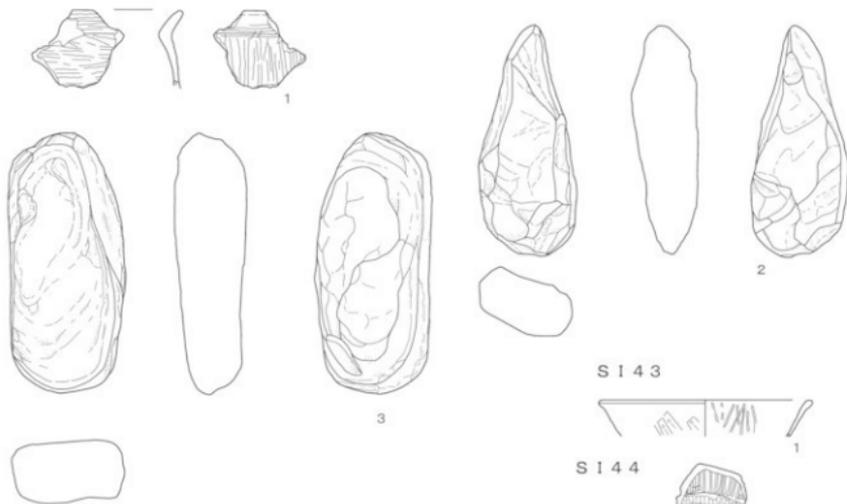


第118圖 后畑西遺物 S I 4 1

S I 4 1



S I 4 2



S I 4 3



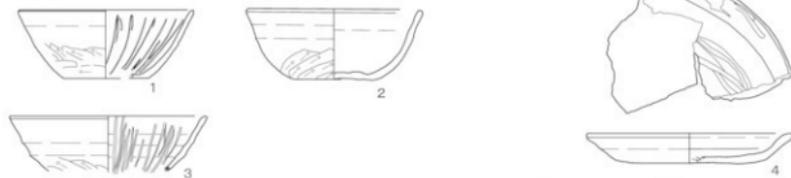
S I 4 4



S I 4 5

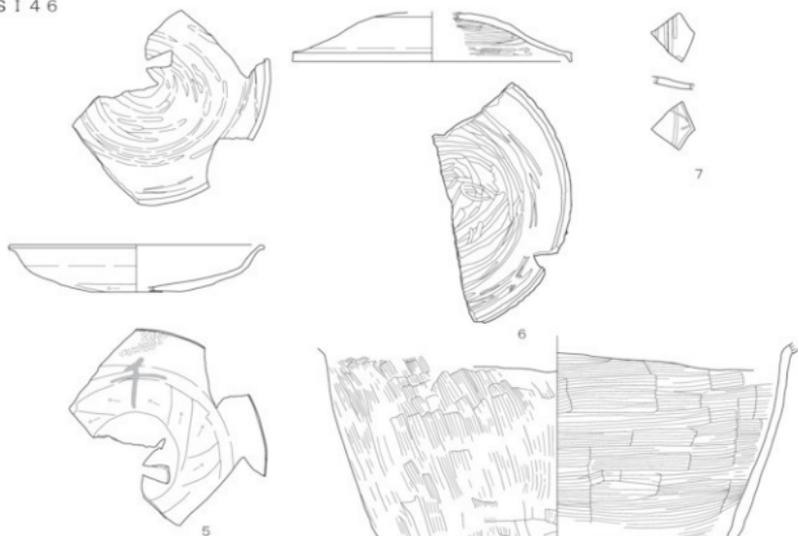


S I 4 6

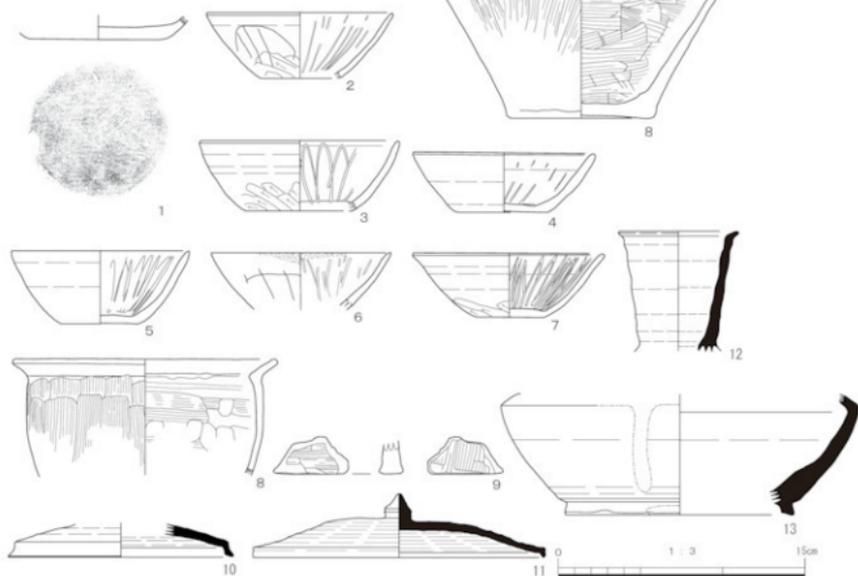


第 119 图 后畑西遺物 S I 4 1 ~ 4 6

S 146



S 147

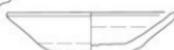
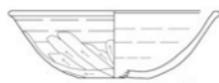
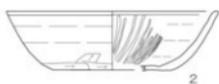


第 120 图 后畑西遺物 S 146・47

S 1 4 8



S 1 4 9



4



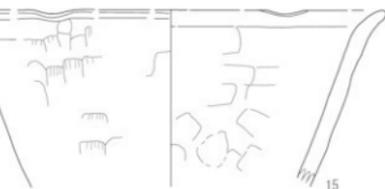
11



12



13



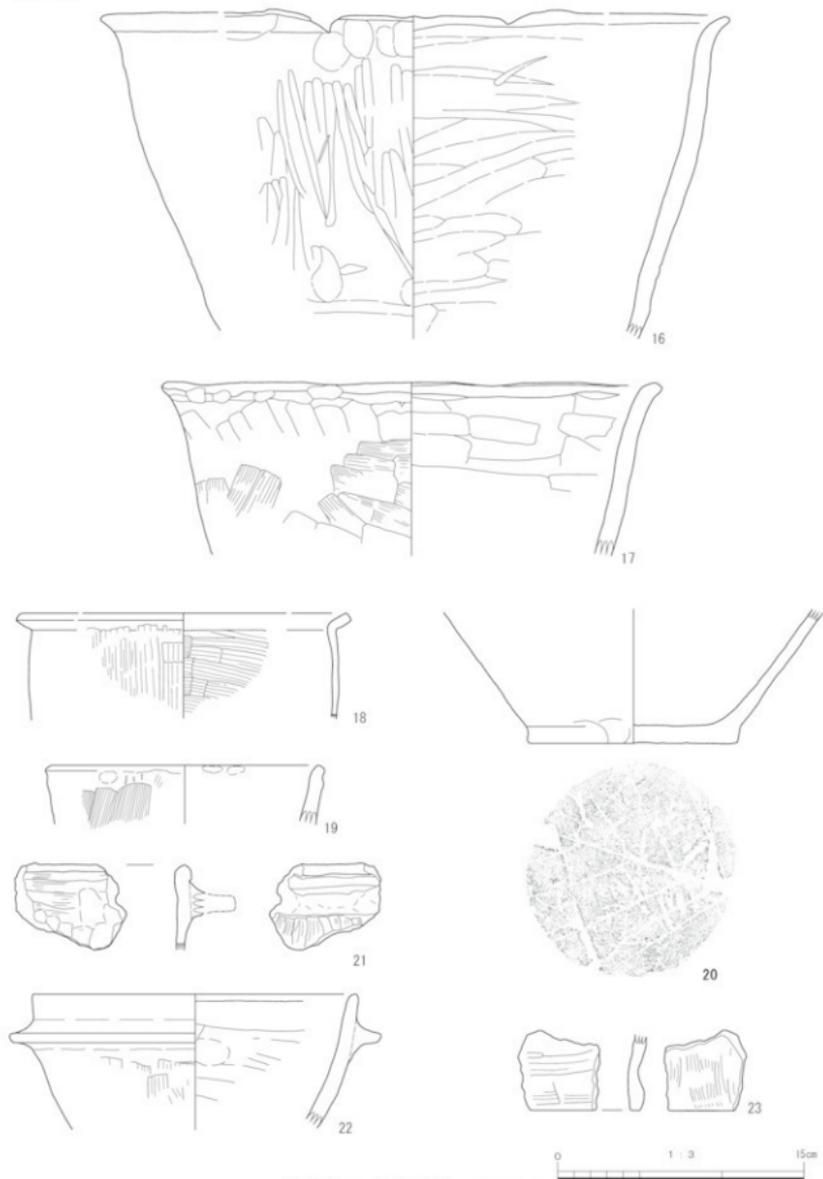
15

14



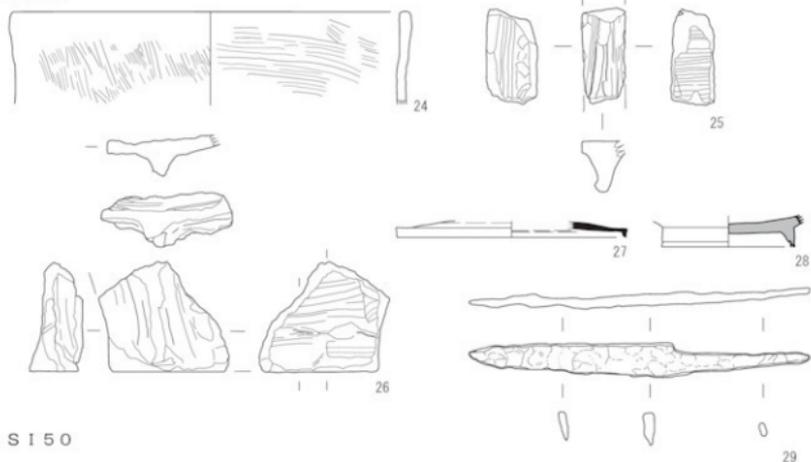
第 121 图 后畑西遺物 S 1 4 8 · 4 9

S 149

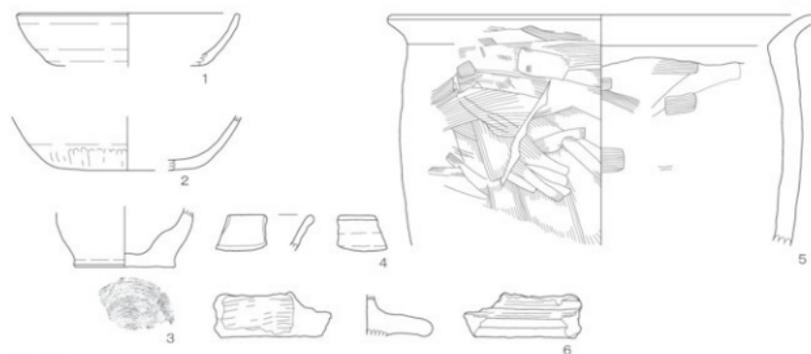


第 122 图 后畑西遺物 S 149

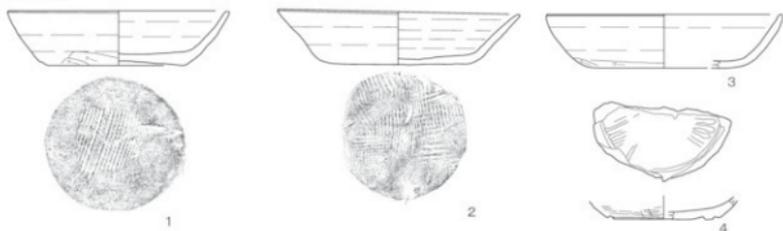
S 1 4 9



S 1 5 0

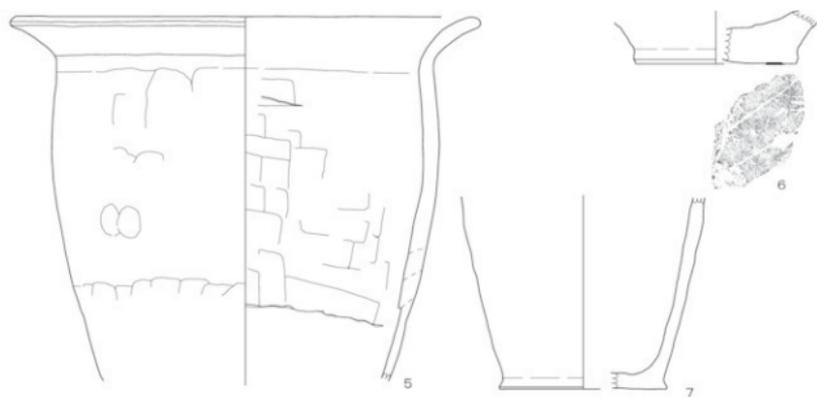


S 1 5 1

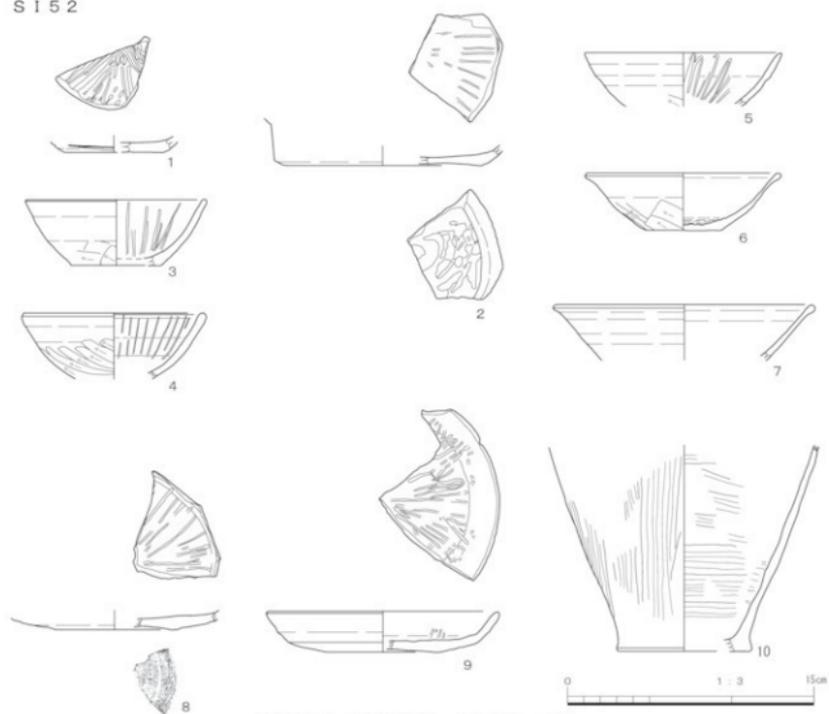


第 123 图 后畑西遺物 S 1 4 9 · 5 0 · 5 1

S 1 5 1

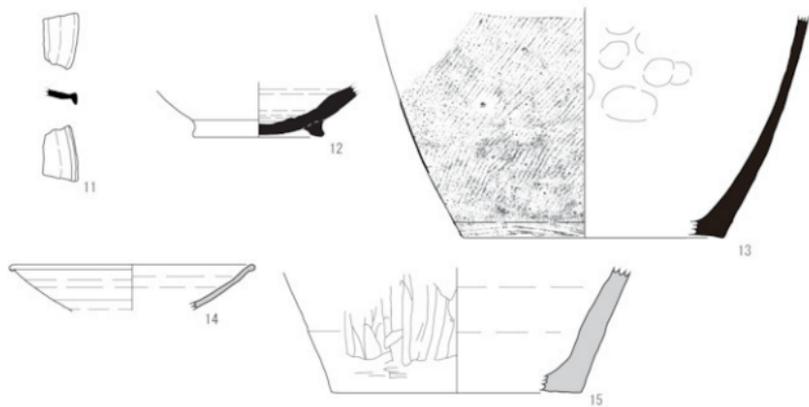


S 1 5 2

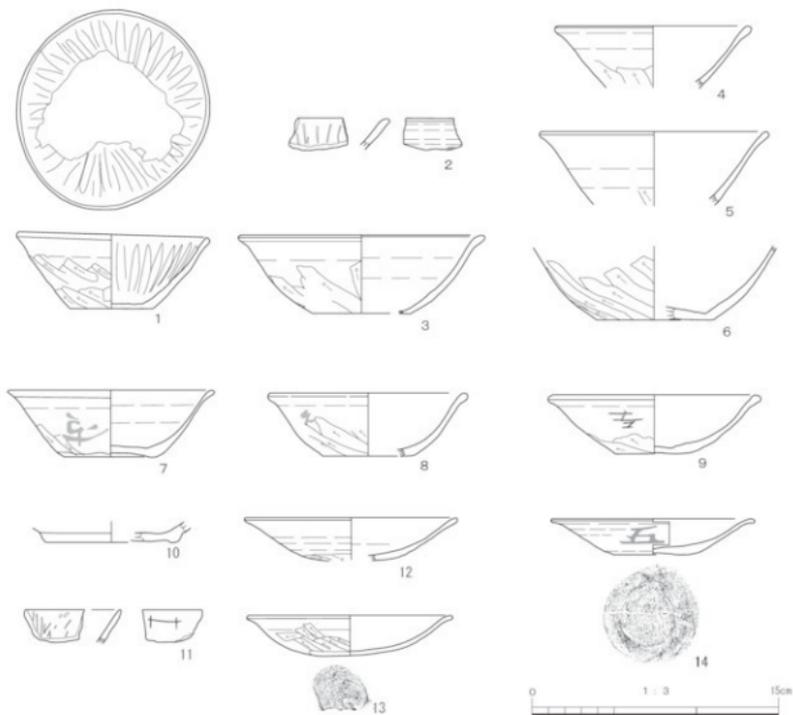


第 124 图 后畑西遺物 S 1 5 1 · 5 2

S 1 5 2

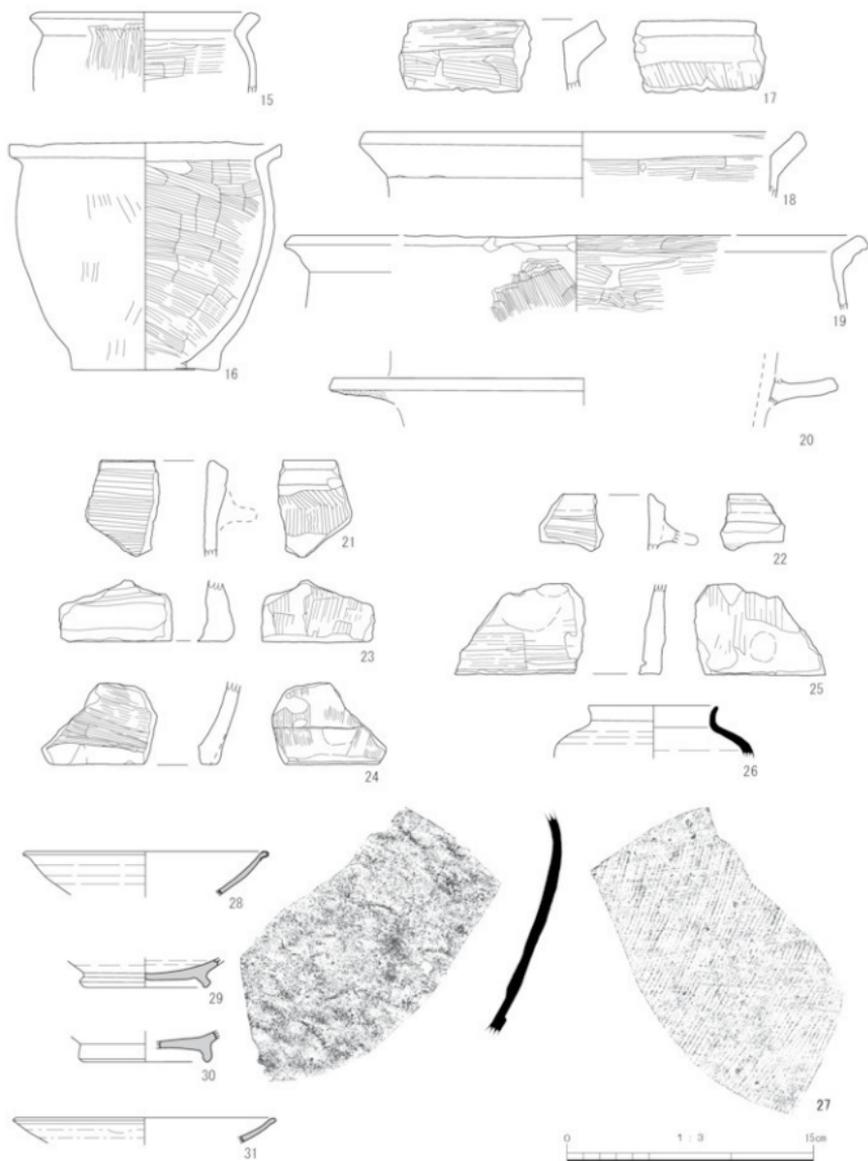


S 1 5 3



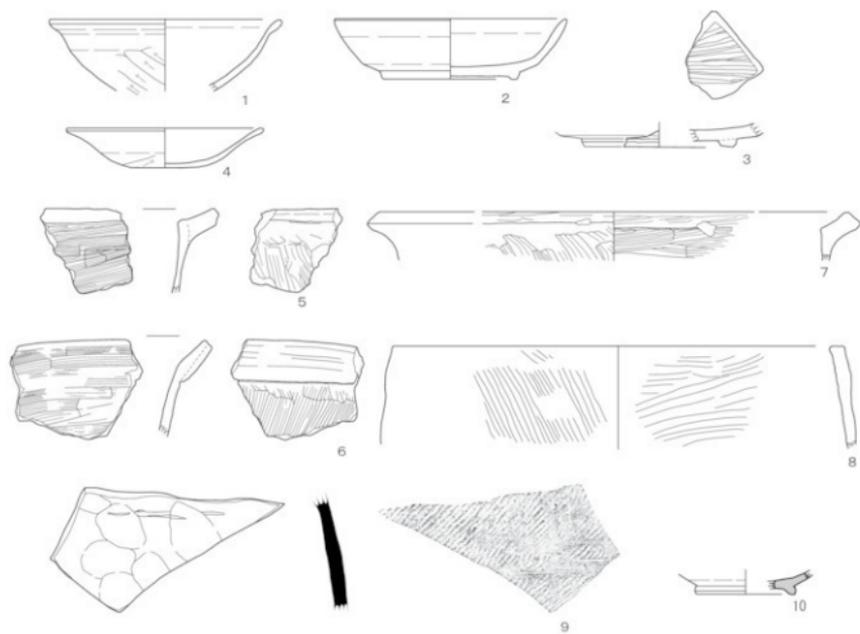
第 125 图 后畑西遺物 S 1 5 2 · 5 3

S 153

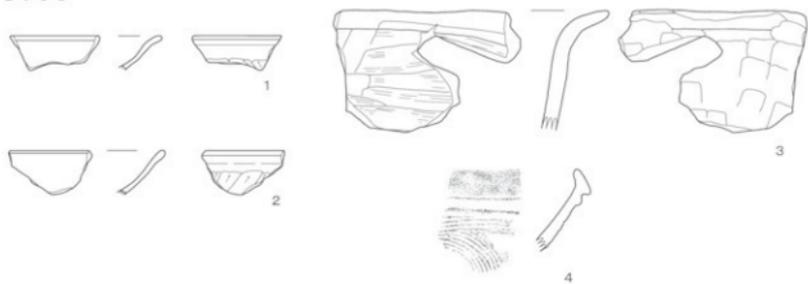


第 126 图 后畑西遺物 S 153

S 154



S 155

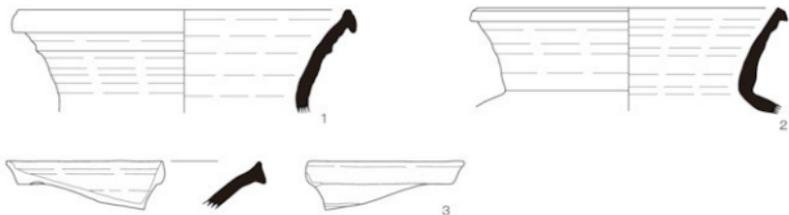


S 156



第 127 圖 后畑西遺物 S 154・55・56

14溝



SK 8



SK 9



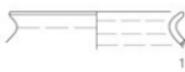
SK 12



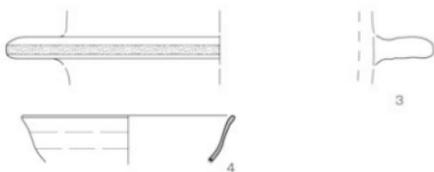
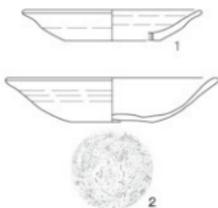
SK 13



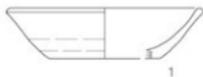
SK 14



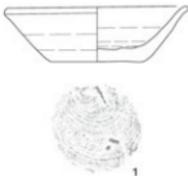
SK 25



SK 29

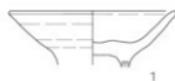


SK 30



第 128 図 后畑西遺物 14溝・SK

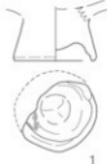
SK 36



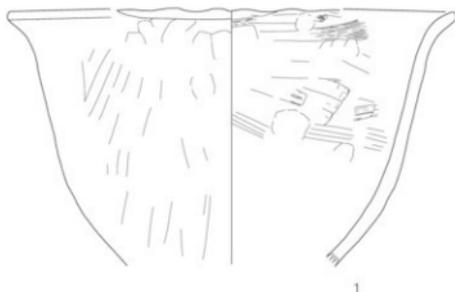
SK 44



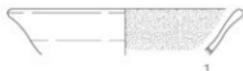
SK 54



SK 59



SK 65



SK 70



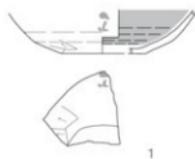
SP 11



SP 16



SP 64



SP 71



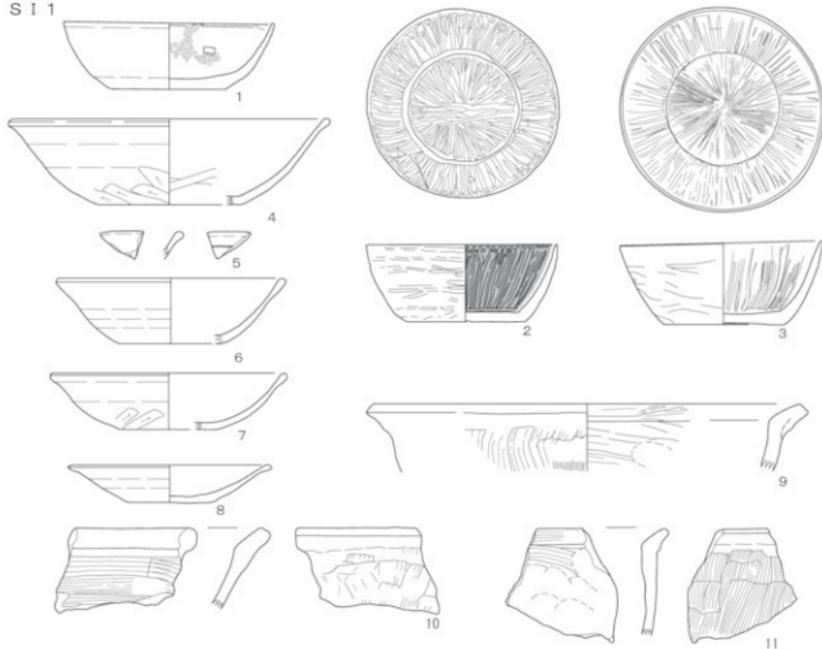
第129图 后畑西遺物 SK・SP

遺構外

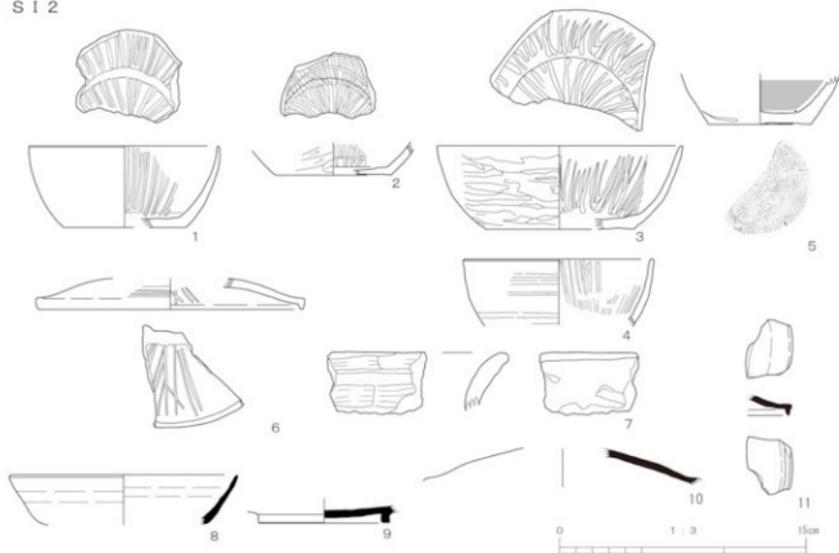


第130図 后畑西遺物 遺構外

S I 1

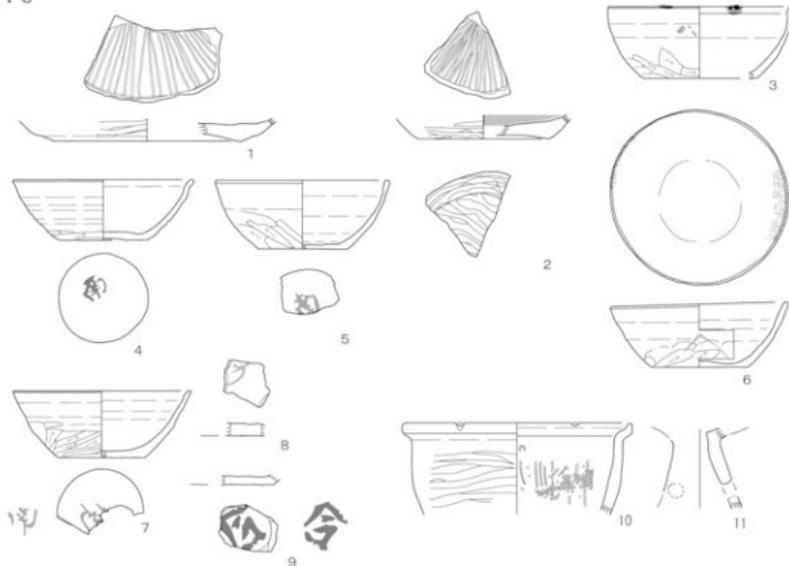


S I 2

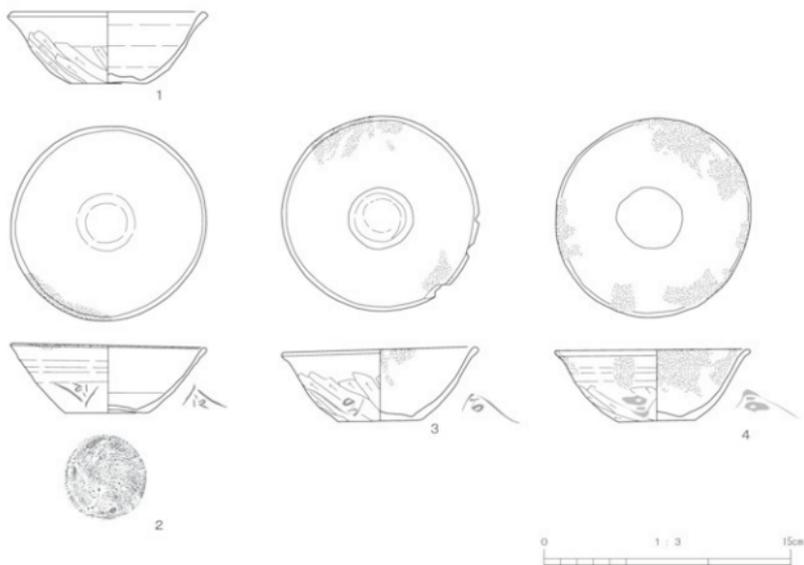


第 131 図 ケカ子遺物 S I 1・2

S 13

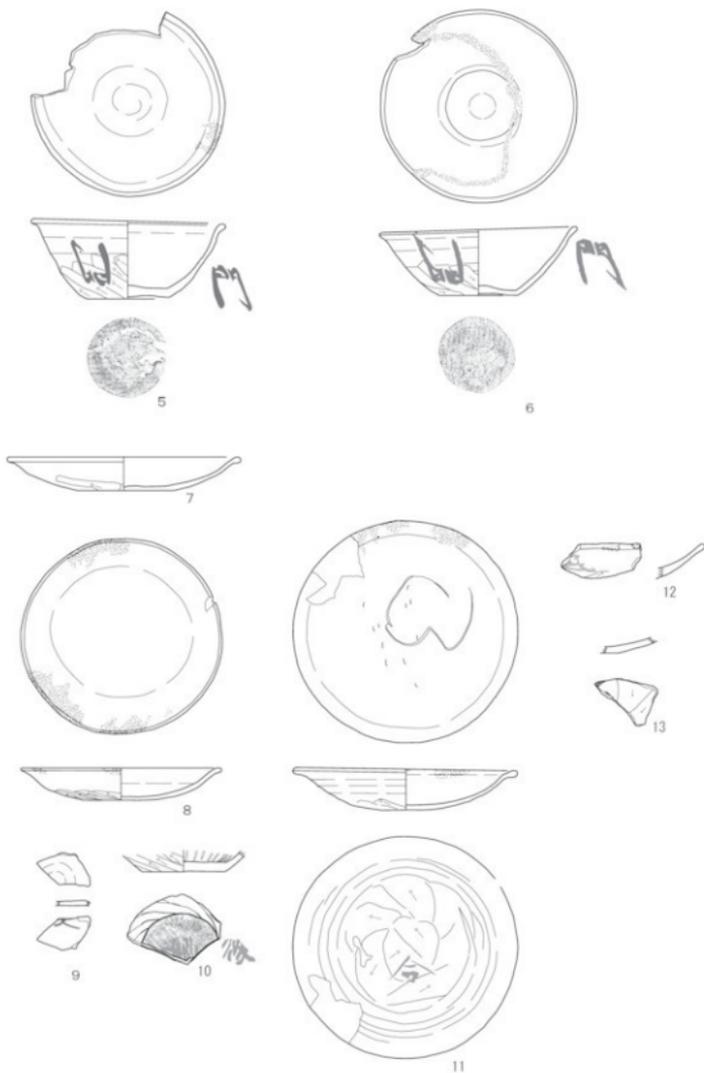


S 14



第132図 ケカ子遺物 S 13・4

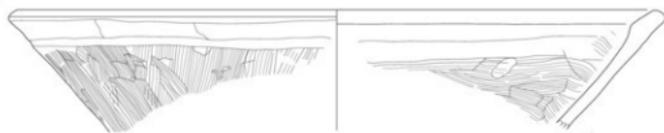
S 1 4



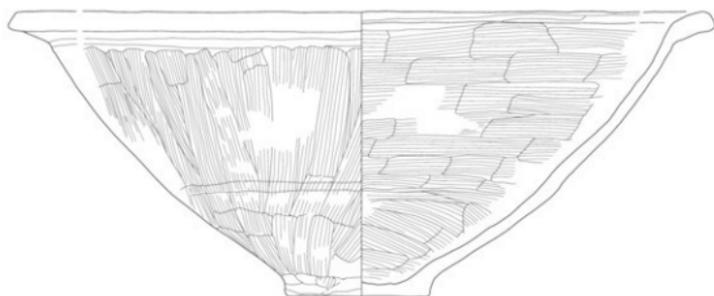
第 133 図 ケカチ遺物 S 1 4



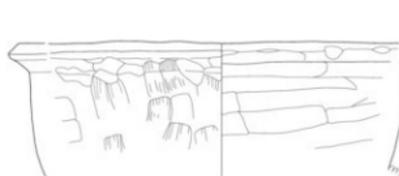
S I 4



14



15



16



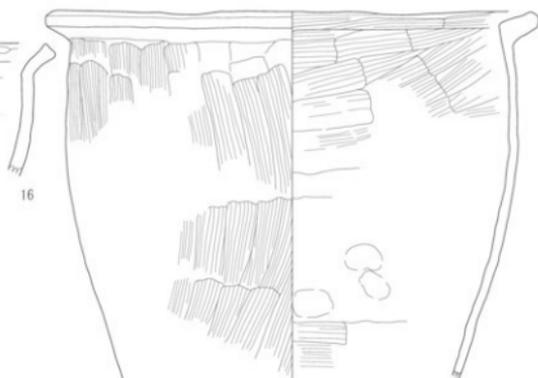
18



19



20

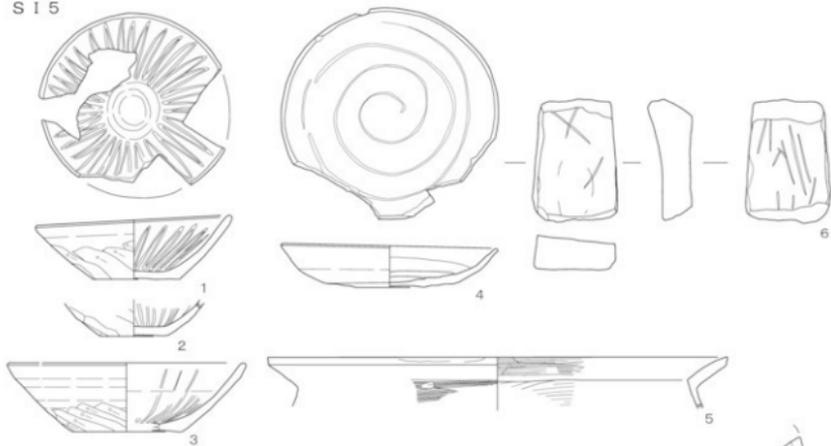


17

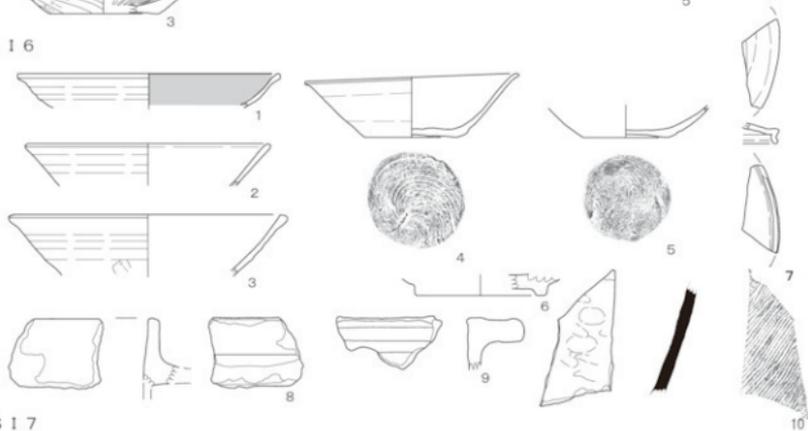


第134図 ケカ子遺物 S I 4

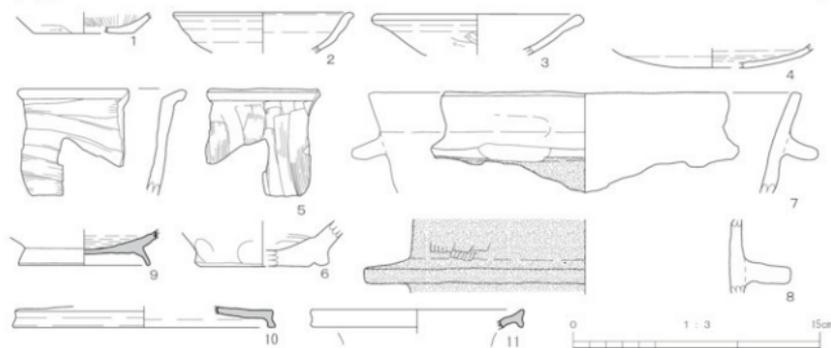
S 15



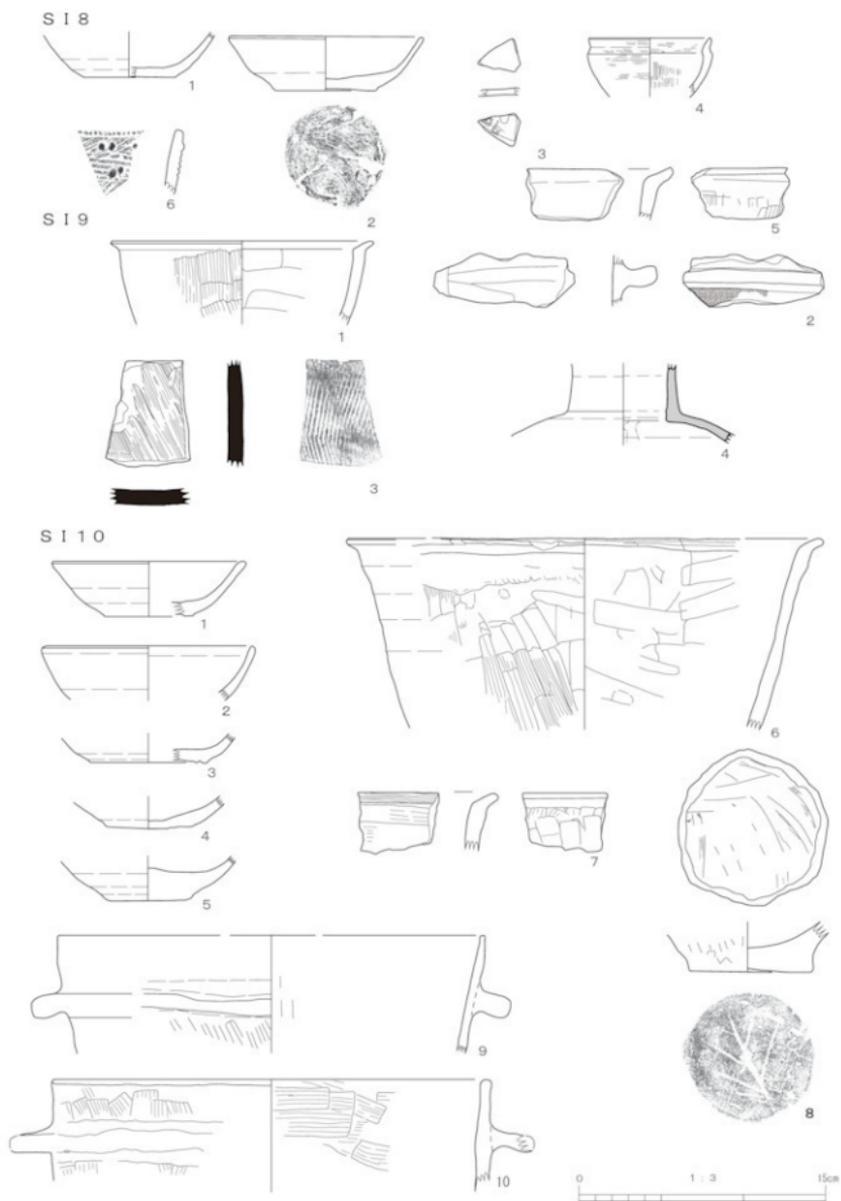
S 16



S 17

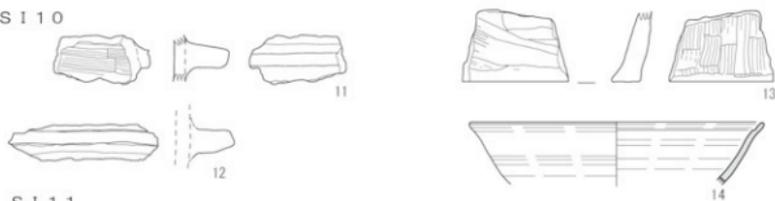


第 135 図 ケカ子遺物 S 15・6・7

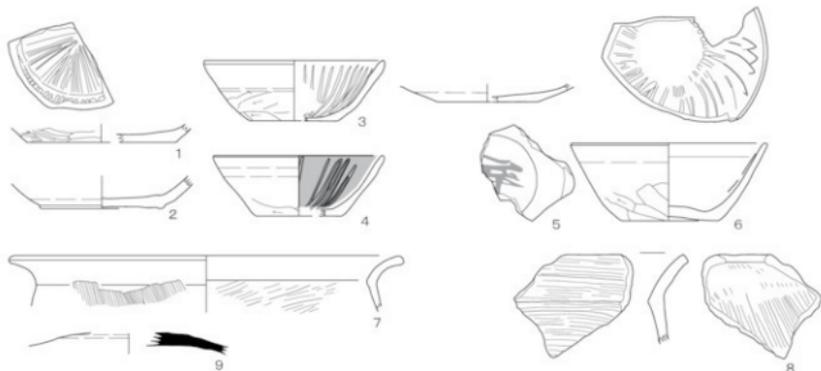


第 136 図 ケカ子遺物 S18・9・10

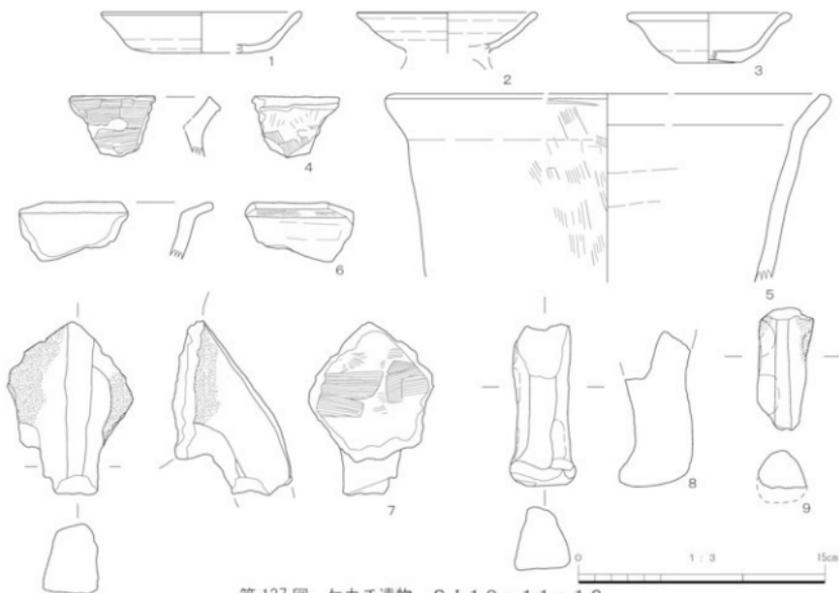
SI 110



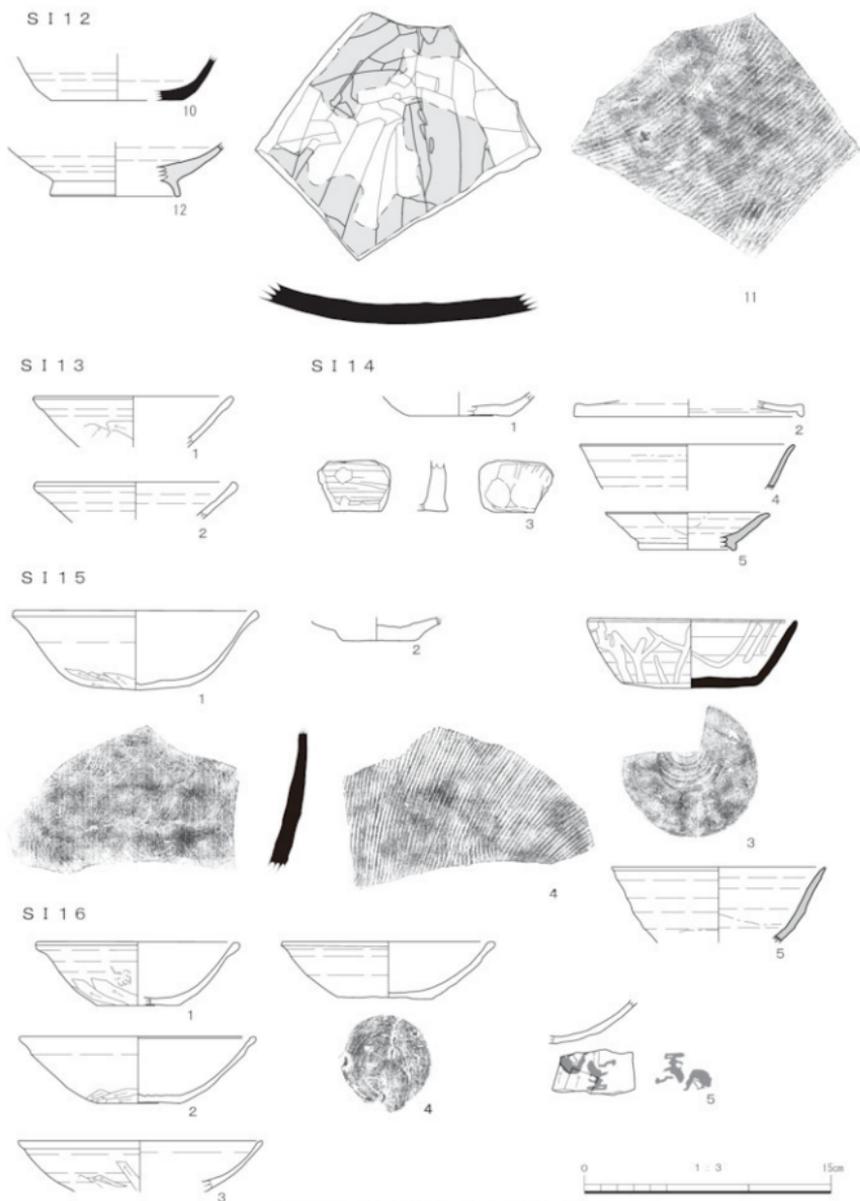
SI 111



SI 112



第 137 図 ケカチ遺物 SI 110・11・12

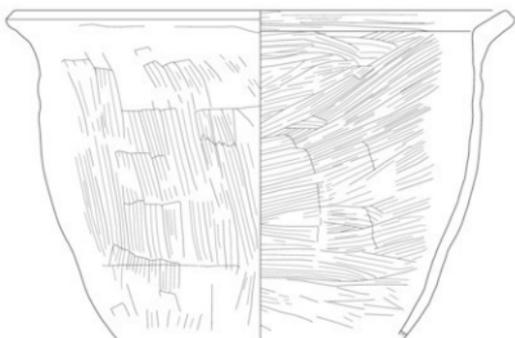


第 138 図 ケカ子遺物 S I 1 2 ~ 1 6

S116



6



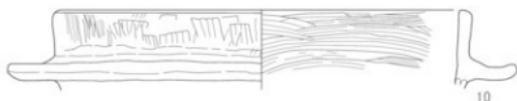
7



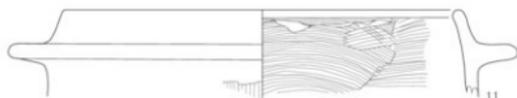
8



9

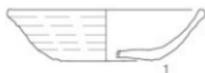


10



11

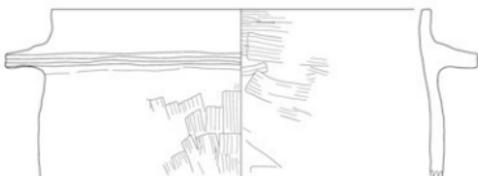
S117



1



2



3



4

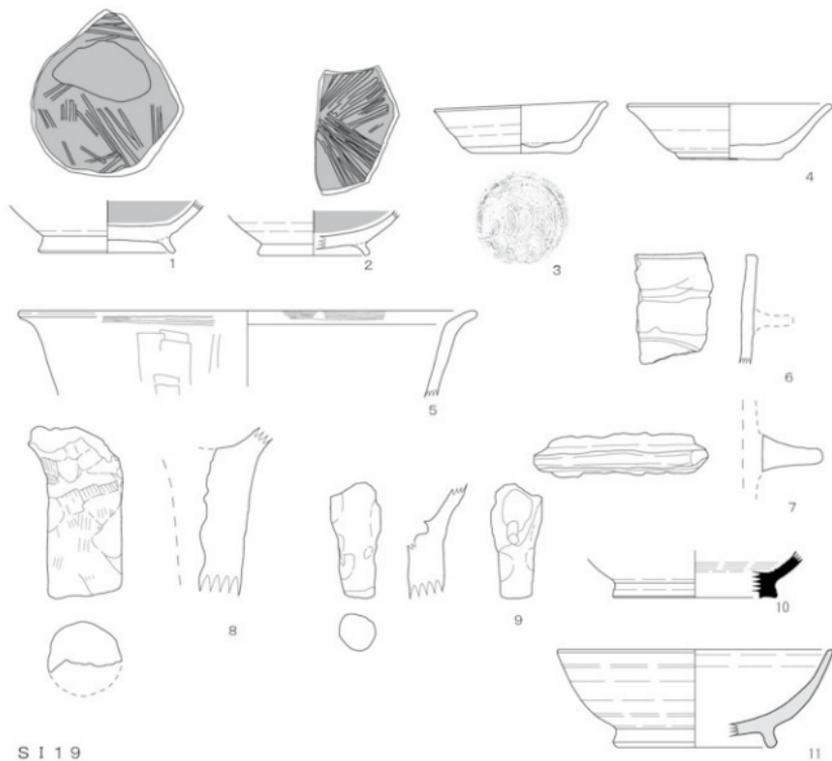


5

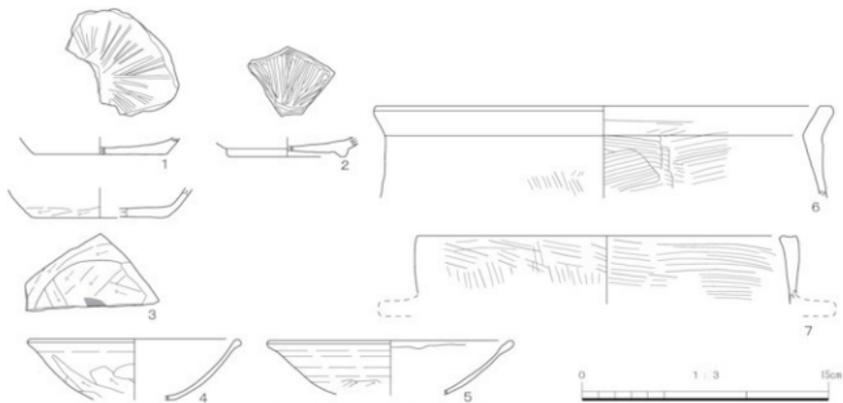


第 139 図 ケカ子遺物 S116・17

SI 18

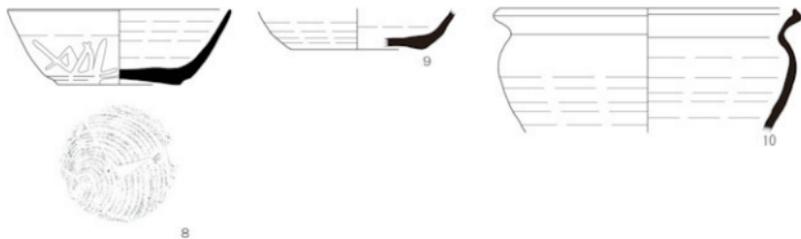


SI 19

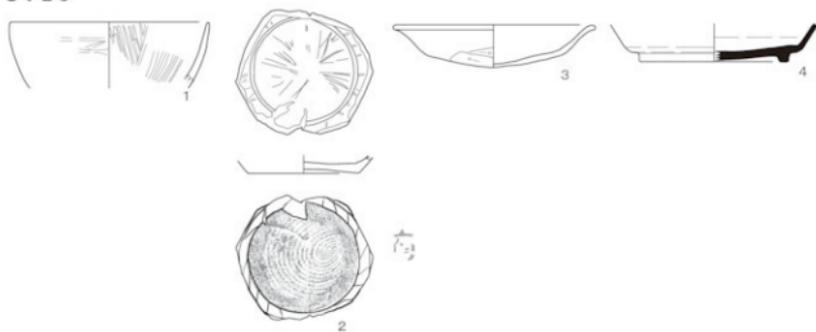


第140図 ケカ子遺物 SI 18・19

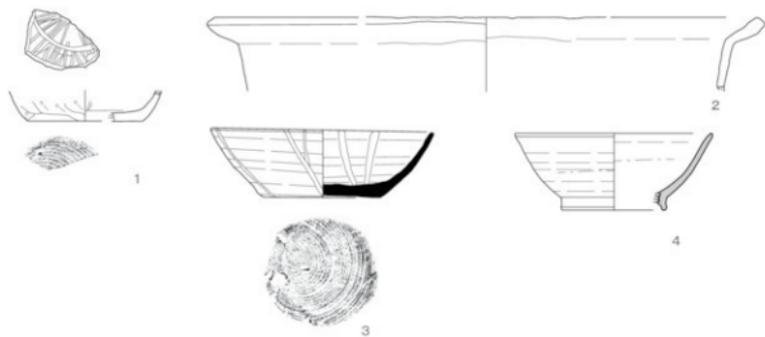
S I 19



S I 20

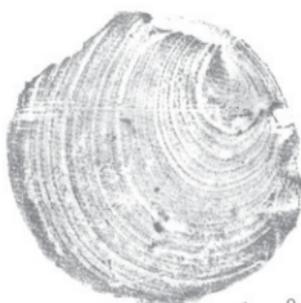


S I 21



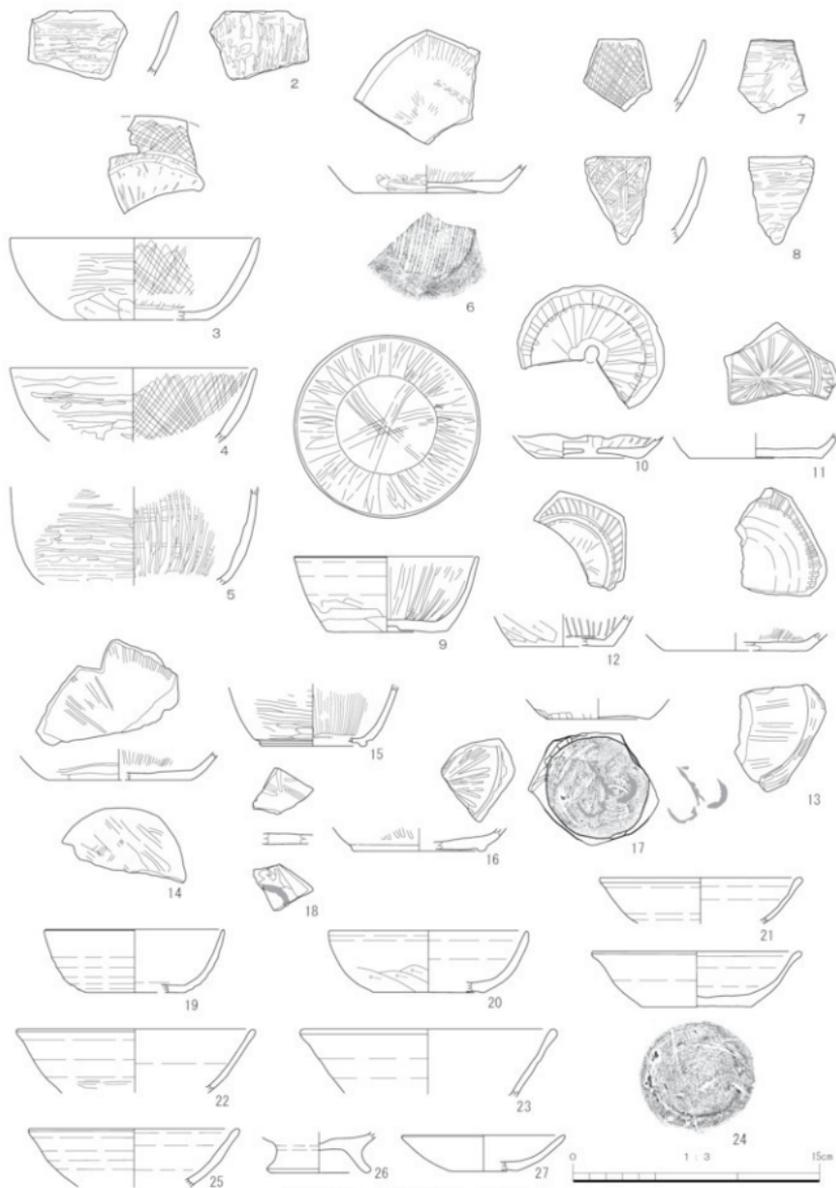
第 141 図 ケカチ遺物 S I 19・20・21

S 1 2 2



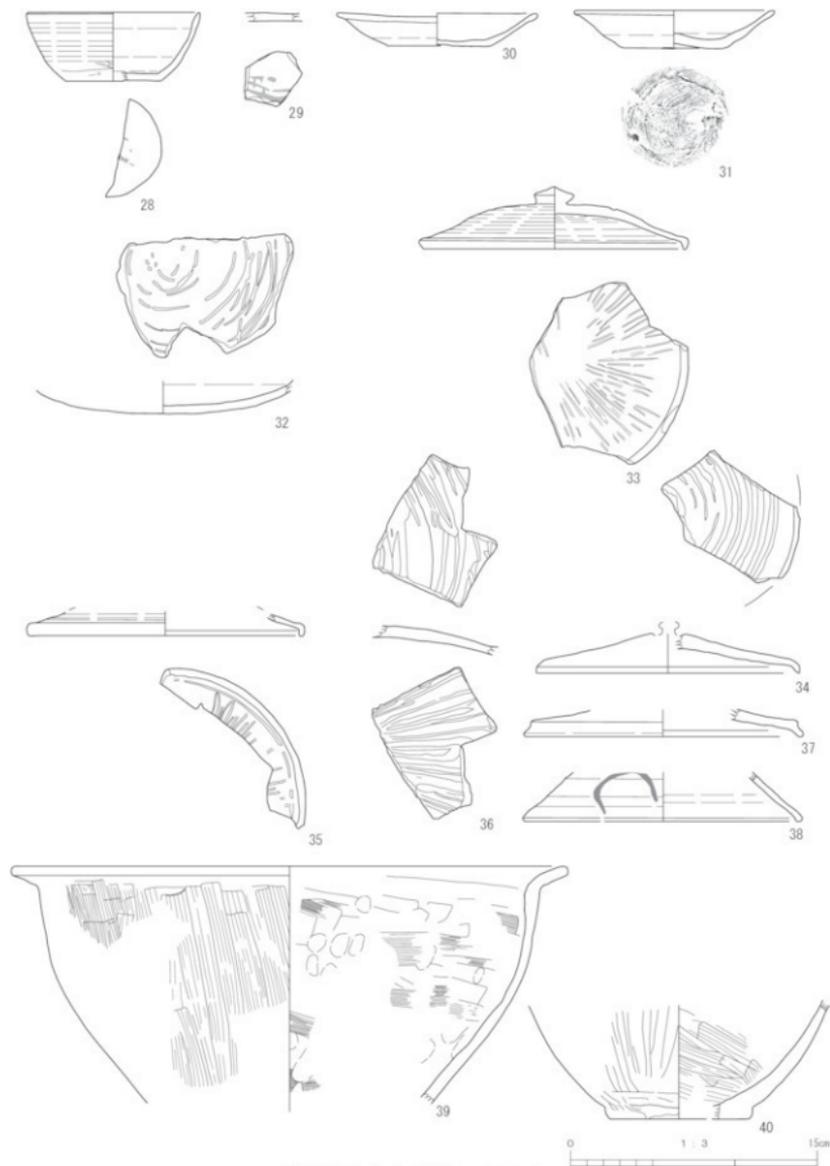
第 142 図 ケカ子遺物 S 1 2 2

S 1 2 2



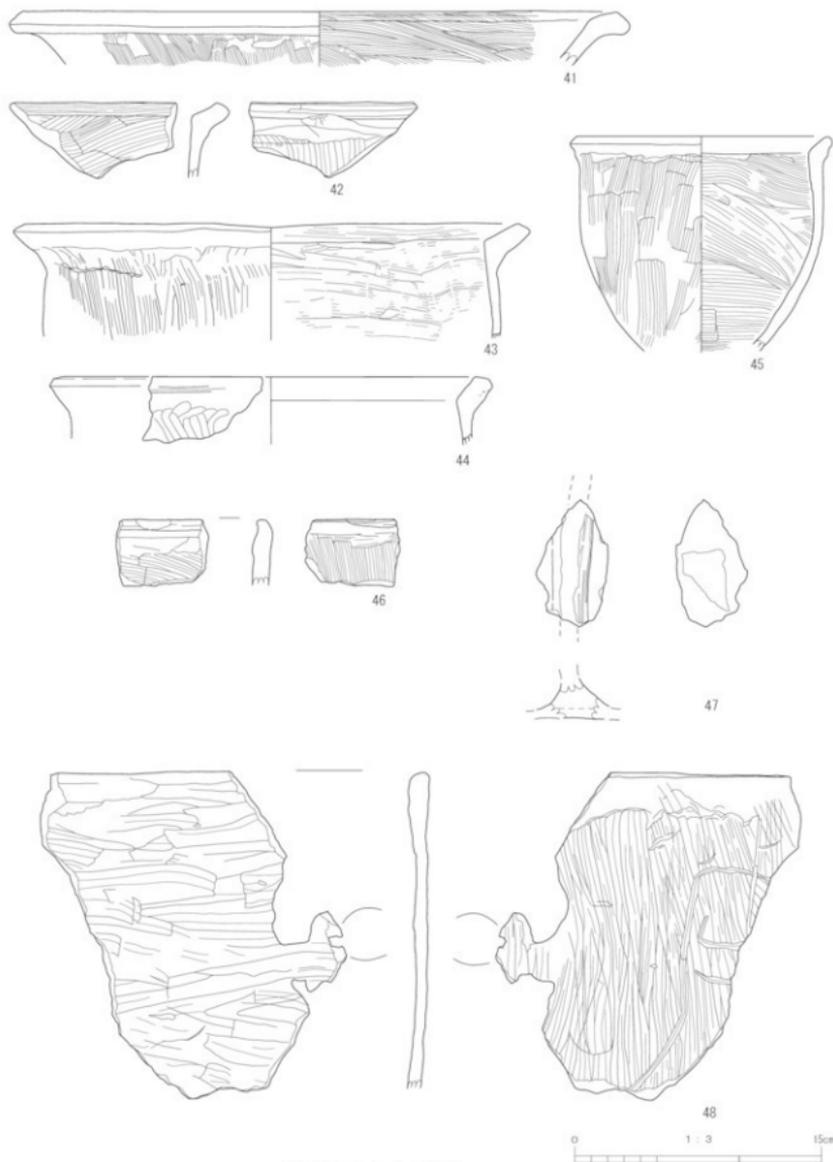
第 143 図 ケカ子遺物 S 1 2 2

S 1 2 2



第 144 図 ケカ子遺物 S 1 2 2

S 1 2 2



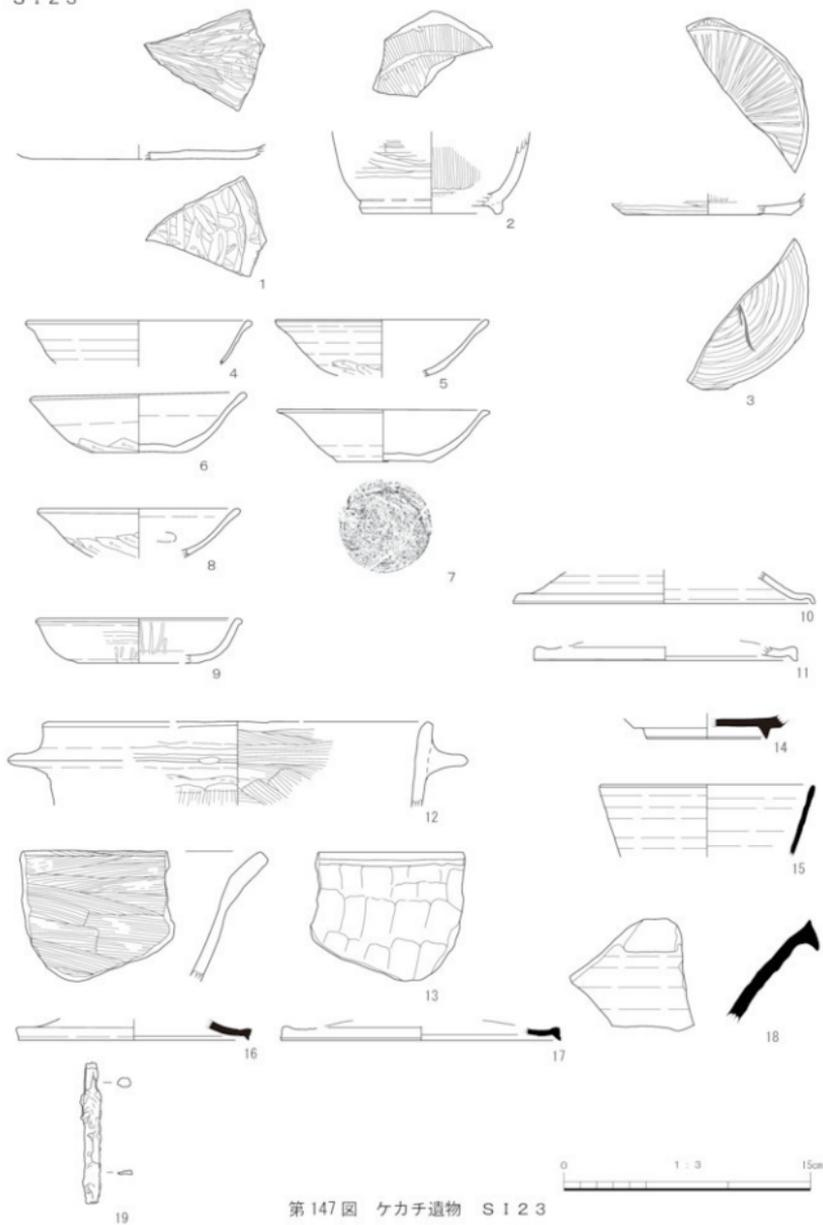
第 145 図 ケカチ遺物 S 1 2 2

S I 2 2



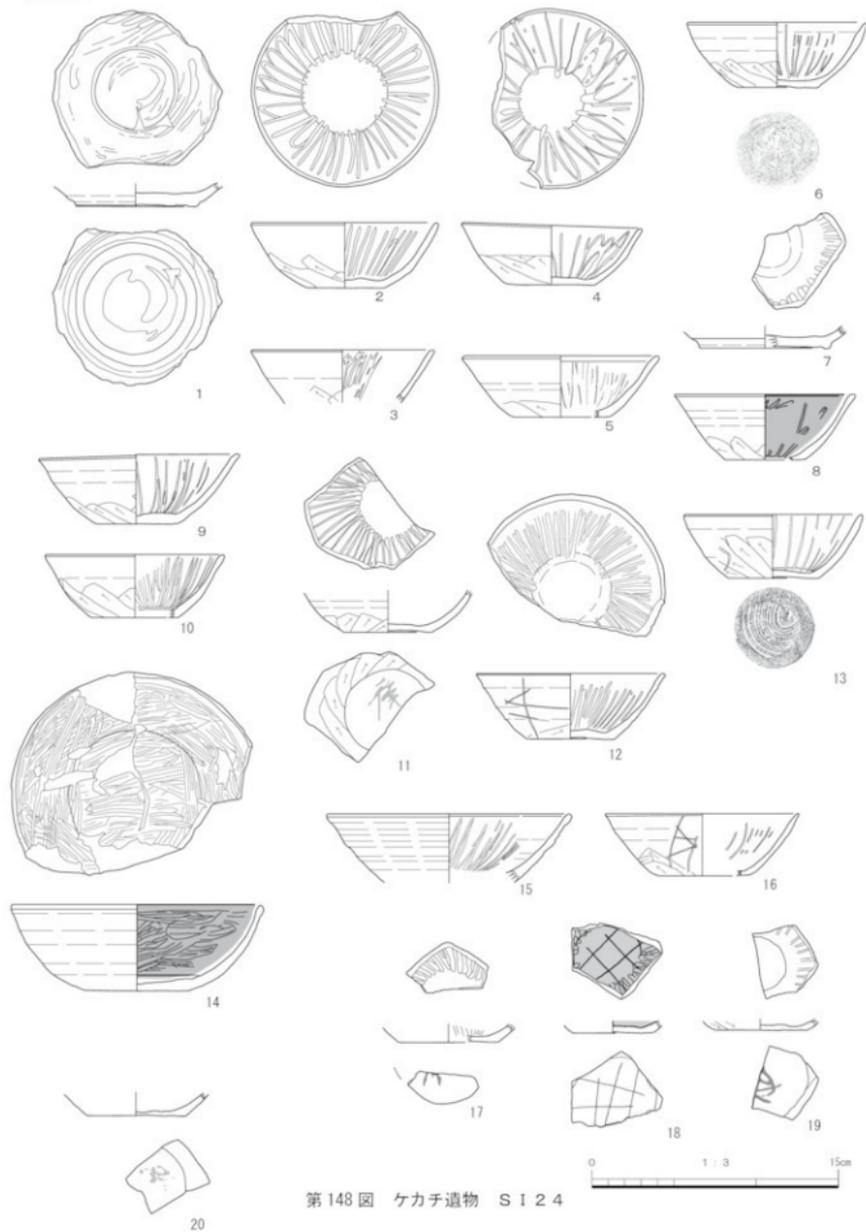
第146図 ケカ子遺物 S I 2 2

S 1 2 3

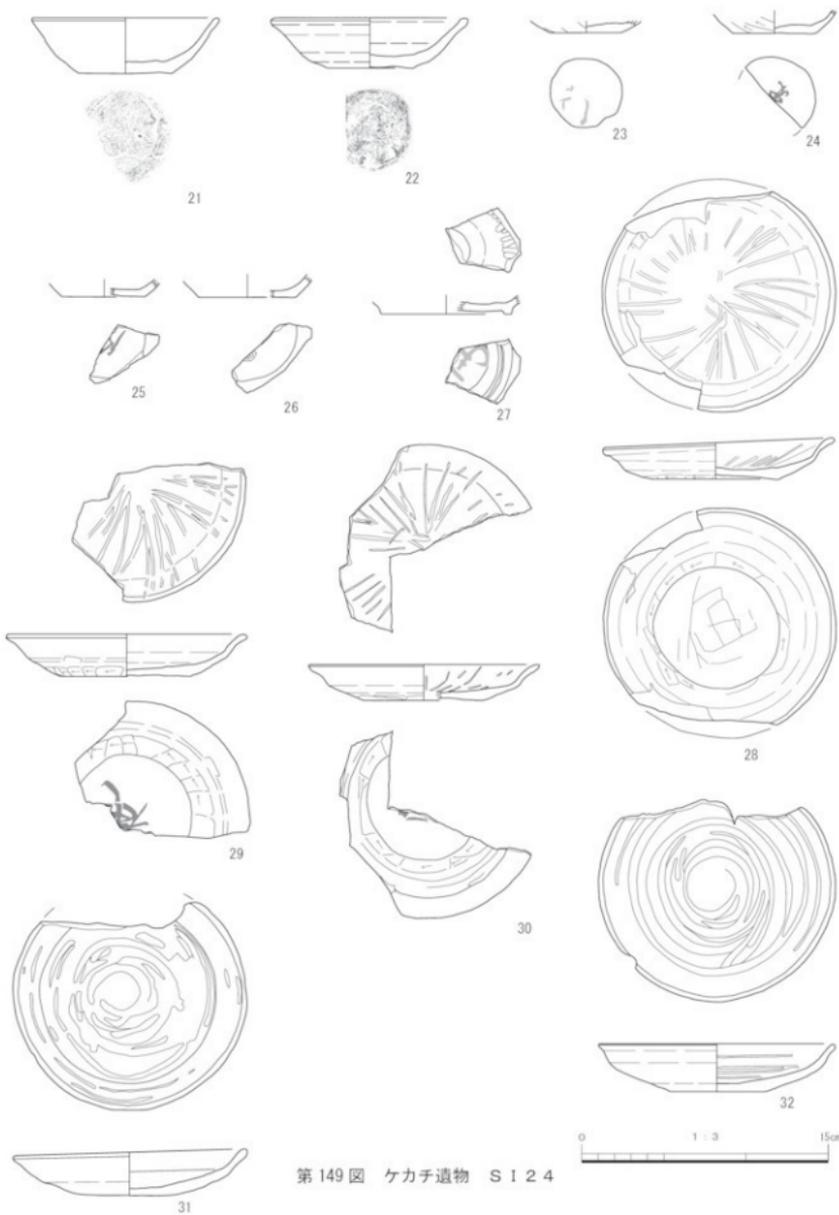


第 147 図 ケカ子遺物 S 1 2 3

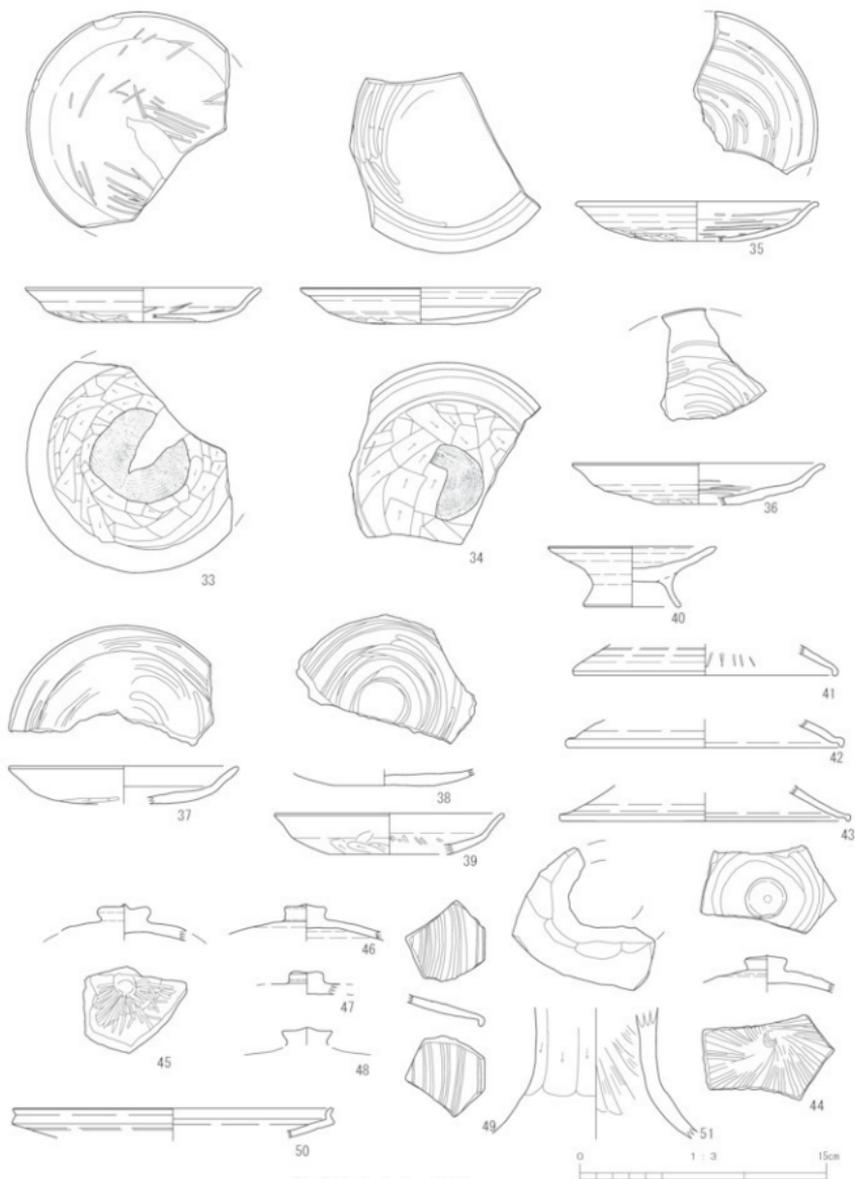
S I 2 4



第 148 図 ケカ子遺物 S I 2 4

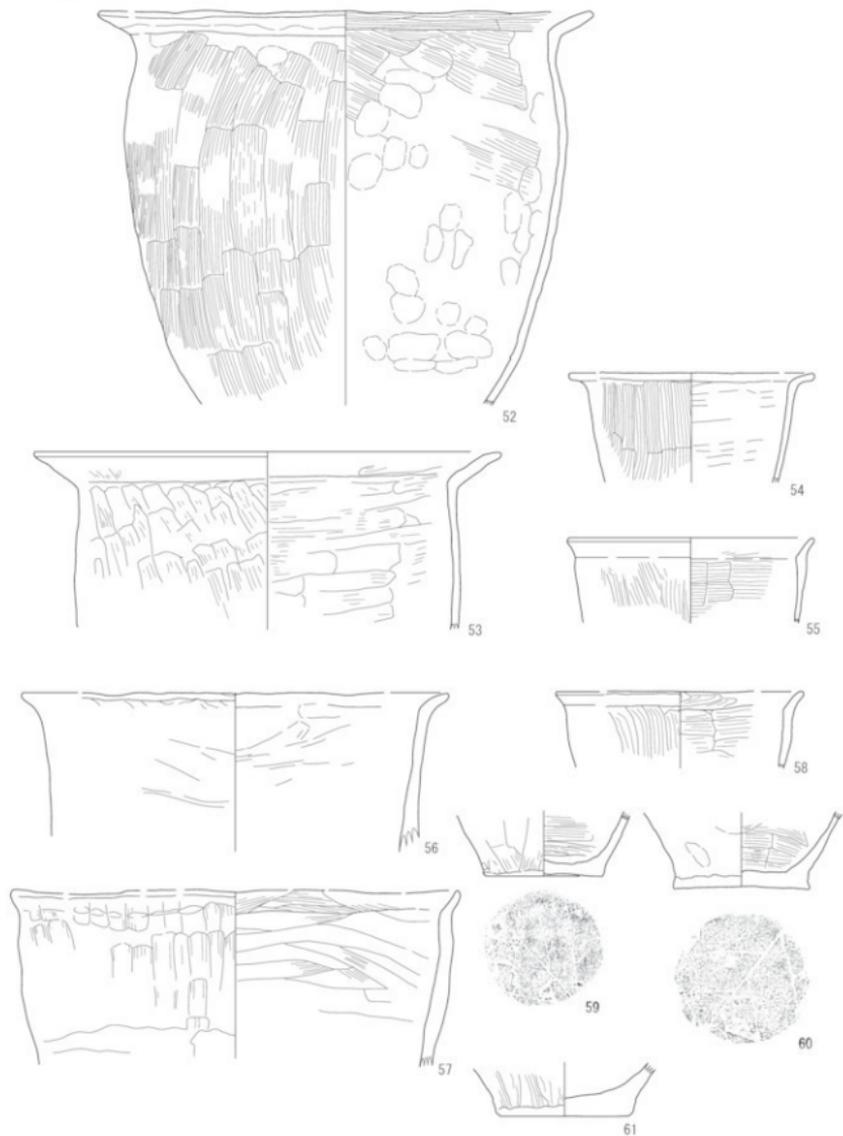


第 149 図 ケカチ遺物 S 1 2 4



第150図 ケカチ遺物 S124

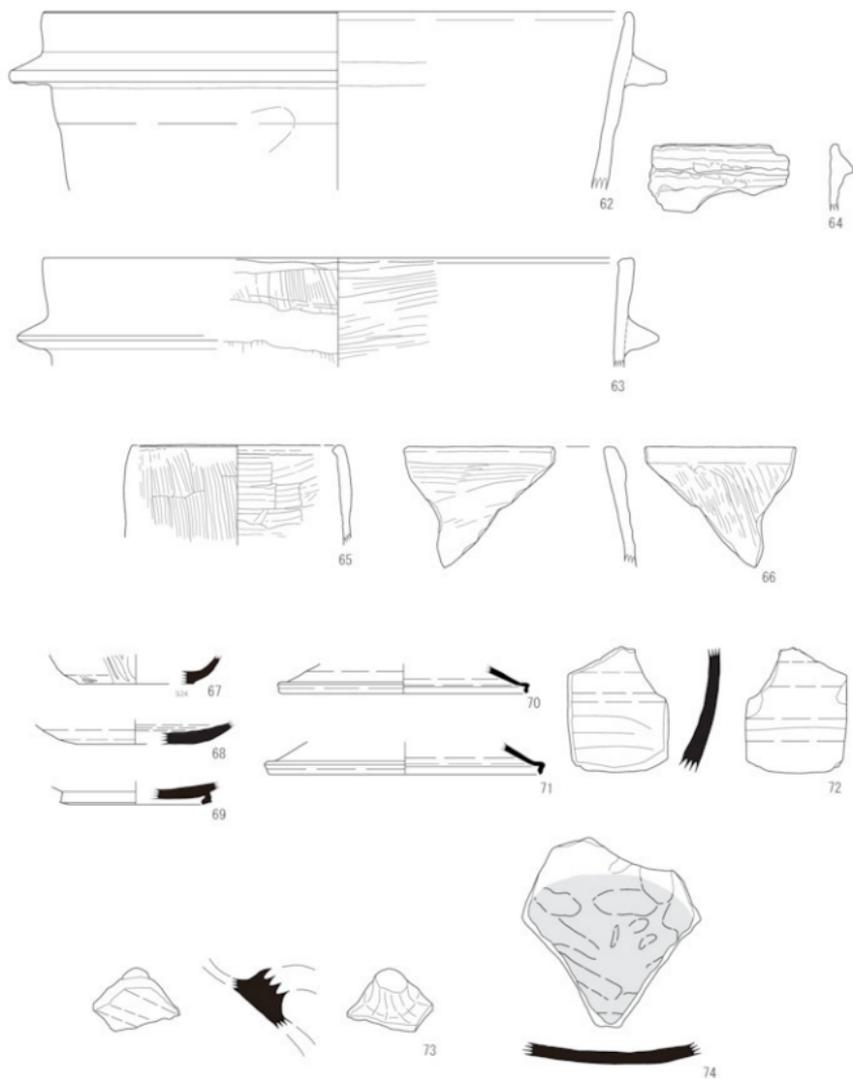
S 1 2 4



0 1 : 3 15cm

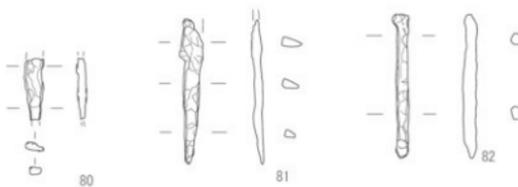
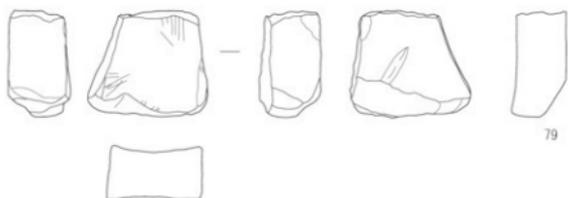
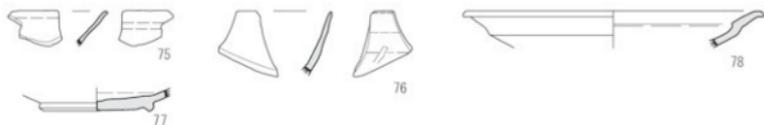
第 151 図 ケカ子遺物 S 1 2 4

S 1 2 4

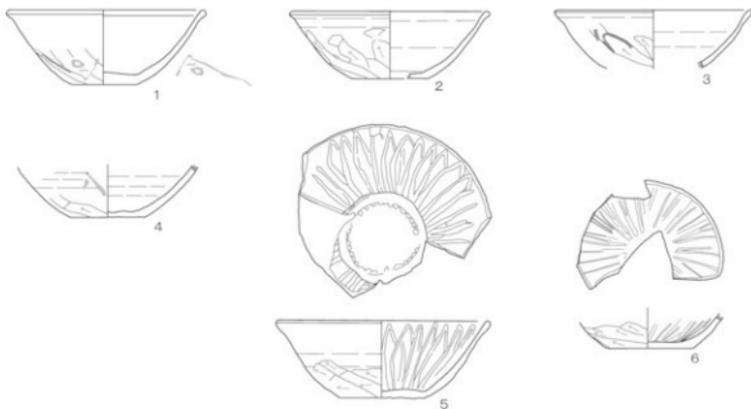


第 152 図 ケカ子遺物 S 1 2 4

S 1 2 4

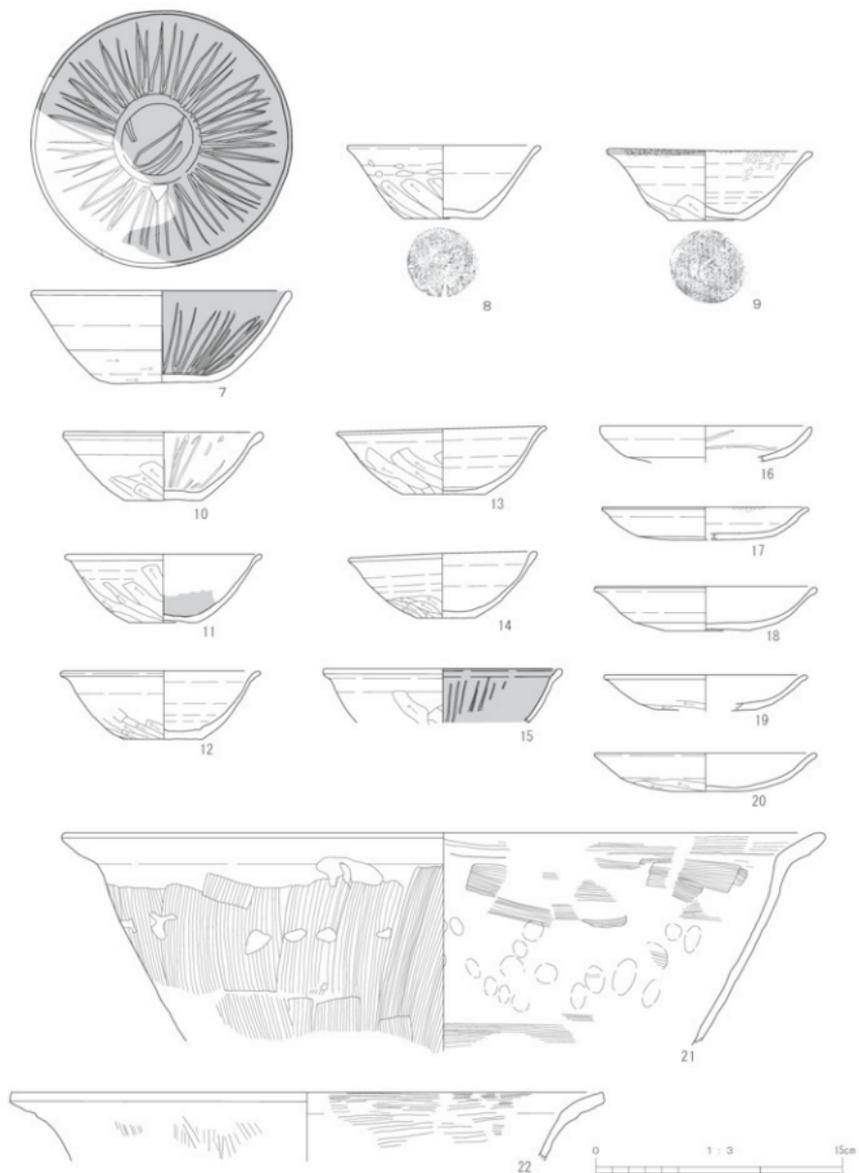


S 1 2 5



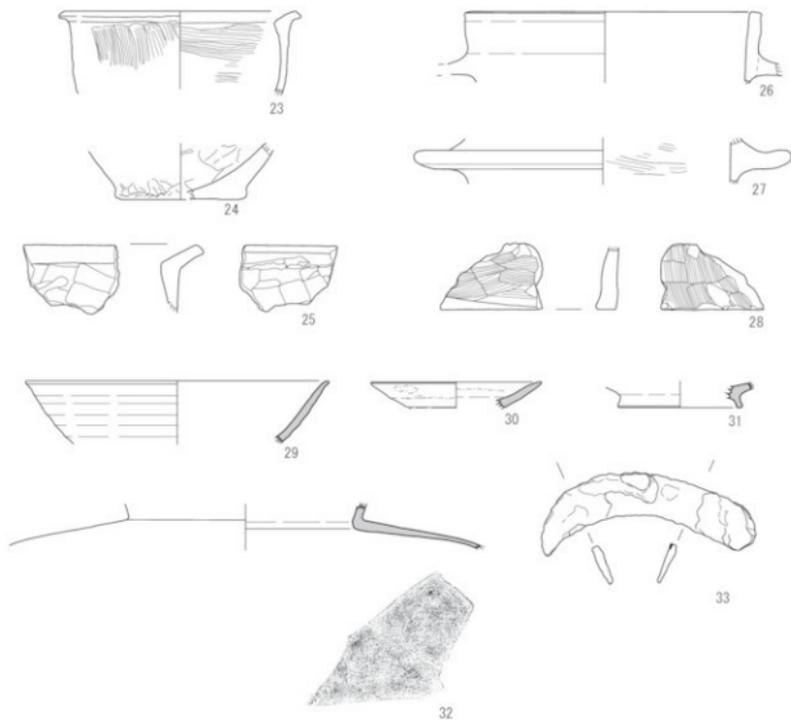
第 153 図 ケカ子遺物 S 1 2 4 ・ 2 5

S 1 2 5

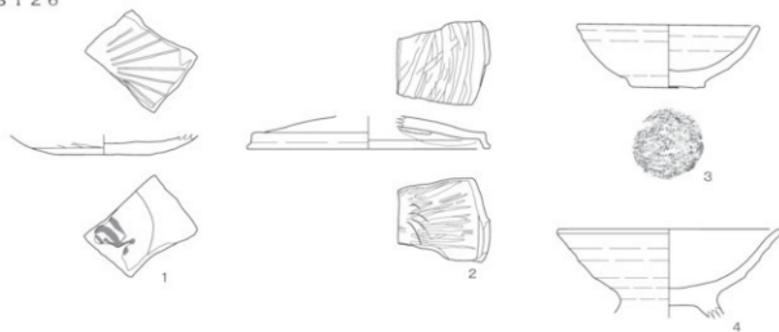


第154図 ケカチ遺物 S 1 2 5

S 1 2 5

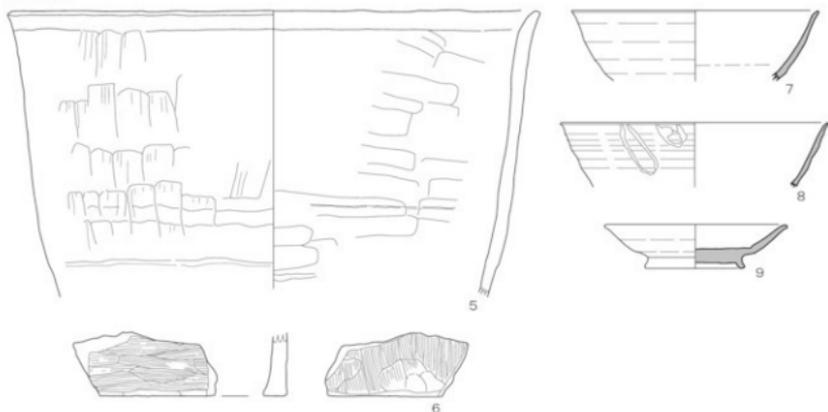


S 1 2 6

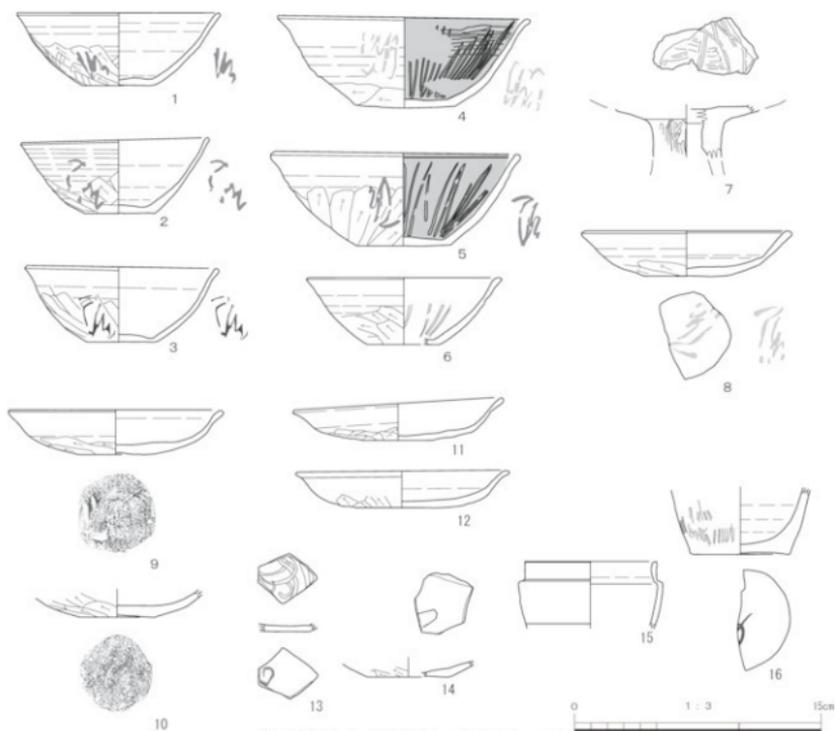


第 155 図 ケカ子遺物 S 1 2 5 ・ 2 6

S I 26

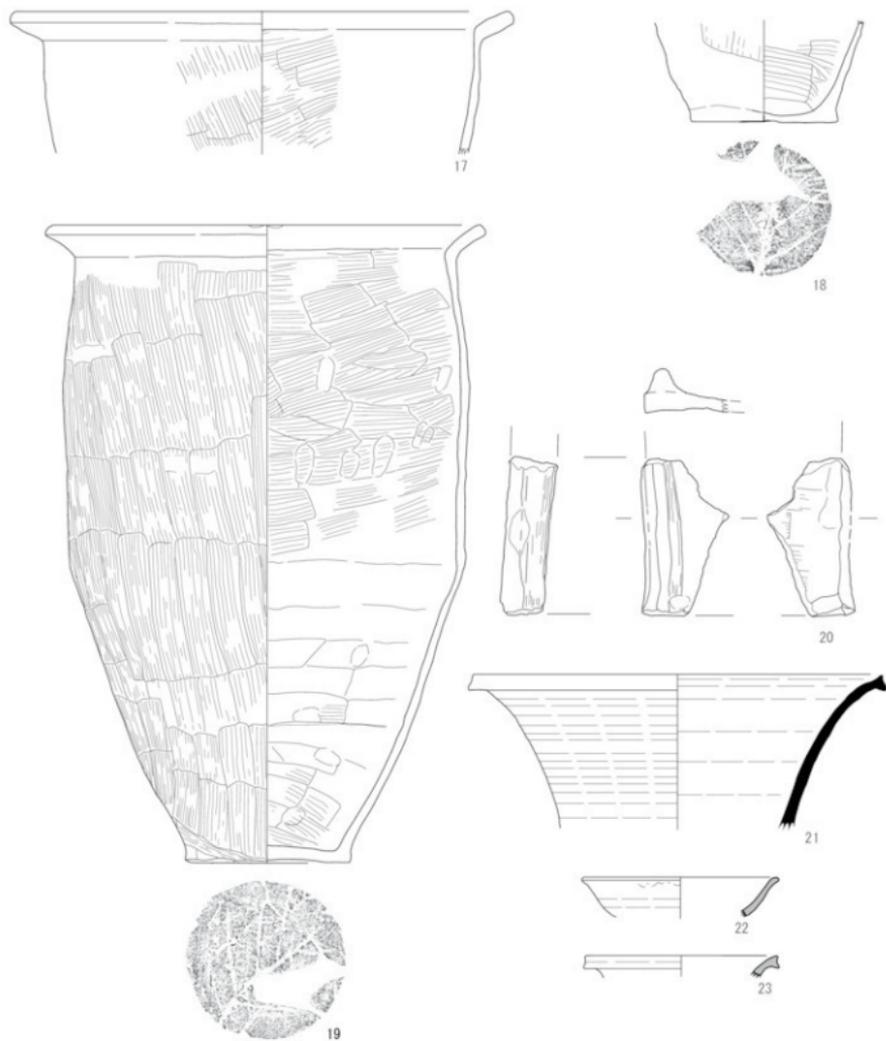


S I 27



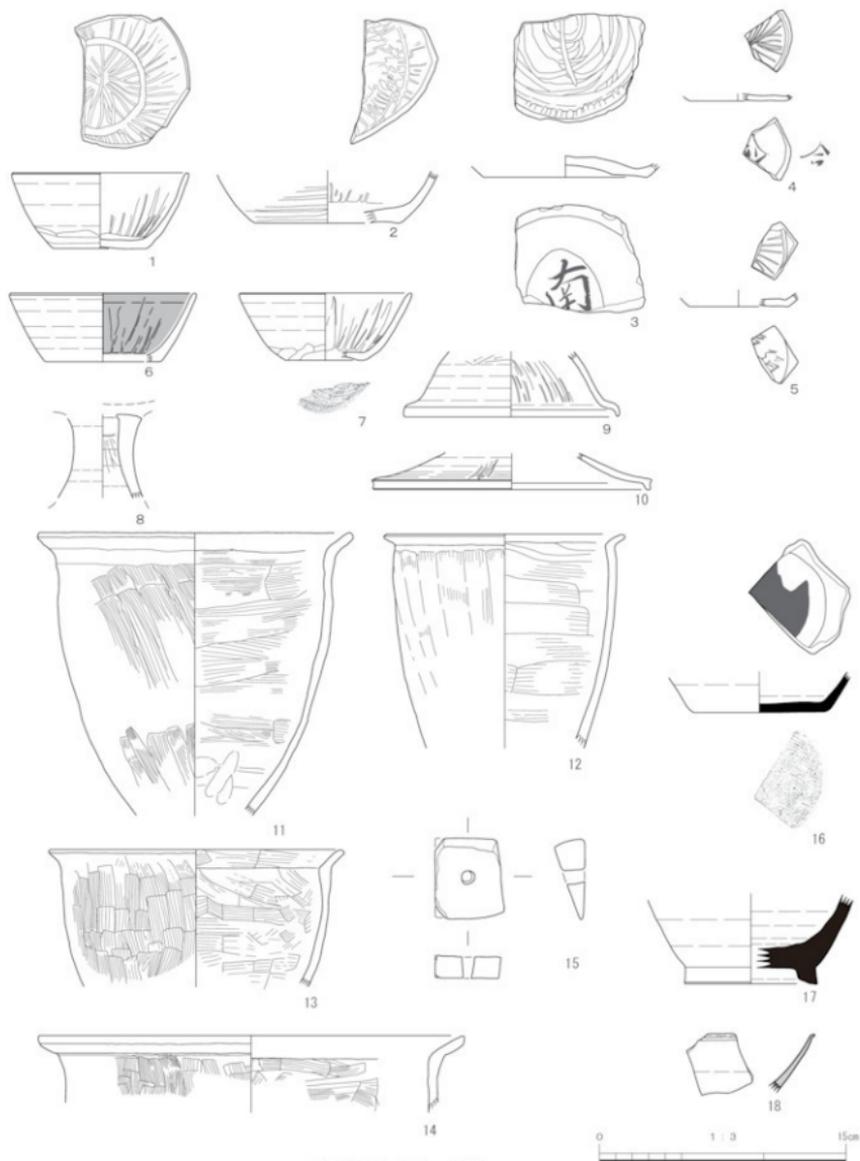
第 156 図 ケカ子遺物 S I 26・27

S I 2 7



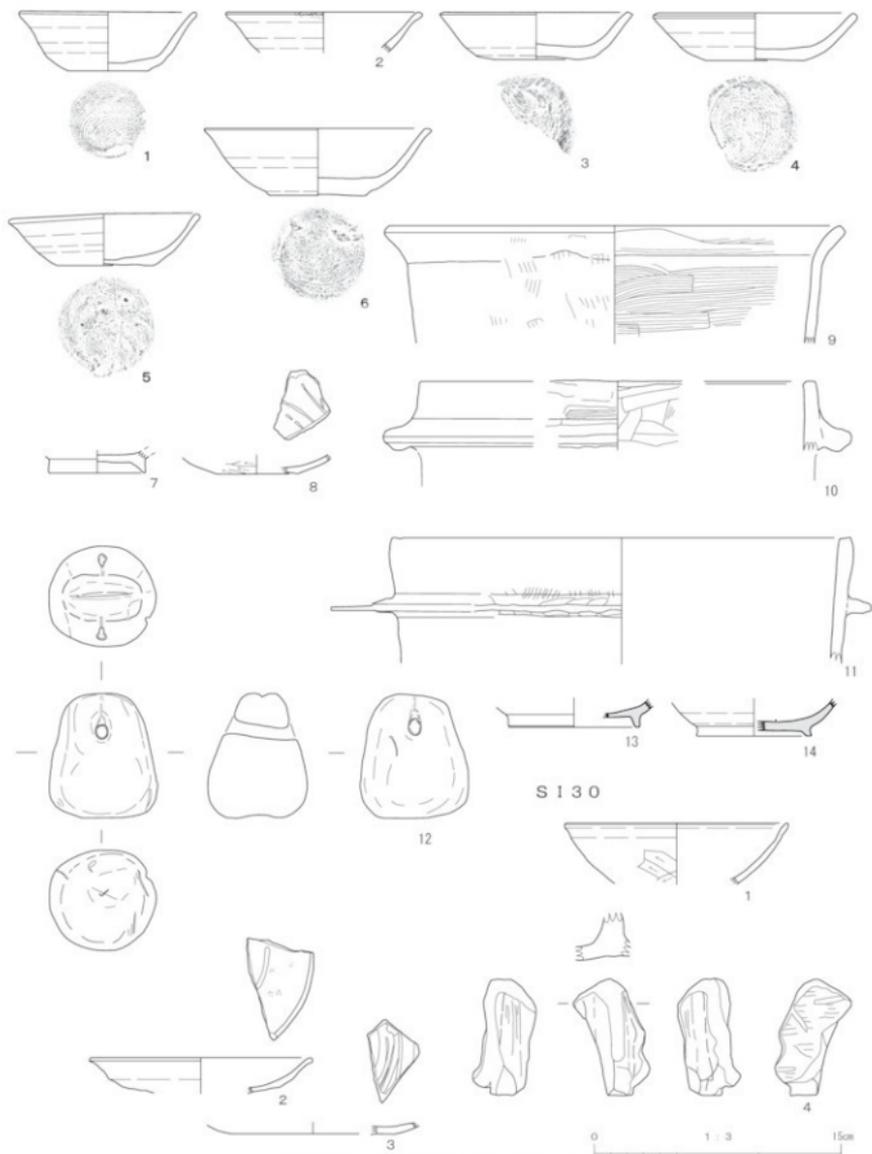
0 1 : 3 15cm

第 157 図 ケカチ遺物 S I 2 7

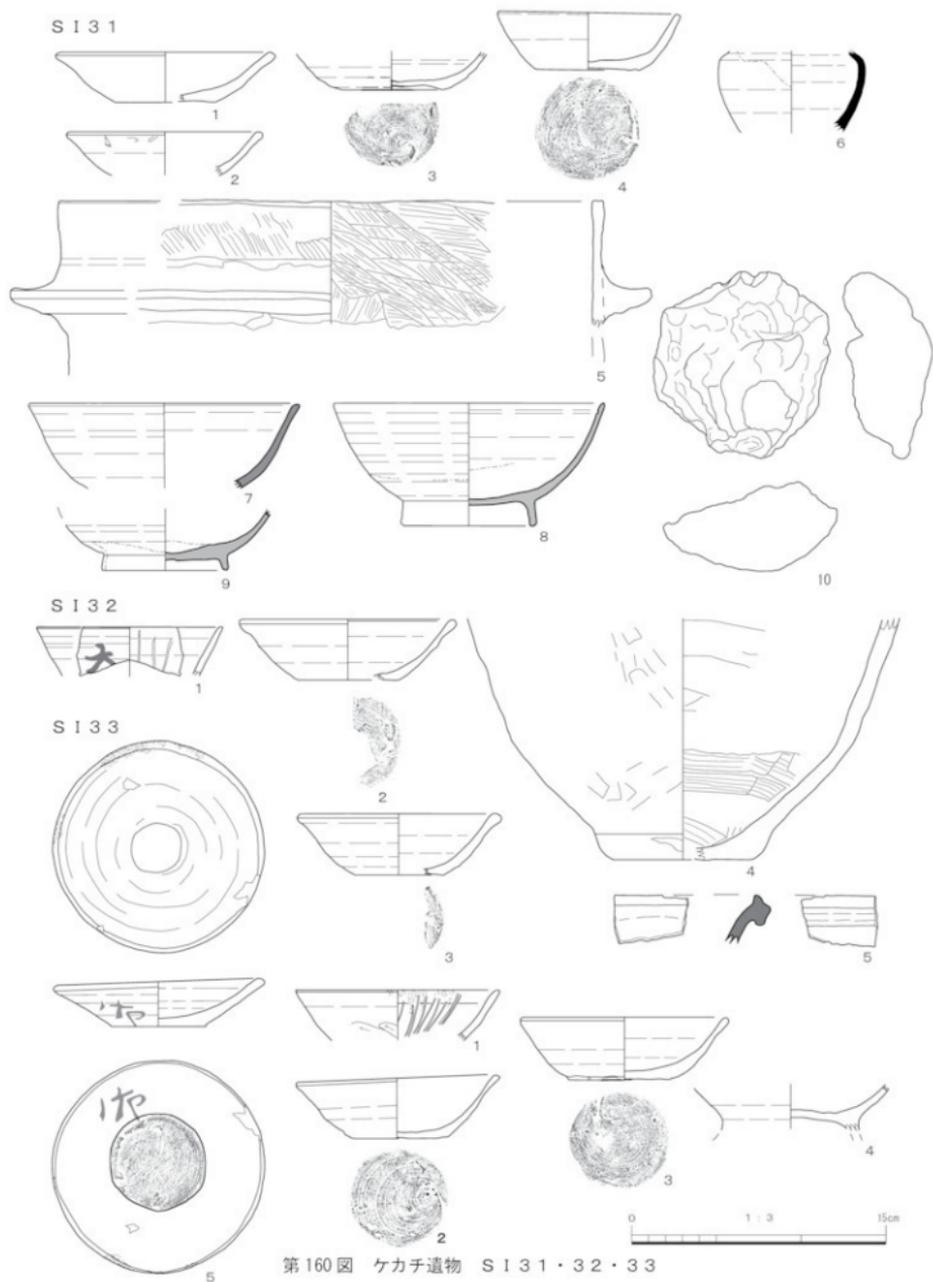


第 158 図 ケカ子遺物 S 1 2 8

S 1 2 9

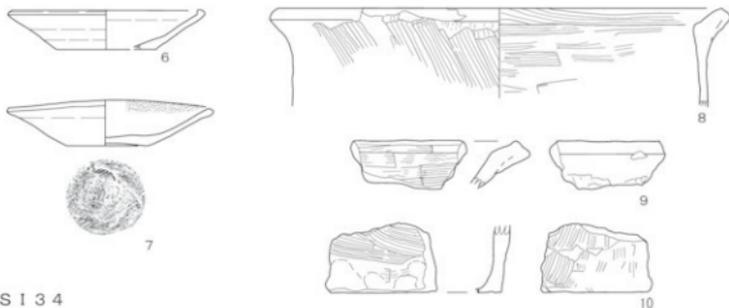


第 159 図 ケカ子遺物 S 1 2 9 ・ 3 0

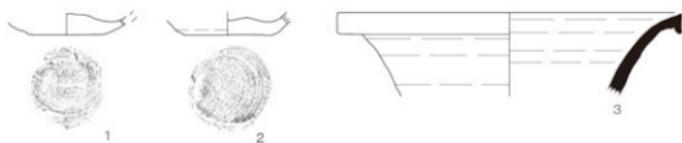


第160図 ケカ子遺物 S131・32・33

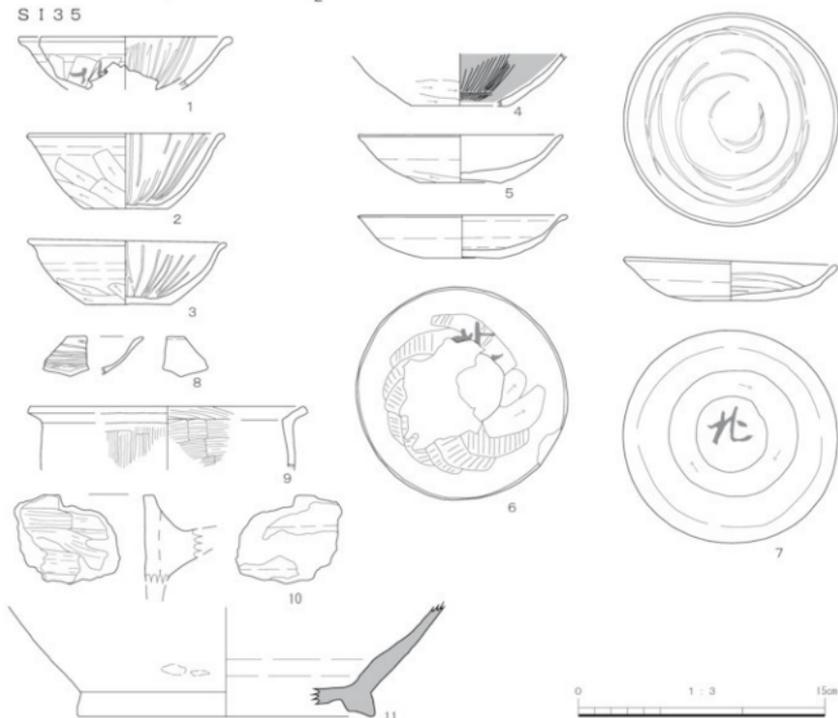
S I 33



S I 34



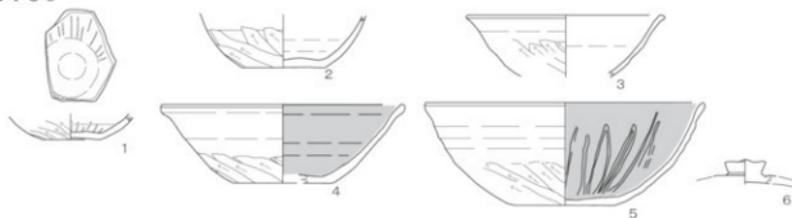
S I 35



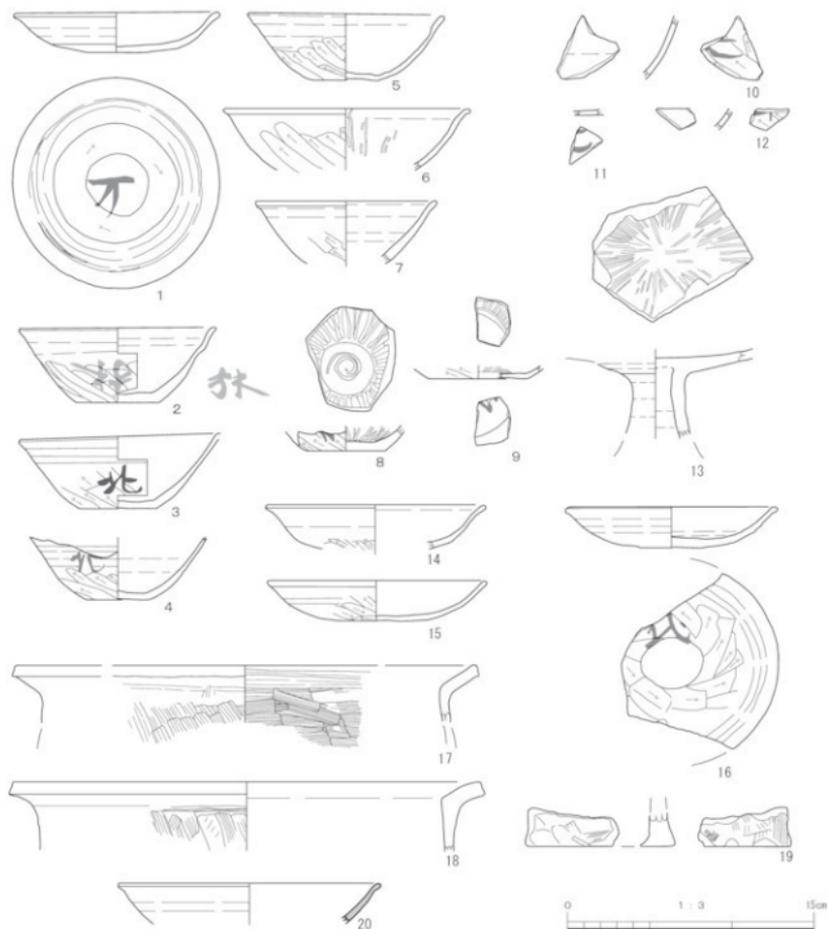
0 1 : 3 15cm

第161図 ケカチ遺物 S I 33・34・35

S 136

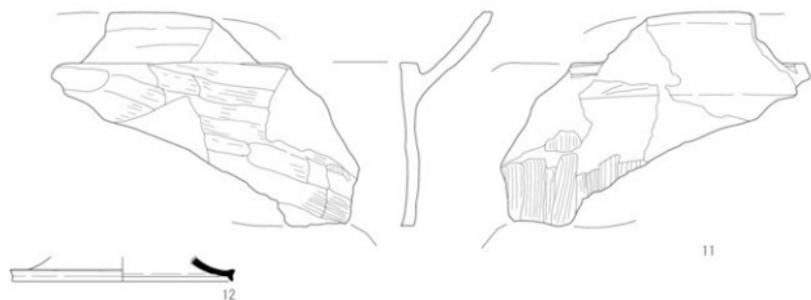


S 137

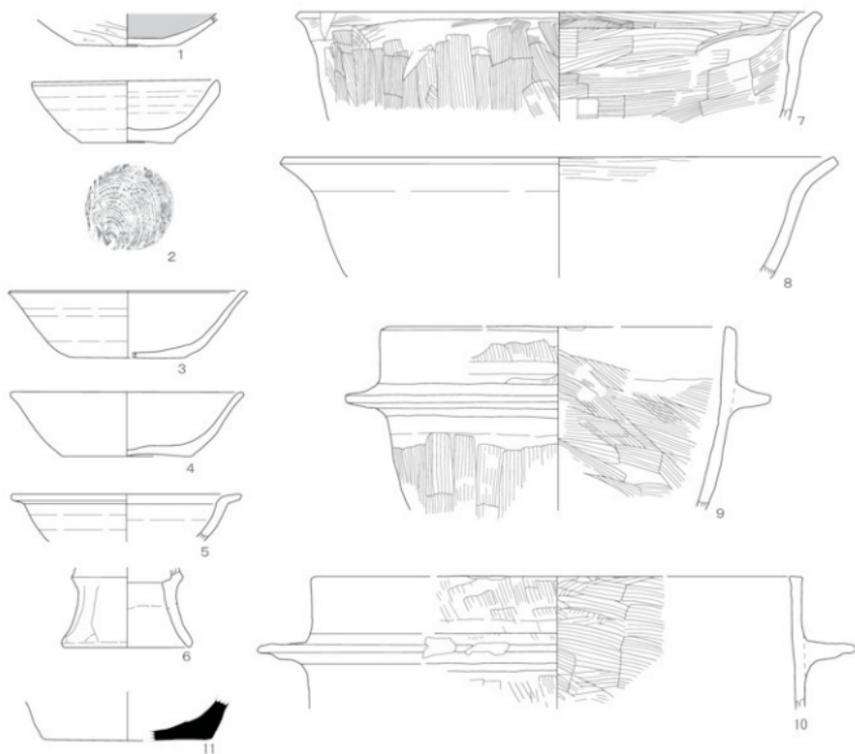


第 162 図 ケカチ遺物 S 136・37

S 1 4 0



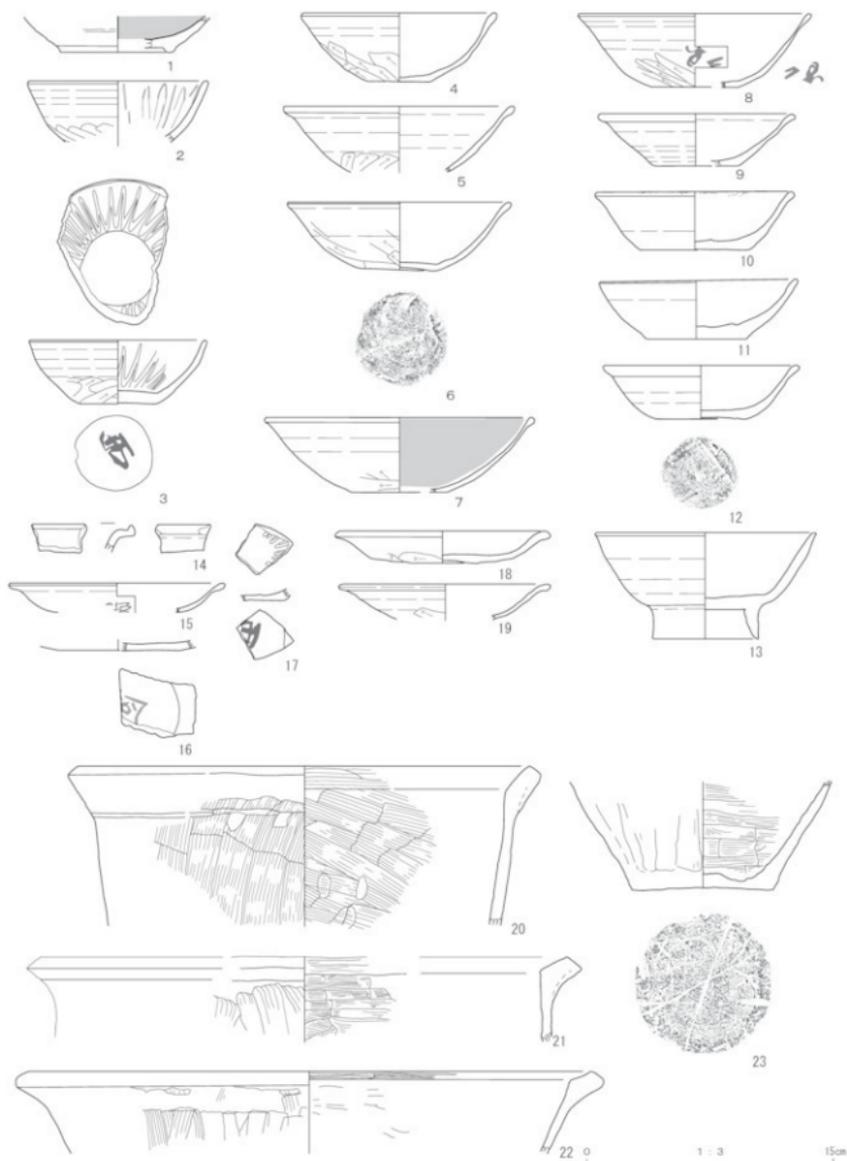
S 1 4 1



0 1 : 3 15cm

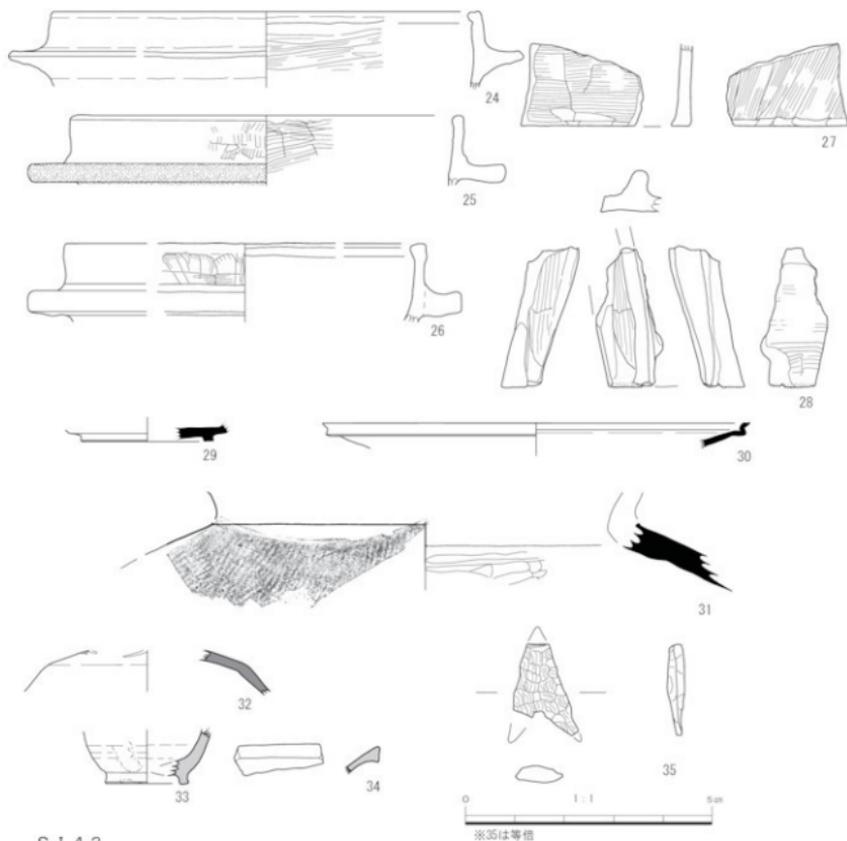
第 164 図 ケカ子遺物 S 1 4 0 ・ 4 1

S 1 4 2

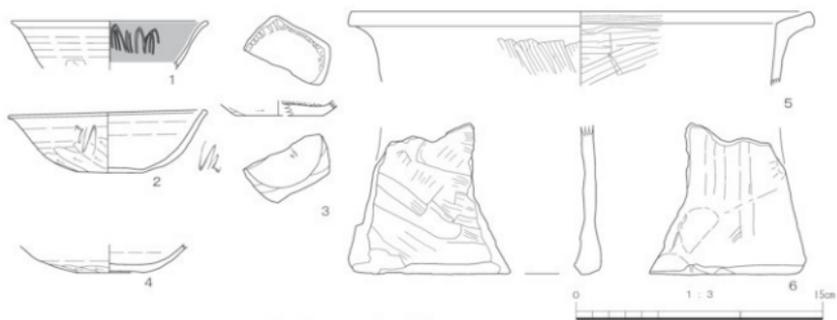


第 165 図 ケカ子遺物 S 1 4 2

S 1 4 2

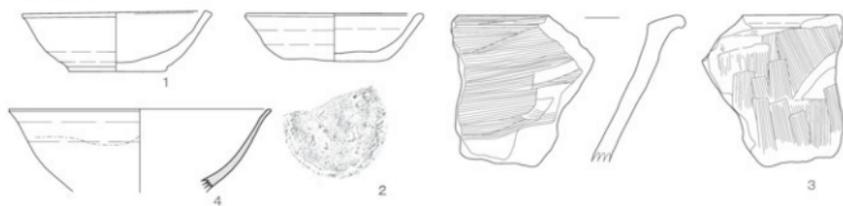


S 1 4 3

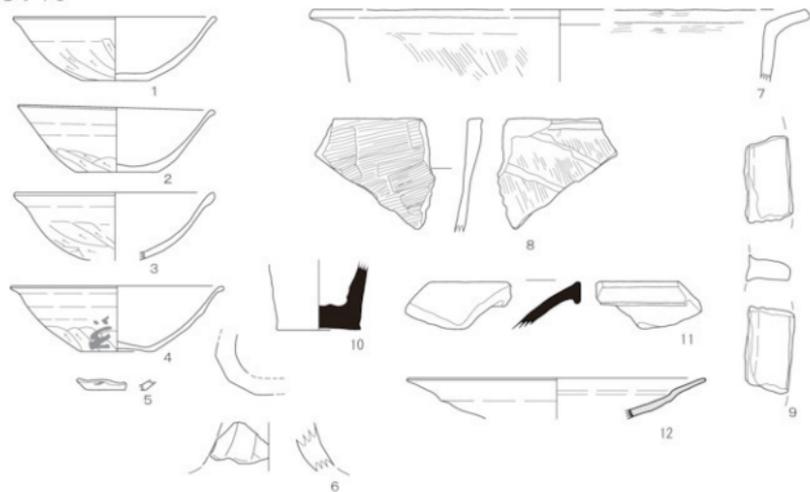


第 166 図 ケカ子遺物 S 1 4 2 ・ 4 3

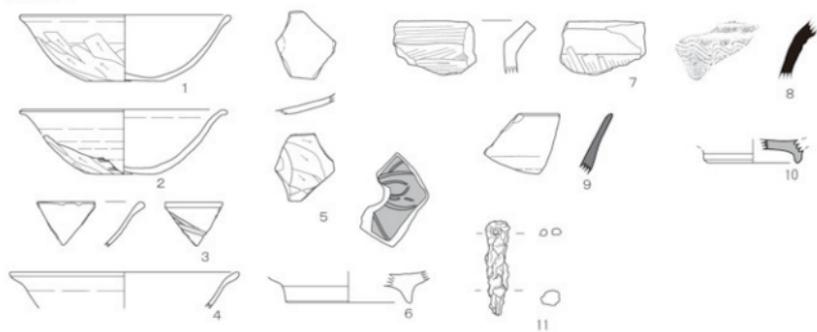
S 1 4 4



S 1 4 5

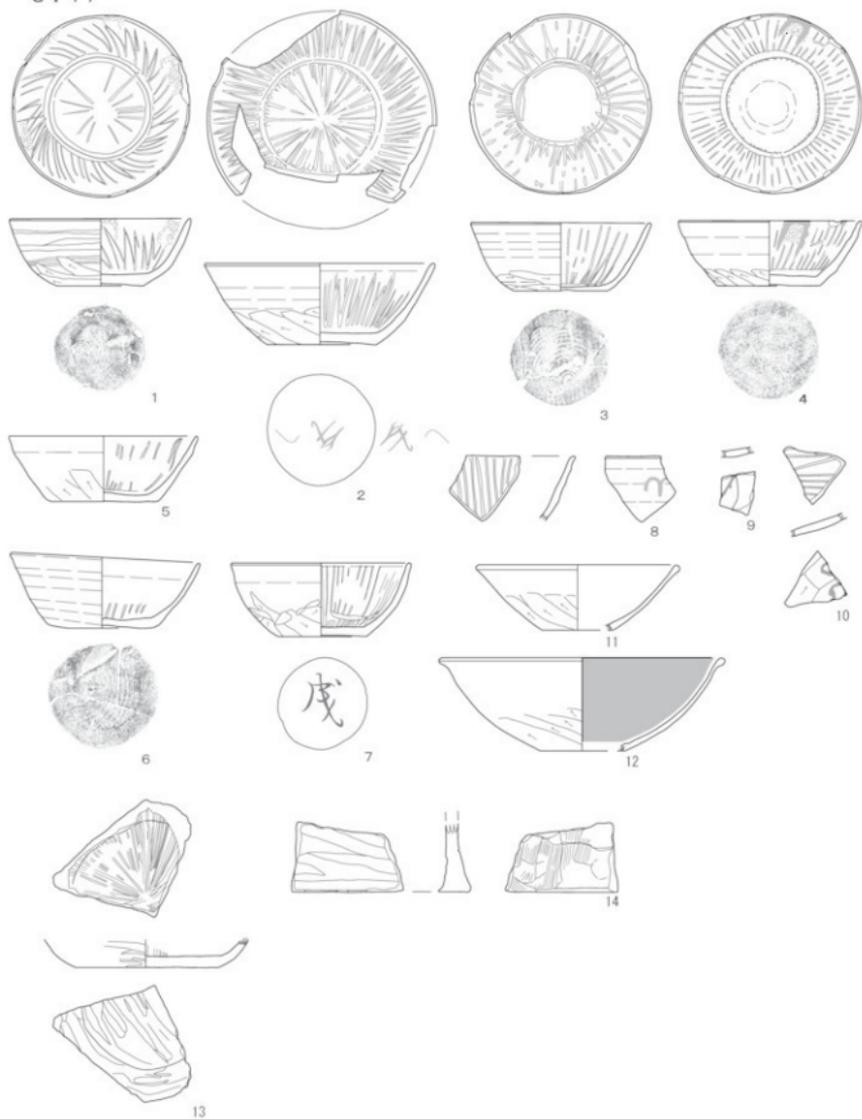


S 1 4 6



第 167 図 ケカ子遺物 S 1 4 4 ・ 4 5 ・ 4 6

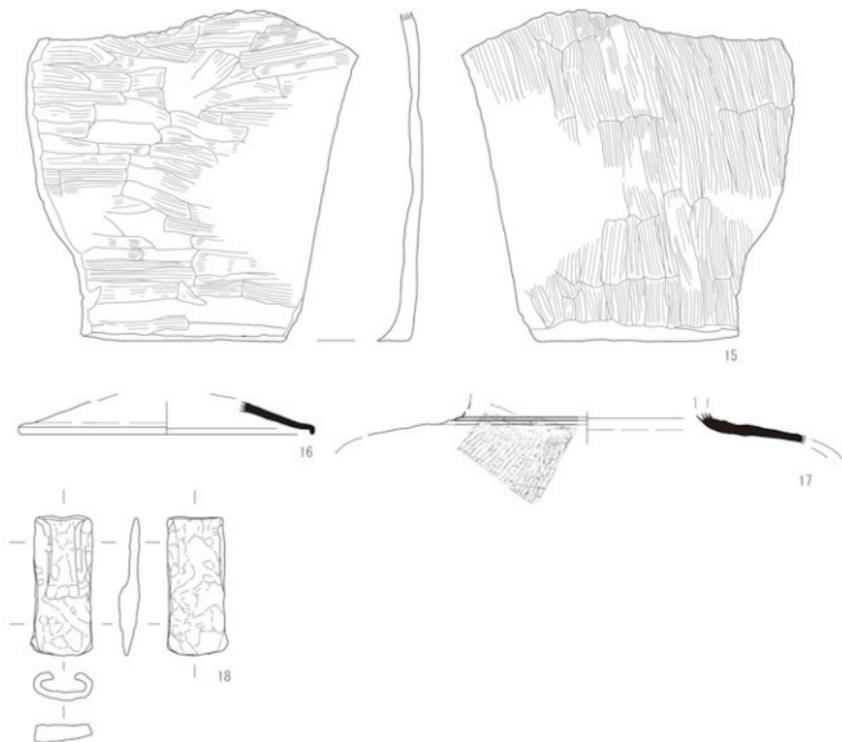
S 1 4 7



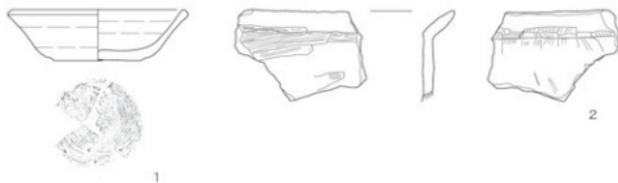
第 168 図 ケカ子遺物 S 1 4 7



S 1 4 7

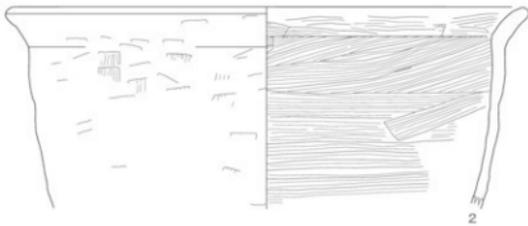
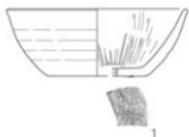


S 1 4 9

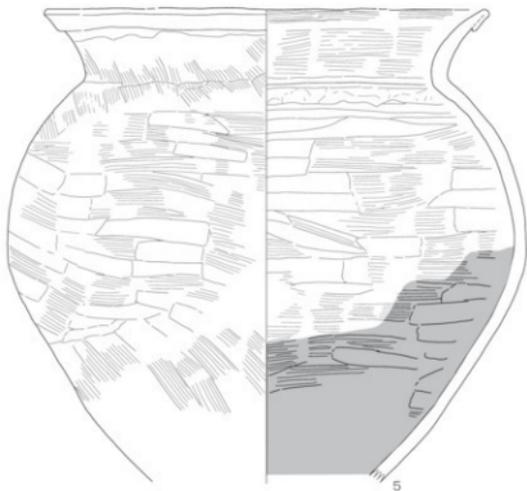
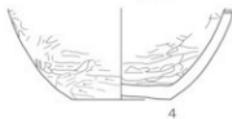
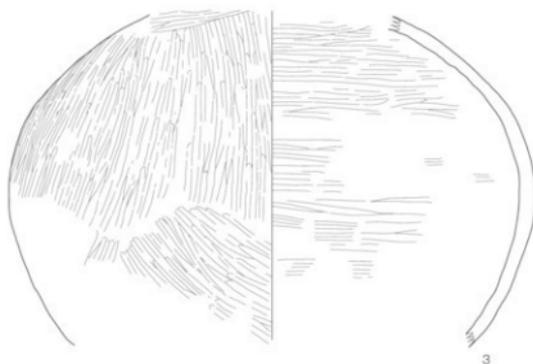


第 169 図 ケカチ遺物 S 1 4 7 ・ 4 9

SL 1

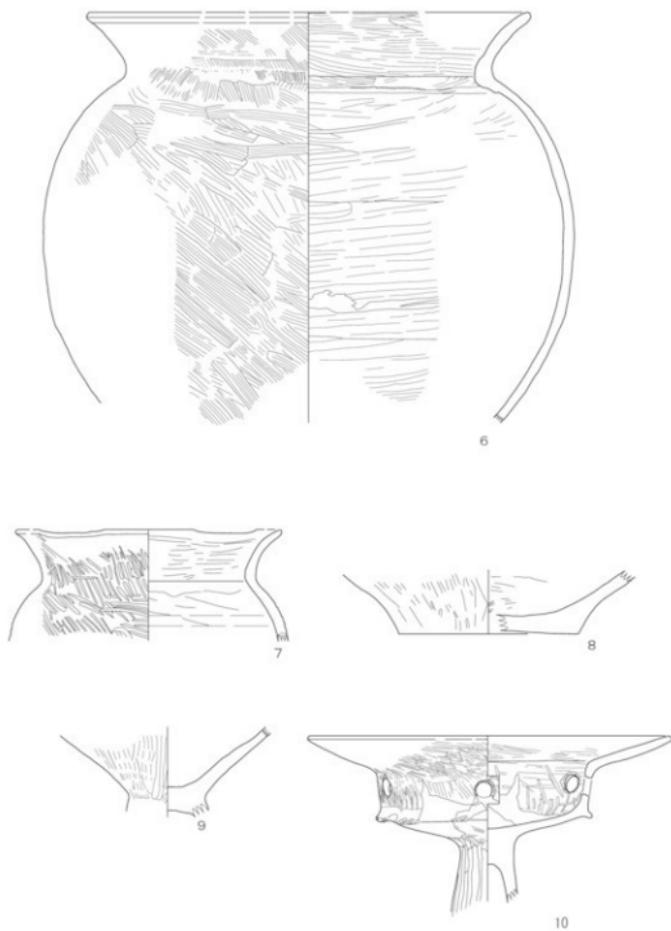


SZ 1



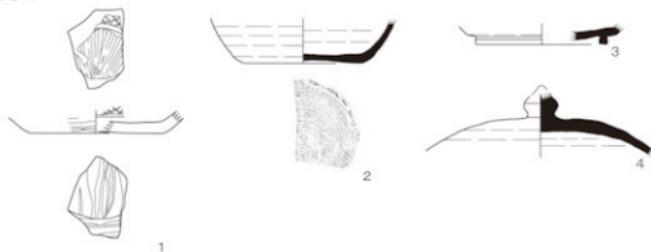
第 170 図 ケカ子遺物 SL 1・SZ 1

SZ 1

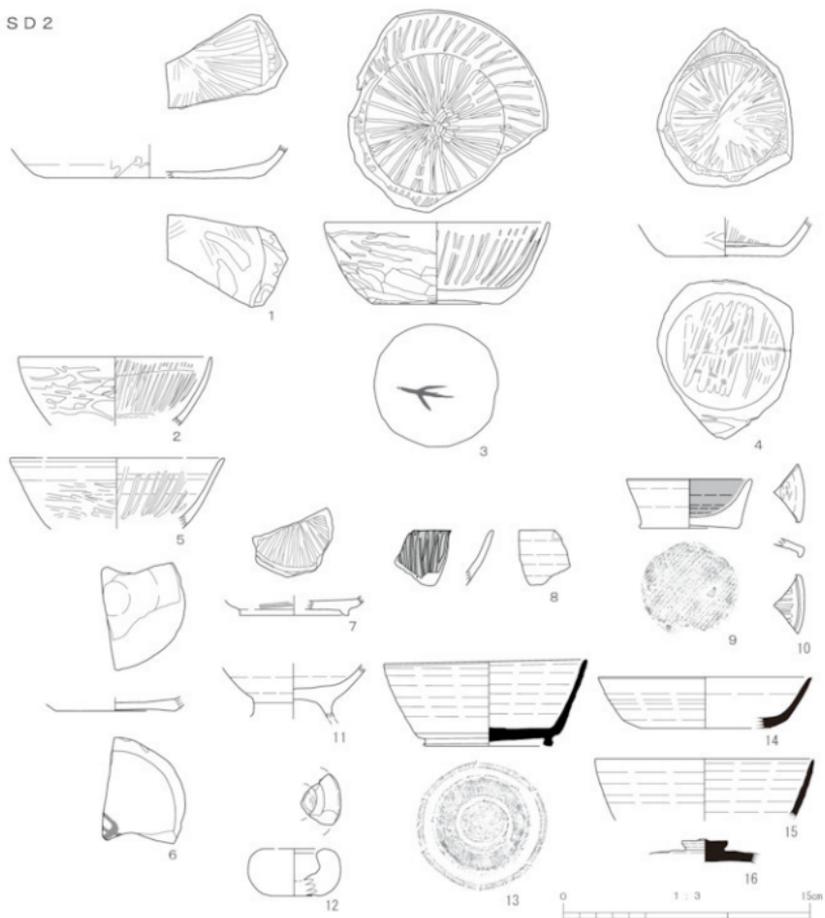


第 171 図 ケカ子遺物 SZ 1

SD 1

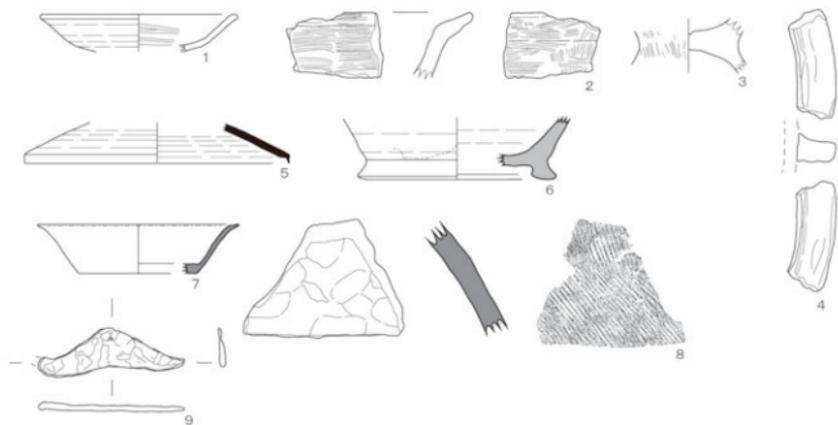


SD 2

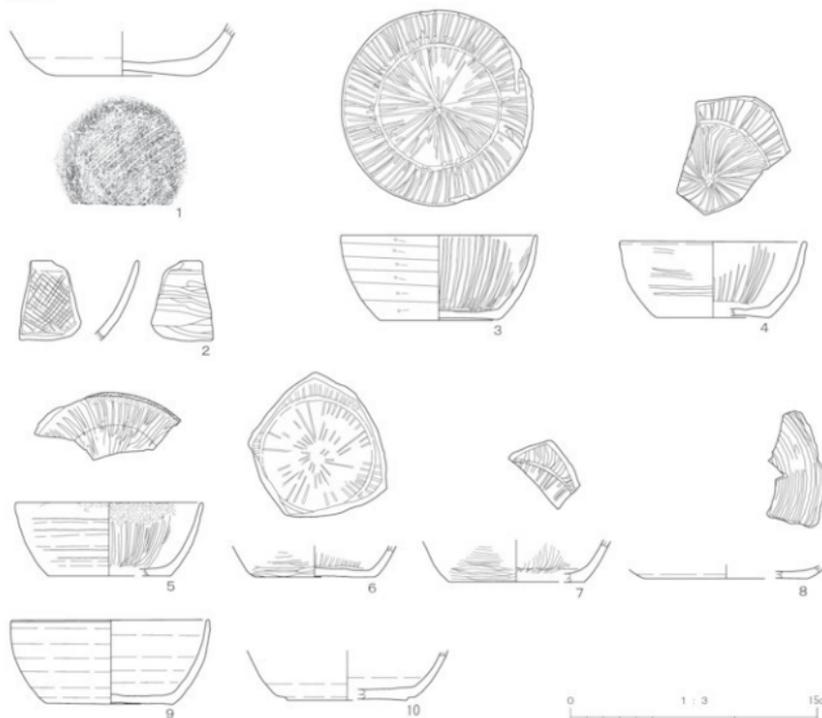


第172図 ケカ子遺物 SD1・2

SD 3

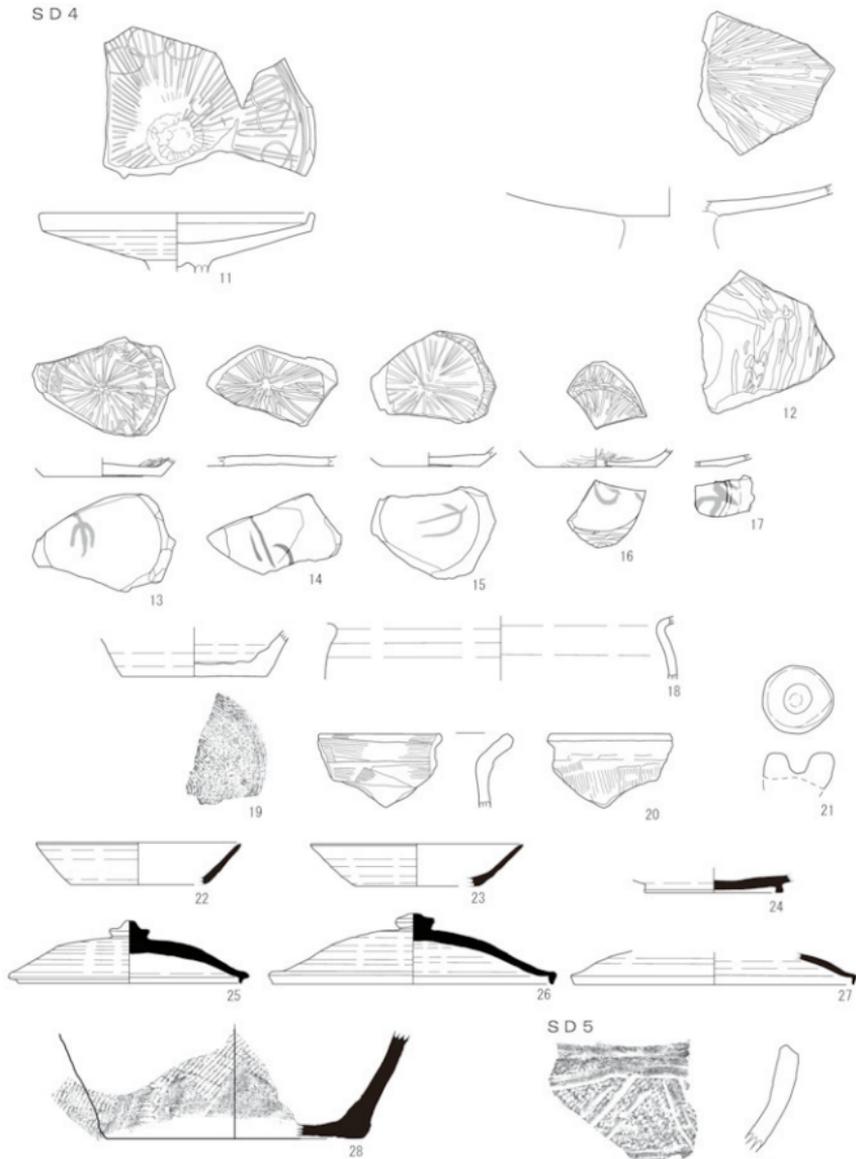


SD 4



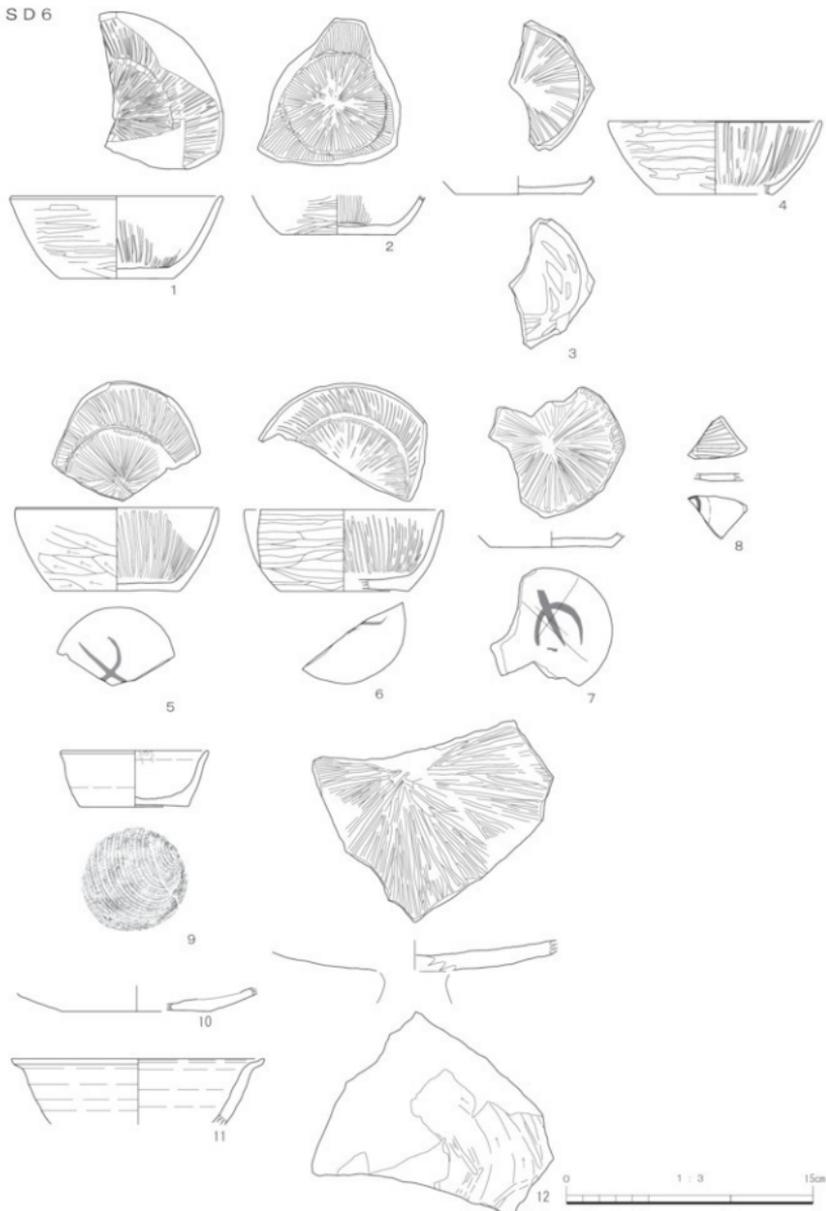
第 173 図 ケカ子遺物 SD 3・4

SD 4



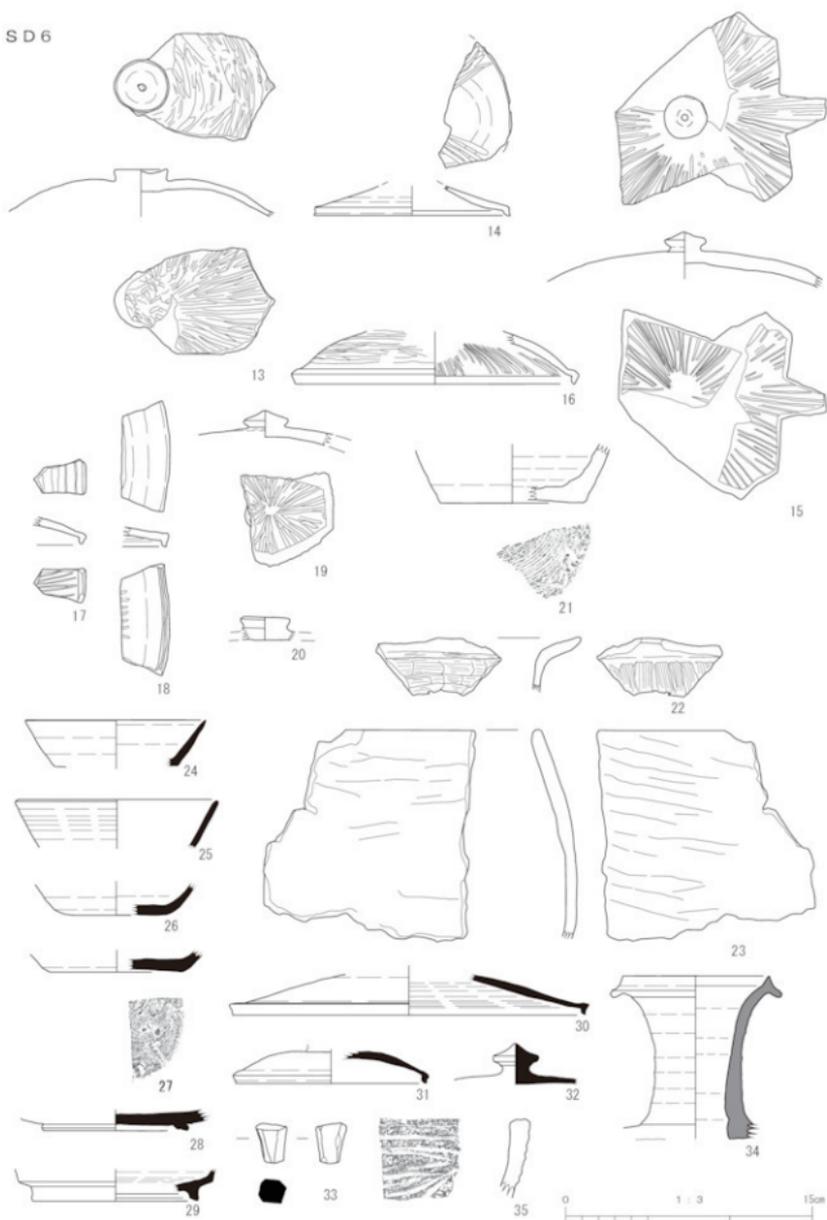
第174図 ケカチ遺物 SD4・5

SD 6



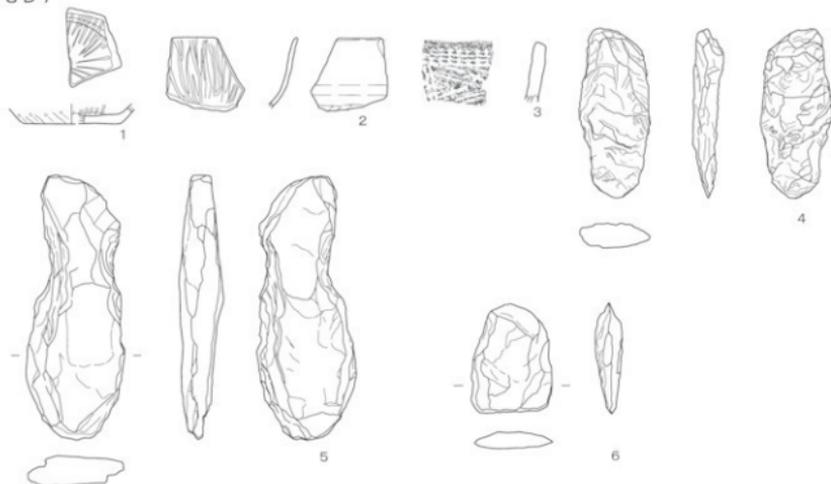
第 175 図 ケカチ遺物 SD 6

SD6

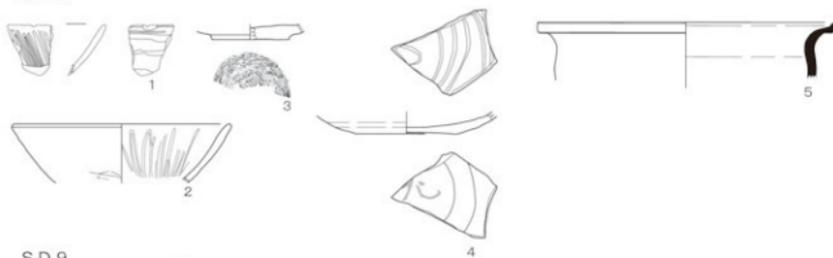


第176図 ケカ子遺物 SD6

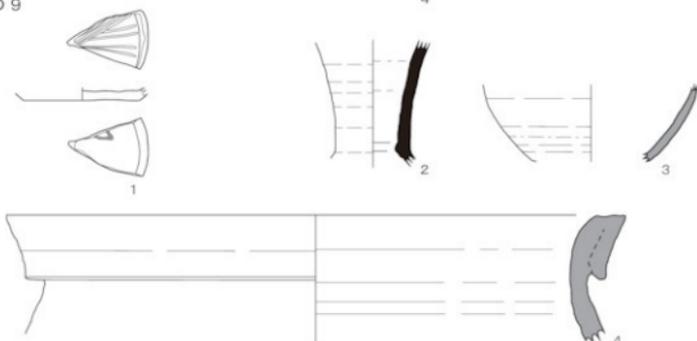
SD 7



SD 8



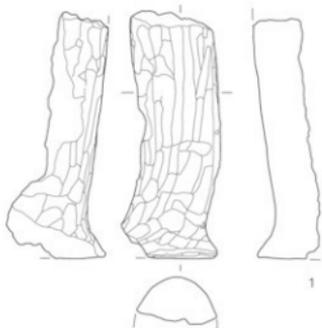
SD 9



0 1:3 15cm

第 177 図 ケカチ遺物 SD 7・8・9

SK 15



SK 20



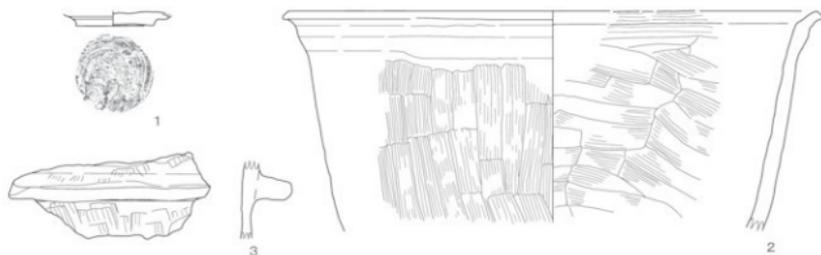
SK 21



SK 22



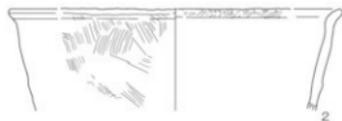
SK 23



SK 24



SK 25



SK 29



SK 31



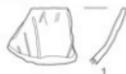
SK 32



SK 33

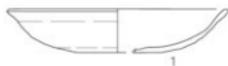


SK 34

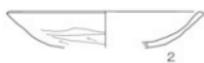
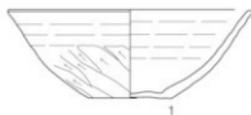


第178図 ケカ子遺物 SK

SK 44



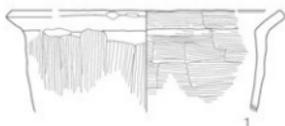
SK 45



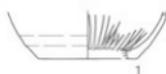
SK 47



SK 49



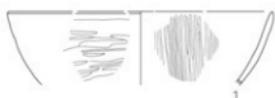
SK 50



SK 55



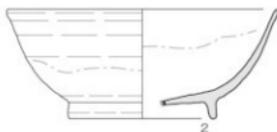
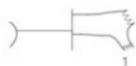
SK 58



SK 65



SK 66



SK 67



SK 68



SK 72

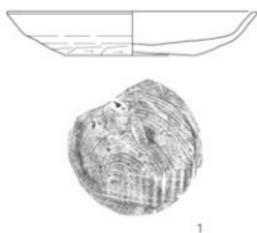


SK 84



第 179 図 ケカ子遺物 SK

SP 18



SP 60



SP 63



SP 77



SP 78



SP 102



SP 131



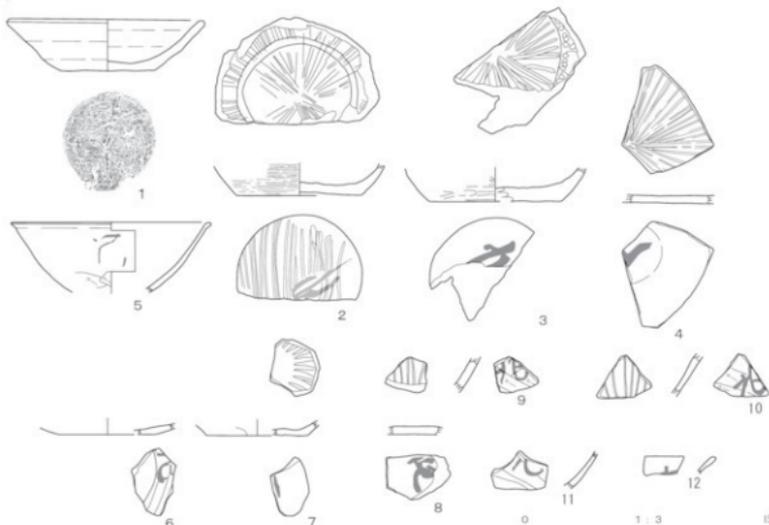
SP 106



SP 148



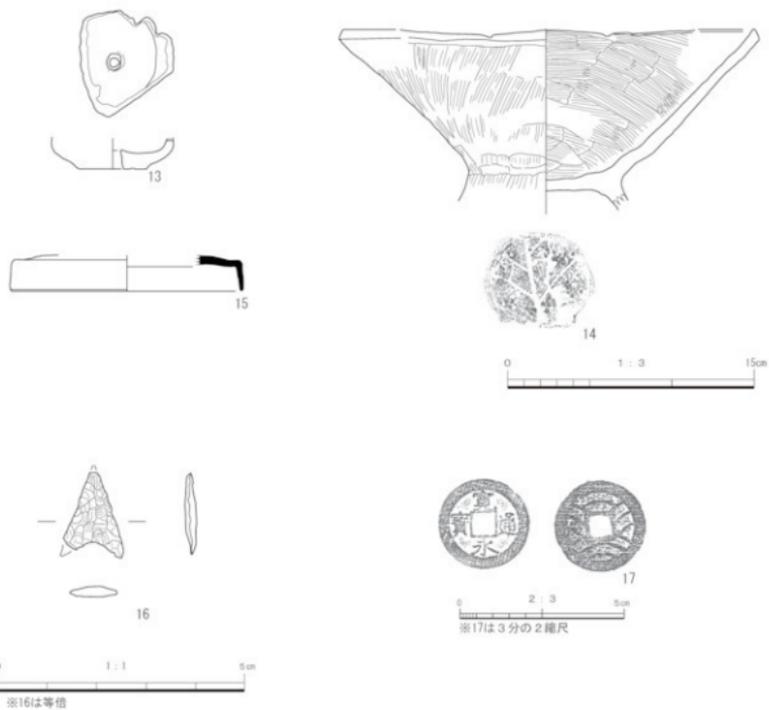
遺構外



第 180 図 ケカ子遺物 SP・遺構外

0 1:3 15cm

遺構外



第 181 図 ケカチ遺物 遺構外

氏名	生年	没年	備考	職名	職名	職名	備考
3800	1716	1786	1716	1786	1786	1786	1786
3801	1717	1787	1717	1787	1787	1787	1787
3802	1718	1788	1718	1788	1788	1788	1788
3803	1719	1789	1719	1789	1789	1789	1789
3804	1720	1790	1720	1790	1790	1790	1790
3805	1721	1791	1721	1791	1791	1791	1791
3806	1722	1792	1722	1792	1792	1792	1792
3807	1723	1793	1723	1793	1793	1793	1793
3808	1724	1794	1724	1794	1794	1794	1794
3809	1725	1795	1725	1795	1795	1795	1795
3810	1726	1796	1726	1796	1796	1796	1796
3811	1727	1797	1727	1797	1797	1797	1797
3812	1728	1798	1728	1798	1798	1798	1798
3813	1729	1799	1729	1799	1799	1799	1799
3814	1730	1800	1730	1800	1800	1800	1800
3815	1731	1801	1731	1801	1801	1801	1801
3816	1732	1802	1732	1802	1802	1802	1802
3817	1733	1803	1733	1803	1803	1803	1803
3818	1734	1804	1734	1804	1804	1804	1804
3819	1735	1805	1735	1805	1805	1805	1805
3820	1736	1806	1736	1806	1806	1806	1806
3821	1737	1807	1737	1807	1807	1807	1807
3822	1738	1808	1738	1808	1808	1808	1808
3823	1739	1809	1739	1809	1809	1809	1809
3824	1740	1810	1740	1810	1810	1810	1810
3825	1741	1811	1741	1811	1811	1811	1811
3826	1742	1812	1742	1812	1812	1812	1812
3827	1743	1813	1743	1813	1813	1813	1813
3828	1744	1814	1744	1814	1814	1814	1814
3829	1745	1815	1745	1815	1815	1815	1815
3830	1746	1816	1746	1816	1816	1816	1816
3831	1747	1817	1747	1817	1817	1817	1817
3832	1748	1818	1748	1818	1818	1818	1818
3833	1749	1819	1749	1819	1819	1819	1819
3834	1750	1820	1750	1820	1820	1820	1820
3835	1751	1821	1751	1821	1821	1821	1821
3836	1752	1822	1752	1822	1822	1822	1822
3837	1753	1823	1753	1823	1823	1823	1823
3838	1754	1824	1754	1824	1824	1824	1824
3839	1755	1825	1755	1825	1825	1825	1825
3840	1756	1826	1756	1826	1826	1826	1826
3841	1757	1827	1757	1827	1827	1827	1827
3842	1758	1828	1758	1828	1828	1828	1828
3843	1759	1829	1759	1829	1829	1829	1829
3844	1760	1830	1760	1830	1830	1830	1830
3845	1761	1831	1761	1831	1831	1831	1831
3846	1762	1832	1762	1832	1832	1832	1832
3847	1763	1833	1763	1833	1833	1833	1833
3848	1764	1834	1764	1834	1834	1834	1834
3849	1765	1835	1765	1835	1835	1835	1835
3850	1766	1836	1766	1836	1836	1836	1836
3851	1767	1837	1767	1837	1837	1837	1837
3852	1768	1838	1768	1838	1838	1838	1838
3853	1769	1839	1769	1839	1839	1839	1839
3854	1770	1840	1770	1840	1840	1840	1840
3855	1771	1841	1771	1841	1841	1841	1841
3856	1772	1842	1772	1842	1842	1842	1842
3857	1773	1843	1773	1843	1843	1843	1843
3858	1774	1844	1774	1844	1844	1844	1844
3859	1775	1845	1775	1845	1845	1845	1845
3860	1776	1846	1776	1846	1846	1846	1846
3861	1777	1847	1777	1847	1847	1847	1847
3862	1778	1848	1778	1848	1848	1848	1848
3863	1779	1849	1779	1849	1849	1849	1849
3864	1780	1850	1780	1850	1850	1850	1850
3865	1781	1851	1781	1851	1851	1851	1851
3866	1782	1852	1782	1852	1852	1852	1852
3867	1783	1853	1783	1853	1853	1853	1853
3868	1784	1854	1784	1854	1854	1854	1854
3869	1785	1855	1785	1855	1855	1855	1855
3870	1786	1856	1786	1856	1856	1856	1856
3871	1787	1857	1787	1857	1857	1857	1857
3872	1788	1858	1788	1858	1858	1858	1858
3873	1789	1859	1789	1859	1859	1859	1859
3874	1790	1860	1790	1860	1860	1860	1860
3875	1791	1861	1791	1861	1861	1861	1861
3876	1792	1862	1792	1862	1862	1862	1862
3877	1793	1863	1793	1863	1863	1863	1863
3878	1794	1864	1794	1864	1864	1864	1864
3879	1795	1865	1795	1865	1865	1865	1865
3880	1796	1866	1796	1866	1866	1866	1866
3881	1797	1867	1797	1867	1867	1867	1867
3882	1798	1868	1798	1868	1868	1868	1868
3883	1799	1869	1799	1869	1869	1869	1869
3884	1800	1870	1800	1870	1870	1870	1870
3885	1801	1871	1801	1871	1871	1871	1871
3886	1802	1872	1802	1872	1872	1872	1872
3887	1803	1873	1803	1873	1873	1873	1873
3888	1804	1874	1804	1874	1874	1874	1874
3889	1805	1875	1805	1875	1875	1875	1875
3890	1806	1876	1806	1876	1876	1876	1876
3891	1807	1877	1807	1877	1877	1877	1877
3892	1808	1878	1808	1878	1878	1878	1878
3893	1809	1879	1809	1879	1879	1879	1879
3894	1810	1880	1810	1880	1880	1880	1880
3895	1811	1881	1811	1881	1881	1881	1881
3896	1812	1882	1812	1882	1882	1882	1882
3897	1813	1883	1813	1883	1883	1883	1883
3898	1814	1884	1814	1884	1884	1884	1884
3899	1815	1885	1815	1885	1885	1885	1885
3900	1816	1886	1816	1886	1886	1886	1886

序号	姓名	性别	民族	出生日期		籍贯	学历	学位	职称	主要工作经历	主要业绩	获奖情况	其他
				出生年月	出生日期								
1	王 强	男	汉族	1975.10	10/10	山西	本科	无	无	无	无	无	无
2	李 伟	男	汉族	1978.05	5/5	河南	本科	无	无	无	无	无	无
3	张 明	男	汉族	1980.03	3/3	山东	本科	无	无	无	无	无	无
4	刘 华	男	汉族	1982.07	7/7	湖北	本科	无	无	无	无	无	无
5	陈 宇	男	汉族	1985.11	11/11	四川	本科	无	无	无	无	无	无
6	周 涛	男	汉族	1988.09	9/9	湖南	本科	无	无	无	无	无	无
7	吴 昊	男	汉族	1990.06	6/6	安徽	本科	无	无	无	无	无	无
8	郑 宇	男	汉族	1992.04	4/4	福建	本科	无	无	无	无	无	无
9	冯 强	男	汉族	1995.08	8/8	江西	本科	无	无	无	无	无	无
10	孙 伟	男	汉族	1998.12	12/12	广东	本科	无	无	无	无	无	无
11	李 明	男	汉族	2000.01	1/1	广西	本科	无	无	无	无	无	无
12	王 强	男	汉族	2002.05	5/5	贵州	本科	无	无	无	无	无	无
13	张 华	男	汉族	2004.09	9/9	云南	本科	无	无	无	无	无	无
14	刘 伟	男	汉族	2006.03	3/3	陕西	本科	无	无	无	无	无	无
15	陈 宇	男	汉族	2008.07	7/7	甘肃	本科	无	无	无	无	无	无
16	周 涛	男	汉族	2010.11	11/11	宁夏	本科	无	无	无	无	无	无
17	吴 昊	男	汉族	2012.05	5/5	青海	本科	无	无	无	无	无	无
18	郑 宇	男	汉族	2014.09	9/9	海南	本科	无	无	无	无	无	无
19	冯 强	男	汉族	2016.03	3/3	重庆	本科	无	无	无	无	无	无
20	孙 伟	男	汉族	2018.07	7/7	四川	本科	无	无	无	无	无	无
21	李 明	男	汉族	2020.11	11/11	湖北	本科	无	无	无	无	无	无
22	王 强	男	汉族	2022.05	5/5	湖南	本科	无	无	无	无	无	无
23	张 华	男	汉族	2024.09	9/9	安徽	本科	无	无	无	无	无	无
24	刘 伟	男	汉族	2026.03	3/3	福建	本科	无	无	无	无	无	无
25	陈 宇	男	汉族	2028.07	7/7	江西	本科	无	无	无	无	无	无
26	周 涛	男	汉族	2030.11	11/11	广东	本科	无	无	无	无	无	无
27	吴 昊	男	汉族	2032.05	5/5	广西	本科	无	无	无	无	无	无
28	郑 宇	男	汉族	2034.09	9/9	贵州	本科	无	无	无	无	无	无
29	冯 强	男	汉族	2036.03	3/3	云南	本科	无	无	无	无	无	无
30	孙 伟	男	汉族	2038.07	7/7	陕西	本科	无	无	无	无	无	无
31	李 明	男	汉族	2040.11	11/11	甘肃	本科	无	无	无	无	无	无
32	王 强	男	汉族	2042.05	5/5	宁夏	本科	无	无	无	无	无	无
33	张 华	男	汉族	2044.09	9/9	海南	本科	无	无	无	无	无	无
34	刘 伟	男	汉族	2046.03	3/3	重庆	本科	无	无	无	无	无	无
35	陈 宇	男	汉族	2048.07	7/7	四川	本科	无	无	无	无	无	无
36	周 涛	男	汉族	2050.11	11/11	湖北	本科	无	无	无	无	无	无
37	吴 昊	男	汉族	2052.05	5/5	湖南	本科	无	无	无	无	无	无
38	郑 宇	男	汉族	2054.09	9/9	安徽	本科	无	无	无	无	无	无
39	冯 强	男	汉族	2056.03	3/3	福建	本科	无	无	无	无	无	无
40	孙 伟	男	汉族	2058.07	7/7	江西	本科	无	无	无	无	无	无
41	李 明	男	汉族	2060.11	11/11	广东	本科	无	无	无	无	无	无
42	王 强	男	汉族	2062.05	5/5	广西	本科	无	无	无	无	无	无
43	张 华	男	汉族	2064.09	9/9	贵州	本科	无	无	无	无	无	无
44	刘 伟	男	汉族	2066.03	3/3	云南	本科	无	无	无	无	无	无
45	陈 宇	男	汉族	2068.07	7/7	陕西	本科	无	无	无	无	无	无
46	周 涛	男	汉族	2070.11	11/11	甘肃	本科	无	无	无	无	无	无
47	吴 昊	男	汉族	2072.05	5/5	宁夏	本科	无	无	无	无	无	无
48	郑 宇	男	汉族	2074.09	9/9	海南	本科	无	无	无	无	无	无
49	冯 强	男	汉族	2076.03	3/3	重庆	本科	无	无	无	无	无	无
50	孙 伟	男	汉族	2078.07	7/7	四川	本科	无	无	无	无	无	无
51	李 明	男	汉族	2080.11	11/11	湖北	本科	无	无	无	无	无	无
52	王 强	男	汉族	2082.05	5/5	湖南	本科	无	无	无	无	无	无
53	张 华	男	汉族	2084.09	9/9	安徽	本科	无	无	无	无	无	无
54	刘 伟	男	汉族	2086.03	3/3	福建	本科	无	无	无	无	无	无
55	陈 宇	男	汉族	2088.07	7/7	江西	本科	无	无	无	无	无	无
56	周 涛	男	汉族	2090.11	11/11	广东	本科	无	无	无	无	无	无
57	吴 昊	男	汉族	2092.05	5/5	广西	本科	无	无	无	无	无	无
58	郑 宇	男	汉族	2094.09	9/9	贵州	本科	无	无	无	无	无	无
59	冯 强	男	汉族	2096.03	3/3	云南	本科	无	无	无	无	无	无
60	孙 伟	男	汉族	2098.07	7/7	陕西	本科	无	无	无	无	无	无
61	李 明	男	汉族	2100.11	11/11	甘肃	本科	无	无	无	无	无	无
62	王 强	男	汉族	2102.05	5/5	宁夏	本科	无	无	无	无	无	无
63	张 华	男	汉族	2104.09	9/9	海南	本科	无	无	无	无	无	无
64	刘 伟	男	汉族	2106.03	3/3	重庆	本科	无	无	无	无	无	无
65	陈 宇	男	汉族	2108.07	7/7	四川	本科	无	无	无	无	无	无
66	周 涛	男	汉族	2110.11	11/11	湖北	本科	无	无	无	无	无	无
67	吴 昊	男	汉族	2112.05	5/5	湖南	本科	无	无	无	无	无	无
68	郑 宇	男	汉族	2114.09	9/9	安徽	本科	无	无	无	无	无	无
69	冯 强	男	汉族	2116.03	3/3	福建	本科	无	无	无	无	无	无
70	孙 伟	男	汉族	2118.07	7/7	江西	本科	无	无	无	无	无	无
71	李 明	男	汉族	2120.11	11/11	广东	本科	无	无	无	无	无	无
72	王 强	男	汉族	2122.05	5/5	广西	本科	无	无	无	无	无	无
73	张 华	男	汉族	2124.09	9/9	贵州	本科	无	无	无	无	无	无
74	刘 伟	男	汉族	2126.03	3/3	云南	本科	无	无	无	无	无	无
75	陈 宇	男	汉族	2128.07	7/7	陕西	本科	无	无	无	无	无	无
76	周 涛	男	汉族	2130.11	11/11	甘肃	本科	无	无	无	无	无	无
77	吴 昊	男	汉族	2132.05	5/5	宁夏	本科	无	无	无	无	无	无
78	郑 宇	男	汉族	2134.09	9/9	海南	本科	无	无	无	无	无	无
79	冯 强	男	汉族	2136.03	3/3	重庆	本科	无	无	无	无	无	无
80	孙 伟	男	汉族	2138.07	7/7	四川	本科	无	无	无	无	无	无
81	李 明	男	汉族	2140.11	11/11	湖北	本科	无	无	无	无	无	无
82	王 强	男	汉族	2142.05	5/5	湖南	本科	无	无	无	无	无	无
83	张 华	男	汉族	2144.09	9/9	安徽	本科	无	无	无	无	无	无
84	刘 伟	男	汉族	2146.03	3/3	福建	本科	无	无	无	无	无	无
85	陈 宇	男	汉族	2148.07	7/7	江西	本科	无	无	无	无	无	无
86	周 涛	男	汉族	2150.11	11/11	广东	本科	无	无	无	无	无	无
87	吴 昊	男	汉族	2152.05	5/5	广西	本科	无	无	无	无	无	无
88	郑 宇	男	汉族	2154.09	9/9	贵州	本科	无	无	无	无	无	无
89	冯 强	男	汉族	2156.03	3/3	云南	本科	无	无	无	无	无	无
90	孙 伟	男	汉族	2158.07	7/7	陕西	本科	无	无	无	无	无	无
91	李 明	男	汉族	2160.11	11/11	甘肃	本科	无	无	无	无	无	无
92	王 强	男	汉族	2162.05	5/5	宁夏	本科	无	无	无	无	无	无
93	张 华	男	汉族	2164.09	9/9	海南	本科	无	无	无	无	无	无
94	刘 伟	男	汉族	2166.03	3/3	重庆	本科	无	无	无	无	无	无
95	陈 宇	男	汉族	2168.07	7/7	四川	本科	无	无	无	无	无	无
96	周 涛	男	汉族	2170.11	11/11	湖北	本科	无	无	无	无	无	无
97	吴 昊	男	汉族	2172.05	5/5	湖南	本科	无	无	无	无	无	无
98	郑 宇	男	汉族	2174.09	9/9	安徽	本科	无	无	无	无	无	无
99	冯 强	男	汉族	2176.03	3/3	福建	本科	无	无	无	无	无	无
100	孙 伟	男	汉族	2178.07	7/7	江西	本科	无	无	无	无	无	无

第5章 総括

和歌刻書土器について

ケカチ遺跡で出土した和歌刻書土器については、本書の刊行に先立つ平成29年9月3日に甲州市でシンポジウムが開催され、広く一般公開された。土器の内面左側に仮名文字を五行に分けて31文字、ヘラ書きしたものである。土器としては甲斐型土器という奈良時代以降の甲斐国において生産されたものである。口縁は玉縁状を呈し、体部外面はヘラケズリ調整が見られない。甲斐型土器の最終段階に属するもので山梨県史奈良・平安時代編年ではⅦ期に相当する。漢字から仮名への変遷を知る上で貴重な資料であり、ヘラ書きであることによって土器にかかわる時期や場所の特定が可能で、当時の中央と地方の関わりを解き明かす上でも重要なものである。シンポジウム配布資料『甲州市文化財調査報告書第25集 古代史しんぼじうむ「和歌刻書土器の発見」ケカチ遺跡と於曾郷』では土器の検討にあたった各分野の研究者の詳しい解説を掲載しているが、ここでも一部抜粋する形で紹介する。解説案は次に示すとおりである。

- 【解説案】 一行目 わ れ に よ り お も
(字母) 和 礼 尔 与 利 於 毛
二行目 ひ く □ (×又はる) ら ん し け い
比 久 × (留) 良 无 之 計 以
三行目 と の あ は す や □ (み) ※「み」は欠損部分のため推定
止 能 安 波 数 也 見
四行目 な は ふ く る
奈 波 不 久 留
五行目 は か り そ
波 可 利 所

- 【和歌A案】 我(われ)により
思ひ繰(く)らむ
紐(しけ)糸(いと)の
逢(あ)はずやみなば
更(ふ)くるばかりぞ

〈現代語訳案〉

私の方から思いを括り合わせよう。しけ糸のように、繰り(寄り)合う(逢う)ことのないまま離ればなれで終わってしまうならば、ただ更けていく(年が過ぎる)ばかりです。

- 【和歌B案】 我(われ)により
思ひ暮(く)るらむ
紐(しけ)糸(いと)の
逢(あ)はずやみなば
更(ふ)くるばかりぞ

〈現代語訳案〉

私のためにあなたは、日がなものの思いをし続けていることだろう。しけ糸のように繰り(寄り)合う(逢う)ことのないまま離ればなれで終わってしまうならば、ただ更けてゆくばかりの夜になるが(そうならぬよう今宵は逢おう)。

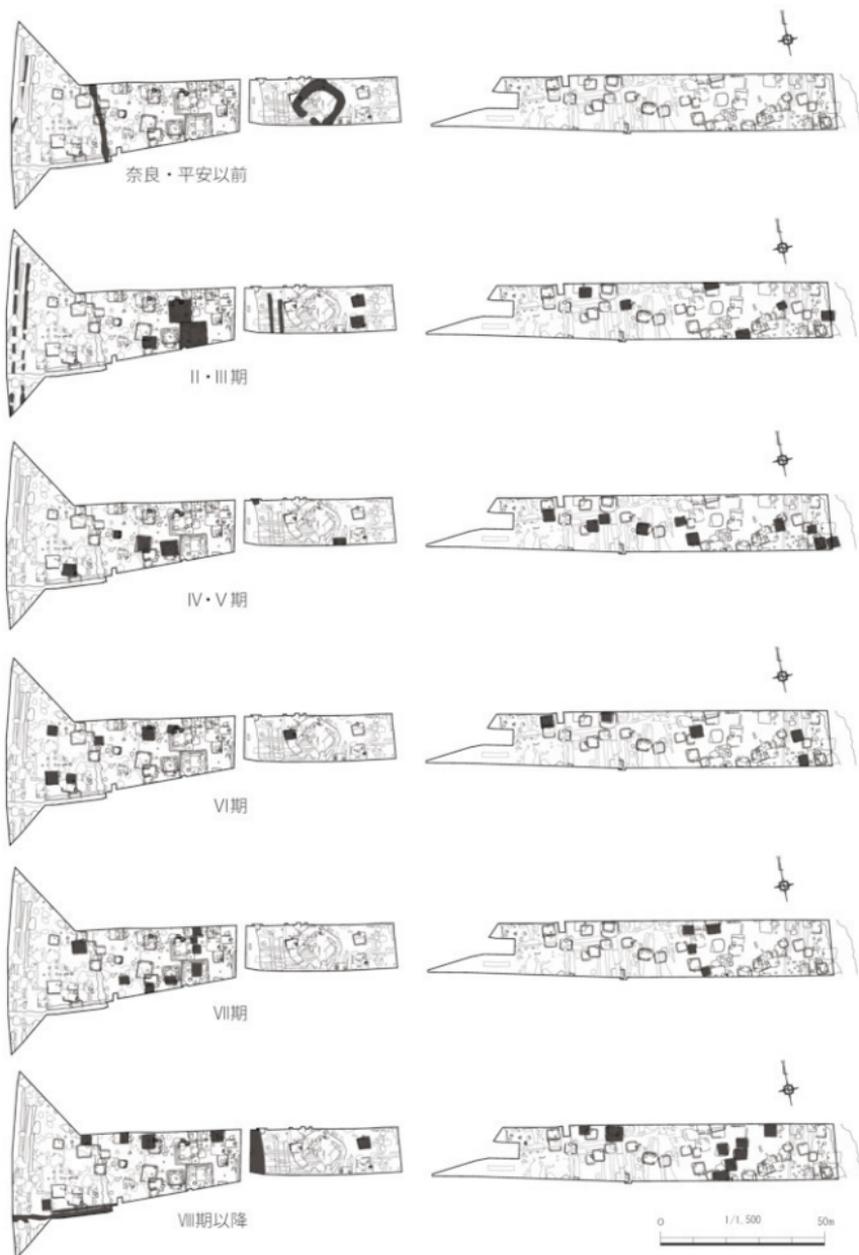
遺構の変遷と出土遺物の様相

后畑西遺跡・ケカチ遺跡で検出した遺構の変遷と出土遺物の様相を概観しておきたい。ローマ数字で示した時期は山梨県史奈良・平安時代編年によるもので、后畑西・ケカチⅠ期・Ⅱ期とはしていない。

奈良・平安以前	ケカチ	S D 5・7、S Z 1
Ⅱ・Ⅲ期	后畑西	S I 1・12・20・39・42・51
	ケカチ	S I 1・2・19・20・22・28、S D 1・2・4・6
Ⅳ・Ⅴ期	后畑西	S I 3・5・14・22・26・32・41・46・47・52
	ケカチ	S I 3・5・24・27・30・37
Ⅵ期	后畑西	S I 10・23・28・53・54
	ケカチ	S I 4・16・25・35・36・40・45
Ⅶ期	后畑西	S I 6・7・13・37
	ケカチ	S I 14・17・18・23・31・32・33・42
Ⅷ期以降	后畑西	S I 8・9・11・15・16・40・49・50、S K 68
	ケカチ	S I 8・10・26・29・39・41、S D 3・8・9

奈良・平安以前では后畑西遺跡では縄文土器と古墳時代の土師器がわずかに出土したのみで検出できない遺構はない。ケカチ遺跡では古墳時代前期の方形周溝墓を1基検出している。周溝の一辺が13.5m×13mを測るもので、南西側の一辺が途切れて陸橋状となる形状である。周溝に平安時代の竪穴建物が重複することから、その時期には墳丘は削平され、生活域としての土地利用が開始されていたものとみている。方形周溝墓の出土遺物には北陸系の装飾器台や壺などがあり、4世紀前半のものである。S D 5・7はいずれも奈良・平安時代の竪穴建物が先行しており、縄文土器や打製石斧などがわずかにあるが出土している。

Ⅱ・Ⅲ期は后畑西遺跡で竪穴建物6軒、ケカチ遺跡で竪穴建物5軒と溝状遺構 S D 1・2および S D 4・6を検出した。后畑西遺跡の竪穴建物は分散しており、主軸方向はほぼ南北軸と一致するもの(N-5°-WからN-5°-E)が3軒、やや東に振るもの(N-5°-EからN-15°-E)が2軒、西に振るもの(N-15°-W)が1軒である。ケカチ遺跡では S D 1・2より東に位置する竪穴建物が2軒で、S D 1・2と S D 4・6に挟まれた区画に3軒を検出した。主軸方向は東側を並走する S D 1・2がN-7°-E、西側を並走する S D 4・6がN-14°-Eである。建物は S I 1がわずかに外れるものの他の建物は東西で並走する S D 1・2と S D 4・6の主軸方向の振り幅に収まっている。この傾向は他の時期にもほぼ当てはまっており、后畑西遺跡では主軸方向にややバラつきがみられるものの、ケカチ遺跡ではほとんどの建物が溝状遺構の主軸方向の振り幅の中に収まっている。ケカチ遺跡の建物が東西で並走する溝状遺構の主軸方向に制約を受けているとみることができ、それは溝状遺構が埋没後も続いたようである(S D 1・2と S D 4・6の出土遺物の時期はほぼⅡ・Ⅲ期に収まる)。なお S D 1・2の東側は竪穴建物の分布が一旦希薄となり、少し離れて后畑西遺跡の集落が検出される。S D 4・6の西側の梶畑B遺跡では谷状地形が検出され、その西にまばらに竪穴建物が検出されている。これらから東西で並走する溝状遺構を集落の区画とみることができ、その区画の幅は東西方向で75mである。また、S D 1・2と S D 4・6で類似する墨書土器が出土している。S D 2の№3・4、S D 4の№13・14・15、S D 6の№5・7などいずれも見込内まで暗文を施した丁寧なつくりの甲斐型土器の坏で、外底面に墨書される。墨書は一見すると「七」のように見えるが書き順はまちまちで、ケカチの集落を示す記号かもしれないと想像している。竪穴建物の中では、ケカチ遺跡の S I 22は4本主柱で一辺が約8mに及ぶ大形なもので、今回の后畑西遺跡とケカチ遺跡の発掘調査で検出した100軒以上の竪穴建物の中で最大の



后畑西遺跡・ケカチ遺跡遺構変遷図

大きさである。隣接するS I 19も一辺が7.2mと、時期差のない中で2軒の大形建物を検出している。S I 22の出土遺物には須恵器の二面碇や鉄製錘などがある。土師器製の風字碇が笛吹市の大原遺跡で出土しているが、須恵器の二面碇の出土は県内で初例であり全国的にも例が少ない。二面に分かれた碇面の狭い面からはベンガラ成分が検出され、黒墨と朱墨を使い分けていたことが判明した(第6章第1節)。錘は県内では南アルプス市の百々遺跡で銅製錘が出土しているが、ケカチの錘は鉄製で、より実用的な形状である。竿秤の錘と想定している。S I 28では「南」、「口酒」の墨書土器の他、漆が付着した須恵器環も出土している。これらの出土遺物からは文字を扱い、物品の重さの記録を取るなどして行政組織の一端を担った人物の存在が想定される。また、覆土上層から出土した和歌刻書土器の時期(VII期)とは200年近くの開きがあることになるが、すでに奈良時代にはこの場所が行政的、公的な役割を担う場所であり、文化的な素養も持つ人物が集う状況にあった場所であるとも言える。

IV・V期には后畑西遺跡で竪穴建物10軒、ケカチ遺跡で6軒の竪穴建物を検出した。后畑西遺跡ではこの時期の建物をもっとも多いのに対し、ケカチ遺跡では溝状遺構の区画内では4軒ともっとも少ない。墨書土器・刻書土器の出土が多くなってくる時期で、后畑西遺跡のS I 26では「戸舎」の墨書や「奉」とみられる墨書土器が2点出土している。ケカチ遺跡のS I 3では「南」の墨書が3点と「合」が1点出土し、S I 7では「須」が6点出土する。S I 37では「万」が1点、「北」が3点出土する。その他の出土遺物では、后畑西遺跡のS I 5で角状の把手が付いた甕形のミニチュア土器や鉄製の紡錘車などが出土している。また全体では土師器高環が数は多くないものの出土しており、V期以降とみられる竪穴では置きカマドが出土する。

VI期には后畑西遺跡で5軒、ケカチ遺跡で7軒の竪穴建物を検出した。墨書土器・刻書土器の出土が多く、判読できる墨書土器の数も多い。后畑西遺跡のS I 53では「五」の墨書の他、「吉」の線刻の刻書土器なども出土する。ケカチ遺跡のS I 4では「門」の墨書土器が2点出土する。S I 4はS D 1・2が陸橋状に途切れる地点の東(区画の外)に位置しており文字通りの場所であった可能性もある。他に「合」の墨書や「得」の刻書があり、また土器の時期としては少し先行するが「掾」と読める墨書土器も出土しており、ケカチ遺跡の公的な性格と考え合わせると興味深い。S I 25では「合」・「万」の墨書、S I 35では「北」が出土する。S I 40では「吉」の墨書土器が4点、「合」と「号」もそれぞれ1点ずつ出土する。その他の遺物では置きカマドに加えて、口径15cm以上の大形の土師器環、土師器羽釜や灰釉陶器などが目立ち始める。

VII期には后畑西遺跡で4軒、ケカチ遺跡で8軒の竪穴建物を検出した。后畑西遺跡はこの時期がもっとも数が少なく中央部に集中的に検出されたのみだが、逆にケカチ遺跡はもっとも多くなる。建物には后畑西遺跡のS I 7・13など一辺が3m程度の小形のものがある。S I 7ではカマド祭祀にかかわる遺構も検出されている。墨書土器・刻書土器は減少傾向となるが出土しており、后畑西遺跡のS I 7で「吉」、「第」、ケカチ遺跡のS I 33では「御」、S I 42では「西」が出土している。他の遺物ではS I 18で三足土器が出土し、S I 31では緑釉陶器、碗形の鉄滓なども出土している。また和歌刻書土器もこの時期に属する遺物である。

VIII期以降には中世も含めた。后畑西遺跡で8軒の竪穴建物と中世の土壇墓1軒、ケカチ遺跡で6軒の竪穴建物と中世の溝状遺構3条を検出した。后畑西遺跡ではS I 16の壁沿いで口縁を重ね合わせた状態の土師器環が出土しており隣接する后畑遺跡と同様の事例がある。集落内の道端における地鎮、祭祀行為が想定されている。出土遺物では墨書土器・刻書土器はほとんどみられない。S I 29では土製錘が出土しており、西に隣接する梶畑B遺跡でも出土例がある。后畑西遺跡のS K 68は土坑上面に集石を検出し、その下から人骨が出土した。時期の分かる出土遺物はないが埋葬形態から中世墓とみられる。

分析(第6章第3節)により被葬者は20歳代の女性と推定されている。他に中世では后畑西遺跡、ケカチ遺跡でそれぞれ一体のウマの骨が出土しており詳細に分析されている(第6章第2節)。后畑西のウマは推定年齢13歳、ケカチ遺跡は体高110cm台と小形で、推定年齢10歳である。后畑西のウマには中世陶器の破片が伴っていた。ケカチ遺跡のウマの出土位置はS I 42のカマドの直上で、重複するS I 41の覆土中とした。竪穴に伴う可能性もあるが、表土直下での出土ということもあり中世としている。溝状遺構3条を検出しているが中世の建物は確認できなかった。

その他、遺跡全体では竪穴建物を多く検出したものの掘立柱建物を構成すると判断できた柱穴はなかった。なお墨書土器・刻書土器の釈文については平川南(山梨県立博物館)、原正人(駿台甲府高等学校)、平野修(山梨文化財研究所)のご協力を賜った。記して感謝申し上げます。

土壌試料の採取について

后畑西遺跡・ケカチ遺跡で検出した竪穴建物のカマドなどから56地点分の土壌試料を採取した。その試料を水洗フルイして採取した状態の良い41地点分について自然科学分析を行った(第6章第4節)。試料の水洗フルイ、分別作業にあたっては株式会社パレオ・ラボの佐々木由香氏の指導・助言を受けた。分析で得られた貴重な成果はもちろんであるが、こうした指導についても感謝申し上げるとともにその方法を簡単に記しておきたい。

56地点分の土壌試料は発掘現場において土嚢袋や遺物収納用のチャック袋(H4・J4・L4等)に採取した。採取した試料の多くは竪穴のカマド跡などで検出した焼土、炭化物を含む土壌である。現場調査終了後、採取試料にそれぞれ整理番号(土1・2などとした)を付した後、重さを計測して水洗フルイを開始した。水洗は5mm・2mm・0.8mmの網目のフルイを用いた。水に浮く試料については目の細かい調理用の揚げ網などを転用してすくい上げた。フルイや揚げ網を使用して採取した試料は、シャワーヘッドをつけたホースを用いて水圧で落とし、目の細かい寒冷紗を重ねあわせたものを底に敷いた果実採取用のカゴに入れた(写真図版66参照)。微細な試料の収納には洗濯用のゴミ取りネットなども利便性が高かった。得られた試料は天日の下で乾かし、白い紙の上に空けてピンセットを用いて分別を行った。分別は炭化物、樹木・種子、貝・骨、土器などに大雑把に分別し、種類ごとに遺物収納用のチャック袋に収納した。

こうして得た試料を分析対象試料として株式会社パレオ・ラボに委託した。

引用・参考文献

- 一宮町遺跡調査会 1990『大原遺跡発掘調査概報』
- 山梨県 1999『山梨県史 資料編2 原子・古代2考古(遺構・遺物)』
- 山梨県考古学協会 1992『甲斐型土器—その編年と年代—』
- 山梨県埋蔵文化財センター 2002『五反田遺跡—塩山(東)バイパス(国道411号)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 山梨文化財研究所他 2012『後畑B遺跡—市道下塩後22号線建設に伴う発掘調査報告書—』
- 小林健二 2015「甲斐の古墳時代と土器」『山梨県考古学協会誌 第23号』
- 山梨文化財研究所他 2016『五反田遺跡—ナフコ甲州店建設に伴う発掘調査報告書—』
- 山梨文化財研究所他 2017『大木戸・后畑遺跡—市道下塩後22号線建設に伴う発掘調査報告書—』
- 甲州市教育委員会文化財課 2017『古代史しんぼじうむ「和歌刻書土器の発見」ケカチ遺跡と於曽野』

第6章 自然科学分析

第1節 ケカチ遺跡出土二面硯の科学分析

山梨県立博物館 西願麻以

1. はじめに

山梨県甲州市ケカチ遺跡より8世紀中ごろ須恵器製の二面硯(SI22 №61)が出土した。硯面が2つに区画されており、黒墨と朱墨が使い分けられていた可能性が考えられた。本報告では硯の科学分析を行い、朱墨の有無の確認と顔料の同定を試みた。

2. 分析方法

硯の表面観察に実体顕微鏡(顕微鏡: OLYMPUS製 SZ61、カメラ: Nikon製 DIGITAL SIGHT DS-U1)を、顔料粒子の観察と元素組成分析にSEM-EDX(SEM: 日本FEI製 Quanta 600、EDX: アメテック製 EDAX Genesis2000)を用いた。顔料粒子の観察のために、資料表面から炭素テープを用いて顔料を極微量サンプリングを行い分析した。SEM-EDXの分析条件は測定環境高真空、加速電圧25kV、測定時間は90秒で行った。

3. 結果

3-1 赤色顔料付着部位について

実体顕微鏡観察(約6倍)により、赤色顔料が確認された(図2)。非常に細かい赤褐色の顔料が、資料表面の傷やヒビの隙間にみられた。資料全体の実態顕微鏡観察で確認された赤色顔料部位を図1に示す。

3-2 赤色顔料の定性分析

SEM-EDXによる定性分析によって、赤色部位から鉄(Fe)、ケイ素(Si)、アルミニウム(Al)、マグネシウム(Mg)が検出された。サンプリングされた試料の赤色顔料部位以外の部位と比較して、鉄が顕著に多く検出されている(図4)。

3-3 赤色顔料粒子観察

電子顕微鏡による粒子観察(約5600倍)では、厚さ0.1~0.2 μm の薄片状の粒子の一部や0.1 μm 程度の粒状の粒子が確認できる(図3)。中空円筒状のパイプ状粒子は確認されなかった。

4. 考察

4-1 硯の使用法

硯の2面のうち小さい面の1面のみに集中して赤色顔料が確認されてことから、2面を使い分けて使用されていたことが窺える。今回の観察からはもう1面で、黒墨か、水か、他の色の顔料を使用していたのかは分からなかった。硯という性質を考えると建造物などの朱塗りの刷毛等のために用いられた可能性は低い。硯の原型は様々な形が想像できるが、赤色顔料が確認された面は比較的小さく、朱筆や小さい朱印などに用いられていたのではないかと推測される。

4-2 赤色顔料の種類について

古代の赤色顔料はベンガラ(Fe₂O₃ 酸化鉄(III))、水銀朱(HgS 硫化水銀)、鉛丹(Pb₃O₄ 四酸化三鉛)が考えられるが、水銀と鉛が検出されず鉄が検出されたので、本資料の赤色顔料は「ベンガラ」と考えられる。ベンガラは赤の中でもやや褐色に近い色合いを呈する。定性分析結果の鉄以外の成分は鉱物や土等に含まれる成分であると考えられる。

ベンガラは、近年の研究によって同じ酸化鉄(III)で赤い色相を主成分とするものでも、原材料や製法によって(1)赤土ベンガラ、(2)鉄丹ベンガラ、(3)丹土ベンガラ、(4)ローハベンガラ、(5)赤泥ベンガラ、(6)パイプ状ベンガラ、(7)湿式沈殿法による現代のベンガラなどに分類されている¹⁾。本資料のベンガラは電子顕微鏡による粒子観察から薄片状の粒子が確認されたことから、パイプ状の微生物由来のベンガラではなく、赤土ベンガラか丹土ベンガラなどの鉱物由来のベンガラであると考えられる。赤土

ベンガラは、天然赤鉄鉱を粉砕して磨り潰す、もしくは赤味が強い粘土系の風化生成土壌や赤鉄鉱の鉱石が風化して脆弱粉砕化された細粉集積土壌を精製して作成する天然鉱物系のベンガラであり、丹土ベンガラは、鉄分を多く含む黄土を焼いて製造されるもので、量産可能なため古代建造物の外観塗装材料に多用されるベンガラである 1)。本報告では、5600 倍での粒子観察が限界であったが、1～2 万倍の顕微鏡観察でより詳しいベンガラの同定が可能であろう。

近年の研究によって、日本各地の文化財のベンガラ粒子の観察が行われており、地域や時代、資料の形態によって異なる種のベンガラが用いられていることが知られている。山梨におけるベンガラ粒子の観察例は少なく、松ノ尾遺跡（山梨県甲斐市）の古墳時代初期の赤色土師器に貯蔵されていたと考えられるベンガラでパイプ状ベンガラが確認されているのみである 2)。全国に目を向けると、東日本の前期古墳時代では、関東、静岡の遺跡では主にパイプ状ベンガラがみられ、尾張、能登・越中、下越・置賜・会津では非パイプ状ベンガラがみられる傾向となっている 3)。また上水流遺跡（鹿児島県）では、縄文時代半ばまでがパイプ状ベンガラのみ、晩期には鉱物系のベンガラ、水銀朱も併用し、古墳時代以降は鉱物系のみが使用されており、鹿児島県内の古代の資料からはパイプ状ベンガラが確認されていない 4)。本県では本資料の分析と合わせて 2 件のみであり、資料の形態の違い等の考慮も必要であるが、時代が下り鉱物系のベンガラが使用されている点は鹿児島県の報告と同じ傾向である。今後、山梨での赤色顔料の粒子観察例が増え、縄文から古代の物流の実態や移り変わりなどが明らかになることを期待する。

4.3 8 世紀ごろの赤色顔料の流通や使い分けについて

8 世紀ごろの赤色顔料の使用傾向はどのようなものだったのか。正倉院文書の科学分析によって、朱印の天皇御璽（756～758 年）は鉛丹と水銀朱の混合物、太政官印（783～806 年）は鉛丹に若干のベンガラをまぜたもの、国印（702～738 年）はベンガラ、調査例は少ないが地方印（年未詳）でもベンガラが確認されており、印内顔料はランクによって異なっていることがわかる 5)。また、天平勝宝 4 年（752）頃のベンガラ、鉛丹、水銀朱の価格は「仏像彩色料並布施等注文」（続々修二四帙裏）によれば、同一重量あたり、ベンガラ（「紫土」）を一とすれば、鉛丹（「丹」）三、水銀朱（「朱沙」）一〇〇の割合であり 5)、ベンガラが最も入手しやすく一般的に流通していたことが伺える。国印や地方印でベンガラが使用されていたことを考えれば、地方での印や朱筆では一般的にベンガラが用いられていたと考えるのは容易い。8 世紀中ごろに甲斐国於曾郷において硯でベンガラが使用されていたことは、特殊なことではなく一般的なことであったと想像できる。

5. まとめ

本調査によって、山梨県甲州市ケカチ遺跡出土の須恵器製の二面硯（8 世紀中ごろ）で面の使い分けの状況や、鉱物系ベンガラの使用が確認された。硯の 2 面利用の証拠だけでなく、赤色顔料流通の変遷などをさぐる貴重なデータを得ることができた。

引用文献

- 1) 北野信彦・美濃口紀子 (2011)「肥後の古代瓦に塗られた赤色顔料について - 熊本博物館所蔵瓦を中心に -」, 熊本市立熊本博物館報告 23, pp.61-82
- 2) 西願麻以 (2016)「松ノ尾遺跡出土壺内の赤色物質の科学調査」, 松ノ尾遺跡第 15 次調査報告書
- 3) 志賀智久 (2016)「東日本の前期古墳出土土塗土器に採用されたベンガラの地域性に関する研究」, 日本文化財科学会第 33 回大会研究発表要旨集, pp.180-181
- 4) 内山伸明・橋本秀樹ほか (2012)「赤色顔料の原料採取地を求めて - 鹿児島県上水流域遺跡・関山遺跡の例から -」, 鹿児島県立埋蔵文化財センター研究紀要 縄文の森から 5, pp.47-54
- 5) 成瀬正和 (2011)「正倉院文書と料紙調査」必携古典籍古文書料紙辞典, pp176-180

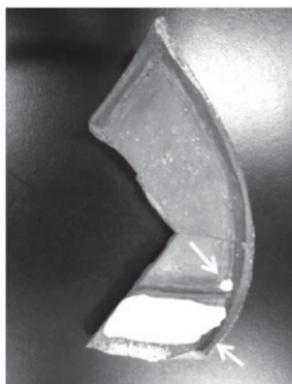


図1

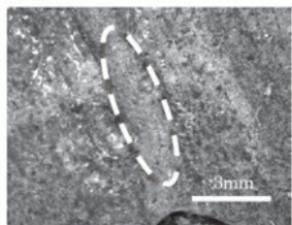


図2

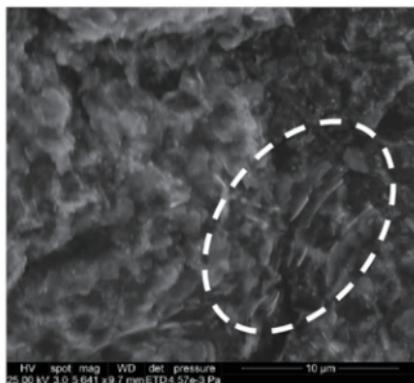


図3

図1：赤色顔料分布位置

図2：実体顕微鏡観察画像（点線内に赤色顔料）

図3：電子顕微鏡観察画像（点線内に薄片粒子）

図4：硯表面のEDX分析結果（上）

硯表面赤色顔料部位のEDX分析結果（下）

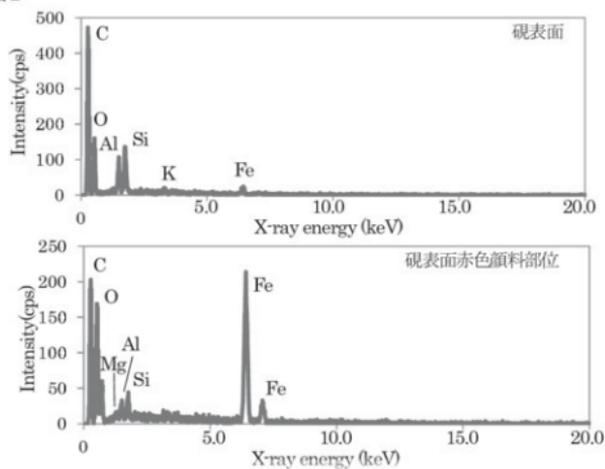


図4

第2節 ケカチ遺跡・后畑西遺跡から出土したウマ遺体

植月 学 (弘前大学)

1. はじめに

ケカチ遺跡・后畑西遺跡よりそれぞれ1個体のウマ遺体が出土した。いずれも平安時代の竪穴建物址の上面で出土しているが、遺構に伴うかは疑問とされている。標本は風化が進み、全般に遺存状態は不良である。

2. 方法

同定は現生標本との比較によりおこなった。計測はDriesch(1976)に従った。ウマの体高推定は林田・山内(1957)のⅢ式により、骨の部分的計測値による骨長の推定、および歯冠高による年齢推定は西中川・松元(1991)によった。ウマの歯冠高は中心(HC)を優先し、計測不能な場合は頰側(HB)で計測した。年齢推定に用いた計測値の優先順位も同様である。

3. 分析結果

(1) ケカチ遺跡

表土直下で出土し、土坑などは確認されていない。平安時代の竪穴建物址(SI41)の上面付近で出土しているが、後世の所産と考えられている。出土したのは左右の上下顎骨(一部顎骨をとどめる)、左右の前肢の一部、左脛骨の一部である。出土状況写真、図面によれば前肢は左右共に肩甲骨～上腕骨(右では橈尺骨も)が交連した状態で出土している。それより先は破壊されているようである。左右の位置も解剖学的位置をとどめているようである。一方、上下顎骨も噛み合わさったような状態で、切歯の位置も矛盾がないが、前肢との位置関係は大きくは外れていないものの、原位置を保っているとは考えにくい。頭部や前肢といった大まかな部位ごとに解体されて埋められたか、全身が埋葬されたものの、頭部が完全に腐食する前に若干の攪乱を受けた可能性が考えられる。右脛骨のみだが、後肢も検出されている。脛骨の位置からは、古代～中世の馬埋葬にしばしば見られるように(植月2013)、前・後肢を緊縛したような状態で埋葬されたものが、その後攪乱を受けたとも考えられる。

上腕骨と脛骨の骨幹幅から骨長、次に体高を推定した結果、いずれも110cm台前半と、非常に小形であった。歯冠高を計測できた標本による推定年齢の平均は約10歳であった。脛骨には齧歯類による噛痕が顕著であった。

(2) 后畑西遺跡

表土直下で出土し、土坑などは確認されていない。平安時代の竪穴建物址(SI52)の上面付近で出土しているが、後世の所産と考えられている。出土したのは左右の下顎骨のみである。東側と南側は水道管により攪乱されていたため、元来は頭蓋骨が存在した可能性もある。出土状況写真によると右側を中心に下顎骨も残存していたが、現状では小破片に分割しており、計測は困難であった。臼歯は左P2、右M3を除く10本が残存している。歯冠高を計測できた標本による推定年齢の平均は約13歳であった。

4. おわりに

后畑西遺跡・ケカチ遺跡から各1個体のウマ遺体が出土した。推定年齢はそれぞれ約13、10歳であった。ケカチ遺跡出土馬の推定体高110cm 台前半の小形馬であった。両遺跡共に所属年代が不確かだが、今後年代測定や各種同位体分析を実施することにより、本地域における馬の産地や給餌様式などを検討するための貴重な資料となりうるだろう。

未筆ながら、貴重な資料を分析する機会を与えていただいた、甲州市教育委員会および新津健氏・泉英樹氏（昭和測量株式会社）に感謝申し上げます。

文献

植月 学 2011 「出土馬歯計測値の比較のための基礎的研究」『動物考古学』28:1-22

植月 学 2013 「甲斐周辺における馬埋葬と頭骨埋納」『山梨県考古学協会誌』22:170-182

西中川 駿・松元光春 1991 「遺跡出土骨同定のための基礎的研究—とくに在来種および現代種の骨、歯の計測値の比較」『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』科学研究費成果報告書 164—188 頁

林田重幸・山内忠平 1957 「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』6 146-156 頁

Dreisch, A. von den. 1976 A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites. Bulletin No.1. Peabody Museum, Harvard University, Massachusetts.

表1 ケカチ遺跡 ウマ四肢骨同定・計測結果

遺構	注記	日付	部位	左右	位置	計測値 mm	推定 骨長(cm)	推定 体高(cm)
SI41	足東側	16.07.04	肩甲骨	右	近位端			
			上腕骨	右	骨幹～遠位端	SD:26.9	24.94	113.23
			橈骨	右	近位端 破片			
			尺骨	右	近位端			
			肩甲骨	左	近位端			
	足西側	16.07.04	上腕骨	左	近位端 破片			
北側足	16.07.04	脛骨	左	近位部～骨幹	SD(Bm):30.8	29.85899541	112.1653585	

SD:骨幹幅

表2 ケカチ遺跡 ウマ歯同定・計測結果

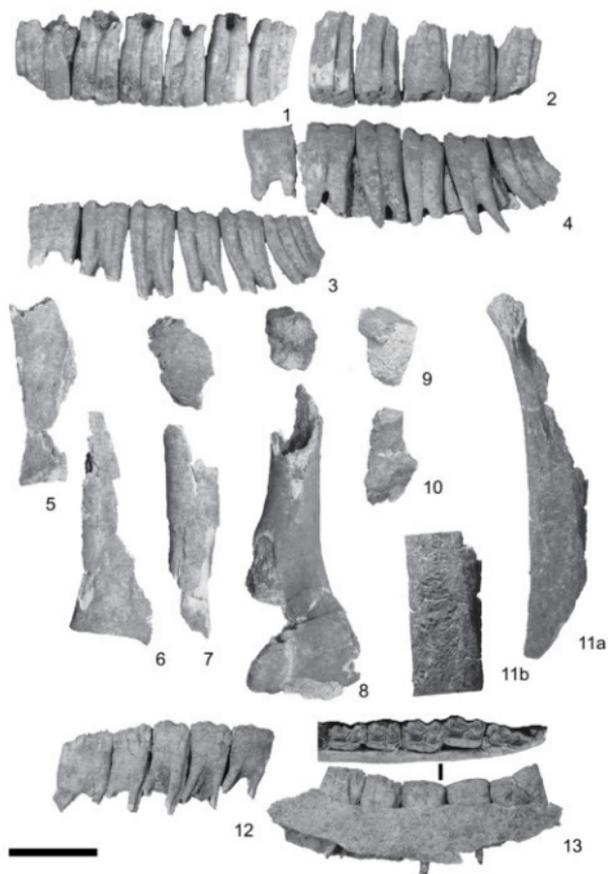
遺構	注記	日付	上下	左右	歯種	長さ mm	幅 mm	歯冠高 mm		推定 年齢	
								中央	頰側		
S141	馬骨上面歯	16.07.04	上	右	P2	-	-	-	-	-	-
					P3	25.7	23.4	39	38	9.6	
					P4	25.1	23.9	41	40	9.6	
					M1	22.7±	23.1	37	x	9.5±	
					M2	22.9	23.7	x	x	-	
					M3	23.5	20.4	x	x	-	
			下	右	P2	29.2	12.7	25	27	11.1	
					P3	26.4	14.8	31	32	11.4	
					P4	25.5	15.3	42	43	8.7	
					M1	24.2	13.6	37	36	11.0	
					M2	24.7	13.2	40	40	10.8	
					M3	27.6	11.5	38±	x	9.8±	
	?	右?	1fr.x4								
	馬骨下面歯	16.07.04	上	左	P2	29.3	12.8	30	28	9.8	
					P3	26.7	14.1	34	35	11.2	
					P4	25.2	14.5	42	44	9.3	
					M1	23.9	12.9	39	39	8.9	
					M2	24	14.3	38	37	10.3	
					M3	27.9	11.5	39	41	9.7	
			下	左	P2	32.8	22.4	33	33	8.3	
					P3	25.7	23.8	36	35	9.9	
					P4	24.8	23.4	40	39	9.3	
					M1	22.8	23.5	36	36	11.3	
					M2	23.2	22.7	37	39	11.7	
M3					23.3	20.1	x	42	9.8		
?	左?	1fr.x8									
平均									10.1		
標準偏差									1.0		

I: 切歯 M:後臼歯 P:前臼歯 x: 計測不可

表3 后畑西遺跡 ウマ歯同定・計測結果

遺構	注記	上下	左右	歯種	長さ mm	幅 mm	歯冠高 mm		推定 年齢
							中央	頰側	
S152	馬骨	下	左	P2	-	-	-	-	-
				P3	23.7	14.2	23	25	14.1
				P4	23.3	14.6	植立	30	12.4
				M1	19.9	x	植立	-	-
				M2	21.6	10.8	35	-	12.4
				M3	30.1	x	33	-	11.5
			右	P2	27.5	12	18	-	14
				P3	23.9	14.4	植立	-	-
				P4	23.5	15.2	植立	-	-
				M1	20.7	13.7	29	-	13.8
				M2	22.2	12.1	33	-	13.1
				M3	-	-	-	-	-
平均									13.0
標準偏差									1.0

M:後臼歯 P:前臼歯 x: 計測不可



ケチ遺跡・后畑西遺跡出土ウマ遺体

- ケチ遺跡 1.P²³⁴M¹²³ (左・頬側) 2.P³⁴M¹²³ (右・舌側) 3.P₂₃₄M₁₂₃ (左・頬側) 4.P₂₃₄M₁₂₃ (右・舌側) 5.肩甲骨 (右・外側) 6.肩甲骨 (左・内側) 7.上腕骨 (右・近位端破片、骨幹) 8.上腕骨 (右・近位端破片、骨幹～遠位端) 9.橈骨 (右・近位端) 10.尺骨 (右・近位部) 11a.脛骨 (左・近位部) 11b.齧歯類噛痕
- 后畑西遺跡 12.P₂₃₄M₁₂ (左・頬側) 13.P₃₄M₁₂₃ (右・咬合面、舌側) ※スケールは5 cm

第3節 出土人骨・獣骨の分析

大妻女子大学博物館 楢崎修一郎

第1項 后畑西遺跡出土人骨

1. はじめに

后畑西遺跡は、山梨県甲州市塩山に所在する。昭和測量(株)による発掘調査が、平成27年9月～平成28年7月まで実施された。本遺跡のC区SK68から人骨が出土したので、以下に報告する。なお、副葬品は検出されていないが、時期は埋葬形態から中世に比定されている。

2. 出土人骨鑑定

(1) 人骨の出土状況

人骨は、長軸1.27m・短軸88cm・深さ38cmの隅丸長方形土坑から出土している。但し、南部は調査区外であるため、全容は不明である。

(2) 副葬品

副葬品は、検出されていない。

(3) 人骨の出土部位

人骨は、頭蓋骨片・下顎骨片・四肢骨片が出土している。

(4) 被葬者の埋葬形態

被葬者の埋葬形態は、頭位を北にし、左側を下にした横臥(側臥)屈葬で埋葬されている。

(4) 被葬者の個体数

出土人骨には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(5) 被葬者の性別

出土歯の大きさは比較的中庸である。しかしながら、側頭骨の乳線突起は比較的小さく、四肢骨は小さく華奢である。また、後頭骨の外後頭隆起厚は15.2mmであった。中世人骨の場合、男性の平均値は17.5mm・女性の平均値は15.0mmであるため(長岡・平田 2005)、結論として、被葬者の性別は女性であると推定される。

(6) 被葬者の死亡年齢

歯の萌出状態は、左上下M3(第3大臼歯)は萌出している。出土歯の咬耗度は、象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態である。総合的に、被葬者の死亡年齢は約20歳代であると推定される。

3. まとめ

山梨県甲州市塩山に所在する、后畑西遺跡C区SK68土坑墓から、中世人骨1体が出土した。被葬者は、頭位を北にして左側を下にした横臥(側臥)屈葬で埋葬されていた。被葬者は、約20歳代の女性であると推定された。



写真1. 后畑西遺跡C区SK68出土状況(南→)

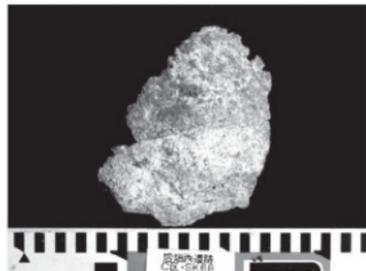


写真2. 后畑西遺跡C区SK68後頭骨

第2項 ケカチ遺跡出土獣骨

1. はじめに

ケカチ遺跡は、山梨県甲州市塩山に所在する。昭和測量（株）による発掘調査が、平成27年9月～平成28年7月まで実施された。本遺跡のF区及びG区から獣骨が出土したので、以下に報告する。

2. F区出土獣骨

(1) SI22 出土獣骨

SI22は、約8世紀中頃の住居で、この住居のカマドから獣骨が出土している。獣骨は、良く焼かれており、調理されたものと推定される。小片であるため、動物種や部位の同定は困難であるが、大きさや形状から、イノシシカブタの中手骨か中手骨の矢状突起部であると推定される。

(2) SI25 出土獣骨

SI25は、約10世紀前半の竪穴建物である。獣骨は、長さ約53mmほどの骨幹部である。本獣骨は、焼かれていない。残存部位が少ないため、動物種や部位の同定は困難であるが、大きさや形状から、イノシシカブタの上腕骨であると推定される。

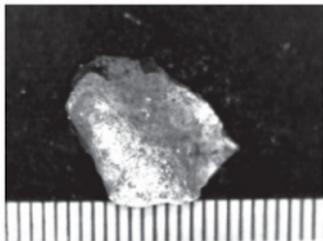


写真1. SI22 出土獣骨 (スケールは4mm)



写真2. SI25 出土獣骨 (スケールは5mm)

3. G区出土獣骨

(1) SI35 出土獣骨

SI35は、約10世紀前半の竪穴建物である。獣骨は、上層及びNo.24から出土している。どちらも、魚類の脊椎骨であると推定される。脊椎骨からの魚種の同定は非常に困難であるが、おそらく、マグロの脊椎骨であると推定される。但し、獣骨の残存状態は、10世紀のように見えないため、正確な年代測定が必要であると思われる。

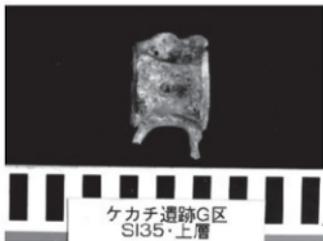


写真3. SI35上層出土獣骨 (スケールは5mm)

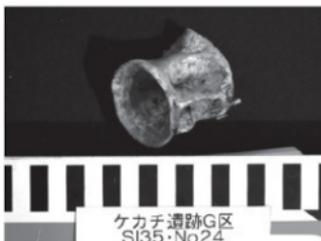


写真4. SI35-No24 出土獣骨 (スケールは5mm)

(2) SI45 出土獣骨

SI45は、約10世紀前半の竪穴建物である。獣骨は、No.5から出土している。破損しており、一部であるが、ウマの上顎臼歯片であると推定される。



写真5. SI45・No5 出土獣骨（スケールは5mm）

まとめ

ケカチ遺跡のF区及びG区から、獣骨が出土した。以下の表1にまとめを示した。特に興味深いのは、10世紀とされるSI35の竪穴建物からマグロと推定される脊椎骨が出土したことである。現在、山梨県は寿司屋の数が人口比で全国でも多く、かつマグロの消費量も全国で2位と言われている。元山梨県立博物館で現・弘前大学の動物考古学者の植月学によると、江戸時代の終わり頃から明治時代の文献で、駿河湾で大量のマグロが獲れ、海産物を馬の背に乗せて山梨県や長野県に向けて運ばれていたという。その際、山梨県へは、最短ルートである富士山西側の「中道往還」を使用したという（植月 2016）。このルートが、10世紀まで遡っていた可能性もあるが、今回の魚骨は10世紀出土の割には保存状態が良く、正確をきすためには年代測定を実施する必要があると思われる。

表1. ケカチ遺跡出土獣骨まとめ

区名	遺構名	動物種名	出土部位	時期
F区	SI22	イノシシカブタ	中手骨か中足骨	8世紀
	SI25	イノシシカブタ	上腕骨	10世紀
G区	SI35	マグロ	脊椎骨	10世紀
	SI45	ウマ	上顎歯	10世紀

謝辞

遺跡に関する情報を提供いただいた、昭和測量（株）の泉 英樹様に感謝いたします。

第4節 土壤採取試料の分析

第1項 后畑西遺跡・ケカチ遺跡出土の動物遺体

中村賢太郎（ハレオ・ラボ）

1. はじめに

山梨県甲州市に所在する后畑西遺跡・ケカチ遺跡の発掘調査では、古代の集落が検出された。ここでは、平安時代に属する竪穴建物跡のカマドから回収された動物遺体の同定結果を報告する。

2. 試料と方法

后畑西遺跡B地区では、平安時代（8～11世紀）の竪穴建物跡であるSI26のカマドから採取された動物遺体2試料（土23、32）を対象とした。なお、SI26のカマドから出土した炭化種実の放射性炭素年代測定結果は7～9世紀である（別稿参照）。

ケカチ遺跡F地区では、平安時代（9～10世紀）の竪穴建物跡であるSI24、SI19、SI22のカマドから採取された動物遺体8試料（土5、6、8、11、13～16）を対象とした。なお、SI22のカマドから出土した炭化種実の放射性炭素年代測定結果は8～9世紀である（別稿参照）。

土の水洗選別では、0.8mm以上の試料が回収された。

観察は実体顕微鏡下で行い、現生標本との比較により同定した。

3. 結果と考察

后畑西遺跡では哺乳綱（Mammalia）1分類群のみが同定された。哺乳綱は、部位不明の破片で、焼けていた。

ケカチ遺跡の試料は、ほぼ全てが焼けており、その他もおそらく焼けている。同定された分類群は、貝殻亜門（Conchifera）、ウニ綱（Echinoidea）、マイワシ（*Sardinops melanostictus*）、硬骨魚綱（Osteichthyes）、哺乳綱（Mammalia）の5分類群である。なお、硬骨魚綱には、サケ科（小型のサケ属あるいはイワナ属）の可能性がある歯骨？を1点含む。ウニ綱、マイワシ、サケ科？の写真を図版1（写真図版146）に示した。

マイワシとウニ綱（ムラサキウニやバフンウニなど）は、海産の生物である。マイワシは上顎にあたる左前上顎骨1点、ウニ綱は殻破片と口器破片が見られた。后畑西遺跡・ケカチ遺跡は、駿河湾や相模湾から数十km離れており、海岸部で漁獲されたマイワシとウニが内陸へと運ばれて利用されたと考えられる。マイワシは腐るのが早いため、干物や塩漬けなど保存用の加工がされていた可能性が考えられる。ウニは殻破片や口器破片であるため、殻ごと持ち込まれた可能性と、可食部である内臓の塩漬けなどに混ざっていた可能性が考えられる。

表1 后畑西遺跡出土動物遺体

地区	遺構	位置	番号	土重量g ()は推定値	分類群	部位	左右	部分・状態	数量
后畑西B地区	SI26	カマド	土23, 32	2965.6	哺乳綱	不明	不明	破片	1
					骨?	不明	不明	破片	1

表2 ケカチ遺跡出土動物遺体

地区	遺構	位置	番号	土重量g ()は推定値	分類群	部位	左右	部分・状態	数量
ケカチF地区	SI24	カマド①	土5, 6	(10,000)	マイワシ	前上顎骨	左	前端	1
					サケ科?	歯骨?	右?	破片	1
					硬骨魚綱	不明	不明	破片	23
					哺乳綱	不明	不明	破片	30
					ウニ綱	殻	—	破片	3
	SI119	カマド	土8	(3,000)	ウニ綱	口器	—	破片	1
					貝殻亜門	殻	不明	破片	5
					硬骨魚綱	不明	不明	破片	8
					哺乳綱	不明	不明	破片	3
					SI22	カマド	土11, 13-16	20, 352.5+(3,000)	硬骨魚綱
哺乳綱	不明	不明	破片	20					
哺乳綱	不明	不明	破片	22					

第2項 后畑西遺跡・ケカチ遺跡出土炭化材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

甲府市に所在する后畑西遺跡・ケカチ遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、主に住居跡のカマドから採取された土壌を水洗選別して得られた炭化材である。今回は残存径が0.3cm以上の炭化材を分析対象とし、総計65点の同定を行った。遺構の時期は、いずれも平安時代頃と推測されている。なお、同じ土壌試料内の炭化種実を用いて行われた年代測定では、ケカチ遺跡のSI22（土13）の試料が奈良～平安時代前期（8～9世紀）、后畑西遺跡のSI6（土26）とSI47（土49）の試料が飛鳥～奈良時代（7～8世紀）、SI26（土32）の試料が飛鳥～平安時代前期（7～9世紀）の暦年代を示した。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製 VHX-D510）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3. 結果

樹種同定の結果、針葉樹はヒノキ科のみ1分類群、広葉樹はイヌエンジュとモモ（モモ？を含む）、ニレ属、クワ属、クリ、ブナ属、コナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節）、コナラ属コナラ節（以下、コナラ節）、カバノキ属、アサダ、ウツギ属の11分類群の、合計12分類群が確認された。そのほかに状態が悪く広葉樹までの同定にとどまった試料と、広葉樹樹皮、草葉が確認された。遺跡別の同定結果を表1、結果の一覧を付表1と2に示す。后畑西遺跡では、ヒノキ科とイヌエンジュ、モモ（モモ？を含む）、ニレ属、クワ属、クリ、ブナ属、クヌギ節、コナラ節、アサダ、ウツギ属、広葉樹、広葉樹樹皮が確認された。ケカチ遺跡では、ヒノキ科とモモ（モモ？を含む）、ニレ属、クワ属、クリ、クヌギ節、コナラ節、カバノキ属、広葉樹、広葉樹樹皮、草葉が確認された。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1) ヒノキ科 Cupressaceae 図版1(写真図版143) 1a-1c (土44-3)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔は小型で、1分野に1～3個存在する。試料の状態が悪く、分野壁孔の型が不明瞭であるため、ヒノキ科までの同定に留めた。

(2) イヌエンジュ *Maackia amurensis* Rupr. et Maxim. マメ科 図版1(写真図版143) 2a-2c (土32-1)

大型で厚壁の道管が年輪のはじめに並び、晩材部では小道管が集団をなして接線～斜線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は3～5列幅の同性で、接線断面において軸方向柔組織、道管要素が層状構造をなす。

イヌエンジュは温帯に分布する落葉高木である。材はやや重硬で韌性も高く、心材の保存性は高い。

(3) モモ *Amygdalus persica* L. バラ科 図版1(写真図版143) 3a-3c (土3)

半環孔性の散孔材で、年輪のはじめにやや大きな道管が1～3列程度並ぶ。晩材部では道管が単独で散在する。道管に着色物質を含むものがあり、穿孔は単一である。放射組織は異性で、1～7列幅である。

モモは温帯に分布する落葉高木である。材は重硬である。

(4) ニレ属 *Ulmus* ニレ科 図版1(写真図版143) 4a-4c(土27-4)

大型の道管が年輪のはじめに1列に並び、晩材部では小道管が集団をなして接線状から斜めに配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、3～5列幅程度である。また、接線断面において軸方向柔組織が層状構造となる。

ニレ属は暖帯から温帯に分布する落葉高木で、アキニレとハルニレ、オヒヨウの3種がある。ハルニレの材は、中庸からやや重硬でやや粘り気があるが、狂いが出やすく、保存性もよくない。

(5) クワ属 *Morus* クワ科 図版1(写真図版143) 5a-5c(土18-1)

大型で丸い道管が年輪のはじめに配列し、晩材部では徐々に径を減じた小道管が単独もしくは複数複合して斜線方向に配列する半環孔材である。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織は周囲状から翼状となる。放射組織は3～5列幅で、上下端の1～2細胞が直立もしくは方形細胞である異性である。

クワ属は亜熱帯から温帯に分布する落葉高木で、ケグワとマグワ、ヤマグワなどがある。材は堅硬で、靱性に富む。

(6) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 図版1・2(写真図版143・144) 6a-6c(土13)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火災状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。

クリは暖帯から温帯下部に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

(7) ブナ属 *Fagus* ブナ科 図版2(写真図版144) 7a-7c(土32-2)

小型で単独の道管が密に分布し、晩材部ではやや径を減ずる散孔材である。道管の穿孔は単一のものと同段階の2種類がある。放射組織はほぼ同性で、単列のもの、2～数列のもの、広放射組織の3種類がある。

ブナ属は温帯に分布する落葉高木で、ブナとイヌブナがある。材は堅硬および緻密で、靱性はあるが保存性は低い。

(8) コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版2(写真図版144) 8a-8c(土2)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では急に径を減じた円形で厚壁の小道管が単独で放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

クヌギ節は暖帯に生育する落葉高木で、クヌギとアベマキがある。材は重硬および強靱で、加工困難である。

(9) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版2(写真図版144) 9a-9c(土25)

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火災状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は暖帯から温帯下部に分布する落葉高木で、カシワとミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で、加工困難である。

(10) カバノキ属 *Betula* カバノキ科 図版2(写真図版144) 10a-10c(土44-2)

やや小型で丸い道管が、ほぼ単独でまばらに分布する散孔材である。道管の穿孔は10～20段程度の階段状である。放射組織はほぼ同性で、1～3列幅である。道管相互壁孔は交互状で極めて小さく、

密に分布する。

カバノキ属は温帯から亜寒帯に分布する落葉高木もしくは低木で、カバノキやミズメなど11種がある。材は全般的にやや重厚で、切削および加工は中庸である。

(11) アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科 図版2・3(144・145) 11a-11c (土32-3)

径が中型の道管が、単独あるいは放射方向に数個複合して、ややまばらに分布する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、1～4列幅である。

アサダは温帯の山地に生育する落葉高木である。材は極めて重硬であり、切削加工および割裂は困難である。

(12) ウツギ属 *Deutzia* アジサイ科 図版3(写真図版145) 12a-12c (土22-1)

小型で丸い道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。道管の穿孔は40段以上の階段状である。放射組織は異性で1～5列幅、高さは1mm以上で鞘細胞がある。

温帯に分布する落葉低木である。ヒメウツギとマルバウツギ、ツクシウツギ、ウメウツギ、ウツギ、ウラジロウツギがある。

(13) 広葉樹樹皮 *Broadleaf wood Bark* 図版3(写真図版145) 13a (土16-1)

師細胞および師部放射組織からなる二次細胞および周皮で構成される樹皮である。樹皮は対象標本が少なく、同定には至っていない。

(14) 草本 *herbaceous plant*

程の組織のみから属や種を識別するのは難しい。

4. 考察

后畑西遺跡は、全体ではクヌギ節が13点で最も多く、SI6とSI10、SI16b、SI20、SI22、SI25、SI26、SI38、SI41、SI47、SI48、SI55の12遺構で確認された(表2)。それ以外の樹種は、クリが5遺構で確認されているほかは、いずれも2点以下であった。遺構内のカマドの土壌内に含まれていた炭化材は燃料材の残渣と思われる。床面やカマド以外の場所から採取された試料は用途不明であるが、建築材などの可能性が考えられる。

ケカチ遺跡は、全体ではクヌギ節が10点で最も多く、SI2とSI12、SI22、SI24、SI27、SI28、SI36、SI42、SI47、SI1の10遺構で確認された(表3)。クリも8点確認されたが、SI22とSI36で3点ずつと、SI29とSI40で各1点であり、検出された遺構は多くない。それ以外の樹種は、いずれも3点以下である。すべてカマドの土壌内に含まれていた炭化材であり、燃料材の残渣であると思われる。

山梨県内では、山梨市の中沢遺跡で古墳時代末期～平安時代初期の住居内のカマドからクヌギ節を主体としてコナラ節やブナ属など広葉樹の炭化材が確認されている。また、甲府市の音羽遺跡では古墳時代後期～平安時代初期の燃料材としてクヌギ節やコナラ節、クリ、カエデ属などの広葉樹が確認されている(伊東・山田編, 2012)。燃料材には身近に生育していた樹木が伐採利用されたと考えられるため、后畑西遺跡とケカチ遺跡の周辺にはクヌギ節やコナラ節、クリを中心とした二次林があったと推測される。

参考・引用文献

平井信二(1996)木の百科, 394p, 朝倉書店。

伊東隆夫・山田昌久編(2012)木の考古学—出土木製品用材データベース—, 449p, 海青社。

表1 遺跡別の樹種同定結果

樹種	后畑西遺跡	ケチ遺跡	計
ヒノキ科	1	3	4
イヌエンジュ	1		1
モモ	1	2	3
モモ?	1	1	2
ニレ属	2	1	3
クワ属	2	1	3
クリ	5	8	13
ブナ属	1		1
コナラ属クスギ節	13	10	23
コナラ属コナラ節	2	1	3
カバノキ属		1	1
アサダ	1		1
ウツギ属	1		1
広葉樹	1	1	2
広葉樹(樹皮)	2	1	3
草本		1	1
総計	34	31	65

表2 后畑西遺跡の樹種同定結果

樹種	A地区				B地区							C地区				計
	遺構 S11	S15	S16	S110	S106	S120	S122	S125	S126	S128	S141	S147	S148	S149	S155	
ヒノキ科								1								1
イヌエンジュ									1							1
モモ			1						1							2
サクラ属						1						1				2
ニレ属						1				1						2
クワ属						1							1			2
クリ	1					1				1				1	1	5
ブナ属									1							1
コナラ属クスギ節			1	1	1	1	1		1	1	1	1		1		13
コナラ属コナラ節			1			1										2
アサダ									1							1
ウツギ属	1															1
広葉樹	1															1
広葉樹(樹皮)						1		1								2
計	2	1	2	2	1	6	1	2	1	4	3	1	1	1	2	34

表3 ケチ遺跡の樹種同定結果

樹種	D地区		E地区					F地区					G地区					計
	遺構 S12	S14	S111	S112	S122	S124	S127	S128	S129	S136	S137	S140	S142	S147	S11			
ヒノキ科						1										1	3	
モモ			1				1										2	
モモ?								1								1	1	
ニレ属				1													1	
クワ属										1							1	
クリ						3				1	3		1				8	
コナラ属クスギ節	1			1	1	1	1	1	1		1		1	1	1		10	
コナラ属コナラ節						1											1	
カバノキ属												1					1	
アサダ								1									1	
ウツギ属																	1	
広葉樹																	1	
広葉樹(樹皮)						1											1	
草本																	1	
計	1	1	1	1	1	7	3	2	1	2	4	3	1	2	1	1	31	

付表1 后畑西遺跡の樹種同定結果一覧

試料No.	採取地点	樹種	形状	残存径
土1	后畑西C地区S153A	-	-	-
土20-1	后畑西A地区S110カマド	モモ	破片	<0.5cm角
土20-2	后畑西A地区S110カマド	コナラ属クスギ節	破片	<0.5cm角
土21	后畑西A地区S114カマド	-	破片	<0.2cm角
土22-1	后畑西A地区S11カマド	ウツギ属	丸木	直径0.2cm
土22-2	后畑西A地区S11カマド	広葉樹	破片(節)	<1.5cm角
土23	后畑西A地区S14カマド	-	破片	<0.2cm角
土24	后畑西A地区S18No. 23	クリ	破片	<0.5cm角
土25	后畑西A地区S16カマド	コナラ属コナラ節	破片	<0.8cm角
土26	后畑西A地区S16カマド	コナラ属クスギ節	破片	<0.5cm角
土27-1	后畑西B地区S120カマド	クリ	破片	<0.5cm角
土27-2	后畑西B地区S120カマド	コナラ属コナラ節	破片	<1cm角
土27-3	后畑西B地区S120カマド	コナラ属クスギ節	破片	<1cm角
土27-4	后畑西B地区S120カマド	ニレ属	破片	<1cm角
土27-5	后畑西B地区S120カマド	クワ属	破片	<1cm角
土27-6	后畑西B地区S120カマド	広葉樹(樹皮)	破片	<1cm角
土28	后畑西B地区S122カマド	コナラ属クスギ節	破片	<0.5cm角
土29	后畑西B地区S124遺物No. 3	-	破片	<0.2cm角
土30-1	后畑西B地区S125カマド	コナラ属クスギ節	破片	<0.5cm角
土30-2	后畑西B地区S125カマド	広葉樹(樹皮)	破片	<1cm角
土31	后畑西B地区S126No. 11	ヒノキ科	破片	<0.3cm角
土32-1	后畑西B地区S126カマド	イヌエンジュ	破片	<1cm角
土32-2	后畑西B地区S126カマド	ブナ属	破片	<1cm角
土32-3	后畑西B地区S126カマド	アサダ	破片	<1cm角
土32-4	后畑西B地区S126カマド	コナラ属クスギ節	破片	<0.5cm角
土33	后畑西B地区S135カマド	-	破片	<0.2cm角
土34-1	后畑西B地区S138カマド	コナラ属クスギ節	破片	<0.5cm角
土34-2	后畑西B地区S138カマド	クリ	破片	<0.5cm角
土34-3	后畑西B地区S138カマド	ニレ属	破片	<0.5cm角
土35	后畑西B地区S141カマド	コナラ属クスギ節	破片	<0.5cm角
土36	后畑西B地区S142カマド	-	-	-
土37	后畑西B地区S16 b カマド	コナラ属クスギ節	破片	<0.5cm角
土49	后畑西C地区S147カマド	コナラ属クスギ節	破片	<0.5cm角
土50	后畑西C地区S147カマド焼土	モモ?	破片	<0.5cm角
土51-1	后畑西C地区S148カマド	コナラ属クスギ節	破片	<0.5cm角
土51-2	后畑西C地区S148カマド	クワ属	破片	<0.5cm角
土52	后畑西C地区S149床面炭化材	クリ	破片	<2cm
土53	后畑西C地区S149カマド炭化材	クリ	破片	<0.5cm角
土54	后畑西C地区S151カマド	-	破片	<0.2cm角
土55	后畑西C地区S155カマド	コナラ属クスギ節	破片	<0.5cm角
土56	后畑西C地区S155カマド	コナラ属クスギ節	破片	<0.5cm角

付表2 ケカチ遺跡の樹種同定結果一覧

試料No.	採取地点	樹種	形状	残存径
土2	ケカチD地区S12カマド	コナラ属クスギ節	破片	<1cm角
土3	ケカチE地区S14カマド	モモ	破片	<1.5cm角
土4	ケカチF地区S112カマド	コナラ属クスギ節	破片	<0.5cm角
土5	ケカチF地区S124カマド①	広葉樹	破片	<0.5cm角
土6-1	ケカチF地区S124カマド①	コナラ属クスギ節	破片	<0.5cm角
土6-2	ケカチF地区S124カマド①	ヒノキ科	丸木	直径0.2cm
土7	ケカチF地区S111カマド	ニレ属	破片	<0.5cm角
土8	ケカチF地区S119カマド	-	破片	<0.2cm角
土9	ケカチF地区S125カマド	-	破片	<0.2cm角
土10	ケカチF地区S122カマド	-	-	-
土11	ケカチF地区S122カマド	-	破片	<0.2cm角
土12	ケカチF地区S122カマド	ヒノキ科	破片	<0.3cm角
土13	ケカチF地区S122カマド	クリ	破片	<0.3cm角
土14	ケカチF地区S122カマド	クリ	破片	<0.3cm角
土15	ケカチF地区S122カマド	コナラ属クスギ節	破片	<1cm角
土16-1	ケカチF地区S122カマド	広葉樹(樹皮)	破片	<1cm角
土16-2	ケカチF地区S122カマド	クリ	破片	<0.5cm角
土16-3	ケカチF地区S122カマド	コナラ属コナラ節	破片	<0.5cm角
土17	ケカチF地区S121No. 1	-	破片	<0.2cm角
土18-1	ケカチF地区S129カマド	クワ属	破片	<1cm角

第3項 后畑西遺跡・ケカチ遺跡から出土した炭化種実

佐々木由香・バンドリ スダルジャン (パレオ・ラボ)

1. はじめに

甲州市塩山下於魯・熊野地内に位置する后畑西遺跡・ケカチ遺跡は、重川と塩川に挟まれた南北の細長い扇状地上に立地する、奈良・平安時代(8世紀前半から11世紀代)の集落跡である。ここでは、検出された竪穴建物約100棟のうち、状態の良い41棟分のカマドなどから採取された土壌中の炭化種実の同定を行い、当時の利用植物について検討した。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている(放射性炭素年代測定の項参照)。

2. 試料と方法

試料は、竪穴建物(SI)のカマドと、建物に伴うかは不明のカマド(SL)から回収された土壌試料である。后畑西遺跡では22棟、ケカチ遺跡では18棟から回収された。考古学的な遺物による遺構の時期は、8世紀前半から11世紀代である。

土壌は昭和測量により水洗作業が行われた。水洗は、5.0mm、2.0mm、0.8mm目の篩を用いて行われた。水洗量は作業の途中から計量が行われ、それ以前の水洗量はおおよその量を示した。水洗量は表を参照されたい。また水洗後、遺物の種別ごとに抽出された。

抽出・同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。試料は、甲州市教育委員会に保管されている。

3. 結果(写真図版141・142)

同定の結果、木本植物ではモモ炭化核とオニグルミ炭化核、トチノキ炭化種子の3分類群、草本植物ではヒエ炭化種子とイネ炭化籾殻・炭化種子、アワ炭化有ふ果・炭化種子、オオムギ炭化種子、コムギ炭化種子、ダイズ炭化種子、ササゲ属アズキ亜属(以下、アズキ亜属)炭化種子、マメ科A炭化種子、アカザ属炭化種子の9分類群の、計12分類群が得られた。このほかに科以上の詳細ができなかった不明A炭化種実と、同定可能な識別点が残存していない一群である同定不能炭化種実が得られた。種実以外には、炭化した虫えい得到了。また、未炭化のメヒシバ属果実とエノキグサ属種子、アカザ属種子が得られたが、奈良・平安時代当時の生の種実は残存しない立地のため、現生種実とした。同定結果を表1～5に示す。

表1 后畑西遺跡から出土した炭化種実(1)(括弧内は破片数)

分類群	遺構	地区							
		A				B			
		S11	S14	S15	S16	S110	S114	S16b	S120
	採取位置	カマド	カマド	No. 23 カマド	カマド	カマド	カマド	カマド	カマド
	推定時期	8世紀後半		9世紀前半		10世紀後半*		10世紀前半	
	水洗量(g)	4169.3	1720.6	193.2	3327.5	3877.2	800.3	356.0	2655.0
オニグルミ	炭化核	(1)							
イネ	炭化籾殻	(1)							
	炭化種子			(1)	(2)	1		(2)	
オオムギ	炭化種子			3(1)	2(1)				
コムギ	炭化種子			3	1				
ササゲ属アズキ亜属	炭化種子			(1)					
マメ科A	炭化種子			1					
同定不能	炭化種実	(5)	(16)			(15)	(2)	(6)	(1)
種実なし									
未炭化									
メヒシバ属	果実	1							
エノキグサ属	種子	(1)							

* オニグルミ炭化核を用いた放射性炭素年代測定結果では7-8世紀

表2 后畑西遺跡から出土した炭化種実(2) (括弧内は破片数)

分類群	水流量 (g)	地区 B								
		遺構 S122		S124	S125	S126		S135	S138	S141
		採取位置	カマド	遺物No.3	カマド	カマド	No. 11	カマド	カマド	カマド
推定時期	9世紀前半	9世紀後半-10世紀前半	10世紀後半	9世紀後半*	9世紀後半	11世紀代	10世紀後半	8世紀後半-9世紀前半		
モモ	炭化核	1096.0	315.0	1150.0	1245.0	5545.0	445.0	1967.0	947.0	
トチノキ	炭化種子				(24)			(2)		
ヒエ属	炭化種子							1		
イネ	炭化種子			5 (19)				(4)		
アワ	炭化有ふ果			1						
オオムギ	炭化種子							4		
コムギ	炭化種子							2 (3)		
アカザ属	炭化種子							1		
同定不能	炭化種実	(7)		(24)				1	(3)	
虫えい	炭化			1		(3)				
				種実なし				種実なし	種実なし	

*モモ炭化核を用いた放射性炭素年代測定結果では7-9世紀

表3 后畑西遺跡から出土した炭化種実(3) (括弧内は破片数)

分類群	水流量 (g)	地区 B								
		遺構 S142		S147	S148	C S149		S151	S153	S155
		採取位置	カマド	カマド	カマド焼土	カマド	床面炭化材	カマド炭化材	カマド	A
推定時期	不明	9世紀前半*	9世紀前半	不明	11世紀代	8世紀前半	10世紀前半			
モモ	炭化核	432.0	2355.0	2997.0	3167.0	36.0	1164.0	1779.0	184.0	5673.0
オニグルミ	炭化核		(2)	(2)			(4)			
イネ	炭化種子			(3)		1			(1)	
ダイズ属	炭化種子					1				
同定不能	炭化種実	(3)	(10)			(1)	(2)	(2)	(6)	
虫えい	炭化				1					
					種実なし					種実なし
未炭化										
アカザ属	種子				7 (2)		2			2

*オニグルミ炭化核を用いた放射性炭素年代測定結果では7-8世紀

表4 ケカチ遺跡から出土した炭化種実(1) (括弧内は破片数)

分類群	水流量 (g)	地区 D E F									
		遺構 S12		S14	S111	S112	S119	S121	S122	S124	S125
		採取位置	カマド	カマド	カマド	カマド	カマド	No. 1	カマド	カマド①	カマド
推定時期	8世紀後半	10世紀前半	9世紀前半	11世紀代	8世紀後半-10世紀前半	不明	8世紀後半*	9世紀-10世紀	9世紀後半-10世紀前半		
オニグルミ	炭化核	(120)	(120)	(3000)	(3000)	(3000)	432.5	(4101.3)	(10000)	(7)	
イネ	炭化種子			(1)	1 (1)			2 (2)	1	1	
オオムギ	炭化種子								1		
不明A	炭化種実								(3)		
同定不能	炭化種実							(4)	(9)	(2)	
虫えい	炭化						1				
							種実なし		種実なし	種実なし	

※括弧付きの水流量の数値は推定数量。水洗前に未計量のため、収納袋の大きさから推定した。

*イネ炭化種子を用いた放射性炭素年代測定結果では8-9世紀

表5 ケカチ遺跡から出土した炭化種実(2) (括弧内は破片数)

分類群	水流量 (g)	地区 F G										
		遺構 S127		S128	S129	S135	S136	S137	S140	S142	S147	S11
		採取位置	カマド	カマド	カマド	カマド	カマド	カマド	カマド	カマド	カマド	カマド
推定時期	9世紀後半	8世紀後半	11世紀代	10世紀前半			10世紀代		8世紀後半-9世紀前半	不明		
イネ	炭化種子	(14000)	(10000)	(3000)	(6000)	(13000)	(7000)	(7000)	(14000)	(7000)	(120)	
オオムギ	炭化種子				(2)	(2)	(1)					
ダイズ属	炭化種子	1							4			
ササガ属アズキ亜属	炭化種子								1			
同定不能	炭化種実				(1)	(3)	(1)		(6)	(6)		
虫えい	炭化						(1)					
							種実なし		種実なし		種実なし	

※括弧付きの水流量の数値は推定数量。水洗前に未計量のため、収納袋の大きさから推定した。

以下に、出土傾向について遺構別に記載する（同定不能炭化種実を除く）。

[后畑西遺跡]

- SI1：イネがわずかに得られた。
- SI4：同定可能な種実は得られなかった。
- SI5：同定可能な種実は得られなかった。
- SI6：オニグルミとイネ、オオムギ、コムギ、アズキ亜属、マメ科 A がわずかに得られた。
- SI10：イネがわずかに得られた。
- SI14：オオムギとコムギがわずかに得られた。
- SI6b：イネがわずかに得られた。
- SI20：イネがわずかに得られた。
- SI22：同定可能な種実は得られなかった。
- SI24：同定可能な種実は得られなかった。
- SI25：イネが少量、アワがわずかに得られた。
- SI26：モモが少量得られた。
- SI35：同定可能な種実は得られなかった。
- SI38：トチノキとヒエ属、イネ、アワ、オオムギ、コムギ、アカザ属がわずかに得られた。
- SI41：同定可能な種実は得られなかった。
- SI42：同定可能な種実は得られなかった。
- SI47：オニグルミとイネがわずかに得られた。
- SI48：同定可能な種実は得られなかった。
- SI49：モモとイネ、ダイズ属がわずかに得られた。
- SI51：同定可能な種実は得られなかった。
- SI53：イネがわずかに得られた。
- SI55：同定可能な種実は得られなかった。

[ケカチ遺跡]

- SI2：同定可能な種実は得られなかった。
- SI4：同定可能な種実は得られなかった。
- SI11：イネがわずかに得られた。
- SI12：イネがわずかに得られた。
- SI19：同定可能な種実は得られなかった。
- SI21：同定可能な種実は得られなかった。
- SI22：イネがわずかに得られた。
- SI24：オニグルミとイネ、オオムギ、不明 A がわずかに得られた。
- SI25：イネがわずかに得られた。
- SI27：オオムギとアズキ亜属がわずかに得られた。
- SI28：同定可能な種実は得られなかった。
- SI29：同定可能な種実は得られなかった。
- SI35：イネがわずかに得られた。
- SI36：イネがわずかに得られた。

SI37: イネがわずかに得られた。

SI40: 同定可能な種実は何れも得られなかった。

SI42: オオムギとダイズ属がわずかに得られた。

SI47: 同定可能な種実は何れも得られなかった。

SL1: 同定可能な種実は何れも得られなかった。

次に、炭化種実の記載を示し、図版(写真図版 141・142)に写真を掲載して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は、米倉・梶田(2003)に準拠し、APG IIIリストの順とした。

(1) モモ *Amygdalus persica* L. 炭化核 パラ科

完形ならば、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形。先が尖り、下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。また、片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。残存長 10.3mm、残存幅 16.1mm、残存厚 6.9mm と残存長 8.2mm、残存幅 7.0mm、残存厚 3.6mm (PLD-34951)。

(2) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu) Kitam. 炭化核 クルミ科

すべて 1/2 未満の破片である。完形ならば側面観は広卵形。本来は縦方向の縫合線があるが残存していない。表面には浅い溝と凹凸が不規則に入る。壁は緻密で硬く、ときどき空隙がある。断面は角が尖り、光沢がある。残存長 3.8mm、残存幅 4.0mm と、残存長 4.8mm、残存幅 2.7mm (PLD-34950)、残存長 2.6mm、残存幅 2.7mm (PLD-34952)。

(3) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 炭化種子 ムクロジ科

完形ならば楕円形で、下半部は光沢がなく、上半部には光沢がややある。上下の境目の下に少し突出した着点がある。種皮は薄く、やや硬い。種皮は 3 層からなり、各層で細胞の配列方向が異なる。種皮の表面には指紋状の微細模様が密にある。残存長 3.1mm、残存幅 4.2mm。

(4) ヒエ属 *Echinochloa* sp. 炭化種子(穎果) イネ科

状態が悪いが、紡錘形。胚は幅が広くうちわ型で、長さは全長の 2/3 程度と長い。内穎は膨らまない。大ききから栽培種のヒエの可能性が考えられるが、状態が悪いためヒエ属の同定にとどめた。種子の大きさは、長さ 1.2mm、幅 1.0mm。

(5) イネ *Oryza sativa* L. 炭化籾殻・炭化種子(穎果) イネ科

籾殻は、完形ならば側面観は長楕円形。縦方向に明瞭な稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。残存長 2.0mm、残存幅 0.9mm。種子(穎果)は、上面観が両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の 2 本の浅い溝がある。長さ 4.5mm、幅 3.0mm と長さ 4.0mm、幅 2.2mm (PLD-34949)。

(6) アワ *Setaria italica* P.Beauv. 炭化有ふ果・炭化種子(穎果) イネ科

有ふ果は、紡錘形。内穎と外穎に独立した微細な乳頭状突起がある。長さ 1.7mm、幅 1.2mm。種子(穎果)の上面観は楕円形、側面観は円形に近く、先端がやや尖る場合がある。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い楕円形の胚があり、長さは全長の 2/3 程度。種子の大きさは、長さ 1.1mm、幅 1.2mm。

(7) オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化種子(穎果) イネ科

上面観は円形、側面観は長楕円形。腹面中央部には上下に走る 1 本の溝がある。背面の下端中央部には三角形の胚がある。断面は円形。長さ 5.6mm、幅 3.8mm、厚さ 2.6mm。

(8) コムギ(パンコムギ) *Triticum aestivum* L. 炭化種子(穎果) イネ科

上面観は円形、側面観は長楕円形。腹面中央部には上下に走る 1 本の溝がある。背面の下端中央部には扇形の胚がある。オオムギに比べて長さが短く、幅に対して厚みがあるため、全体的に丸っこい形状である。断面形状は腹面側が窪み、背面側が円形となる。またコムギの場合、側面観で最も背の高い

部分(幅の広い部分)が基部付近に来る。コムギ属にはパンコムギやマカロニコムギなど複数種あるが、一般的に日本産コムギと呼称しているのはパンコムギである。ここでは一般的な呼称で記載した。長さ2.8mm、幅1.8mm、厚さ1.8mm。

(9) ダイズ属 *Glycine* sp. 炭化種子 マメ科

やや変形しているが、本来の上面観は楕円形、側面観は長楕円形か。へそは側面のほぼ中央にあり、長楕円形で全長の1/3未満であるが、不明瞭。残存長6.6mm、幅4.8mm、厚さ3.7mm。

(10) ササゲ属アズキ亜属 *Vigna* subgenus *Ceratotropis* spp. 炭化種子 マメ科

上面観は方形に近い円形、側面観は方形に近い楕円形。臍は全長の半分から2/3ほどの長さで、片側に寄ると推定されるが、残存していない。長さ4.5mm、幅2.8mm、厚さ3.1mm。小畑(2008)に示された現生種と大きさを比較すると、野生種と栽培種間の大きさである。

(11) マメ科 A *Fabaceae* sp. A 炭化種子 マメ科

上面観・側面観共に狭楕円形、表面は平滑。片側に全長の1/3未満の長さの臍がある。臍は不明瞭。長さ3.6mm、幅2.0mm、残存厚1.9mm。

(12) アカザ属 *Chenopodium* sp. 炭化種子 ヒユ科

上面観はやや扁平、完形ならば側面観は円形。種皮は強い光沢があり、硬い。着点の一端がやや突出し、中心部方向に向かって浅い溝がある。長さ0.7mm、幅0.7mm。

(13) 不明 A *Unknown* A 炭化種実

大型の堅果の破片と思われる。表面は平滑だが、不規則な皺がある。残存長5.2mm、残存幅2.6mm。

4. 考察

奈良・平安時代の竪穴建物のカマドなどで回収された土壌からは、栽培植物のモモとイネ、アワ、オオムギ、コムギが得られた。また食用可能な野生植物のオニグルミとトチノキが得られたが、食用部位でないオニグルミの核やトチノキの種子が産出しており、食べられる部位の子葉を取り出すために割った残滓がカマドで燃やされた可能性がある。ヒエ属とダイズ属、アズキ亜属には野生種と栽培種が含まれる。ヒエ属は大きさから栽培のヒエの可能性はあるが、遺存状態が悪かった。ダイズ属とアズキ亜属は栽培種と野生種双方の可能性のある大きさであったが、炭化している状態やカマドから出土した産出状況を考えて、少なくとも利用された可能性が考えられる。マメ科 A とアカザ属も種によっては利用可能である。

以下、時期別に記載する。なお、炭化種実が出土したカマドを伴う竪穴建物の時期は、考古学的な遺物の編年観を優先して記載する。

8世紀前半と推定された后畑西遺跡の竪穴建物(SI51)1棟からは、同定可能な種実が得られなかった。続く8世紀後半と推定された后畑西遺跡の竪穴建物4棟では、SI1とSI20からはイネ、SI14からはオオムギとコムギが得られたが、SI4からは同定可能な種実が得られなかった。ケカチ遺跡の竪穴建物3棟では、SI22からはイネが得られたが、SI2とSI28からは同定可能な種実が得られなかった。したがって、8世紀後半に水田作物のイネ、畑作物のオオムギとコムギが確認された。なお、ケカチ遺跡のSI22のカマドの土壌から得られたイネを用いた放射性炭素年代測定の結果は、8~9世紀であった。

8世紀後半から9世紀前半と推定された后畑西遺跡の竪穴建物1棟(SI41)とケカチ遺跡の竪穴建物1棟(SI47)からは、同定可能な種実が得られなかった。8世紀後半と10世紀前半の遺物が混入しているケカチ遺跡の竪穴建物1棟(SI19)からも、同定可能な種実は何れも得られなかった。

9世紀前半と推定された后畑西遺跡の竪穴建物3棟では、SI47からはオニグルミとイネが得られたが、

SI5 と SI22 からは同定可能な種実が得られなかった。ただし、后畑西遺跡の SI47 のカマドの土壌から得られたオニグルミを用いた放射性炭素年代測定の結果は、7～8 世紀であった。ケカチ遺跡の竪穴建物 1 棟 (SI11) からはイネが得られた。

9 世紀後半と推定された后畑西遺跡の竪穴建物 1 棟 (SI26) からはモモが得られた。なお、SI26 のカマドの土壌から得られたオニグルミを用いた放射性炭素年代測定の結果は、7～9 世紀であった。ケカチ遺跡の竪穴建物 1 棟 (SI27) からはオオムギとアズキ亜属が得られ、9 世紀後半に果樹のモモ、オニグルミとアズキ亜属が新たに確認された。

9 世紀後半から 10 世紀前半と推定された后畑西遺跡の竪穴建物 1 棟 (SI24) からは、同定可能な種実が得られなかった。ケカチ遺跡の竪穴建物 1 棟 (SI25) からはイネが得られた。

9 世紀代と 10 世紀代の遺物が混入していたケカチ遺跡の竪穴建物 1 棟 (SI24) からは、オニグルミとイネ、オオムギ、不明 A が得られた。

10 世紀前半と推定された后畑西遺跡の竪穴建物 3 棟では、SI10 と SI53 からはイネが得られたが、SI55 からは同定可能な種実が得られなかった。ケカチ遺跡の竪穴建物 5 棟では、SI35 と SI36、SI37 からはイネが得られたが、SI4 と SI40 からは同定可能な種実が得られなかった。

10 世紀後半と推定された后畑西遺跡の竪穴建物 4 棟では、SI6 からはオニグルミとイネ、オオムギ、コムギ、アズキ亜属、マメ科 A、SI6b からはイネ、SI25 からはイネとアワ、SI38 からはトチノキとヒエ属、イネ、アワ、オオムギ、コムギ、アカザ属が得られた。ただし、SI6 のカマドの土壌から得られたオニグルミを用いた放射性炭素年代測定の結果は、7～8 世紀であった。

10 世紀代と推定されたケカチ遺跡の竪穴建物 1 棟 (SI42) からは、オオムギとダイズ属が得られた。したがって、10 世紀後半ではトチノキとヒエ属、アワ、マメ科 A、アカザ属、10 世紀代ではダイズ属が新たに確認された。また、10 世紀代の竪穴建物から得られた穀類の中では、イネがもっとも頻出した。

11 世紀代と推定された后畑西遺跡の竪穴建物 2 棟では、SI49 からはモモとイネ、ダイズ属が得られたが、SI35 からは同定可能な種実が得られなかった。ケカチ遺跡の竪穴建物 2 棟では、SI12 からはイネが得られたが、SI29 からは同定可能な種実が得られなかった。

時期不明の後畑西遺跡の竪穴建物 2 棟の SI42 と SI48 からは、同定可能な種実が得られなかった。ケカチ遺跡の竪穴建物 1 棟 (SI21) とカマド 1 基 (SL1) からも同定可能な種実は得られなかった。

今回の分析では、水洗作業の途中からフローテーションによる浮遊物の回収も合わせて行われ、水洗量も計量された。正確に計量された土壌重量をみると、1000g 以上の土壌からはなんらかの炭化種実が確認された。このため、1000g 以上を目安としてカマドなどの当時の炭化種実が堆積しやすい場所で土壌を回収すると、一定の成果が得られる可能性が高いと考えられる。

引用文献

- 小畑弘己 (2008) マメ科種子同定法。小畑弘己編「極東先史古代の穀物 3」: 225-252。熊本大学。
米倉浩司・梶田 忠 (2003-) BG Plants 和名-学名インデックス (YList), <http://ylist.info>

第4項 后畑西遺跡・ケカチ遺跡から出土した炭化種実の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林絨一
Zaur Lomtadize・バンドリ スダルシャン・野口真利江

1. はじめに

后畑西遺跡・ケカチ遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて大型植物遺体分析も行われている（炭化種実の項参照）。

2. 試料と方法

后畑西遺跡の試料は竪穴建物 SI6 のカマドから出土したオニグルミ核 1 点（PLD-34950）、竪穴建物 SI26 のカマドから出土したモモ核 1 点（PLD-34951）、竪穴建物 SI47 のカマドから出土したオニグルミ核 1 点（PLD-34952）の 3 点、ケカチ遺跡の試料は竪穴建物 SI22 のカマドから出土したイネ種子 1 点（PLD-34949）の計 4 点である。出土物から推定される各遺構の時期は、后畑西遺跡の SI6 が 10 世紀後半、SI26 が 9 世紀後半、SI47 が 9 世紀前半、ケカチ遺跡の SI22 が 8 世紀後半でいずれも平安時代頃の遺構とされている。

測定試料の情報、調製データは表 1 と 2 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた 14C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C 年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理 (1)

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-34950	遺跡名：后畑西遺跡 調査区：A地区 遺構：SI6カマド 試料No. 土26	種類：炭化種実（オニグルミ・核） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸： 1.2N, 水酸化ナトリウム：0.1N, 塩 酸：1.2N)
PLD-34951	遺跡名：后畑西遺跡 調査区：B地区 遺構：SI26カマド 試料No. 土32	種類：炭化種実（モモ・核） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸： 1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩 酸：1.2N)
PLD-34952	遺跡名：后畑西遺跡 調査区：C地区 遺構：SI47カマド 試料No. 土49	種類：炭化種実（オニグルミ・核） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸： 1.2N, 水酸化ナトリウム：0.1N, 塩 酸：1.2N)

表2 測定試料および処理 (2)

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-34949	遺跡名：ケカチ遺跡 調査区：F地区 遺構：SI22カマド 試料No. 土13	種類：炭化種実（イネ・種子） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸： 1.2N, 水酸化ナトリウム：0.1N, 塩 酸：1.2N)

3. 結果

表3と4に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した14C年代、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14C年代 (yrBP) の算出には、14Cの半減期として Libby の半減期 5568年を使用した。また、付記した14C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の14C年代がその14C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、および半減期の違い (14Cの半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C年代の暦年較正には OxCal4.3 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表3 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 (1)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-34950 試料No. 土26	-26.80 \pm 0.13	1326 \pm 19	1325 \pm 20	660-685 cal AD (68.2%)	654-710 cal AD (85.4%) 746-764 cal AD (10.0%)
PLD-34951 試料No. 土32	-23.58 \pm 0.15	1245 \pm 21	1245 \pm 20	693-748 cal AD (56.4%) 762-774 cal AD (11.8%)	683-779 cal AD (80.5%) 791-830 cal AD (8.5%) 837-866 cal AD (6.3%)
PLD-34952 試料No. 土49	-22.18 \pm 0.17	1292 \pm 19	1290 \pm 20	675-711 cal AD (42.3%) 745-764 cal AD (25.9%)	667-724 cal AD (60.3%) 739-769 cal AD (35.1%)

表4 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 (2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-34949 試料No. 土13	-21.60 \pm 0.13	1205 \pm 19	1205 \pm 20	774-778 cal AD (3.8%) 790-829 cal AD (37.3%) 838-867 cal AD (27.0%)	769-886 cal AD (95.4%)

4. 考察

以下では、暦年較正結果のうち 2σ 暦年代範囲 (95.4%) に着目して、結果を整理する。

后畑西遺跡のSI6のカマドから出土したオニグルミ核1点 (PLD-34950) は、14C年代が1325 \pm 20 14C BP、 2σ 暦年代範囲が654-710 cal AD (85.4%) および746-764 cal AD (10.0%) であった。これは、7世紀中頃～8世紀後半で、飛鳥～奈良時代に相当し、出土遺物から推定される遺構の時期よりも200年以上古い年代である。

SI26のカマドから出土したモモ核1点 (PLD-34951) は、14C年代が1245 \pm 20 14C BP、 2σ 暦年代範囲が683-779 cal AD (80.5%)、791-830 cal AD (8.5%)、837-866 cal AD (6.3%) であった。これは、7世紀後半～9世紀後半で、飛鳥～平安時代前期に相当し、出土遺物から推定される遺構の時期に対して

総合的である。

SI47 のカマドから出土したオニグルミ核 1 点 (PLD-34952) は、14C 年代が 1290 ± 20 14C BP、2 σ 暦年代範囲が 667-724 cal AD (60.3%) および 739-769 cal AD (35.1%) であった。これは、7 世紀後半～8 世紀後半で、飛鳥～奈良時代に相当し、出土遺物から推定される遺構の時期と比べて、少なくとも 50 年は古い年代である。

ケカチ遺跡の SI22 のカマドから出土したイネ種子 1 点 (PLD-34949) は、14C 年代が 1205 ± 20 14C BP、2 σ 暦年代範囲が 769-886 cal AD (95.4%) であった。これは、8 世紀後半～9 世紀後半で、奈良～平安時代前期に相当し、出土遺物から推定される遺構の時期に対して総合的である。

今回の測定試料はいずれも炭化種実 1 点の測定であり、測定年代は結実時期を示す。したがって、出土遺物の時期よりも古い暦年代を示した、后畑西遺跡の SI6 カマドのオニグルミ核と SI47 カマドのオニグルミ核は、遺構の時期が出土遺物の時期であったとすれば、古い時期の種実がなんらかの理由で混入や再堆積した可能性などが考えられる。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

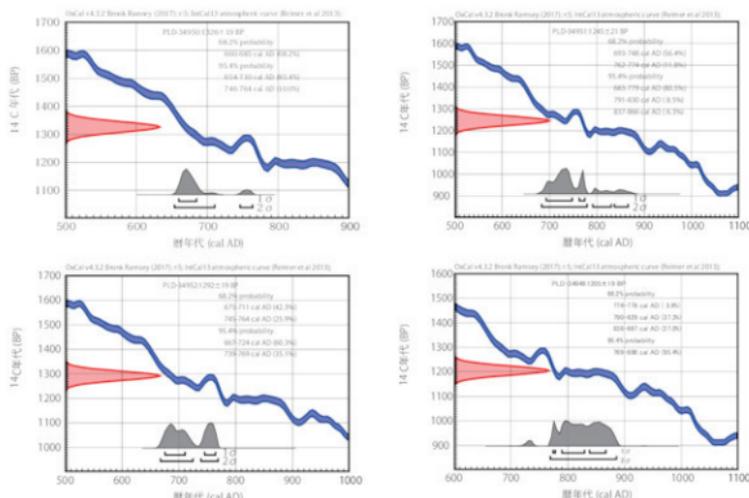


図 1 暦年較正結果

第5項 后畑西遺跡・ケカチ遺跡のカマド灰試料の植物珪酸体

米田恭子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

后畑西遺跡・ケカチ遺跡で検出された平安時代の竪穴建物のカマドから、灰らしき白色物混じりの土壌が採取された。ここでは、灰の母植物を調べる目的で植物珪酸体分析を行った。

2. 試料と方法

試料は、后畑西遺跡 C 地区の竪穴建物 SI53A のカマドから採取された灰（分析 No.1）と、ケカチ遺跡 F 地区の竪穴建物 SI19 と SI22 の各カマドから採取された灰（分析 No.2 と No.3）の、計 3 試料である。まず、試料を実体顕微鏡で観察したところ、分析 No.1 では白色で針状の植物片が複数観察された。そこで、白色物の塊を直接ピンセット一つまみ分（約 0.002g）採取し、グリセリンで封入してプレパラートを作製した。生物顕微鏡（300～600 倍）でプレパラート全面を観察し、機動細胞珪酸体を中心とした植物珪酸体の観察を行った。一方、分析 No.2 と No.3 は、白色物は含まれるものの、微細であるため、直接抽出するのは困難であった。そこで、以下の手順にしたがって処理を行い、試料に含まれる植物珪酸体の抽出を試みた。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約 1g（秤量）をトルビーカーにとり、30% の過酸化水素水を約 20～30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーを用いて試料を分散させ、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、機動細胞珪酸体を中心とした植物珪酸体を観察した。

3. 観察の結果 図版 1（写真図版 140）

分析の結果を表 1 と表 2 に示す。

表1 后畑西遺跡のカマド灰試料の植物珪酸体検出状況（◎：多く検出、○検出、△わずかに検出）

分析 No.	試料 No.	遺跡名	地区	遺構	試料採取位置	遺構の時期	機動細胞珪酸体		イネ初殻の珪酸体	不明植物珪酸体		不明植物細胞片
							イネ	イネ型		ポイント型	棒状型	
1	土1	后畑西遺跡	C	竪穴建物SI53A	カマド	平安時代	◎	○	△	△	△	◎

表2 ケカチ遺跡のカマド灰試料の植物珪酸体検出状況（△：わずかに検出、－：検出されず）

分析 No.	試料 No.	遺跡名	地区	遺構	試料採取位置	遺構の時期	機動細胞珪酸体		不明植物珪酸体 棒状型	不明植物細胞片
							イネ	ウシクサ族		
2	土8	ケカチ遺跡	F	竪穴建物SI19	カマド	平安時代	－	－	△	－
3	土16	ケカチ遺跡	F	竪穴建物SI22	カマド	平安時代	△	△	△	△

分析 No.1（后畑西遺跡の竪穴建物 SI53A カマド）

最も多く観察されたのは、連結したイネの機動細胞珪酸体であった。次いで、イネやマコモなどにみられるイネ型の短細胞珪酸体列が観察された。また、イネの初殻に形成される珪酸体もわずかに得られた。このほかに、ポイント型と棒状型の不明植物珪酸体、不明植物細胞片が観察された。ポイント型と棒状型の不明植物珪酸体については、すべてのイネ科植物に類似した形態の植物珪酸体が存在するため（近藤, 2010）、由来した分類群の同定は難しい。

分析 No.2 (ケカチ遺跡の竪穴建物 SI19 カマド)

植物珪酸体は観察されなかった。そのほかの植物細胞片なども観察されなかった

分析 No.3 (ケカチ遺跡の竪穴建物 SI22 カマド)

イネの機動細胞珪酸体と、ウシクサ族の機動細胞珪酸体のごくわずかに観察された。このほかに、棒状型の不明植物珪酸体と不明植物細胞片がわずかに観察された。

4. 考察

后畑西遺跡の竪穴建物 SI53A のカマドの灰試料には、イネの機動細胞珪酸体が多く含まれていた。また、イネの籾殻の珪酸体もわずかに観察された。イネ以外の分類群の機動細胞珪酸体は観察されなかった。よって、SI53A のカマドの灰の母植物は、イネであったと考えられる。后畑西遺跡の竪穴建物のカマドでは、稲の籾殻や稲藁が着火材として利用されたり、燃やされたりした可能性がある。

ケカチ遺跡の竪穴建物 SI19 のカマドの灰試料では、イネ科植物の珪酸体は観察されなかった。また、樹木起源の珪酸体や、そのほかの植物細胞片なども観察されなかった。SI19 のカマドの灰は、植物起源ではない可能性もある。

ケカチ遺跡の竪穴建物 SI22 のカマド灰試料には、イネの機動細胞珪酸体とウシクサ族 (ススキやチガヤなど) の機動細胞珪酸体がわずかに含まれていた。竪穴建物 SI22 のカマドでは、稲藁やススキなどが着火材として利用されたり、燃やされたりした可能性がある。ただし、いずれの機動細胞珪酸体も連結しておらず、通常土壌に含まれる単体の形状であるため、もともと土壌に含まれていた珪酸体の可能性もある。

引用文献

近藤鍊三 (2010) プラント・オパール図譜. 167p, 北海道大学出版会.